—茨城県土浦市—

六十原遺跡

——— 宅地造成工事事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ———

2003

常陸興業株式会社
土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会

—茨城県土浦市—

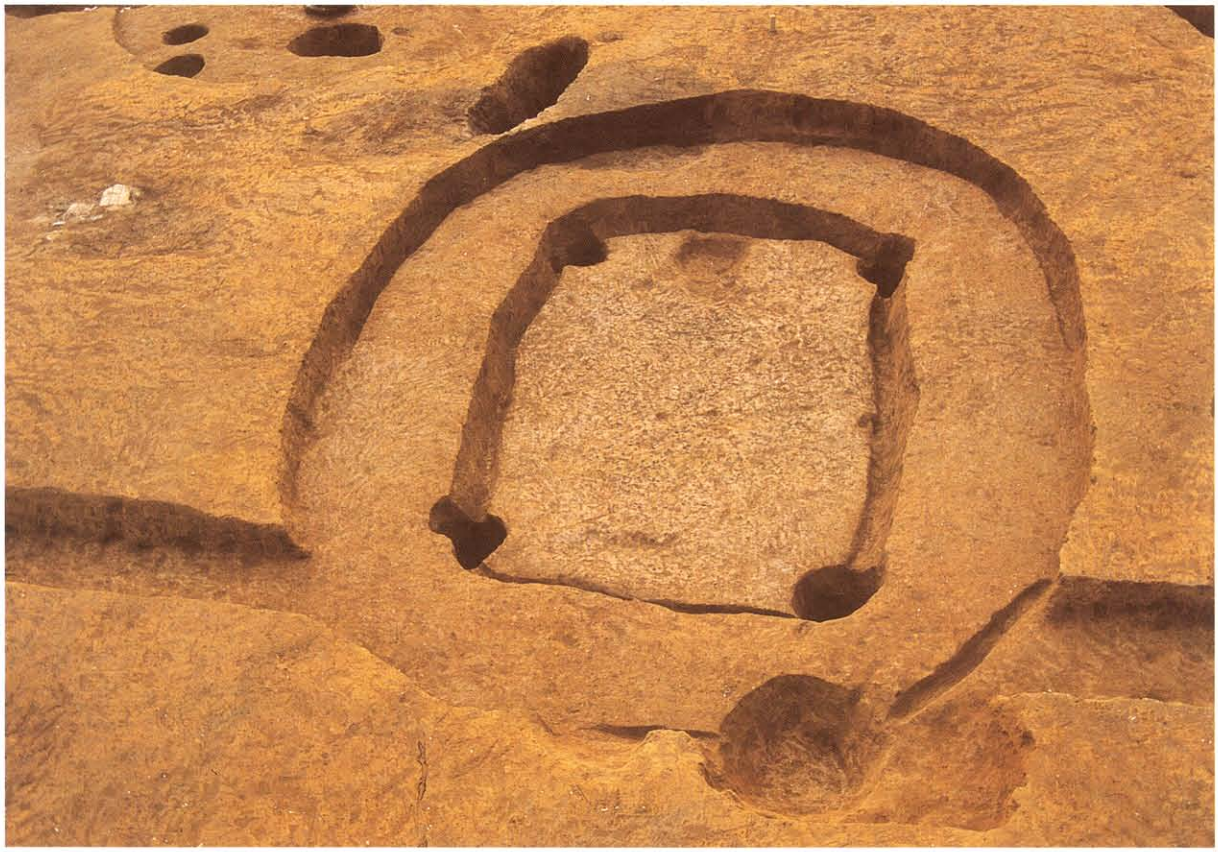
ろく　じゅう　はら

六十原遺跡

——— 宅地造成工事事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ———

2003

常陸興業株式会社
土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会



竪穴住居跡 SI11　完掘状況

竪穴住居跡 SI10　埋甕炉

序

土浦市は霞ヶ浦や桜川の水に恵まれ、太古から人々が生活するのに適したところでありました。そのため市内には貝塚、古墳、集落跡など数多くの遺跡が存在しております。これらの遺跡は当時の様子を知る手掛かりとなることはもちろんのこと、現代の私達が豊かに生活することのできる先人の偉業でもあります。

このような貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えることは私達の大切な責務であり、郷土の発展のためにも重要なことと思われます。

このたびの調査は、常陸興業株式会社の宅地造成工事事業に伴う、六十原遺跡発掘調査による記録保存を目的として行われたものであります。

遺跡からは、縄紋時代の竪穴住居跡や群在する土坑が確認されました。この中から、数多くの縄紋土器や石器等が出土しました。縄紋時代に暮らした人々の生活の知恵を良く示す貴重な事例といえます。

この調査によって、市内桜ヶ丘地区の古代文化の究明にいささかなりとも役立てて頂ければ幸甚であります。

最後になりましたが、調査から報告書の刊行にあたり、常陸興業株式会社をはじめ、関係各位の皆様のご協力とご支援に対し、心から厚く御礼申し上げます。

平成15年11月

土浦市教育委員会
教育長　尾見　彰一

例　言

1．本書は、宅地造成工事事業に伴う、土浦市桜ヶ丘町2268-2番地他に所在する六十原遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は常陸興業株式会社の委託を受け、土浦市遺跡調査会が実施した。

3．調査期間は1993（平成５）年10月12日から11月22日である。

4．発掘調査は大渕淳志（元 日本考古学研究所・現 ㈲日考研茨城）、遺物整理及び本書の作成は小川和博（元 日本考古学研究所・現 ㈲日考研茨城）・大渕が担当した。

5．本書の執筆は、第Ⅰ章第２・３節、第Ⅲ章第１～３節を大渕、第Ⅲ章第４節、第Ⅳ章を小川、第Ⅰ章第１節、第Ⅱ章を関口　満（上高津貝塚ふるさと歴史の広場）が執筆した。各文章の最後に執筆者名を記してある。

6．整理作業の分担は下記のとおりである。

遺物実測：中野耕太郎（元 筑波大学学群生）

遺物拓本：小川・大渕

遺物･遺構トレース･図版作成：小川・大渕

遺構写真：大渕

遺物写真：関口

7．調査及び報告書の作成には下記の諸機関・方々によりご協力・ご助言を賜った。記して感謝の意を表したい。（敬称略）

川島尚宗　工藤幸尚　嶋田敬吾　福田礼子　茨城県教育委員会　茨城県県南教育事務所　三友測量設計株式会社　常陸興業株式会社

8．本遺跡の出土品・報告書作成に伴う資料は全て上高津貝塚ふるさと歴史の広場が保管する。

凡　例

1．遺構図中の断面図・土層図脇の数値は海抜高を表し、単位はｍである。

2．土層・遺物の色調における色相の判断は『新版　標準土色帖』（日本色研事業株式会社）を使用した。

3．本文や図版中等の記号は以下のとおりである。

SI…竪穴住居跡　SK…土坑又は陥し穴状遺構　SD…溝　TG…旧石器時代試掘溝

4．遺構・遺物実測図の縮尺は基本的に下記の通りである。その他のものはスケールを変え示してある。

遺構　竪穴住居跡……１／60・１／20　　遺物　土器･土製品･石器……１／４

土　　坑……１／40

5．遺構図中の破線は推定線及び袋状土坑の下場ラインを示す。また一点鎖線は撹乱の範囲を示す。

6．図版中のスクリーントーンの表現は、以下のとおりである。

焼土

土浦市遺跡調査会組織（平成５年度）

会　　長	須田 直之	土浦市文化財保護審議会長
副 会 長	青木 利次	土浦市教育委員会教育長
理　　事	大塚　博	土浦市文化財保護審議会委員
	廣田 宣次	土浦市企画課長
	野口 幹男	土浦市区画整理課長
	雨貝　宏	土浦市建築指導課長
	山田 和也	土浦市都市計画課長
	内海崎保生	土浦市耕地課長
	大塚 重治	土浦市土木課長
	大渕 淳志	日本考古学研究所
監　　事	永井　進	土浦市教育委員会教育次長
	神林 栄久	土浦市監査事務局長
幹 事 長	宮本　昭	土浦市教育委員会文化課長
幹　　事	加倉井藤雄	土浦市教育委員会文化課文化財係長
	塩谷　修	土浦市教育委員会文化課主幹兼土浦市博物館学芸員
	石川　功	土浦市教育委員会文化課主事
	黒澤 春彦	土浦市教育委員会文化課主事
	中澤 達也	土浦市教育委員会文化課主事
	関口　満	土浦市教育委員会文化課主事

調査体制

現 地 調 査

調査担当　大渕 淳志　市村 義和

作業員　飯田 利子　飯田 陽子　石倉 しげ　市村 けい　遠藤　誠　今福 津知子　小野　豊　大久保 由紀子　岡田 次男　岡田 やす子　掛巣　務　掛巣 松江　河合　耕　川村 俊雄　郡司 悦子　近藤　綾　佐久間ハツ江　佐々木 史子　佐野 清江　島田 初男　関野 喜久代　寺島 邦介　富島 栄子　中野 みよ　福田 加代　藤倉　直　増谷ふさ子　松浦 澄子　松浦 博子　山中 みね　渡辺 恒子

整 理 作 業

調査担当　大渕 淳志　小川 和博

調査補助員　中野 耕太郎

作 業 員　郡司 悦子　酒井 悦子

目　次

口絵
序
例言
凡例
第Ⅰ章　調査の経緯と概要 ・・・・・・・・・・・1
　第１節　調査に至る経緯 ・・・・・・・・・・・1
　第２節　調査の概要 ・・・・・・・・・・・・・1
　第３節　日　誌　抄 ・・・・・・・・・・・・・2
第Ⅱ章　遺跡の位置と周辺の遺跡 ・・・・・・・・3
　第１節　遺跡の位置 ・・・・・・・・・・・・・3
　第２節　周辺の縄紋時代の遺跡 ・・・・・・・・3
第Ⅲ章　遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・10
　第１節　遺跡の概要・・・・・・・・・・・・・10
　第２節　層序・・・・・・・・・・・・・・・・10
　第３節　縄紋時代の遺構・・・・・・・・・・・13
　　１．竪穴住居跡 ・・・・・・・・・・・・・13
　　２．土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・23
　第４節　縄紋時代の遺物・・・・・・・・・・・64
　　１．竪穴住居跡出土の土器 ・・・・・・64
　　２．竪穴住居跡出土の土製品 ・・・・69
　　ａ土器片錘・・・・・・・・・・・・69
　　ｂ耳栓 ・・・・・・・・・・・・・・73
　　３．竪穴住居跡出土の石製品 ・・・・73
　　４．土坑出土の土器 ・・・・・・・・・74
　　５．土坑出土の土製品 ・・・・・・・123
　　ａ土器片錘 ・・・・・・・・・・・123
　　ｂ土錘 ・・・・・・・・・・・・・124
　　６．土坑出土の石製品 ・・・・・・・126
　　７．遺構外出土遺物 ・・・・・・・・128
　　ａ土器 ・・・・・・・・・・・・・128
　　ｂ土製品 ・・・・・・・・・・・・128
　　８．遺構外出土の石製品 ・・・・・131
第Ⅳ章　調査のまとめ ・・・・・・・・・・・・133
報告抄録

図版目次

Fig.1　発掘区の設定図・・・・・・・・・・・・・2
Fig.2　周辺の地形(大日本帝国陸
　　地測量図　明治40年)・・・・・・・・・・3
Fig.3　遺跡の位置と周辺の縄紋時代の遺跡・・・4
Fig.4　遺跡の立地・・・・・・・・・・・・・・・7
Fig.5　基本層序 ・・・・・・・・・・・・・・・10
Fig.6　遺構配置図 ・・・・・・・・・・・・・・11
Fig.7　竪穴住居跡SI01・・・・・・・・・・・・14
Fig.8　竪穴住居跡SI02・・・・・・・・・・・・15
Fig.9　竪穴住居跡SI03・SI04 ・・・・・・・・16
Fig.10　竪穴住居跡SI05・SI06 ・・・・・・・・18
Fig.11　竪穴住居跡SI07・SI08・SI09 ・・・・・19
Fig.12　竪穴住居跡SI10・・・・・・・・・・・・21
Fig.13　竪穴住居跡SI11・・・・・・・・・・・・22
Fig.14　土坑SK01・SK02・SK03 ・・・・・・・24
Fig.15　土坑SK04・SK05・SK06・SK44・SK47 ・25
Fig.16　土坑SK07・SK08・SK11 ・・・・・・・26
Fig.17　土坑SK09・SK10・SK12・SK41 ・・・・29
Fig.18　土坑SK13・SK14・SK16・SK40 ・・・・30
Fig.19　土坑SK17・SK18・SK19 ・・・・・・・33
Fig.20　土坑SK24・SK25・SK26・SK27 ・・・・35
Fig.21　土坑SK28・SK35・SK37 ・・・・・・・36
Fig.22　土坑SK42・SK43・SK38・SK39 ・・・・38
Fig.23　土坑SK45・SK48・SK57・SK49・SK50 ・40
Fig.24　土坑SK51・SK58・SK52・SK53・SK54 ・42
Fig.25　土坑SK56・SK59・SK60・SK68・SK61 ・44
Fig.26　土坑SK62・SK63・SK64・SK65 ・・・・47
Fig.27　土坑SK66・SK67・SK69・SK70・SK98・Pit03 ・48
Fig.28　土坑SK71・SK72・SK73・SK74 ・・・・51
Fig.29　土坑SK75・SK76・SK77・SK78・SK79・Pit01 ・52
Fig.30　土坑SK80・SK82・SK83・SK81・SK85 ・54
Fig.31　土坑SK86・SK87・SK88・SK89 ・・・・56
Fig.32　土坑SK94・SK96・SK97・SK99・SK100,
　　SK102・Pit02・Pit05・・・・・・・・・・58
Fig.33　土坑SK23・SK29 ・・・・・・・・・・60
Fig.34　土坑SK30・SK32・SK55 ・・・・・・・61

Fig.35　土坑SK90・SK91・SK92 ・・・・・・・63
Fig.36　竪穴住居跡SI01・03・04・08出土土器　・65
Fig.37　竪穴住居跡SI10出土土器　・・・・・・66
Fig.38　竪穴住居跡SI11出土土器(1)　・・・・・68
Fig.39　竪穴住居跡SI11出土土器(2)　・・・・・70
Fig.40　竪穴住居跡SI11出土土器(3)　・・・・・71
Fig.41　竪穴住居跡SI11出土土器(4)　・・・・・72
Fig.42　竪穴住居跡出土土製品・石製品　・・・・75
Fig.43　土坑SK01・02(1)出土土器　・・・・・・78
Fig.44　土坑SK02(2)・03(1)出土土器　・・・・・79
Fig.45　土坑SK03(2)・04出土土器　・・・・・・82
Fig.46　土坑SK05出土土器　・・・・・・・・・83
Fig.47　土坑SK07・08・09出土土器・・・・・・85
Fig.48　土坑SK10出土土器　・・・・・・・・・87
Fig.49　土坑SK11出土土器　・・・・・・・・・88
Fig.50　土坑SK12出土土器　・・・・・・・・・90
Fig.51　土坑SK13出土土器　・・・・・・・・・91
Fig.52　土坑SK14・16出土土器　・・・・・・・93
Fig.53　土坑SK17・18出土土器　・・・・・・・94
Fig.54　土坑SK19・24・25・26・28出土土器　・・95
Fig.55　土坑SK29・30・32・35・37出土土器　・・97
Fig.56　土坑SK38・39・47・48・49出土土器　・・99
Fig.57　土坑SK50・52・53・55・56出土土器・・101
Fig.58　土坑SK57・58・59・60・61・63出土土器 103
Fig.59　土坑SK64・65出土土器・・・・・・・105
Fig.60　土坑SK66・67・68出土土器　・・・・・107
Fig.61　土坑SK70(1)出土土器　・・・・・・・108
Fig.62　土坑SK70(2)出土土器　・・・・・・・109
Fig.63　土坑SK70(3)出土土器　・・・・・・・110
Fig.64　土坑SK72・73・74出土土器　・・・・・112
Fig.65　土坑SK75・76・77・78出土土器　・・・114
Fig.66　土坑SK79・80・82・83・84出土土器・・116
Fig.67　土坑SK85(1)出土土器　・・・・・・・118
Fig.68　土坑SK85(2)出土土器　・・・・・・・119
Fig.69　土坑SK86(1)出土土器　・・・・・・・120
Fig.70　土坑SK86(2)出土土器　・・・・・・・121
Fig.71　土坑SK86(3)・87・88・89・90・91・94
　　96出土土器・・・・・・・・・・・・122
Fig.72　土坑出土土製品　・・・・・・・・・・125
Fig.73　土坑出土石製品　・・・・・・・・・・127
Fig.74　遺構外出土遺物(1)・・・・・・・・・129
Fig.75　遺構外出土遺物(2)・・・・・・・・・130
Fig.76　遺構外出土遺物(3)・・・・・・・・・132
Fig.77　住居跡柱穴配置図集成　・・・・・・・133

写真図版目次

PL 1　遺跡周辺航空写真
　　(アメリカ合衆国極東空軍撮影)
PL 2　遺跡遠景、遺跡全景
PL 3　竪穴住居跡SI01、竪穴住居跡SI02・
　　土坑SK26・27・35・36
PL 4　竪穴住居跡SI10・土坑SK88・89・96、
　　竪穴住居跡SI10遺物出土状況、
　　竪住居跡SI07・土坑SK64・65・78・79・81
PL 5　竪穴住居跡SI11、土坑SK02、土坑SK04～07
PL 6　土坑SK04・09・38・41・44、
　　土坑SK07・34・48・57
PL 7　土坑SK09・10・41・44、土坑SK09・10
PL 8　土坑SK25、SK28、SK60、SK61
PL 9　土坑SK72～74、SK76、陥し穴状遺構
　　SK23、陥し穴状遺構SK92
PL10　陥し穴状遺構列（北西から）・陥し穴状遺構列
　　(南東から)、溝状遺構SD01、便所甕SX01・
　　SX02
PL11　竪穴住居跡・土坑出土遺物
PL12　土坑出土遺物
PL13　竪穴住居跡・土坑出土遺物
PL14　網代痕、本葉痕、ヘラ削り痕、ナデ痕、
　　現地説明会

第Ⅰ章　調査の経緯と概要

第1節　調査に至る経緯

六十原遺跡は、常陸興業株式会社の計画する宅地分譲造成工事事業に伴って発掘調査に至った。以下はその調査に至る経緯について述べる。

はじめにその発端は、1993(平成5)年8月4日に常陸興業株式会社の計画する開発事業の事前協議申請が、本市建築指導課に提出されたことによる。その内容は、市内桜ヶ丘地内に所在する2,200㎡の土地において宅地分譲造成工事事業を行うものであった。その後この事前協議申請が、文化財保護の担当課である本市教育委員会文化課に届いた。

このことを受け、市内埋蔵文化財地図との照合を行ったところ、事業者より申請のあった土地は周知の遺跡には該当していなかった。しかしながら、申請地を現地踏査したところ、現地は畑地となっており表面には若干の土器片の散布が見られた。このことから、申請地内に埋蔵文化財が存在する可能性があり、埋蔵文化財の有無を確認するために試掘調査にご協力頂きたい旨を回答した。

試掘調査は、1993(平成5)年9月14日に事業者立会いのもと行った。コンマ2.5のバックホーを使用して行うことになった。申請地内に幅1mのトレンチを5本東西方向に設定し、開発面積の約8％を調査した。その結果、縄紋時代の住居跡や土坑、そして溝が確認された。今回の申請地西側にも広がる様相がみられた。本遺跡については新規発見のもので、同所の字名から六十原遺跡と命名した。そして、9月14日付けで文化財保護法57条の5を文化庁宛て提出した。

9月24日に埋蔵文化財の取扱いについて、教委と事業者との協議が持たれた。この中で、申請地の開発行為の変更は困難なため、発掘調査による埋蔵文化財の記録保存を実施することで合意した。調査の実施にあたっては事業者に多大なるご協力を頂くこととなった。9月24日付けで文化財保護法98条－2埋蔵文化財発掘調査通知を提出した。

調査面積は、試掘調査で遺構の確認されなかった部分を調査対象から外し、排土置き場・作業員駐車場とし、実質調査面積は約1,300㎡とした。調査日時は1993(平成5)年10月12日から11月22日まで行うこととなった。

(関口　満)

第2節　調査の概要

六十原遺跡の本調査は1993年10月12日から開始された。事前に土浦市教育委員会職員立会いのもと、重機による表土排除が行われていた。遺構精査作業と並行して、遺構検出作業を行い、同11月10日まで行った。その翌日11月11日より平面図等の実測作業を行い、11月22日で終了している。また、11月18日に新聞発表を行い、11月27日に市民に対する現地説明会を行い、すべての現地作業を終了した。

検出された遺構としては、縄紋時代の竪穴住居跡11軒、土坑88基、ピット状遺構4基、陥し穴状遺構8基、近現代の土坑14基、溝状遺構4条、便所甕2基が検出されている。

(大渕淳志)

第３節　日誌抄

1993(平成５)年

１０月１２日　本日より本調査開始。遺構検出作業。土浦市教委、常陸興業来跡。
１０月１４日～１５日　遺構検出作業及び土層堆積図実測作業を行う。
１０月１８日～２０日　遺構精査作業及び遺構検出作業。
１０月２１日　遺構検出作業及び土層堆積図実測作業。土浦市教委来跡。
１０月２３日　遺構検出作業。土層堆積図実測作業。日本考古学研究所小川・市村来跡
１０月２６日　遺構検出作業。土浦市教委、常陸興業来跡。
１０月２７日　遺構検出作業。土層堆積図実測作業。
１０月２９日　遺構精査作業。遺構検出作業。
１１月　２日　遺構検出作業。土層堆積図実測作業。土浦市教委、常陸興業来跡。
１１月　５日　旧石器時代試掘調査を行う。土浦市教委来跡。
１１月　６日　遺構完掘写真・遺物出土状況写真撮影作業を行う。
１１月　９日　遺構完掘写真・遺物出土状況写真撮影作業。土浦市教委来跡。
１１月１０日　遺構完掘写真・遺物出土状況写真撮影。
１１月１５日　遺構平面図実測作業。全則図実測作業。
１１月１８日　土浦市教委来跡。新聞発表を行う。
１１月１９日　遺構平面図実測作業。土浦市文化財保護審議会委員来跡。
１１月２０日　遺構平面図実測作業終了。
１１月２２日　現地作業完了。
１１月２７日　現地説明会。

(大渕淳志)

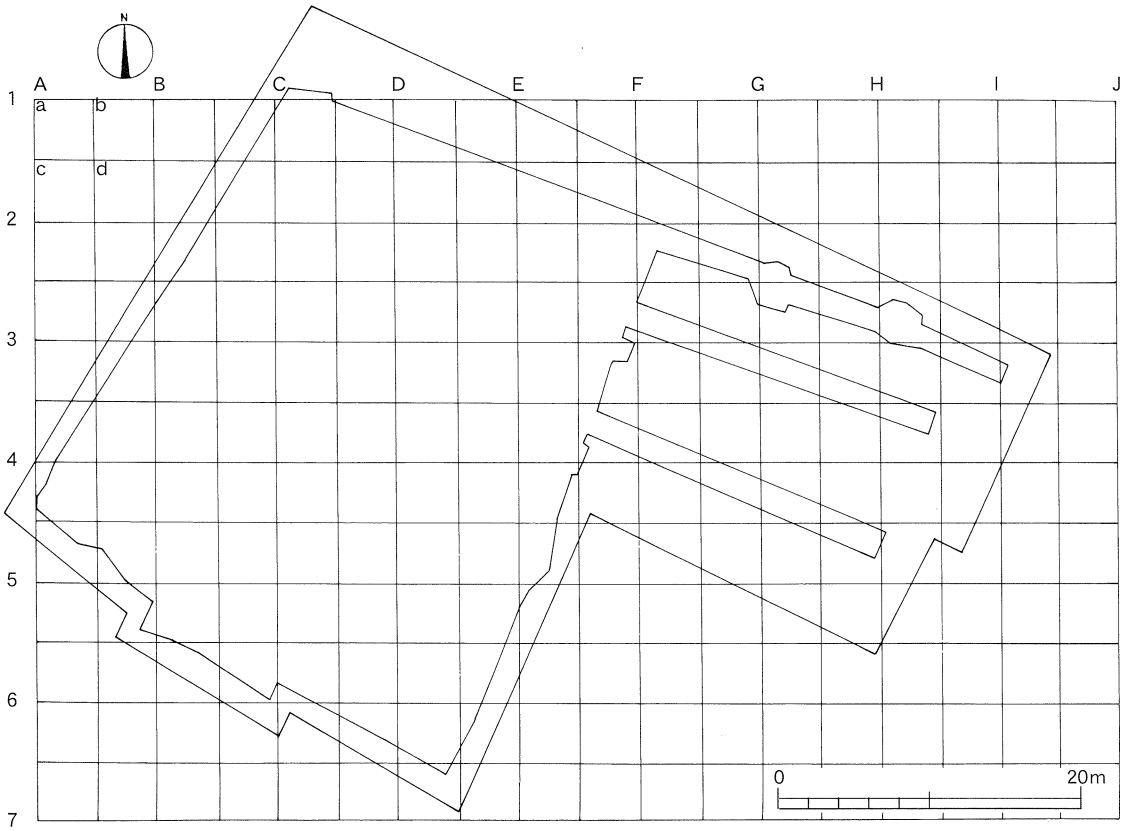


Fig.1　発掘区設定図

第Ⅱ章　遺跡の位置と周辺の遺跡

第１節　遺跡の位置（Fig 2）

六十原遺跡は、土浦市内を東西に流れ霞ヶ浦に注ぐ桜川と花室川に挟まれた標高約26ｍ前後の細長い台地上に位置する。同台地は筑波稲敷台地の一部をなし、台地の南縁と北縁は谷により刻まれている。遺跡は台地の中央部に位置し、南北から入り込む谷の谷頭にあたり、標高は27ｍを測る。

遺跡の西側200ｍには、常磐線の線路が谷部分を生かして台地を掘り抜き、直進している。同じく西側150ｍでは、1995（平成7）年に六十原Ａ遺跡の発掘調査が実施された。同遺跡の東側50ｍには土浦日大高等学校がある。周辺地域は閑静な住宅街となっている。

第２節　周辺の縄紋時代の遺跡（Fig 3）

土浦市内を流れる桜川南岸の土浦市域内には、今回の六十原遺跡の調査でも確認された縄紋時代中期の土坑群を伴う集落跡が比較的多く見つかっている。このような遺跡を中心に、以下は六十原遺跡の周辺の遺跡について述べようと思う。

１六十原Ａ遺跡

六十原遺跡の西側150ｍに六十原Ａ遺跡が存在する。本来的には一続きの遺跡として扱われるべきもの

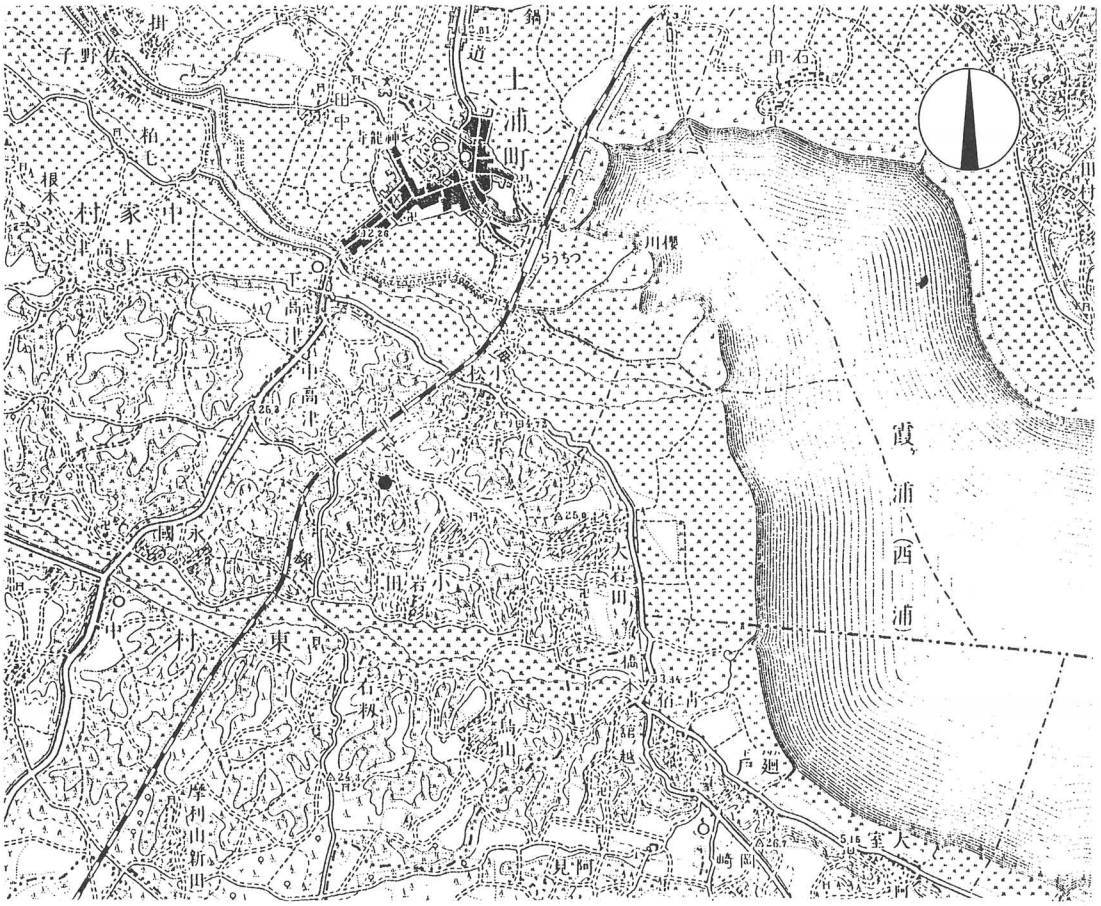


Fig.2　周辺の地形（大日本帝国陸地測量図　明治40年測量）

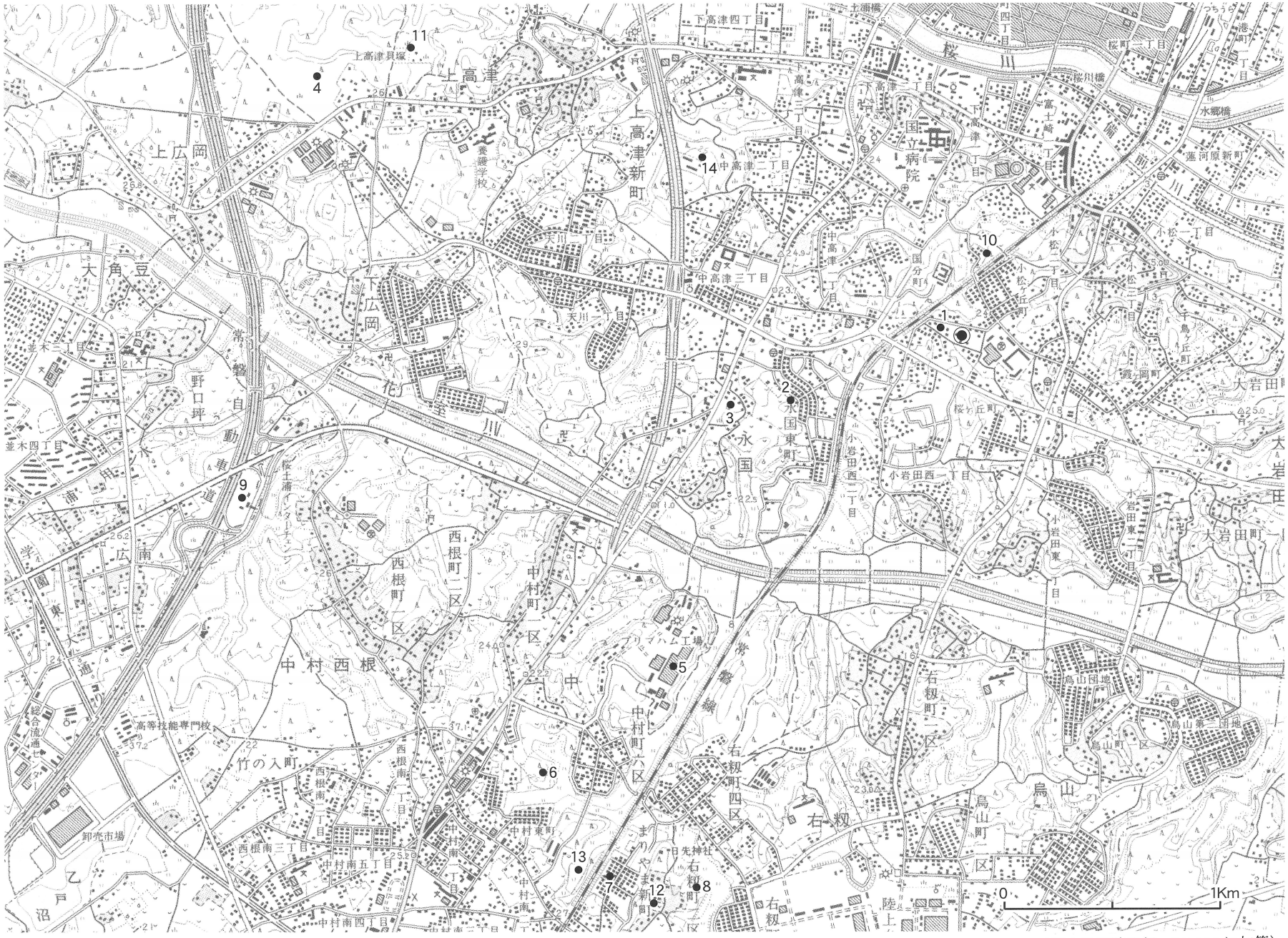


Fig3　遺跡の位置と周辺の縄紋時代の遺跡

（国土地理院発行 1/25,000 に加筆）

と思われるが、それぞれ縄紋時代中期中葉を主体とする遺跡でありながら、その中でも時期的には微妙に異なるようである。発掘調査は1995（平成7）年に実施された。調査面積は1,055㎡で、竪穴住居跡は8軒、土坑は109基が見つかった。遺構は縄紋時代中期阿玉台Ⅲ式から加曽利Ｅ１式にわたるものである。特に検出された遺構は阿玉台Ⅳ式の範疇のものが目立つようである。

この後、調査区北側の道路を挟んだ地点（Fig 4）で開発行為があり、試掘調査を行った結果、1ｍもの盛土下から複数の土坑が確認され、調査区の北側にも土坑群が展開していることが判明した。これらの遺構は現状保存することになった。六十原Ａ遺跡の土坑群は環状をなすというよりは、弧状をなすものと考えられる。遺跡内の第90号土坑からは炭化した堅果類が出土している。

2 永国遺跡

永国遺跡は1974(昭和49)年に調査が実施された。Ａ・Ｂの2地区に分かれ調査された。Ａ地区では、縄紋時代中期加曽利Ｅ式の竪穴住居跡1軒、袋状土坑3基と陥し穴状遺構が13基列をなして見つかった。Ｂ地区では土坑のみが4基見つかっている。このうち2基は袋状の土坑であり、阿玉台式終末の平縁無文土器が出土している。加えて、2002（平成14）年にも発掘調査が実施され、前調査の陥し穴状遺構列と同様な状況が確認された。この陥し穴状遺構からは縄紋時代中期の土器片が出土している。

3 和台遺跡

和台遺跡は1990(平成2)年に調査が実施された。縄紋時代の遺構は竪穴住居跡2軒と土坑が5基である。竪穴住居跡は2軒とも「有段式竪穴遺構」で、いずれも炉が確認されていない。3号住居跡は長軸10.5ｍと大型のものである。これらの遺構は中期前半のものと考えられる。土坑はいずれも袋状・フラスコ状をなすものではない。これらの内、いくつかの土坑から阿玉台Ⅱ式の復元可能な土器が出土している。

4 栗崎遺跡

栗崎遺跡は1986(昭和61)年に小規模な発掘調査が実施された。もともと調査は、古墳時代中期における石製模造品製作址確認のためのものであった。しかしながら、製作址は確認されず、縄紋時代中期の土坑らしきものが検出された。この調査時の出土品を見ると、中期中葉から後半の土器が多数出土している。

5 向原遺跡

向原遺跡は1986(昭和61年)に発掘調査が実施され、縄紋時代の竪穴住居跡1軒と土坑19基が確認された。土坑のほとんどは早期に位置付けられる陥し穴状遺構であり、17基が一定方向に並んでいる。縄紋時代中期の遺構は9号土坑1基のみであり、阿玉台Ⅰb式のものとされ、平面形が円形・断面形がタライ状をなす土坑であり、本地域における群在するフラスコ・袋状土坑の出現以前の様相を示している。

6 扇ノ台遺跡

扇ノ台遺跡は1996(平成8)年から1997(平成9)年にかけて、調査面積13,000㎡が発掘調査された。遺跡内からは、竪穴住居跡24軒、炉跡16基確認された。土坑は389基確認され、阿玉台期のものが69基、中峠～加曽利Ｅ１式を出土したもの59基、加曽利Ｅ２式を出土するものが219基である。加曽利Ｅ３式を

出土するものは４基である。土坑は全体的に環状をなすように見える。

７摩利山遺跡

摩利山遺跡は1974(昭和49)年に発掘調査が実施され、竪穴住居跡９軒調査され、加曽利Ｅ式のものが多い。また、「有段式竪穴遺構」も確認されている。土坑は700基検出されたとされ、形態的に皿状や鍋底状のものが多い。この他に、フラスコ状のものや底面にピットを持つものがある。時期は縄紋時代中期から後期とされている他、詳細は不明である。

８宮前遺跡

宮前遺跡は1994(平成６)から1995(平成７)年まで調査が行われた。縄紋時代の遺構は竪穴住居跡が38軒・土坑117基・陥し穴６基が確認された。いずれも縄紋時代中期の遺構で、阿玉台Ⅳ式から加曽利Ｅ４式のものが確認され、多くは加曽利Ｅ３式のものである。

９下広岡遺跡

下広岡遺跡はつくば市内の遺跡で、1978(昭和53)年から1979(昭和54)年に発掘調査が実施された。縄紋時代の竪穴住居跡は86軒確認され、このうち「有段式竪穴遺構」は７軒検出された。縄紋時代の土坑は633基であり、重複が著しい。袋状土坑は162基で筒状土坑は380基確認された。縄紋土器は阿玉台式終末期のものから加曽利Ｅ３式にわたり出土しているが、特に阿玉台式終末から加曽利Ｅ１式が多いとされる。

10小松貝塚

小松貝塚は、上高津貝塚と同様に江見水蔭著『探検実記　地中の秘密』に登場する貝塚である。上高津貝塚より霞ヶ浦に近い位置に存在する。1990(平成２)年の試掘調査で、それまで不明となっていた貝塚の存在が明らかにされ、同年その一部が発掘調査された。縄紋時代の遺構は、竪穴住居跡７軒、土坑118基等が調査され、遺構の時期は中期後半から後期末葉にわたるものであった。小さな土坑中に廃棄された貝殻が数多く確認されている。これらの土坑から出土した貝類は、時期によりその主体をしめるものが異なる様相が観察されている。上高津貝塚を考える上で重要な貝塚である。

11上高津貝塚

上高津貝塚は1977(昭和52)年に国指定史跡となり、霞ヶ浦沿岸の縄紋時代後・晩期貝塚を代表する一つと言える。1990(平成２)年から1991(平成３)年に史跡整備に伴い斜面部のＡ地点貝塚・台地上のＥ地点とＣ地点が発掘調査された。この調査の結果、Ｅ地点では掘建柱建物跡や大型炉が確認され、現在復原展示されている。これらに混じり中期後半の可能性ある４号建物跡も確認された。同調査区内で一番出土量の多い土器片は中期後半から後期初頭とされる。

Ｃ地点では調査の結果、竪穴住居跡や廃棄土坑、墓等が確認された。これらの遺構は後・晩期を主体としたものであるが、中期後半のもとされる第２号住居跡も見つかり、後・晩期の土器に混じりかなりの量の中期後半の土器片が出土しているようである。

N
園
線
25.6
20
26.9
16.1
26.4
六十原Ａ遺跡
27
25.7
20.7
六十原遺跡
25.7
17.5
27.0
27
0
50m
26.7

Fig.4　遺跡の立地

12 権現前遺跡

権現前遺跡は1997(平成9)年に調査が実施され、縄紋時代の遺構は竪穴住居跡２軒、竪穴状遺構１基、土坑17基が検出された。中期の遺構は竪穴住居跡１軒、竪穴状遺構１基、土坑６基である。これらの遺構から出土している土器は、中期後半の加曽利Ｅ４式が中心となっている。この他、前期後半の遺構が確認されている。

13 峰崎Ａ遺跡・峰崎Ｂ遺跡

峰崎Ａ遺跡・峰崎Ｂ遺跡は1989(平成元)年から1990(平成２)年まで調査が行われた。縄紋時代の遺構は、竪穴住居跡は３軒・土坑46基・屋外埋設土器１基・包含層が確認された。中期の遺構は竪穴住居跡１軒・土坑26基と屋外埋設土器１基及び包含層が確認されている。出土している土器は、縄紋時代中期後半から後期前半の土器が中心となっている。

14　龍善寺遺跡

龍禅寺遺跡は、2003(平成15)年の試掘調査によって、その存在が明らかとなった。試掘調査の結果では、縄紋時代中期加曽Ｅ１式が中心となる集落跡と考えられる。　(関口　満)

参考文献

江見水蔭『探検実記　地中の秘密』1909

日本窯業史研究所　手書き版『摩利山遺跡発掘調査報告書』1974

(財)茨城県教育財団『茨城県教育財団文化財調査報告書Ｘ　下広岡遺跡』1981

日本窯業史研究所『日本窯業史研究所報告第15冊　永国遺跡』1983

土浦市教育委員会『向原遺跡』1987

土浦市教育委員会『峰崎遺跡現地説明会資料』1990

土浦市教育委員会『和台遺跡現地説明会資料』1990

土浦市教育委員会『小松貝塚Ａ地点現地説明会資料』1990

土浦市教育委員会『国指定史跡　上高津貝塚の発掘－史跡整備に伴う調査の概要』1992

土浦市教育委員会『六十原Ａ遺跡』1996

(財)茨城県教育財団『茨城県教育財団文化財調査報告書第118集　宮前遺跡』1997

土浦市教育委員会『扇ノ台遺跡』1999

土浦市教育委員会『国指定史跡　上高津貝塚Ｅ地点』2000

土浦市教育委員会『権現前遺跡』2000

土浦市教育委員会『永国遺跡(第２次調査)』2002

第Ⅲ章　遺　跡

第１節　遺跡の概要

六十原遺跡の今回の調査では、縄紋時代中期の集落跡の遺跡を主に検出している。検出された遺構としては、縄紋時代中期の竪穴住居跡が11軒、同じく中期の土坑が88基、ピット状遺構が４基、同じ縄紋時代である細かな時期が不明確な陥し穴状遺構が８基出土している。

また、近現代の遺構としては、14基の土坑、溝状遺構が４条、便所甕が２基検出されている。なお、近現代の遺構は、Fig６の遺構番号で、土坑はSK15・20・21・22・33・34・36・46・83・84・93・95・101であり、溝状遺構はSD01～04、便所甕はSX01・02である。これらの土坑は農作物の貯蔵用の土坑いわゆる“イモアナ”であり、溝状遺構は境界の境溝あるいは根切り溝ではないかと考えられる。

（大渕淳志）

第２節　層序

本遺跡は洪積台地の平坦面に形成された縄紋時代の集落跡で、土層図は集落の中心から外れた調査区北端の標高27ｍに設定した、旧石器文化層確認グリッドTG1北壁である。既に調査時において表土層および縄紋包含層は削平され、いわゆるソフトローム層からの確確となった。Ⅳ層以下Ⅹ層までがハードローム層、Ⅺ層が常総粘土層に相当する。

Ⅲ層　明黄褐色ローム層(10YR6/8)立川ローム軟質層。

Ⅳ層　褐色ローム層(10YR4/6)立川ローム硬質部でＡＴ包有層に相当する。

Ⅴ層　暗褐色ローム層(10YR3/3)立川ローム層第２暗色帯（BBⅡ）に相当する。

Ⅵ層　明褐色ローム層(10YR6/8)やや明るいローム層。

Ⅶ層　暗褐色ローム層(10YR6/8)立川ローム軟質層

Ⅷ層　黒褐色ローム層(10YR3/1)武蔵野ローム最上層。

Ⅸ層　黄橙色ローム層(10YR7/8)鹿沼パミスを包含。

Ⅹ層　褐色ローム層(10YR4/6)武蔵野ローム最下層

Ⅺ層　青灰色粘土層(10YR5/1)常総粘土層

（大渕淳志）

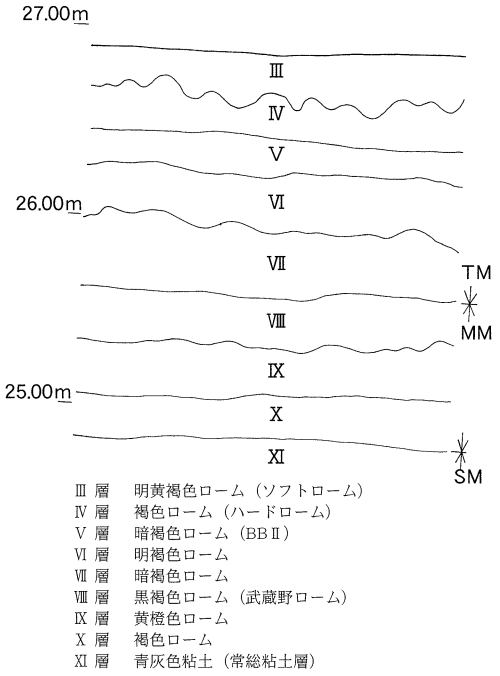


Fig.5　基本層序

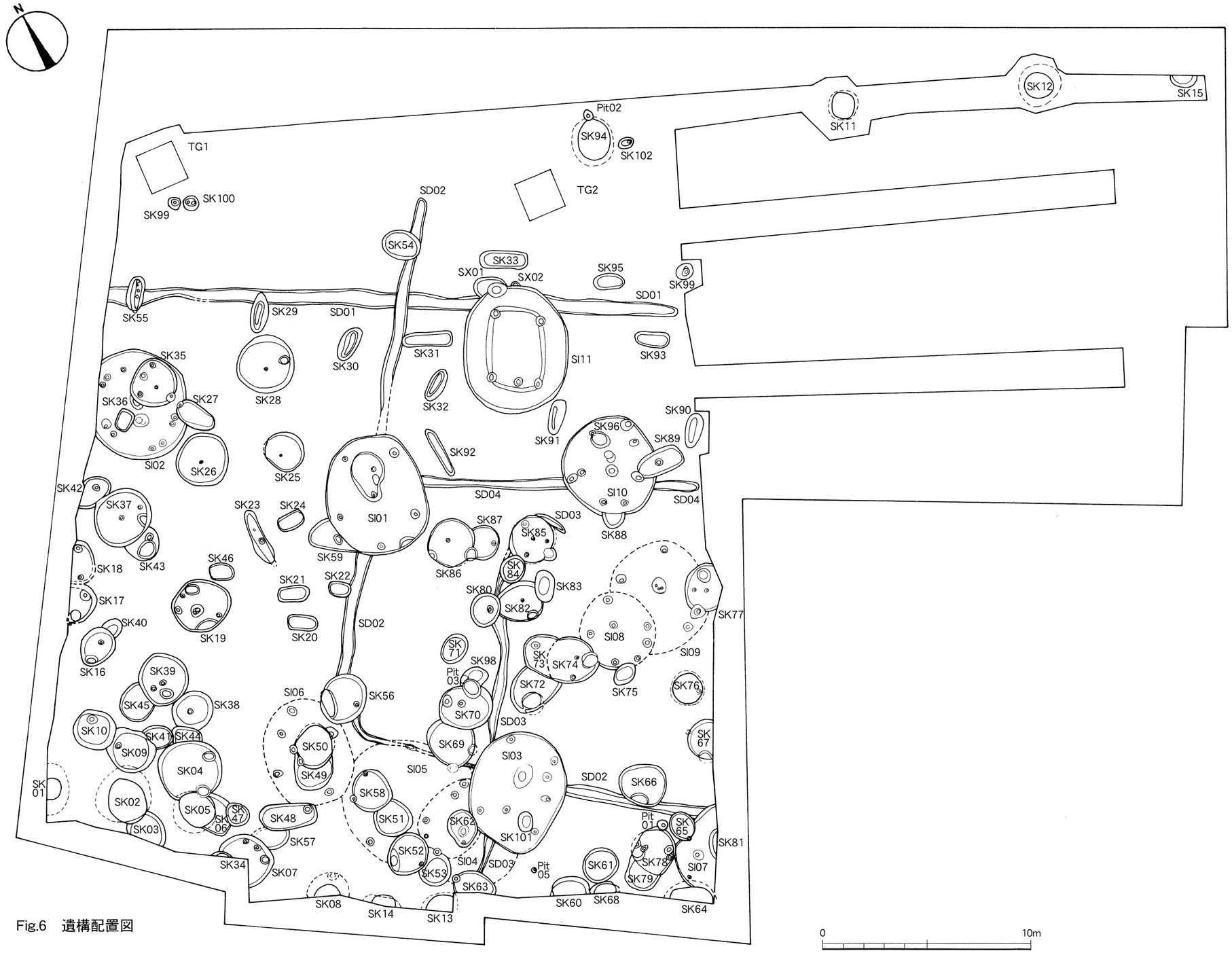

N
TG1
SK100
SK99
Pit02
SK94
SK102
TG2
SD02
SK54
SK33
SX01
SX02
SK95
SK99
SD01
SK11
SK12
SK15
SK55
SK29
SD01
SK30
SK31
SI11
SK93
SK35
SK36
SK27
SK28
SK32
SK90
SK96
SK89
SK91
SK92
SI02
SK26
SK25
SK42
SK37
SK23
SK24
SI01
SD04
SI10
SD04
SK87
SD03
SK85
SK88
SK18
SK43
SK46
SK59
SK86
SK84
SK83
SK17
SK21
SK22
SK80
SK82
SK77
SK40
SK19
SK20
SD02
SK71
SK98
SK73
SK74
SI08
SI09
SK16
SK39
Pit 03
SK72
SK75
SK76
SK45
SK38
SI06
SK56
SK70
SD03
SK10
SK41
SK44
SK50
SK69
SK67
SK09
SK04
SK49
SI05
SI03
SD02
SK66
SK01
SK02
SK05
SK47
SK06
SK48
SK58
SK51
SK62
SK101
Pit 01
SK65
SK81
SK03
SK57
SK52
SI04
SD03
Pit 05
SK61
SK78
SK79
SI07
SK34
SK07
SK53
SK63
SK60
SK68
SK64
SK08
SK14
SK13
0
10m

Fig.6　遺構配置図

第３節　縄文時代の遺構

１．竪穴住居跡

竪穴住居跡 SI01（Fig.７、PL３）

調査区中央のＣ－３－ａ～ｄ区に位置し、標高26.80～26.90ｍの平坦部に立地する。近現代の溝状遺構SD02・04に北壁・南壁及び東側の壁の一部を壊されている。また、土坑SK59を切っている。平面形は南北に長い隅丸方形状の楕円形を呈している。長軸は5.82ｍ、短軸は4.88ｍを計る。長軸方向はＮ－5°－Ｅを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は10～12cmを計測する。床面は軟弱な直床で、ほぼ平坦である。柱穴は７本検出され、径26～60cm、深さ32～72cmと様々である。また、南壁に半円形の掘り込み（82×48cm、深さ９cm）を有する。炉址は中央北側に配し、規模は230×160cm、深さ13cmを計る。燃焼部は南東側にあって、50×40cmを計測する。また、この炉址内に２基のピットP3・P4を有し、大きさはP3が33×30cm、深さ48cm、P4が39×36cm、深さ72cmを数える。この住居跡の覆土は２層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

竪穴住居跡 SI02（Fig.８、PL３）

調査区西側のＢ－２－ａ～ｄ区に位置し、標高26.80～27.00ｍの平坦部に立地する。土坑SK27・35・36に東壁の一部及び・床面・炉址・柱穴の一部が壊されている。また、北西側の一部が調査区域外にあるため、平面形の全容は不明だが、やや南北に長い略円形を呈していると推定される。長軸5.40ｍ・短軸は推定で5.05ｍを計る。長軸方向はＮ－2°－Ｅを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は３～12cmを計測する。床面は直床で、ほぼ平坦である。柱穴は17本検出され、径22～65cm、深さ25～74cmと多様である。炉址はほぼ中央部に設置されているが、土坑SK35に北側半分を壊されているため、全容は不明だが、長径96cm（推定）、短径65cm、深さ17cmを計る。燃焼部は南側に寄っていて、よく焼けている。壁溝は南壁と東壁の一部で検出され、幅10～18cm、深さ12～15cmを計測する。この住居跡の覆土は２層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

竪穴住居跡 SI03（Fig.９）

調査区の南側のＣ－５－ａ～ｄ区に位置し、標高26.80～27.00ｍの平坦部に立地する。溝状遺構SD02・03、土坑SK62・101に一部の壁・床面を壊されている。また、竪穴住居跡SI04・05を切って存在していた。平面形は南北に長い楕円形を呈する。長軸6.02ｍ、短軸4.70ｍを計る。長軸方向はＮ－26°－Ｅを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約10cmを計測する。柱穴は７本検出され、径30～54cm、深さ37～78cmと多様である。床面は直床でほぼ平坦である。炉址は中央よりやや北側で配され、大きさは120×86cm、深さ16cmを計り、よく焼けている。この住居跡の覆土は３層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

竪穴住居跡 SI04（Fig.９）

調査区南側のＢ－５－ｂ・ｄ、Ｃ－５－ａ～ｄ区に位置し、標高26.70～26.80ｍの平坦部に立地する。溝状遺構SD03、竪穴住居跡SI03・05、土坑SK52・53・62・63に床面・壁が切られている。また、遺構検出面が浅かったために、壁・床面のほとんどは現代の耕作によって壊されている。平面形は正確には

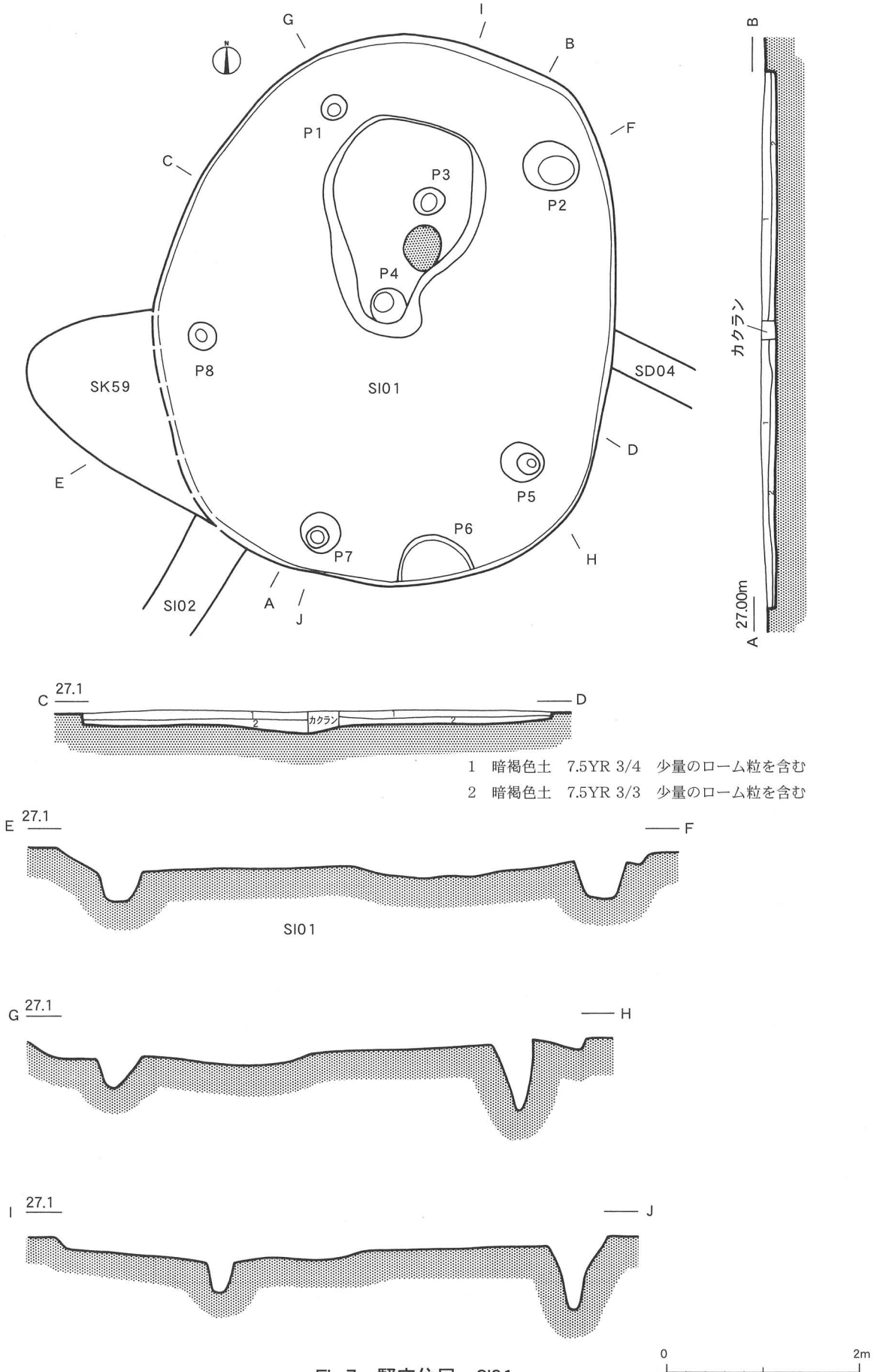
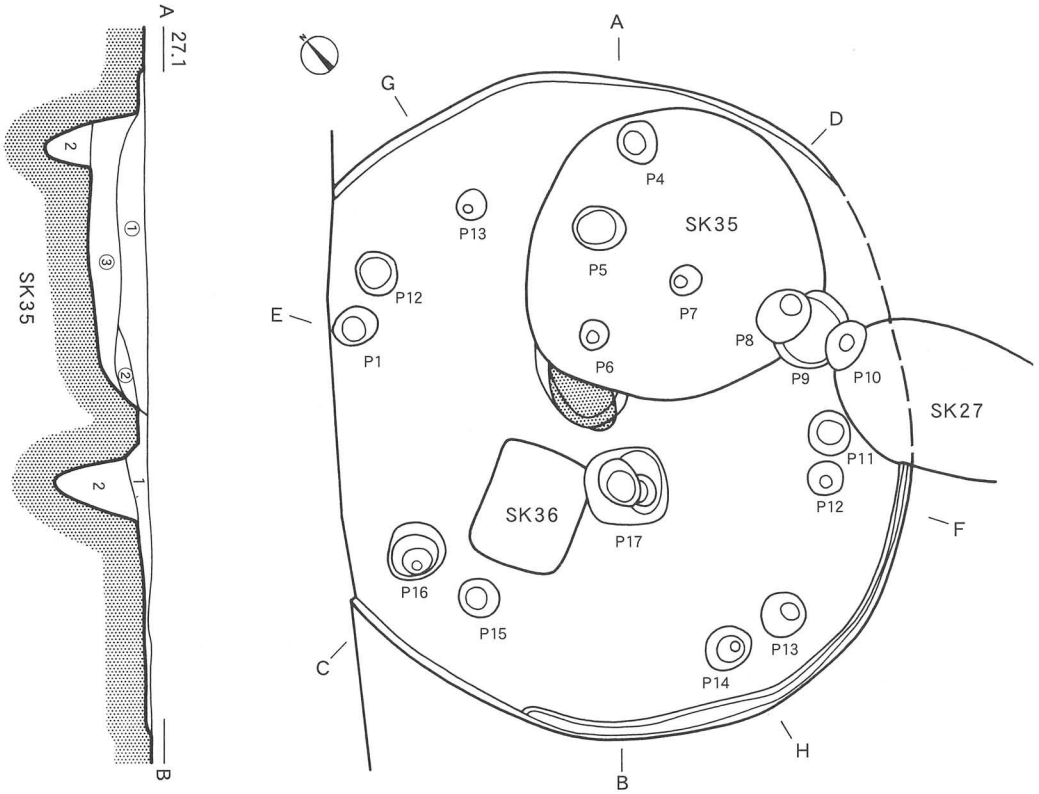


Fig.7　竪穴住居　SI01



SI02
1　褐色土　7.5YR 4/3　少量のローム粒・ロームブロックを含む
2　暗褐色土　7.5YR 3/4　少量のローム粒・ロームブロックを含む

①－SK35
②－SK35
③－SK35

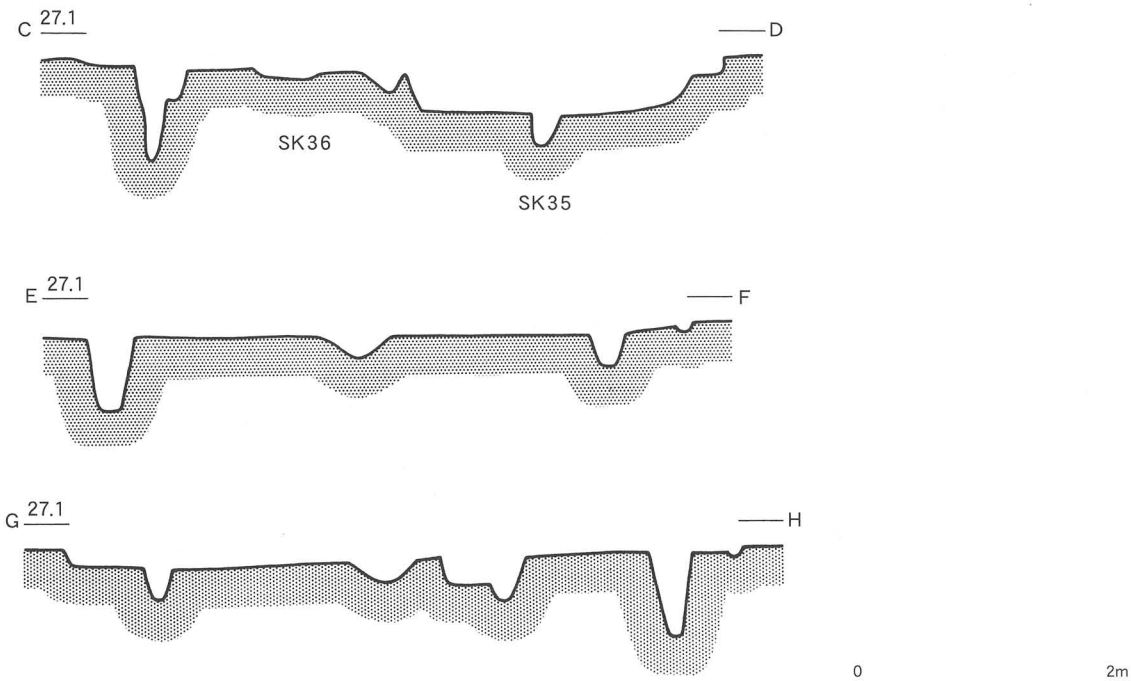
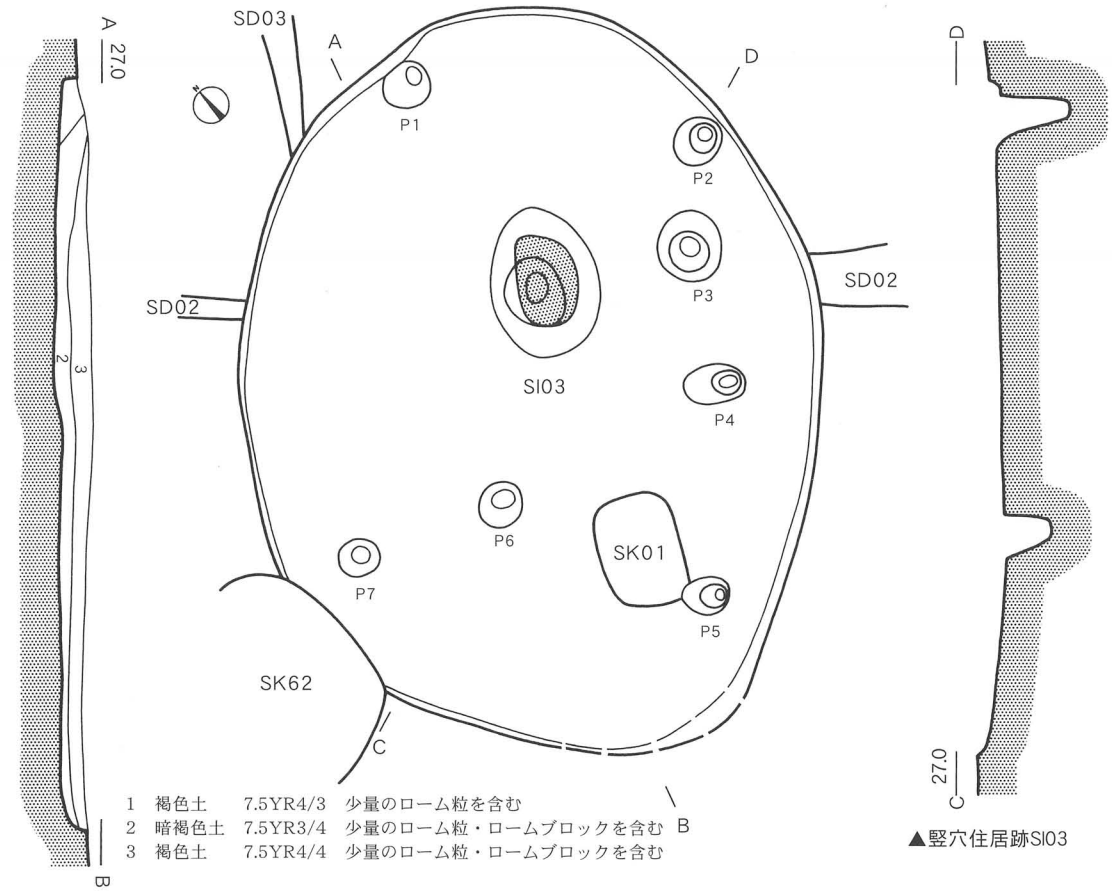


Fig.8　竪穴住居跡　SI02



▲竪穴住居跡SI03

▼竪穴住居跡SI04

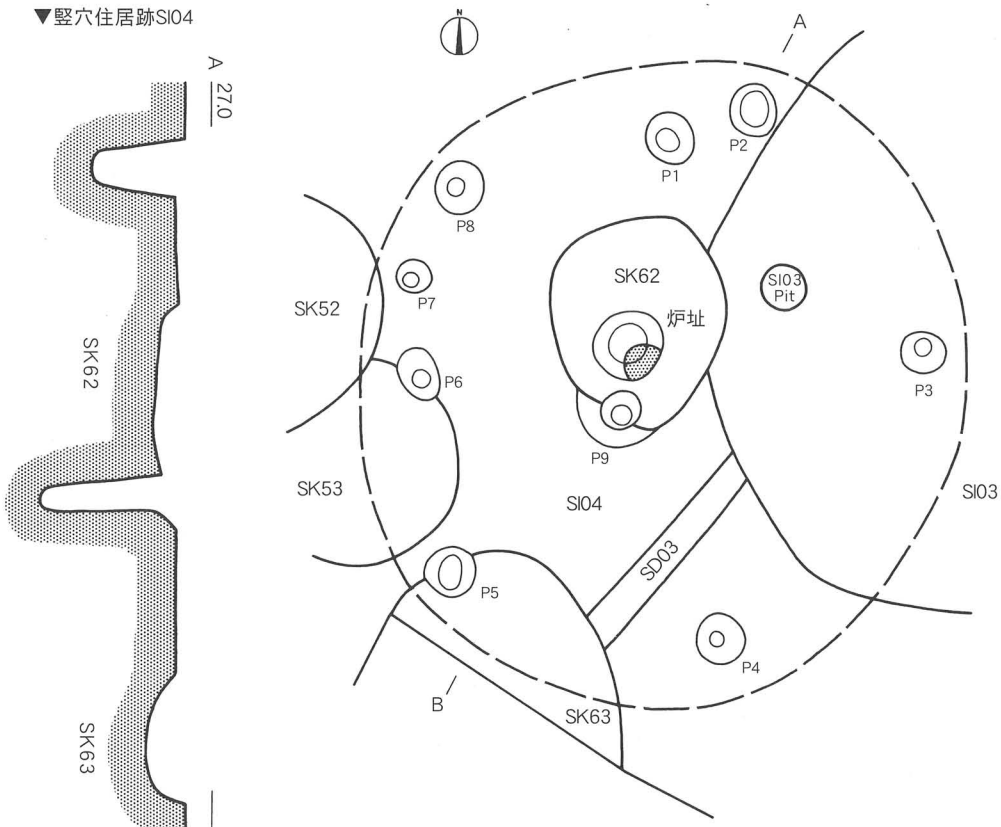


Fig.9 竪穴住居跡 SI03・SI04

不明だが、南北に長い略円形であったと推定される。長軸は推定で5.18ｍ、短軸も推定で4.85ｍを計る。長軸方向は推定でＮ－15°－Ｅを示す。壁・床面は現存していない。柱穴は９本検出され、径26～43cm、深さ45～106cmと多様である。炉址はほぼ中央部に位置していたものと考えられるが、土坑SK62に切られているため、全容は不明。現存する大きさは55×53cm、深さは19cmを計る。燃焼部は南東側でよく焼けて検出されている。

竪穴住居跡SI05（Fig.10）

調査区南側のＢ－４－ｄ、Ｂ－５－ｂ・ｄ、Ｃ－４－ｃ、Ｃ－５－ａ・ｃ区に位置し、標高26.70～26.80ｍの平坦部に立地する。溝状遺構SD02、竪穴住居跡SI03、土坑SK51・52・53・58・62・69に切られている。また、遺構の掘り込みが浅かったために、壁・床面のほとんどは現代の耕作によって消失し、西側の一部の柱穴も大規模な撹乱によって壊されている。なお、竪穴住居跡SI04は本址によって切られている。平面形は推定では東西に長い楕円形を呈すると考えられる。長軸は推定で7.16ｍ、短軸も推定で6.16ｍを計る。長軸方向はＮ－51°－Ｗ（推定）を示す。床面・壁は現存していない。柱穴は10本検出され、径28～52cm、深さ37～107cmと多様である。炉址は検出されていない。

竪穴住居跡SI06（Fig.10）

調査区南側のＢ－４－ａ～ｂ、Ｂ－５－ａ・ｂ区に位置し、標高26.70～26.80ｍの平坦部に立地する。土坑SK48～50、56に切られている。遺構の検出面が浅かったために、壁・床面のほとんどは現代の耕作によって消失し、南側の一部の柱穴も現代の撹乱によって壊されている。平面形は推定で南北に長い楕円形と考えられる。長軸は推定で5.45ｍ、短軸も推定で4.17ｍを計る。長軸方向も推定でＮ－０°を示す。壁・床面・炉址は現存していない。柱穴は８本検出され、径30～56cm、深さ30～78cmと多様である。

竪穴住居跡SI07（Fig.11、PL４）

調査区南西側のＤ－６－ａ～ｃ区に位置し、標高26.80ｍの平坦部に立地する。本址の東側1/2以上が調査区域外に存在するため、遺構の全容は不明なうえに、溝状遺構SD02、土坑64・65・78・81に壁・床面及び柱穴の一部が壊されている。平面形は推定で、東西に長い隅丸方形と考えられる。長軸は推定で、4.84ｍ、短軸も推定で4.40ｍを計る。長軸方向はＮ－65°－Ｅ（推定）を示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は９cm前後を計測する。床面は直床でほぼ平坦である。柱穴は３本検出され、径24～58cm、深さ40～60cmと多様である。炉址は検出されていない。住居跡の覆土は４層に分けられ、人為的な埋め戻し土と推定される。

竪穴住居跡SI08（Fig.11）

調査区の東側Ｄ－４－Ｃ・ｄ、Ｄ－５－ａ・ｂ区に位置し、標高26.60～26.80ｍの平坦部に立地する。土坑SK74・75に切られている。また、遺構検出面が浅かったため、壁・床面の大部分が現代の耕作によって削平されている。重複している竪穴住居跡SI09を切って存在していた。平面形は南北にやや長い略円形を呈する。長径は3.95ｍ、短径は3.60ｍを計る。長軸方向はＮ－7°－Ｗを示す。壁は南西側の一部しか残存しておらず、残存部ではほぼ垂直に立ち上がり、壁高は18cmを数える。床面は直床でほぼ平坦であ

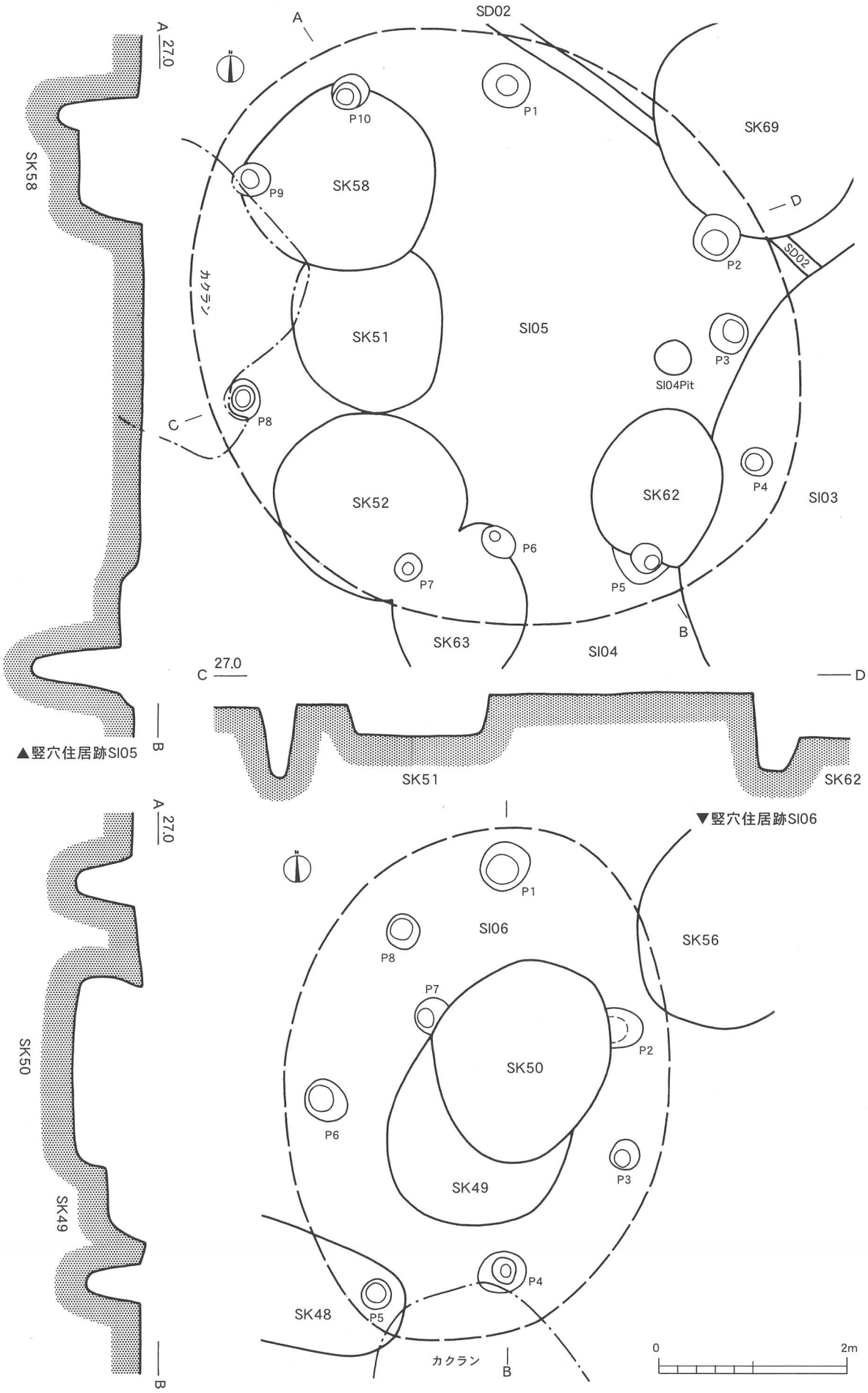


Fig.10　竪穴住居跡　SI05・SI06

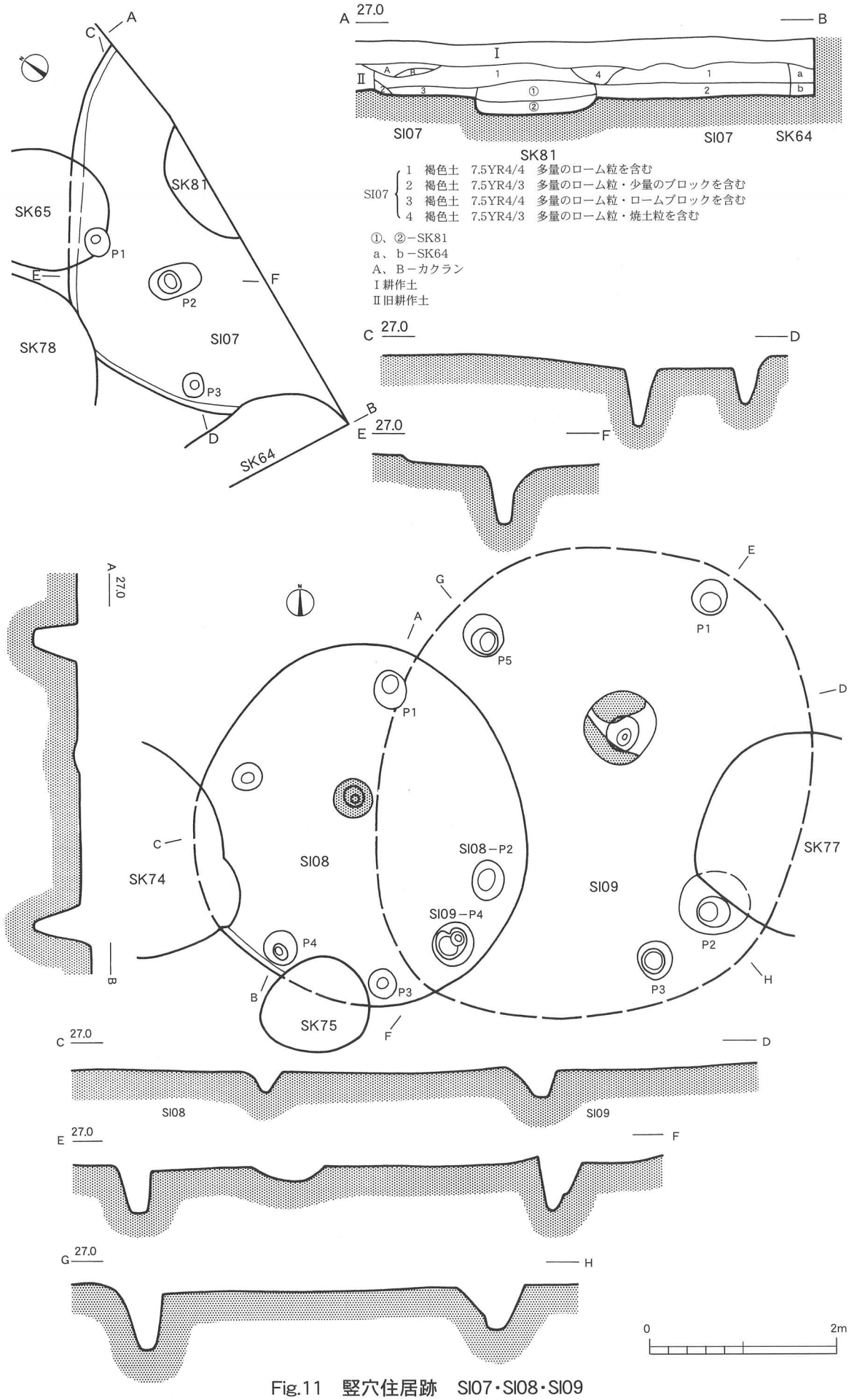


Fig.11　竪穴住居跡　SI07・SI08・SI09

る。柱穴は５本配置され、径29～43cm、深さ42～51cmと多様である。炉址は中央部よりやや北側に配され、径42cm、深さ14cmとよく焼けていて、土器を転用した埋甕炉であった。

竪穴住居跡SI09（Fig.11）

調査区の東側Ｄ－４－ｂ・ｄ、Ｅ－４－Ｃ，Ｄ－５－ｂ、Ｅ－５－ａ区に位置し、標高26.80ｍの平坦部に立地する。竪穴住居跡SI08、土坑SK77に切られている。また、遺構検出面が浅かったため、壁・床面のほとんどが、現代の耕作によって削平されている。平面形は南北に長い隅丸方形と推定される。長軸5.20ｍ（推定)、短軸も推定で4.64ｍを計る。長軸方向も推定でＮ－10°－Ｅを示す。壁・床面は現存していない。柱穴は５本検出され、径37～49cm、深さ39～56cmと多様である。炉址は中央よりやや北側に配され、規模は80×78cm、深さ30cmを計測する。炉底面中央に18×14cmの大きさのピットを有する。

竪穴住居跡SI10（Fig.12、PL４）

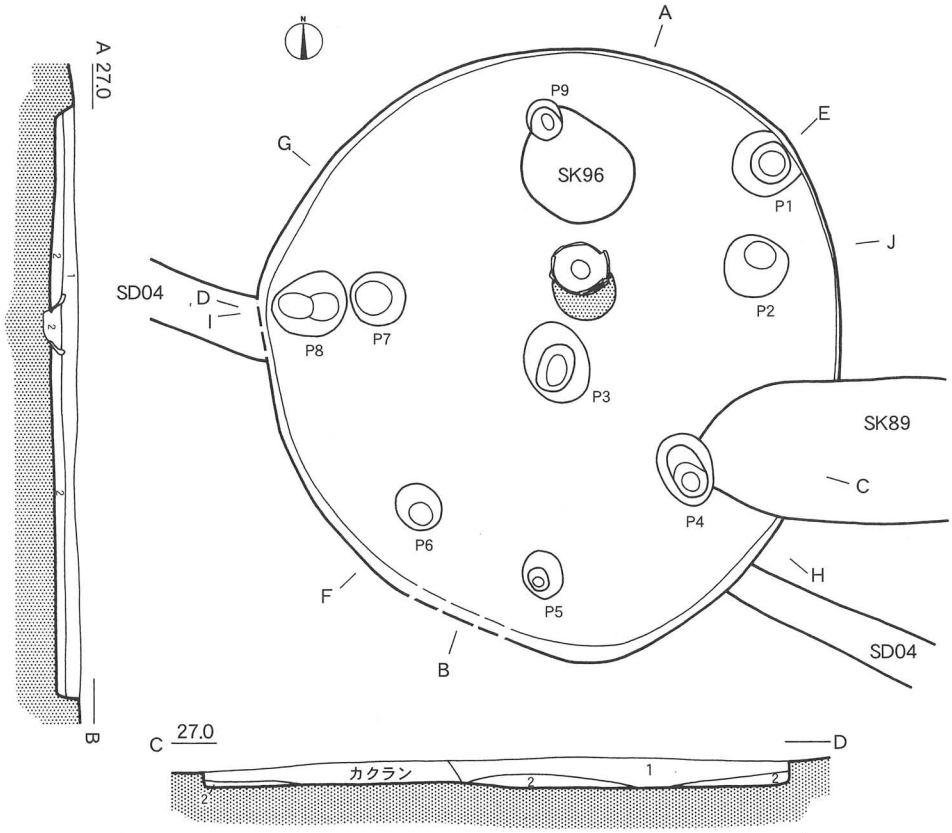
調査区の東側Ｄ－３－ｄ、Ｅ－３－Ｃ、Ｄ－４－ｂ、Ｅ－４－ａ区に位置し、標高26.70～26.90ｍの平坦部に立地する。溝状遺構SD04、土坑SK88・89・96に一部の壁・床面・柱穴が壊されている。平面形は南北にやや長い略円形を呈する。長軸4.90ｍ、短軸4.70ｍを計る。長軸方向はＮ－13°－Ｗを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は13～16cmを計測する。床面は直床でほぼ平坦である。柱穴は９本検出され、径34～70cm、深さ40～78cmと多様である。炉址は中央よりやや北側で配され、大きさは60×48cm、深さ12cmを計測し、よく焼けていて、土器を転用した埋甕炉であった。

（大渕淳志）

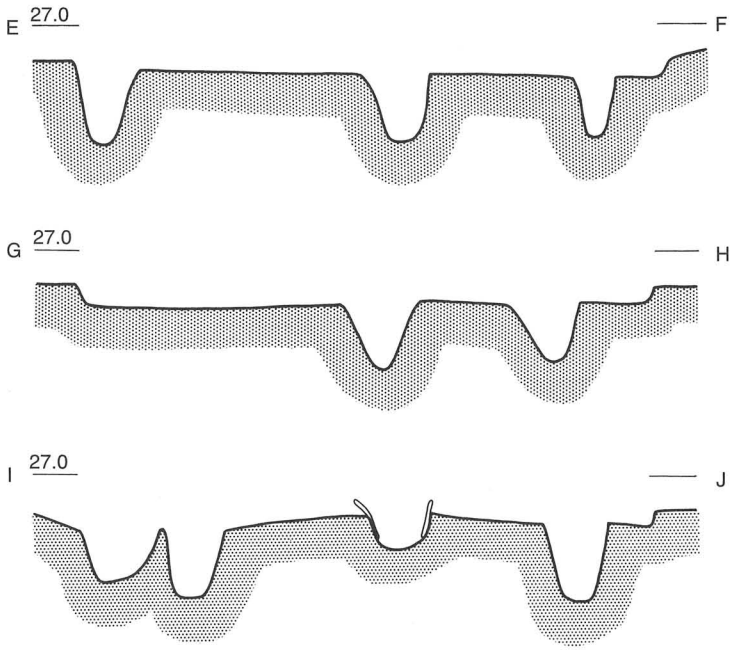
竪穴住居跡SI11（Fig.13、PL５）

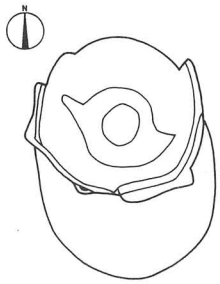
調査区の中央部やや東側のＤ－２－ｃ、Ｄ－２－ｄ、Ｅ－２－ｃ、Ｄ－３－ａ、Ｄ－３－ｂ、Ｅ－３－ａに位置する。平面形は中形の楕円形を呈するいわゆる「有段式竪穴遺構」と呼称されるもで、その規模は上床部長軸6.17m、短軸5.06m下床部長軸4.16m、短軸2.86mを測る。主軸方位はＮ－25°－Ｅを指す。全体の遺構の依存状況は近・現代の撹乱が北川壁周辺に集中するもののきわめて良好である。確認された壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は上床部壁において、北側27cm、東側26cm、南側27cm、西側28cmを計測でき、また下床部壁においては北側23cm、東側19cm、南側25cm、西側21cmを計測する。壁溝は上床部で北西部の一部と南壁部で構築され、床から深さ４～６cm、幅15～25cm。下床部は全周し、深さ６～10cm、幅18～27cmである。上・下床面の表面は状態はともに堅緻でほぼ平坦である。柱穴は下床部四隅隣接して４本の主柱穴と南側中央に梯子穴１本が穿ってある。まず主体穴の４本の規模は、北壁隅（Ｐ１）が58×52cm、深さ60cm、東壁隅（Ｐ２）は48×46cm、深さ71cm、南壁隅（Ｐ３）は50×46cm、深さ60cm、西壁隅（Ｐ４）は50×４４cm、深さ73cmを測る。また南壁中央に梯子穴（Ｐ５）がある。大きさは58×48cm、深さ13cmと浅い。なお、炉もしくは加熱等による床面の赤化は全くできなかった。覆土の堆積状況は、レンズ状の自然堆積で、人為的な埋め戻しは観察できなかった。また覆土中よりも中峠式を主体に加曽利Ｅ１式の古期の土器のほか、土製品として土器方錘９点、石製品とし磨製石斧１点が出土している。

（小川和博）



1　褐色土　7.5YR4/3　少量のローム粒・微量のロームブロックを含む
2　暗褐色土　7.5YR3/4　微量のローム粒を含む





▲竪穴住居跡SI10埋甕炉

0　50cm

0　2m

Fig.12　竪穴住居跡　SI10

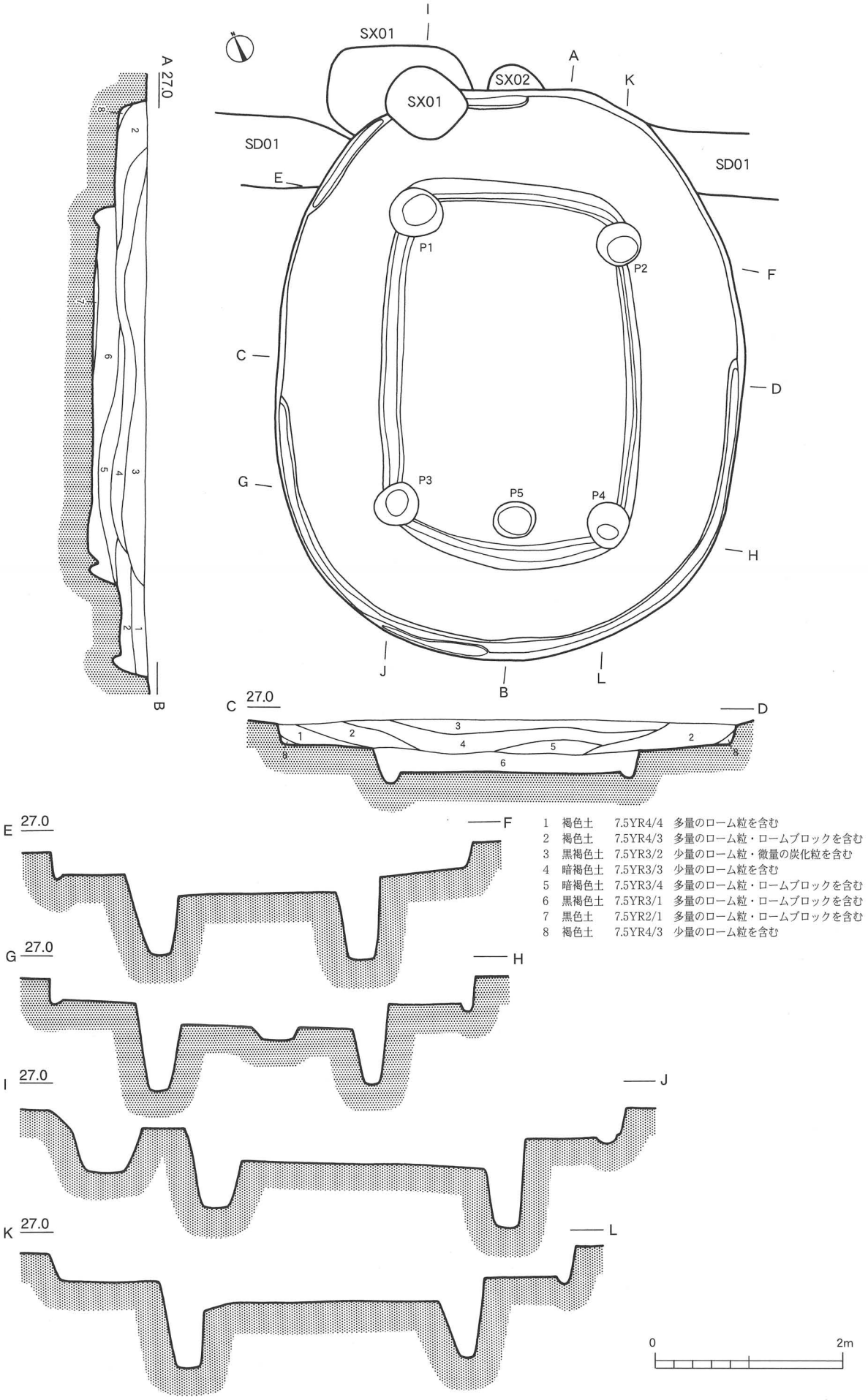


Fig.13 竪穴住居跡 SI11

2．土坑

土坑SK01（Fig.14）

調査区南西側Ａ－４－ａ区に位置し、標高27.00ｍの平坦部に立地する。遺構の西側1/2が調査区域外に存在していたため、全容は不明だが、平面形は南北にやや長い略円形を呈すると推定される。開口部長径は246cmを計る。長軸方向はＮ－29°－Ｅを示す。坑底長径は118cm、底面中央部の深さは108cmを計る。開口部より坑底部が65～85cmほど大きく広がる。壁は内側へ大きく膨らみながら急傾して立ち上がる。底面はやや起伏がある。覆土は４層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

土坑SK02（Fig.14）

調査区南西側Ａ－４－ａ～ｄ区に位置し、標高26.80～26.90ｍの平坦部に立地する。南側を土坑SK03に切られている。平面形は南北に長い楕円形を呈する。開口部長径は216cm、開口部短径182cmを計る。長軸方向はＮ－40°－Ｅを示す。坑底長径292cm、坑底短径253cm、底面中央部の深さは108cmを計る。開口部より坑底部が５～67cmほど大きく広がる。壁は内側へ大きく膨らみながら急傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。覆土は８層に分けられ、人為的な埋め戻し土と考えられる。

土坑SK03（Fig.14）

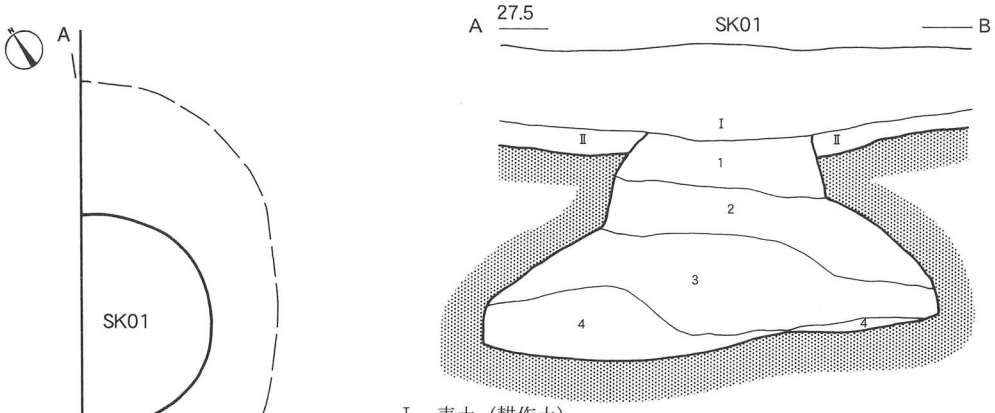
調査区南西側Ａ－４－Ｃ・ｄ区に位置し、標高26.90～27.30ｍの平坦部に立地する。遺構の南西側1/3が調査区域外に存在し、全容は不明。重複する土坑SK02を切って検出されている。平面形は東西に長い楕円形を呈すると推定される。長径は210㎝以上と考えられる。底面中央部の深さは70㎝を計る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。覆土は９層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

土坑SK04（Fig.15）

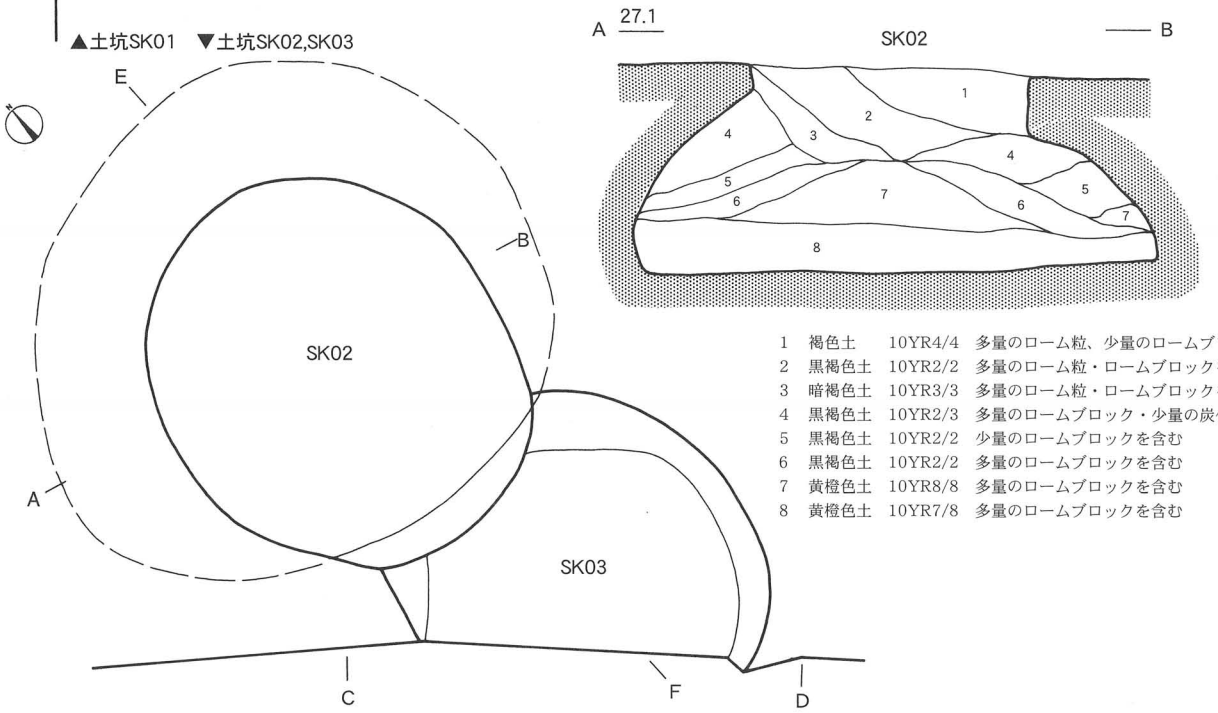
調査区南西側Ａ－４－ｂ・ｄ、Ｂ－４－ａ・ｃ区に位置し、標高27.00ｍの平坦部に立地する。土坑SK05を切って、土坑SK06・44に切られていた。平面形は東西に長い楕円形を呈する。長径313㎝、短径276㎝を計る。長軸方向はＮ－80°－Ｗを示す。坑底長径は286㎝、坑底短径246㎝、底面中央部の深さは52㎝を計測する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。坑底施設として１基の円形サイド・ピットを伴う。ピットの大きさは径56×52㎝、深さ39㎝を計る。覆土は６層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

土坑SK05（Fig.15）

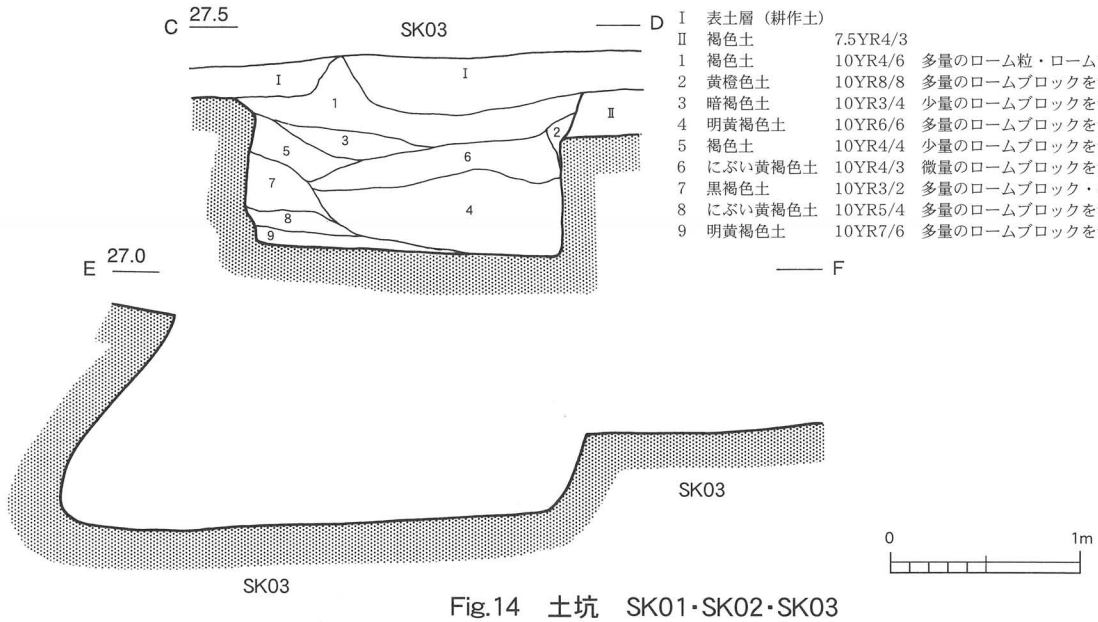
調査区南西側Ａ－４－ｄ区に位置し、標高26.90ｍの平坦部に立地する。土坑SK04・06に切られている。平面形は南北に長い楕円形を呈する。開口部長径188㎝、開口部短径156㎝を計る。長軸方向はＮ－42°－Ｗを示す。坑底長径225㎝、坑底短径210㎝、底面中央部の深さは76㎝を計る。開口部より坑底部が２～50㎝ほど大きく広がる。壁は内側へ大きく膨らみながら急傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。坑底施設として１基の円形サイド・ピットを付設する。ピットの大きさは68×64㎝、深さは54㎝を計測する。覆土は５層に分けられ、人為的な埋め戻し土と考えられる。



I　表土（耕作土）
II　褐色土　7.5YR4/3
1　褐色土　7.5YR4/3　少量のローム粒を含む
2　黒褐色土　7.5YR3/2　少量のローム粒・微量のロームブロックを含む
3　褐色土　7.5YR4/4　多量のローム粒・ロームブロックを含む
4　黒褐色土　7.5YR2/2　微量のローム粒・ロームブロックを含む

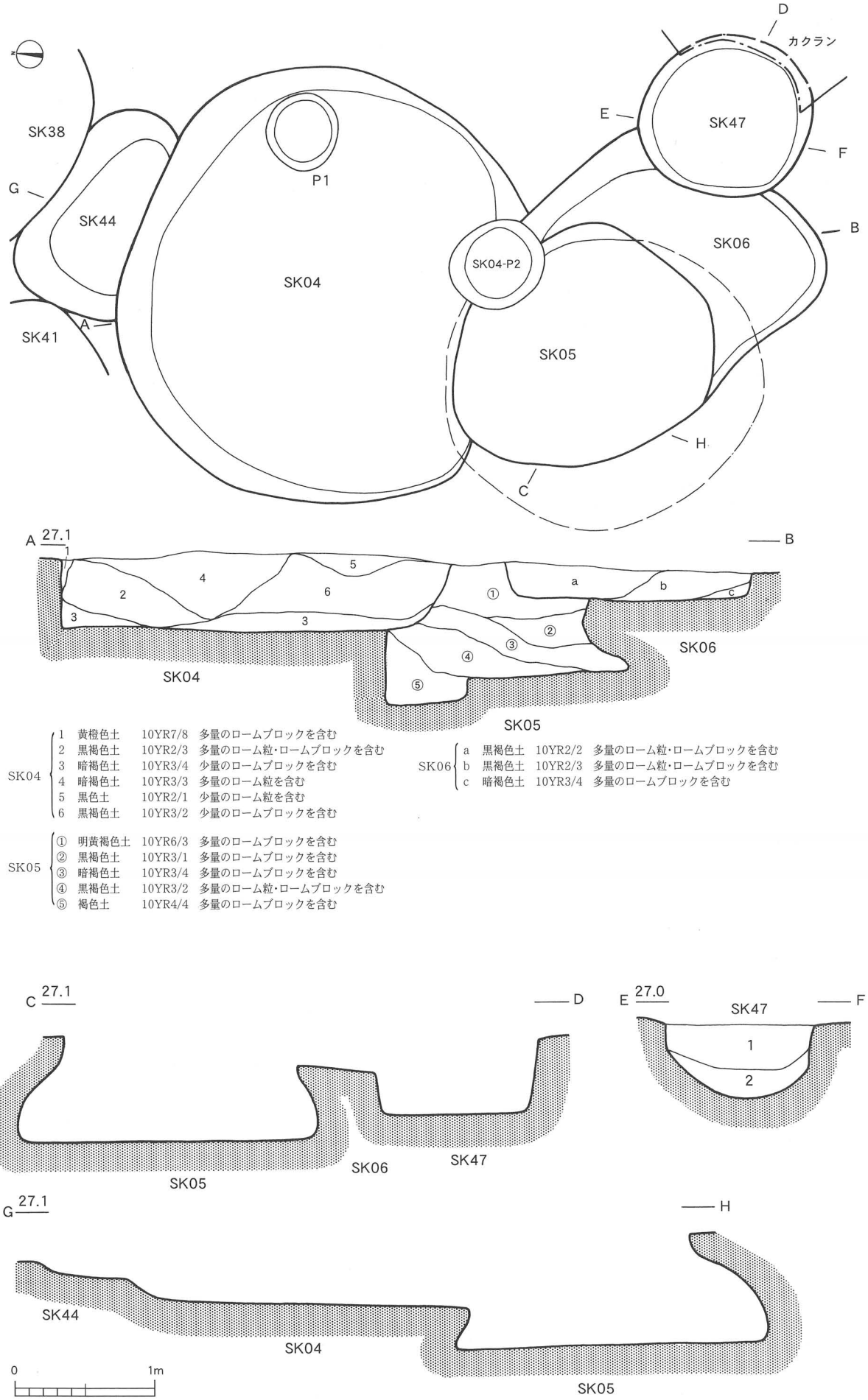


1　褐色土　10YR4/4　多量のローム粒、少量のロームブロックを含む
2　黒褐色土　10YR2/2　多量のローム粒・ロームブロックを含む
3　暗褐色土　10YR3/3　多量のローム粒・ロームブロックを含む
4　黒褐色土　10YR2/3　多量のロームブロック・少量の炭化粒を含む
5　黒褐色土　10YR2/2　少量のロームブロックを含む
6　黒褐色土　10YR2/2　多量のロームブロックを含む
7　黄橙色土　10YR8/8　多量のロームブロックを含む
8　黄橙色土　10YR7/8　多量のロームブロックを含む



I　表土層（耕作土）
II　褐色土　7.5YR4/3
1　褐色土　10YR4/6　多量のローム粒・ロームブロックを含む
2　黄橙色土　10YR8/8　多量のロームブロックを含む
3　暗褐色土　10YR3/4　少量のロームブロックを含む
4　明黄褐色土　10YR6/6　多量のロームブロックを含む
5　褐色土　10YR4/4　少量のロームブロックを含む
6　にぶい黄褐色土　10YR4/3　微量のロームブロックを含む
7　黒褐色土　10YR3/2　多量のロームブロック・少量の焼土粒を含む
8　にぶい黄褐色土　10YR5/4　多量のロームブロックを含む
9　明黄褐色土　10YR7/6　多量のロームブロックを含む

Fig.14　土坑　SK01・SK02・SK03

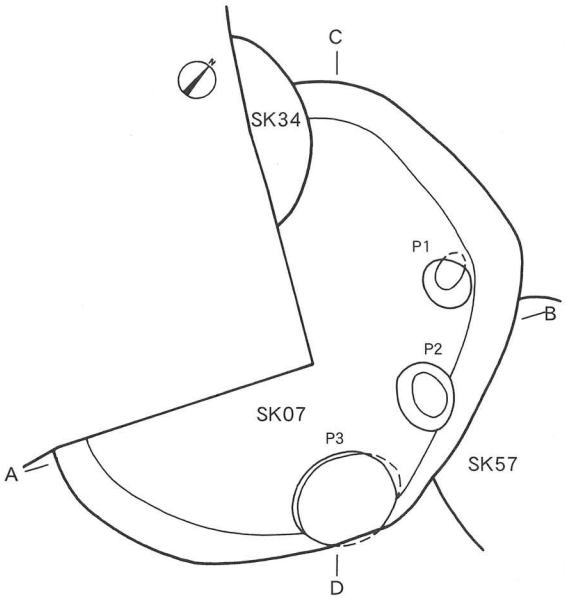


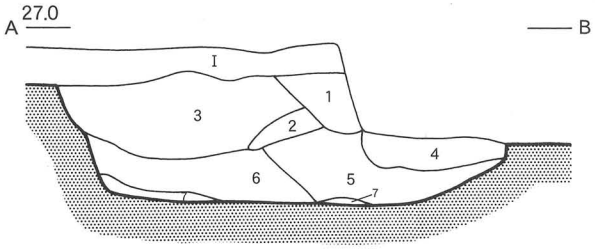
SK04
- 1 黄橙色土 10YR7/8 多量のロームブロックを含む
- 2 黒褐色土 10YR2/3 多量のローム粒・ロームブロックを含む
- 3 暗褐色土 10YR3/4 少量のロームブロックを含む
- 4 暗褐色土 10YR3/3 多量のローム粒を含む
- 5 黒色土 10YR2/1 少量のローム粒を含む
- 6 黒褐色土 10YR3/2 少量のロームブロックを含む

SK05
- ① 明黄褐色土 10YR6/3 多量のロームブロックを含む
- ② 黒褐色土 10YR3/1 多量のロームブロックを含む
- ③ 暗褐色土 10YR3/4 多量のロームブロックを含む
- ④ 黒褐色土 10YR3/2 多量のローム粒・ロームブロックを含む
- ⑤ 褐色土 10YR4/4 多量のロームブロックを含む

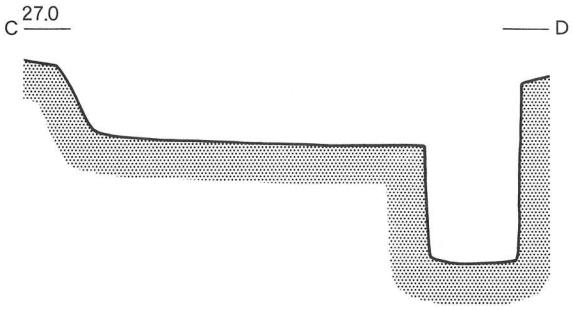
SK06
- a 黒褐色土 10YR2/2 多量のローム粒・ロームブロックを含む
- b 黒褐色土 10YR2/3 多量のローム粒・ロームブロックを含む
- c 暗褐色土 10YR3/4 多量のロームブロックを含む

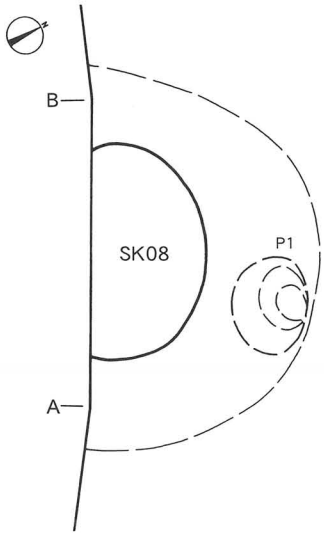
Fig.15 土坑 SK04・SK05・SK06・SK44・SK47

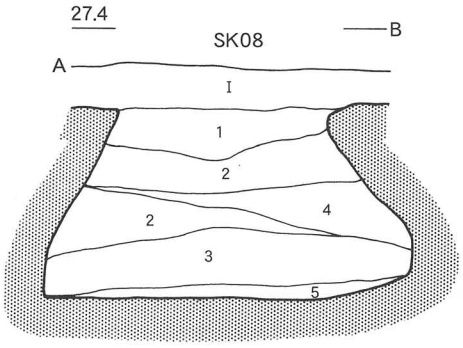




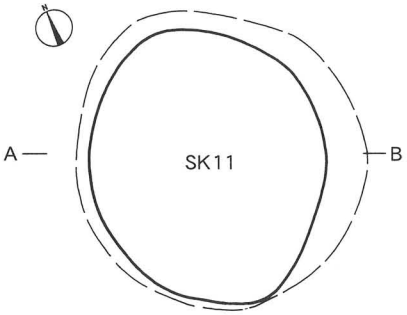
I	黒色土	10YR2/1	表土
1	暗褐色土	7.5YR3/3	多量のローム粒・ロームブロックを含む
2	にぶい黄褐色土褐色土	10YR4/3	多量のロームブロックを含む
3	明褐色土	10YR6/8	多量のロームブロックを含む
4	褐色土	10YR4/6	多量のロームブロックを含む
5	褐色土	10YR4/4	多量のロームブロックを含む
4	黒褐色土	10YR2/2	少量のロームブロックを含む
5	黄橙色土	10YR8/8	多量のロームブロックを含む

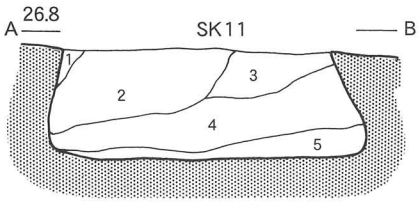






I	表土層		
1	褐色土	7.5YR4/4	多量のローム粒を含む
2	褐色土	7.5YR4/3	多量のローム粒を含む
3	暗褐色土	7.5YR3/4	多量のローム粒を含む
4	黒褐色土	7.5YR3/1	少量のローム粒を含む
5	黒褐色土	7.5YR3/2	少量のローム粒を含む





1	明褐色土	7.5YR5/6	多量のローム粒を含む
2	暗褐色土	10YR3/2	多量のローム粒を含む
3	黒褐色土	10YR3/2	多量のローム粒を含む
4	明黄褐色土	10YR6/6	少量のローム粒を含む
5	明黄褐色土	10YR6/8	少量のローム粒を含む

0 1m

Fig.16　土坑　SK07・SK08・SK11

土坑SK06（Fig.15）

調査区南西側Ａ－４－ｄ区に位置し、標高26.90ｍの平坦部に立地する。土坑SK04・05を切っていて、土坑SK47に切られて検出されている。平面形は南北に長い楕円形を呈する。長径240㎝、短径200㎝を計る。長軸方向はＮ－０°を示す。坑底長径は210㎝、坑底短径は155㎝、底面中央の深さは20㎝を計測する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。覆土は３層に分けられ、人為的な埋め戻し土と推定される。

土坑SK44（Fig.15）

調査区南西側Ａ－４－ｂ、Ｂ－４－ａ区に位置し、標高26.90ｍの平坦部に立地する。土坑SK04・38・41を切っている。平面は東西に長いやや歪んだ楕円形を呈する。長径152㎝、短径110㎝を計る。長軸方向はＮ－64°－Ｗを示す。坑底長径は116㎝、坑底短径は68㎝、底面中央の深さは27㎝を計測する。壁は緩やかに立ち上がり、底面はやや起伏がある。覆土は自然埋没土と考えられる。

土坑SK47（Fig.15）

調査区南西側Ａ－４－ｄ、Ｂ－４－ｃ区に位置し、標高26.90ｍの平坦部に立地する。東側の一部の壁が現代の撹乱によって壊されている。また、土坑SK06を切っている。平面形は南北にやや長い略円形を呈する。長径は120㎝、短径118㎝を計る。長軸方向はＮ－62°－Ｗを示す。坑底長径は102㎝、坑底短径は100㎝、底面中央の深さは46㎝を計測する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。覆土は２層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

土坑SK07（Fig.16）

調査区南西側Ａ－４－ｄ、Ｂ－４－ｃ、Ａ－５－ｂ、Ｂ－５－ａ区に位置し、標高26.40～26.80ｍの平坦部に立地する。本址の南西側1/4が調査区域外にあるため、全容は不明なうえに、土坑SK34・57に切られている。平面形は南北に長い楕円形を呈すると推定される。長径は266㎝、短径は不明。長軸方向はＮ－24°－Ｗを示す。坑底長径は226㎝、坑底短径は不明、底面中央の深さは40㎝を計る。壁は急傾に立ち上がり、底面はやや起伏がある。坑底施設として、３基の円形サイド・ピットを伴う。北東側のピット(P1)は径28×24㎝、深さ37㎝を計り、北側の底部は上場より８㎝内側に入っている。東側のピット(P2)は径36×30㎝、深さ39㎝を計測する。南東側のピット(P3)は径56×48㎝、深さ63㎝を計り、北側・東側の底面の一部が上場より内側へ２～５㎝ほど入る。覆土は７層に分けられ、埋め戻し土と考えられる。

土坑SK08（Fig.16）

調査区南側Ｂ－５－ａ・ｃ区に位置し、標高27.00ｍの平坦部に立地する。本址の南側2/5が調査区域外にあるため、全容は不明だが、平面形は東西に長い楕円形を呈すると推定される。開口部長径は114㎝、開口部短径は不明。長軸方向はＮ－65°－Ｗを示す。坑底長径は不明、坑底短径202㎝、底面中央の深さは102㎝を計る。開口部より坑底部が45～60㎝ほど大きく広がる。壁は大きく膨らみながら急傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。坑底施設としては、楕円形のサイド・ピットを１基付設する。ピットの大きさは径52×40㎝、深さ57㎝を計る。覆土は５層に分けられ、人為的な埋め戻し土と考えられる。

土坑SK09（Fig.17）

調査区の南西側Ａ－４－ａ・ｂ区に位置し、標高26.70～26.90ｍの平坦部に立地する。土坑SK10を切り、SK41に切られている。平面形は南北に長い楕円形を呈する。長径は246㎝、短径は200㎝を計る。長軸方向はＮ－41°－Ｗを示す。坑底長径184㎝、坑底短径176㎝、底面中央の深さは42㎝を計測する。壁は急傾に立ち上がり、底面はやや起伏がある。坑底施設としては、円形のサイド・ピットを１基付設する。ピットの大きさは径34㎝、深さ27㎝を計る。覆土は６層に分けられ、人為的な埋め戻し土と考えられる。

土坑SK10（Fig.17）

調査区の南西側Ａ－３－ｃ・ｄ、Ａ－４－ａ・ｂ区に位置し、標高26.70～26.90ｍの平坦部に立地する。土坑SK09に切られている。平面形は南北方向に長い楕円形を呈する。長径196㎝、短径186㎝を計る。長軸方向はＮ－43°－Ｗを示す。坑底長径162㎝、坑底短径148㎝、底面中央の深さは58㎝を計る。壁は急傾に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。坑底施設としては、１基の円形サイド・ピットを付設する。ピットの大きさは径44×40㎝、深さ36㎝を計る。覆土は５層に分けられ、人為的な埋め戻し土と考えられる。

土坑SK41（Fig.17）

調査区の南西側Ａ－４－ｂ区に位置し、標高26.80ｍの平坦部に立地する。土坑SK09を切っている。平面形は東西に長い楕円形を呈する。長径176㎝、短径120㎝を計る。長軸方向はＮ－82°－Ｗを示す。坑底長径は156㎝、坑底短径は102㎝、底面中央部の深さは18㎝を計測する。壁は急傾に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。覆土は自然埋没土と考えられる。

土坑SK11（Fig.16）

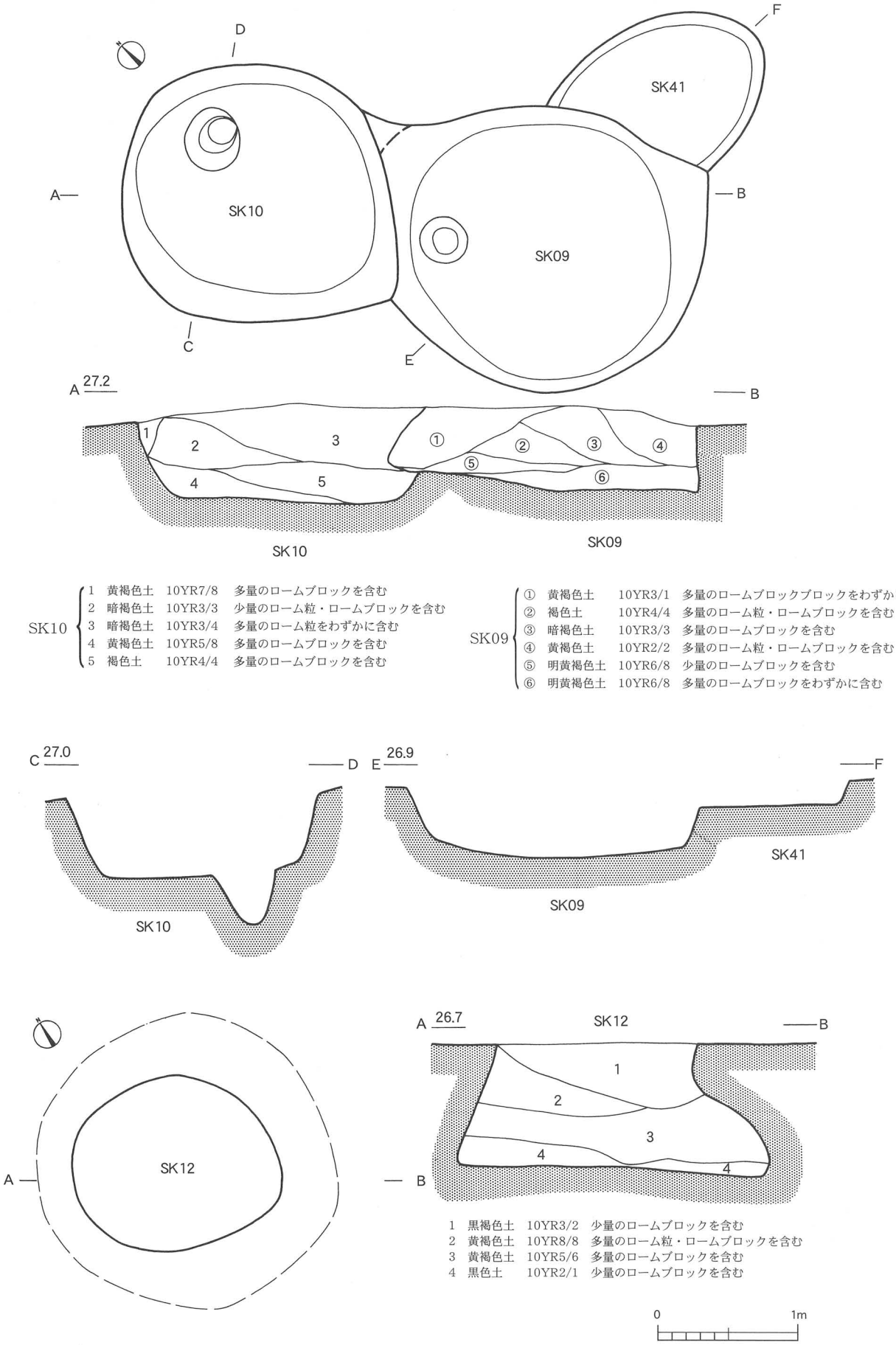
調査区の北東側Ｇ－２－ａ・ｃ区に位置し、標高26.70ｍの平坦部に立地する。平面形は南北に長い楕円形を呈する。開口部長径152㎝、開口部短径は126㎝を計る。長軸方向はＮ－２°－Ｗを示す。坑底長径は164㎝、坑底短径は154㎝、底面中央の深さは62㎝を計測する。開口部より坑底部が２～22㎝ほど大きく広がっている。壁は内側へ急傾しながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。覆土は５層に分けられ、人為的な埋め戻し土と考えられる。

土坑SK12（Fig.17）

調査区の北東側Ｈ－２－ｃ区に位置し、標高26.60ｍの平坦部に立地する。平面形は東西に長い楕円形を呈する。開口部長径152㎝、開口部短径124㎝を計る。長軸方向はＮ－43°－Ｗを示す。坑底長径220㎝、坑底短径210㎝、底面中央の深さは88㎝を計測する。開口部より坑底部が30～50㎝ほど大きく広がる。壁は大きく膨らみながら急傾して立ち上がる。底面はやや起伏がある。覆土は４層に分けられ、人為的な埋め戻し土と考えられる。

土坑SK13（Fig.18）

調査区の南側Ｂ－５－ｄ区に位置し、標高26.60ｍの平坦部に立地する。本址の南側の1/2が調査区域外に存在しているため、遺構の全容は不明だが、平面形は略円形を呈していると推定される。開口部長径は



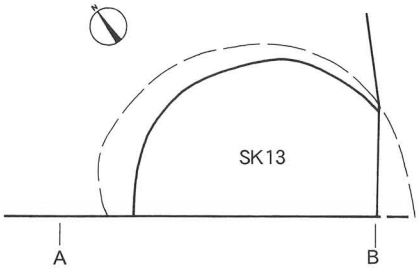
SK10
1 黄褐色土 10YR7/8 多量のロームブロックを含む
2 暗褐色土 10YR3/3 少量のローム粒・ロームブロックを含む
3 暗褐色土 10YR3/4 多量のローム粒をわずかに含む
4 黄褐色土 10YR5/8 多量のロームブロックを含む
5 褐色土 10YR4/4 多量のロームブロックを含む

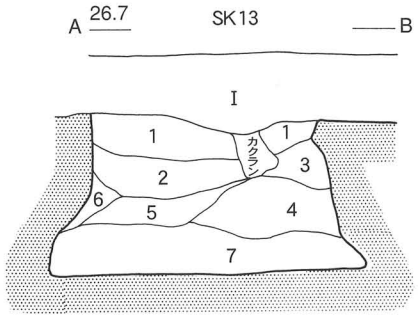
SK09
① 黄褐色土 10YR3/1 多量のロームブロックブロックをわずかに含む
② 褐色土 10YR4/4 多量のローム粒・ロームブロックを含む
③ 暗褐色土 10YR3/3 多量のロームブロックを含む
④ 黄褐色土 10YR2/2 多量のローム粒・ロームブロックを含む
⑤ 明黄褐色土 10YR6/8 少量のロームブロックを含む
⑥ 明黄褐色土 10YR6/8 多量のロームブロックをわずかに含む

1 黒褐色土 10YR3/2 少量のロームブロックを含む
2 黄褐色土 10YR8/8 多量のローム粒・ロームブロックを含む
3 黄褐色土 10YR5/6 多量のロームブロックを含む
4 黒色土 10YR2/1 少量のロームブロックを含む

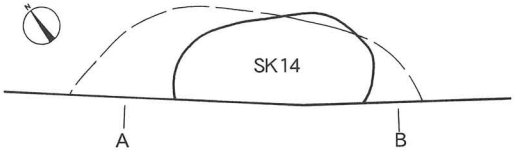
0 1m

Fig.17 土坑 SK09. SK10. SK12. SK41

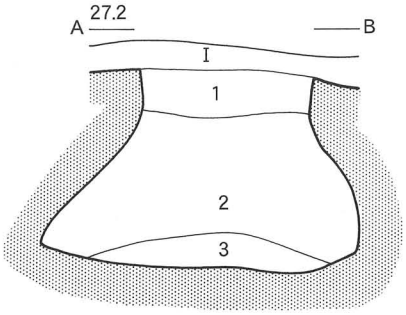




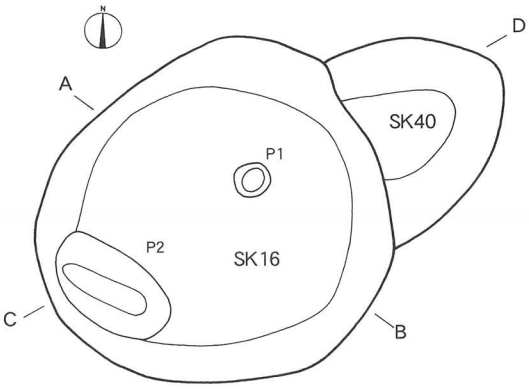
I	黒色土	10YR2/1	表土
1	黄橙色土	10YR7/8	多量のローム粒・少量のロームブロックを含む
2	黒褐色土	10YR3/2	少量のロームブロックを含む
3	にぶい黄橙色土	10YR6/4	少量のロームブロックを含む
4	黄褐色土	10YR5/8	多量のローム粒・少量のロームブロックを含む
5	黄褐色土	10YR5/8	少量のロームブロックを含む
6	暗褐色土	10YR3/4	少量のロームブロックを含む
7	黒褐色土	10YR3/2	少量のロームブロックを含む

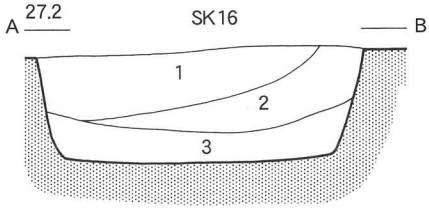


I	表土	7.5YR4/2	
1	褐色土	7.5YR4/4	多量のローム粒を含む
2	暗褐色土	7.5YR3/4	多量のローム粒を含む
3	暗褐色土	7.5YR3/3	多量のローム粒を含む



SK14





1	暗褐色土	7.5YR3/3	少量のローム粒・微量のロームブロックを含む
2	暗褐色土	7.5YR3/4	少量のローム粒・微量のロームブロックを含む
3	黒褐色土	7.5YR2/2	少量のローム粒・少量のロームブロックを含む

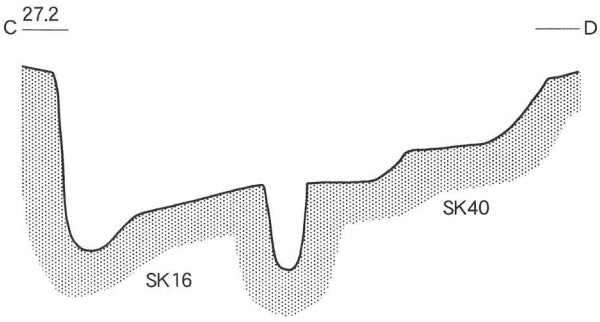


Fig.18　土坑　SK13・SK14・SK16・SK40

推定で140㎝ほどと考えられる。開口部短径は不明。長軸方向はN－61°－Wを示す。坑底長径は166㎝、坑底短径は不明、底面中央の深さは116㎝を計る。開口部より坑底部が5～20㎝ほど大きく広がる。壁は内側へ膨らみながら急傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。覆土は7層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

土坑SK14（Fig.18）

調査区の南側B－5－d区に位置し、標高27.00ｍの平坦部に立地する。本址の南側1/2以上が調査区域外に存在していたため、遺構の全容は不明だが、平面形は東西に長い楕円形を呈すると推定される。開口部長径は106㎝、開口部短径は不明。長軸方向はN－60°－Wを示す。坑底長径は188㎝以上と推定される。坑底短径は不明、底面中央の深さは102㎝を計る。開口部より坑底部が2～55㎝ほど大きく広がる。壁は内側へ大きく膨らみながら急傾して立ち上がる。底面はやや起伏がある。覆土は3層に分けられ、人為的な埋め戻し土と考えられる。

土坑SK16（Fig.18）

調査区の南西側A－3－d区に位置し、標高27.00～27.10ｍの平坦部に立地する。土坑SK40を切っている。平面形は南北にやや長い略円形を呈する。長径は192㎝、短径は183㎝を計る。長軸方向はN－18°－Eを示す。坑底長径・坑底短径は142㎝、底面中央の深さは62㎝を計測する。壁は急傾に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。坑底施設としては、楕円形のサイド・ピット1基と円形ピットを有する。南側の楕円形サイド・ピットは径68×40㎝、深さ27㎝を計る。円形ピットは中央部よりやや北東側に配され、大きさは径20㎝、深さ45㎝を計測する。覆土は3層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

土坑SK40（Fig.18）

調査区の南西側A－3－d区に位置し、標高27.00ｍの平坦部に立地する。西側の1/2近くを土坑SK16に切られているため、全容は不明だが、平面形は東西に長い楕円形を呈していたと推定される。長径は不明、短径は100㎝を計る。長軸方向は不明。坑底長径は不明、坑底短径は46㎝、底面中央の深さは40㎝を計測する。壁は緩やかに立ち上がり、底面はやや起伏がある。覆土は人為的な埋め戻し土と考えられる。

土坑SK17（Fig.19）

調査区の西側A－3－b区に位置し、標高27.00～27.10ｍの平坦部に立地する。西側の1/2近くが調査区域外に存在しているうえに、北側の壁・底面を土坑SK18に壊されているため、全容は不明だが、平面形は略円形ではないかと推定される。規模は200㎝ほどと考えられるが、正確な長径・短径は不明。長軸方向も不明。坑底長径・坑底短径も不明。底面中央の深さは56㎝を計る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。坑底施設としては、円形のサイド・ピットを2基伴う。北東側のピットは径46×40㎝、深さ20㎝を計る。南側のピットは径60×52㎝、深さ70㎝を計測し、底面が上場より2～20㎝内側に広がっている。覆土は3層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

土坑SK18（Fig.19）

調査区の西側Ａ－２－ｄ、Ａ－３－ｂ区に位置し、標高27.20～27.30ｍの平坦部に立地する。西側の2/5が調査区域外に存在していたため、全容は不明だが、平面形は南北に長い楕円形を呈すると推定される。長径は220㎝、短径は不明。長軸方向はＮ－17°－Ｗを示す。坑底長径は200㎝、坑底短径は不明、底面中央の深さは56㎝を計る。壁は急傾に立ち上がり、底面は平坦である。坑底施設としては、２基のサイド・ピットを付設する。北側のピットはやや楕円形で、径46×36㎝、深さ33㎝を計測する。南側のピットはほぼ円形で28×26㎝、深さ16㎝を計る。覆土は２層に分けられ、自然埋没土と考えられる。なお、重複する土坑SK17を切っている。

土坑SK19（Fig.19）

調査区の西側Ｂ－３－ａ・ｃ・ｄ区に位置し、標高27.00ｍの平坦部に立地する。平面形は東西に長い楕円形を呈する。長径は300㎝、短径は262㎝を計る。長軸方向はＮ－68°－Ｗを示す。坑底長径は280㎝、坑底短径は240㎝、底面中央の深さは46㎝を計測する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。坑底施設としては、５基のサイド・ピットと、中央部よりやや南西側に１基の円形ピットを有する。５基のサイド・ピット（P1～P5）のうち、P1は楕円形ピットで径74×56㎝、深さ32㎝を計り、北側の底面が上場より２～５㎝内側に広がっている。P2は円形ピットで径22×21㎝、深さ22㎝を計り、西側の底面が上場より２㎝内側に入っている。P3は隅丸方形で長軸45㎝、短軸34㎝、深さ８㎝を計測する。P4は楕円形ピットを呈し、径100×55㎝、深さ71㎝を数え、南側の底面は上場より内側へ２～15㎝広がっている。P5は円形ピットで径23×20㎝、深さ36㎝を計る。P6は中央部よりやや南西側に位置する円形ピットで、径62×56㎝、深さ40㎝を計測し、底面に２基のピットを有する。このピットは東側の大きさが25×16㎝、深さ４㎝を計り、西側が径18×12㎝、深さ14㎝を数える。本土坑の覆土は２層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

土坑SK24（Fig.20）

調査区の中央部西側Ｂ－３－ｂ、Ｃ－３－ａ区に位置し、標高26.80～26.90ｍの平坦部に立地する。平面形は東西に長い隅丸方形を呈する。長軸は136㎝、短軸は82㎝を計る。長軸方向はＮ－90°－Ｗを示す。坑底長径は116㎝、坑底短径は73㎝、底面中央の深さは10㎝を計測する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。覆土は２層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

土坑SK25（Fig.20）

調査区の中央部西側Ｃ－２－ｃ、Ｃ－３－ａ区に位置し、標高26.90ｍの平坦部に立地する。平面形は南北にやや長い略円形を呈する。長径は202㎝、短径は194㎝を計る。長軸方向はＮ－8°－Ｅを示す。坑底長径は194㎝、坑底短径は174㎝、底面中央の深さは60㎝を計測する。壁は西側がやや膨らみながら急傾して立ち上がっている。その他の部分の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底面はやや起伏があり、西側の坑底部は開口部より２～６㎝ほど広がっている。坑底施設としては、底面中央部よりやや南西側に円形ピットを１基伴っている。ピットの大きさは径17×16㎝、深さ23㎝を計る。覆土は５層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

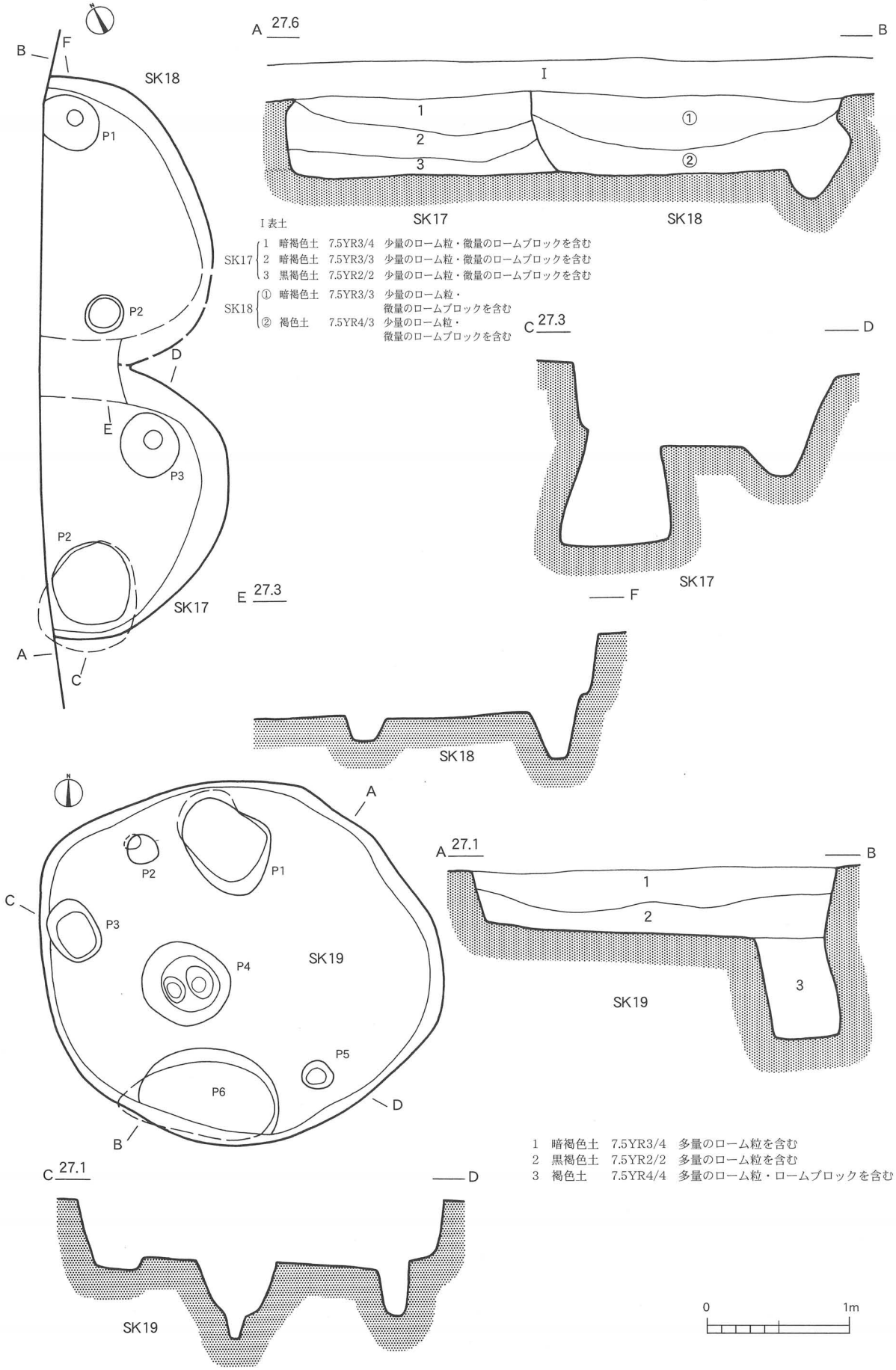


Fig.19 土坑 SK17・SK18・SK19

土坑SK26（Fig.20）

調査区の西側C－2－d、B－3－b区に位置し、標高26.80～26.90ｍの平坦部に立地する。平面形は南北にやや長い略円形を呈する。長径は254㎝、短径は252㎝を計る。長軸方向はN－35°－Eを示す。坑底長径は240㎝、坑底短径は226㎝、底面中央の深さは40㎝を計測する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。坑底施設は中央部よりやや南西側にセンター・ピットを1基有する。ピットの大きさは径20×18㎝、深さ68㎝を計る。覆土は2層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

土坑SK27（Fig.20）

調査区の西側B－2－b・d区に位置し、標高26.90～27.00ｍの平坦部に立地する。竪穴住居跡SI02を切っている。平面形は東西に長い楕円形を呈する。長径207㎝、短径111㎝を計る。長軸方向はN－41°－Wを示す。坑底長径は188㎝、坑底短径は94㎝、底面中央の深さは33㎝を計測する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。覆土は3層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

土坑SK28（Fig.21）

調査区の中央部北西側C－2－a・c区に位置し、標高26.80ｍの平坦部に立地する。平面形は東西にやや長い略円形を呈する。長径282㎝、短径278㎝を計る。長軸方向はN－89°－Wを示す。坑底長径は250㎝、坑底短径は236㎝、底面中央の深さは62㎝を計測する。壁は急傾に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。センター・ピットは中央部よりやや南側に位置し、径18㎝、深さ46㎝を計る。サイド・ピットは東側に配し、径47×36㎝、深さ22㎝を計測する。覆土は2層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

土坑SK35（Fig.21）

調査区の西側B－2－a・b区に位置し、標高26.70～26.80ｍの平坦部に立地する。竪穴住居跡SI02を切っている。平面形は東西にやや長い略円形を呈する。長径245㎝、短径228㎝を計る。長軸方向はN－80°－Eを示す。坑底長径は223㎝、坑底短径は205㎝、底面中央の深さは33㎝を計測する。壁は急傾に立ち上がり、底面は平坦である。覆土は3層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

土坑SK37（Fig.21）

調査区の西側A－2－d、B－2－c、A－3－b、B－3－a区に位置し、標高26.90～27.00ｍの平坦部に立地する。平面形は東西にやや長い略円形を呈する。長径282㎝、短径252㎝を計る。長軸方向はN－77°－Eを示す。坑底長径は260㎝、坑底短径は242㎝、底面中央の深さは74㎝を計測する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。坑底施設としては、2基のサイド・ピット及び1基の円形センター・ピットを配する。東側のサイド・ピット(P2)は円形を呈し、径22㎝、深さ36㎝を計る。南東側のサイド・ピット(P3)は略円形を呈し、径66×60㎝、深さ47㎝を計測し、ピット底面は土坑下場より内側へ2～10㎝広がっている。円形センター・ピットは土坑坑底部のほぼ中央にあって、径18㎝、深さ30㎝を計る。覆土は4層に分けられ、人為的な埋め戻し土と考えられる。なお、土坑SK42に切られ、土坑SK43を切っている。

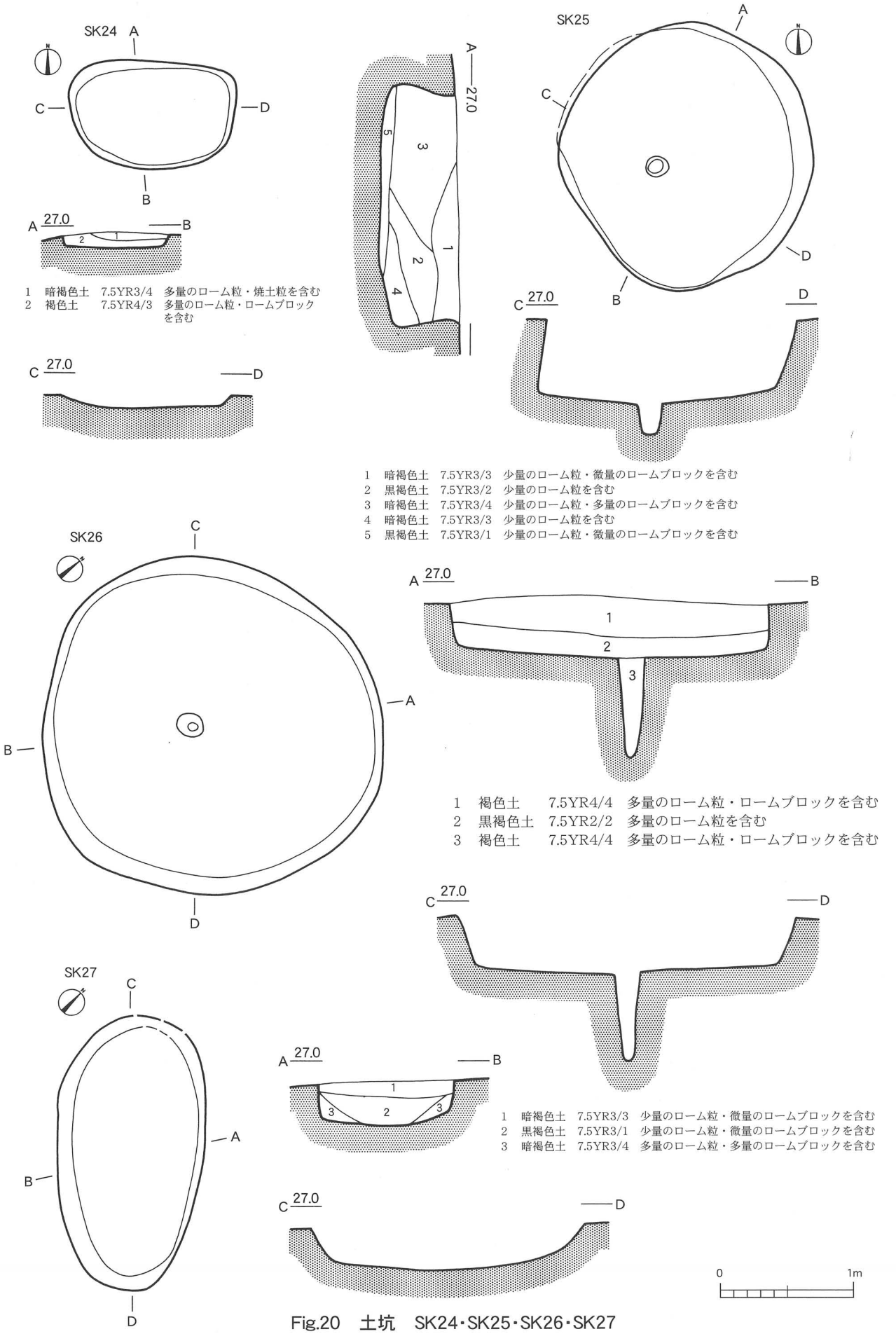


Fig.20 土坑 SK24・SK25・SK26・SK27

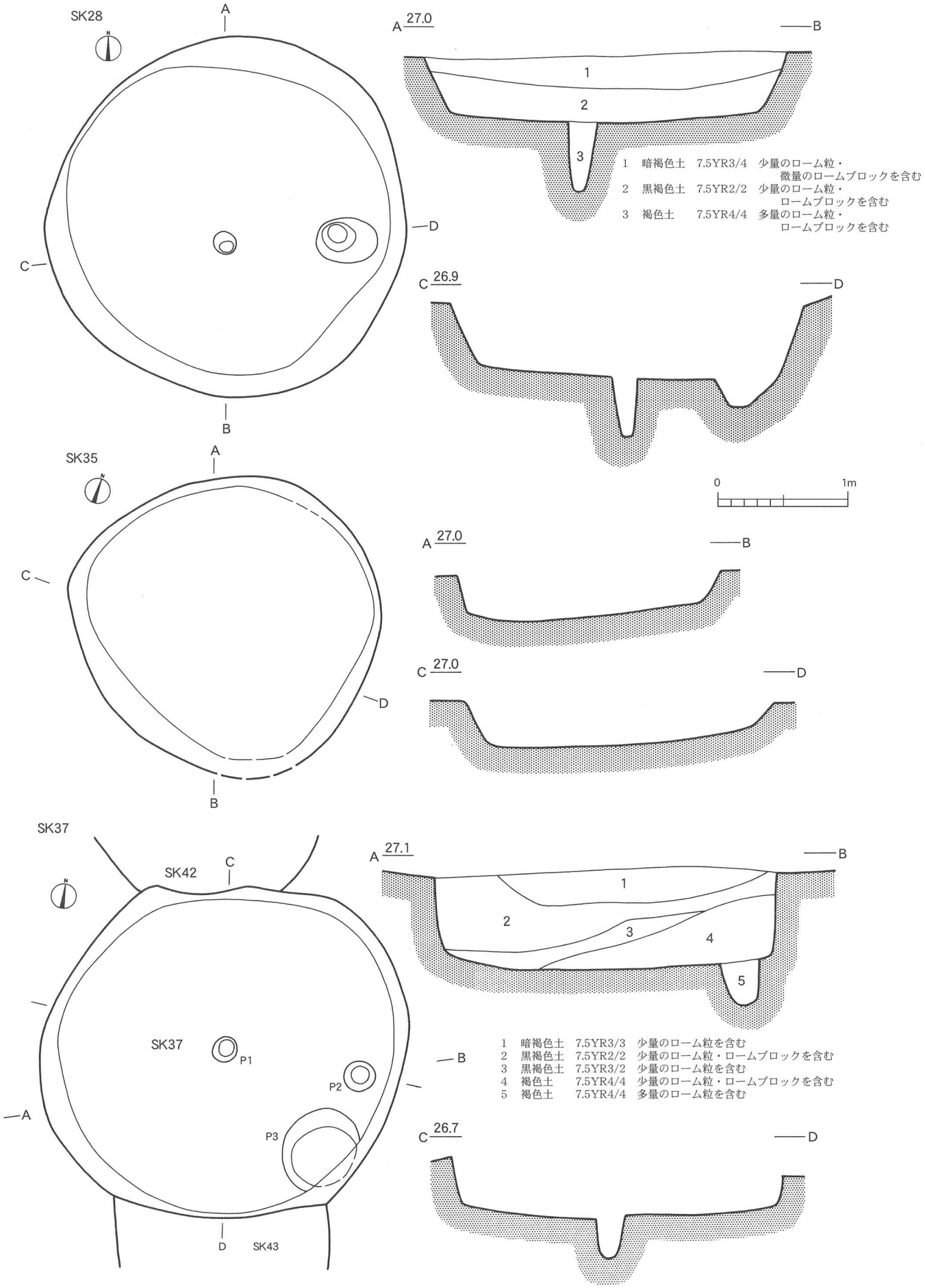


Fig.21 土坑 SK28・SK35・SK37

土坑SK42（Fig.22）

調査区西側Ａ－２－ｄ、Ｂ－２－ｃ区に位置し、標高26.90～27.00ｍの平坦部に立地する。西側の一部が調査区域外に存在していたため、全容は不明。また、土坑SK37を切っている。平面形は南北に長い楕円形を呈していると推定される。長径は180㎝、短径は140㎝を計る。長軸方向はＮ－64°－Ｅを示す。坑底長径は164㎝、坑底短径は113㎝、底面中央の深さは46㎝を計測する。壁は西側は緩やかに立ち上がっているが、その他の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底面は凹レンズ状を呈している。坑底施設としては２基のピットを有する。１基はほぼ中央部に位置する略円形のピットで、径38×34㎝、深さ24㎝を測る。他の１基は東側の壁際に配し、径26×21㎝、深さ26㎝の楕円形ピットである。覆土は自然埋没土と考えられる。

土坑SK43（Fig.22）

調査区西側Ｂ－３－ａ区に位置し、標高26.90～27.00ｍの平坦部に立地する。北側を土坑SK37に壊されているため、全容は不明だが、平面形は南北に長い楕円形を呈していたと推定される。長径は不明、短径は165㎝を計る。長軸方向も不明。坑底長径は83㎝、坑底短径は63㎝、底面中央の深さは70㎝を計測する。壁は急傾に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。坑底施設としては、北東側に略円形ピットを付設する。ピットの大きさは径45×43㎝、深さ27㎝を計る。覆土は人為的な埋め戻し土と考えられる。

土坑SK38（Fig.22）

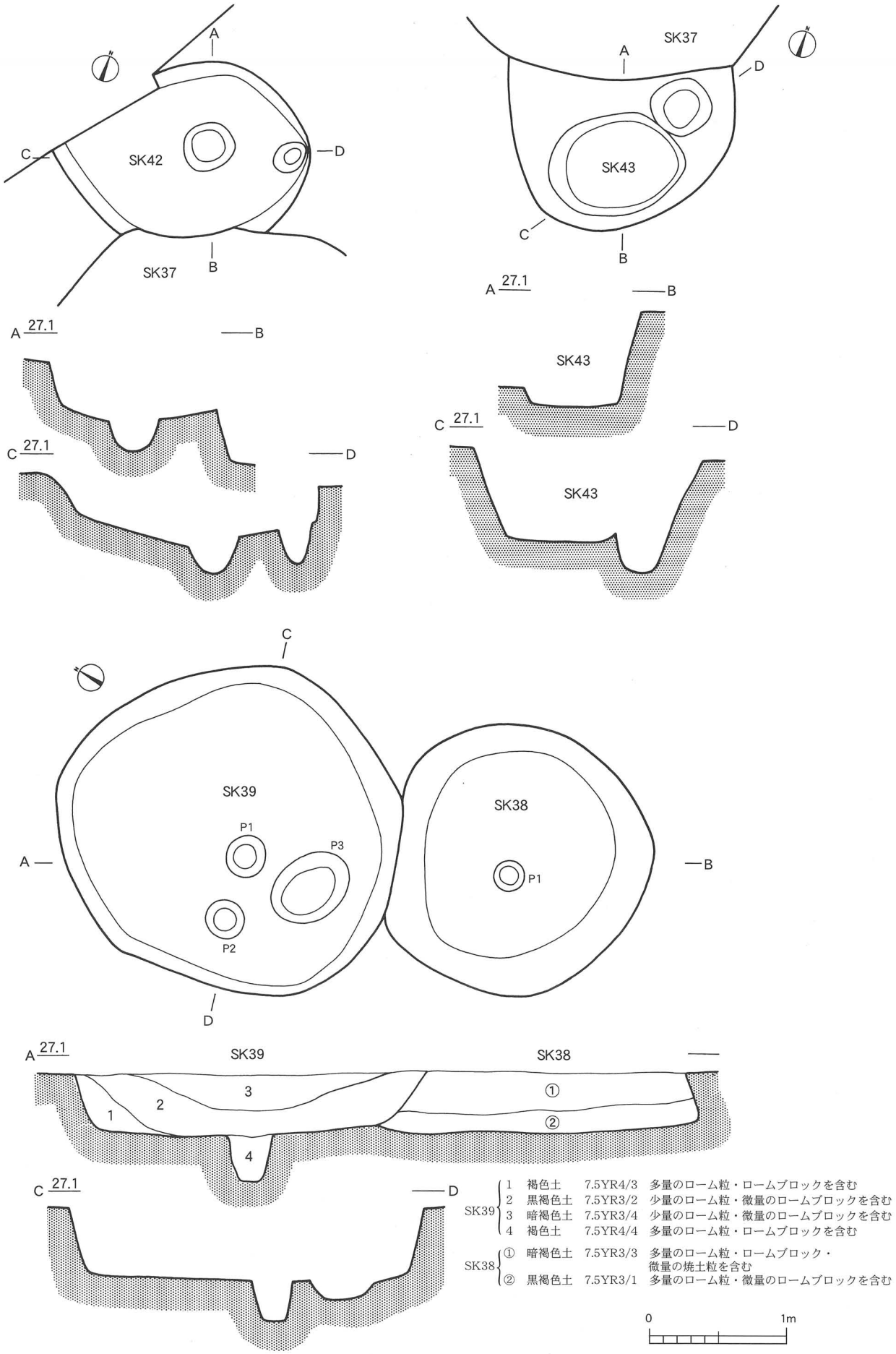
調査区南西側Ａ－４－ｂ、Ｂ－４－ａ区に位置し、標高27.00ｍの平坦部に立地する。土坑SK39・44に切られている。平面形は東西にやや長い略円形を呈する。長径は202㎝、短径は198㎝を計る。長軸方向はＮ－42°－Ｗを示す。坑底長径は158㎝、坑底短径は136㎝、底面中央の深さは44㎝を計測する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はやや起伏がある。坑底施設としては、円形センター・ピットを１基有する。ピットは底面中央よりやや南西側に位置し、径22㎝、深さ43㎝を計る。覆土は２層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

土坑SK39（Fig.22）

調査区の南西側Ａ－３－ｄ、Ｂ－３－ｃ、Ａ－４－ｂ、Ｂ－４－ａ区に位置し、標高27.00ｍの平坦部に立地する。土坑SK38・45を切っている。平面形は南北に長い楕円形を呈する。長径は256㎝、短径は234㎝を計る。長軸方向はＮ－5°－Ｗを示す。坑底長径は230㎝、坑底短径は212㎝、底面中央の深さは53㎝を計測する。壁は急傾に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。坑底施設としては、ピットを３基を有する。P1は底面中央部よりやや南西側に位置し、円形を呈し、径31×30㎝、深さ29㎝を計る。P2は西側にあって、円形を呈し、径29×28㎝、深さ35㎝を計る。P3は坑底南西側に位置し、径62×46㎝、深さ13㎝の楕円形のピットである。覆土は３層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

土坑SK45（Fig.23）

調査区の南西側Ａ－３－ａ、Ａ－４－ｂ区に位置し、標高27.00ｍの平坦部に立地する。土坑SK39に切られているため、北東側1/6ほどの壁・底面が壊されている。このため、正確な全容は不明だが、平面形



SK39	1	褐色土	7.5YR4/3	多量のローム粒・ロームブロックを含む
	2	黒褐色土	7.5YR3/2	少量のローム粒・微量のロームブロックを含む
	3	暗褐色土	7.5YR3/4	少量のローム粒・微量のロームブロックを含む
	4	褐色土	7.5YR4/4	多量のローム粒・ロームブロックを含む
SK38	①	暗褐色土	7.5YR3/3	多量のローム粒・ロームブロック・微量の焼土粒を含む
	②	黒褐色土	7.5YR3/1	多量のローム粒・微量のロームブロックを含む

Fig.22　土坑　SK42・SK43・SK38・SK39

は東西に長い楕円形と推定される。長径は不明、短径166㎝を計る。長軸方向はN－27°－Eを示す。坑底長径は不明、坑底短径は146㎝、底面中央の深さは34㎝を計測する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。覆土は2層に分けられ、人為的な埋め戻し土と考えられる。

土坑SK48（Fig.23）

調査区の南側B－4－c、B－5－a区に位置し、標高26.80～26.90mの平坦部に立地する。竪穴住居跡SI06、土坑SK57を切っている。また、西側の壁の一部を現代の撹乱によって壊されている。平面形は東西に長い隅丸方形を呈する。長径は推定で276㎝、短径は116㎝を計る。長軸方向はN－71°－Wを示す。坑底長径は259㎝、坑底短径は96㎝、底面中央の深さは46㎝を計測する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。覆土は2層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

土坑SK57（Fig.23）

調査区の南側B－4－c、B－5－a区に位置し、標高26.90mの平坦部に立地する。土坑SK07・48に切られていて、北側の一部を現代の撹乱によって壊されているため、遺構の全容は不明だが、平面形は東西に長い楕円形と推定される。長径は推定で190㎝ほどと考えられる。短径・坑底長径・坑底短径は不明。長軸方向もN－87°－Wと推定される。底面中央の深さは38㎝を計る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。覆土は人為的な埋め戻し土と考えられる。

土坑SK49（Fig.23）

調査区の南側B－4－c・d区に位置し、標高26.90mの平坦部に立地する。竪穴住居跡SI06、土坑SK50を切っている。平面形は南北に長い楕円形を呈する。長径は245㎝、短径は193㎝を計る。長軸方向はN－26°－Eを示す。坑底長径は190㎝、坑底短径は166㎝、底面中央の深さは37㎝を計測する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。覆土は2層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

土坑SK50（Fig.23）

調査区の南側B－4－c・d区に位置し、標高26.90mの平坦部に立地する。竪穴住居跡SI06を切り、土坑SK49に切られている。平面形は南北に長い楕円形を呈する。開口部長径215㎝、開口部短径182㎝を計る。長軸方向はN－31°－Eを示す。坑底長径205㎝、坑底短径195㎝、底面中央の深さは76㎝を計測する。開口部より坑底部が北側半分で2～22㎝ほど大きく広がる。壁は北側1/2では大きく膨らみながら急傾し、南側半分ではほぼ垂直に立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。覆土は4層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

土坑SK51（Fig.24）

調査区の南側B－5－b区に位置し、標高26.80～27.00mの平坦部に立地する。土坑SK52を切りSK58に切られていて、正確な全容は不明だが、平面形は南北にやや長い略円形と推定される。長径は推定で186㎝、短径は172㎝を計る。長軸方向はN－6°－Wを示す。坑底長径は174㎝、坑底短径は150㎝、底面中央の深さは42㎝を計測する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はやや起伏がある。覆土は2層に分

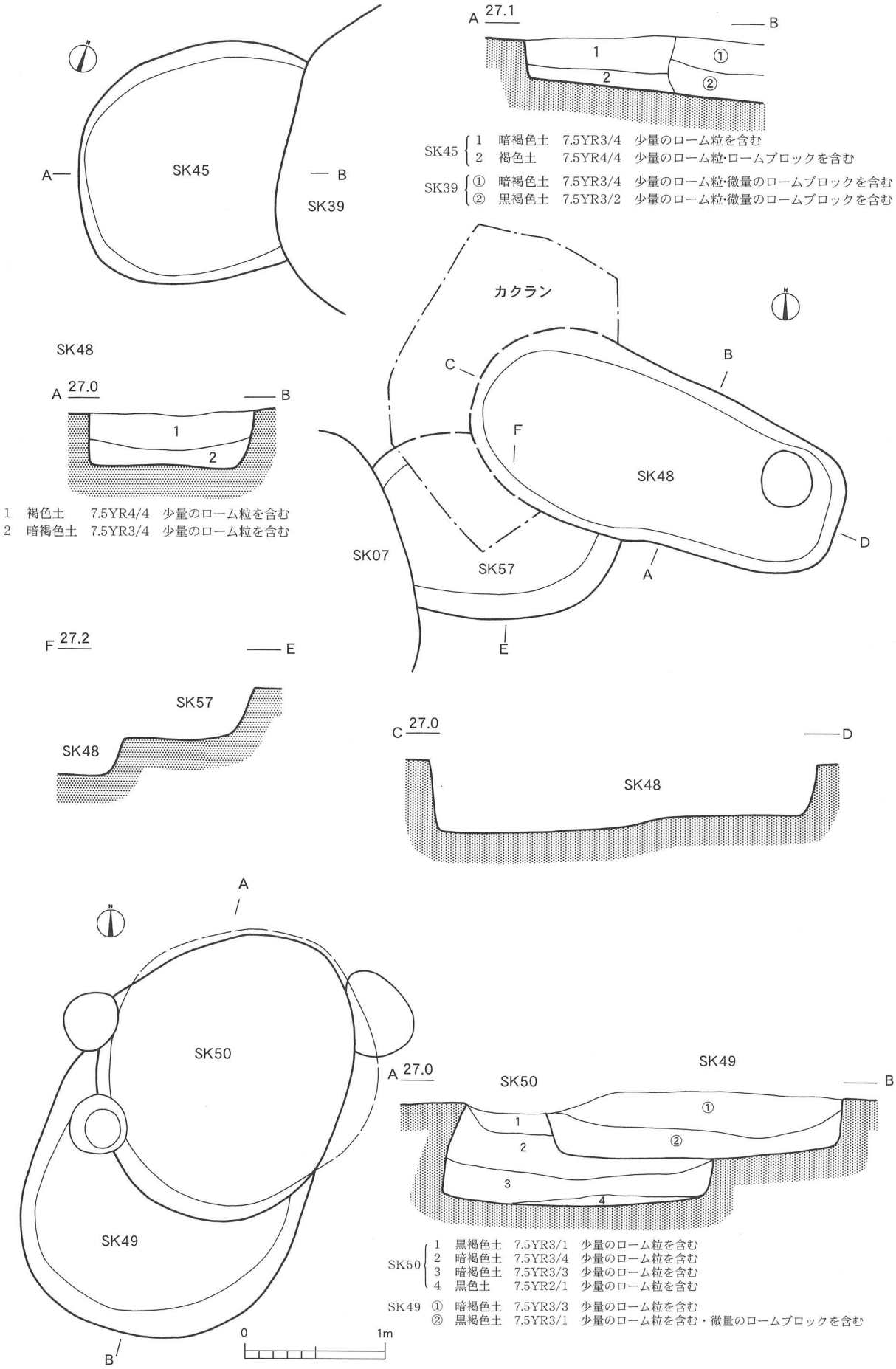


Fig.23 土坑 SK45. SK48. SK57. SK49. SK50.

けられ、自然埋没土と考えられる。なお、竪穴住居跡SI05を切って存在していた。

土坑SK52（Fig.24）

調査区の南側Ｂ－５－ｂ・ｄ区に位置し、標高26.90ｍの平坦部に立地する。竪穴住居跡SI04・05を切り、土坑SK51・53に切られている。平面形は東西に長い楕円形を呈する。長径は216㎝、短径は192㎝を計る。長軸方向はＮ－82°－Ｗを示す。坑底長径は190㎝、坑底短径は180㎝、底面中央の深さは56㎝を計測する。壁はやや内傾しつつ急傾斜に立ち上がり、底面もやや起伏がある。坑底施設としては、楕円形サイド・ピットを１基有する。ピットの大きさは112×56㎝、深さ８㎝を計る。覆土は２層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

土坑SK53（Fig.24）

調査区の南側Ｂ－５－ｄ、Ｃ－５－ｃ区に位置し、標高26.80ｍの平坦部に立地する。竪穴住居跡SI04・05、土坑SK52を切っている。平面形は南北に長い楕円形を呈する。長径は204㎝、短径は156㎝を計る。長軸方向はＮ－70°－Ｅを示す。坑底長径は128㎝、坑底短径は124㎝、底面中央の深さは50㎝を計測する。壁はやや内傾しつつ、急傾斜に立ち上がり、底面は若干の起伏を有する。覆土は２層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

土坑SK54（Fig.24）

調査区の北側Ｄ－２－ａ区に位置し、標高26.90～27.00ｍの平坦部に立地する。溝状遺構SD02に切られている。平面形は東西に長い楕円形を呈する。長径は176㎝、短径は142㎝を計る。長軸方向はＮ－55°－Ｗを示す。坑底長径は158㎝、坑底短径は120㎝、底面中央の深さは52㎝を計測する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はやや起伏がある。

土坑SK56（Fig.25）

調査区の南側Ｂ－４－ｂ・ｄ区に位置し、標高26.80～26.90ｍの平坦部に立地する。溝状遺構SD02に切られ、竪穴住居跡SI06を切っている。平面形は南北に長い楕円形を呈する。長径は246㎝、短径は204㎝を計る。長軸方向はＮ－21°－Ｅを示す。坑底長径は212㎝、坑底短径は182㎝、底面中央の深さは62㎝を計測する。壁は急傾に立ち上がり、底面はやや起伏がある。坑底施設は楕円形サイド・ピットが１基、円形サイドピットが１基、計２基のサイド・ピットを有する。楕円形サイド・ピットは大きさが166×78㎝、深さ13㎝を計り、北西側のピットの底面の一部が、土坑の開口部より５㎝内側へ広がっている。円形サイド・ピットは規模が径32㎝、深さ35㎝を計測する。覆土は３層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

土坑SK58（Fig.24）

調査区の南側Ｂ－４－ｄ、Ｂ－５－ｂ区に位置し、標高26.90～27.00ｍの平坦部に立地する。竪穴住居跡SI05・06、土坑SK51を切っている。平面形は南北にやや長い略円形を呈する。長径は200㎝、短径は196㎝を計る。長軸方向はＮ－7°－Ｗを示す。坑底長径は190㎝、坑底短径は178㎝、底面中央の深さは66㎝を計測する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。覆土は５層に分けられ、自然埋没土

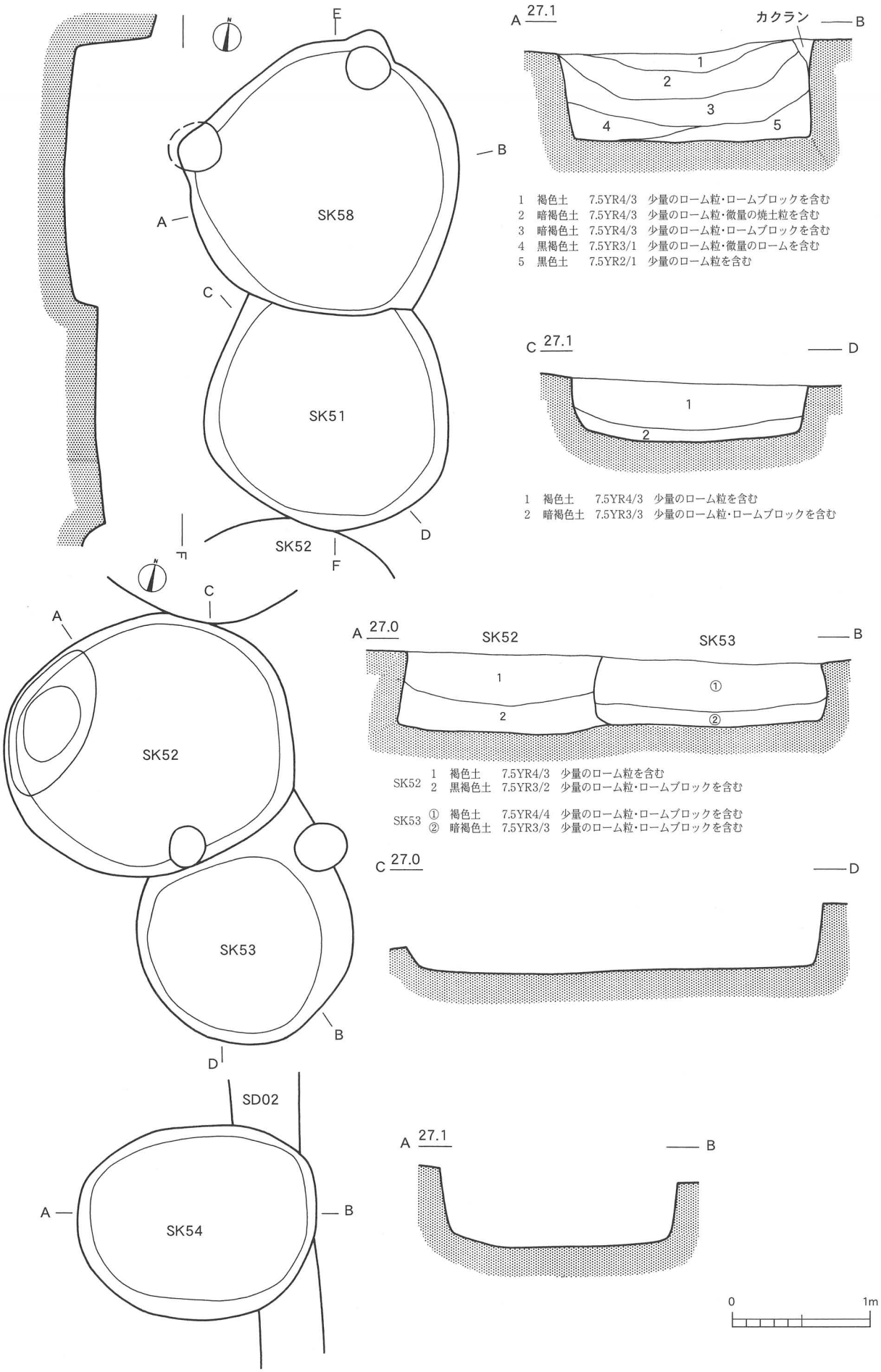


Fig.24 土坑 SK51・SK58・SK52・SK53・SK54

と考えられる。

土坑SK59（Fig.25）

調査区の中央部C－3－a・c区に位置し、標高26.90ｍの平坦部に立地する。竪穴住居跡SI01に切られているため、遺構の全容は不明だが、平面形は東西に長い楕円形と推定される。長径は不明、短径は167㎝を計る。長軸方向は推定でN－67°－Wを示す。坑底長径は不明、坑底短径は157㎝、底面中央の深さは28㎝を計測する。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。坑底施設としては、円形ピットを1基有し、ピットの大きさは48×44㎝、深さ28㎝を計る。また溝状遺構SD02にも切られている。

土坑SK60（Fig.25）

調査区の南東側C－6－b区に位置し、標高27.00ｍの平坦部に立地する。遺構の南側1/2が調査区域外に存在するため、本址の全容は不明だが、平面形は東西に長い楕円形を呈していると推定される。長径は176㎝、短径は不明。長軸方向はN－67°－Wを示す。坑底長径は173㎝、坑底短径は不明、底面中央の深さは74㎝を計測する。壁は内傾しつつ、急傾斜に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。西側の坑底部は開口部より28㎝ほど大きく広がり、この部分の壁は内側へ大きく膨らみながら急傾して立ち上がっている。覆土は3層に分けられ、人為的な埋め戻し土と考えられる。なお、土坑SK68を切っている。

土坑SK68（Fig.25）

調査区の南東側C－6－b区に位置し、標高27.10ｍの平坦部に立地する。本址の南側1/2が調査区域外に存在するうえに、土坑SK60に西側の一部が切られているため、以降の全容は不明だが、平面形は東西に長い楕円形を呈すると推定される。長径は118㎝、短径は不明。長軸方向はN－70°－Wを示す。坑底長径は120㎝、坑底短径は不明、底面中央の深さは72㎝を計る。壁は全体的にはほぼ垂直に立ち上がっているが、東側の壁は内側へ大きく膨らみながら急傾して立ち上がっている。この東側の坑底部は開口部より2～28㎝ほど大きく広がっている。底面はやや起伏がある。覆土は3層に分けられ、人為的な埋め戻し土と考えられる。

土坑SK61（Fig.25）

調査区の南東側C－5－d、C－6－b区に位置し、標高26.90ｍの平坦部に立地する。平面形は南北にやや長い略円形を呈する。長径186㎝、短径172㎝を計る。長軸方向はN－48°－Eを示す。坑底長径は168㎝、坑底短径は156㎝、底面中央の深さは46㎝を計測する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はやや起伏がある。覆土は2層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

土坑SK62（Fig.26）

調査区の南側C－5－a・c区に位置し、標高26.70～26.80ｍの平坦部に立地する。溝状遺構SD03に切られ、竪穴住居跡SI03・04・05を切っている。平面形は南北に長い楕円形を呈する。長径は162㎝、短径は136㎝を計る。長軸方向はN－18°－Wを示す。坑底長径は140㎝、坑底短径は118㎝、底面中央の深さは17㎝を計測する。壁は緩やかに立ち上がり、底面はやや起伏がある。覆土は3層に分けられ、自然埋没

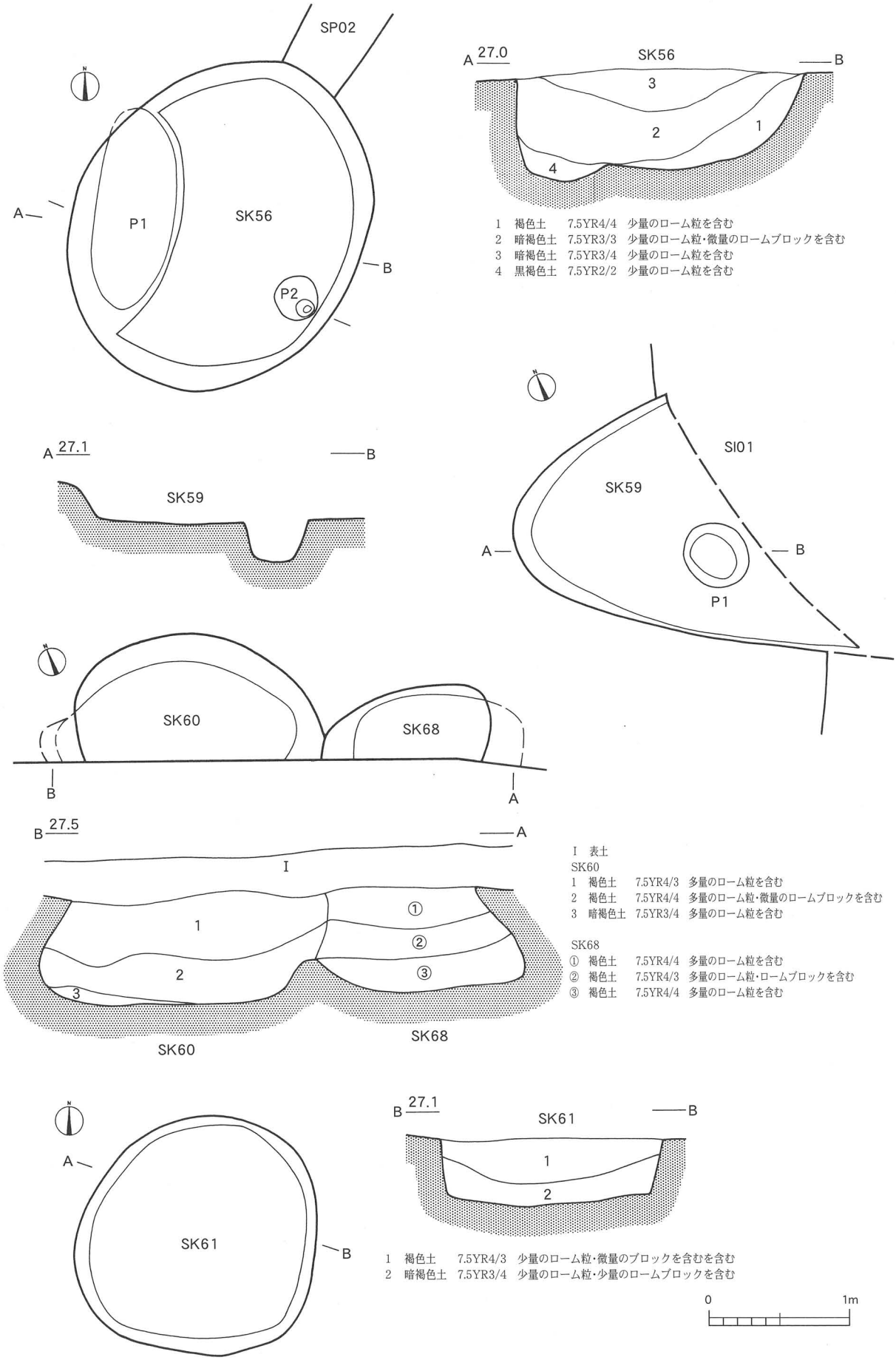


Fig.25 土坑 SK56・SK59・SK60・SK68・SK61

土と考えられる。

土坑SK63（Fig.26）

調査区の南側Ｂ－５－ｄ、Ｃ－５－ｃ区に位置し、標高27.30ｍに立地する。本址の南側1/2以上が調査区域外に存在するうえに、溝状遺構SD03に切られているため、遺構の全容は不明だが、平面形は南北に長い楕円形を呈すると推定される。また、竪穴住居跡SI04を切っている。長径・短径は正確には不明だが、大きさは200㎝以上の長径の土坑と推定される。長軸方向は推定で、Ｎ－21°－Ｗを示す。坑底長径、坑底短径は不明、底面中央の深さは70㎝を計る。壁はやや内傾しつつ、急傾に立ち上がる。底面はやや起伏がある。覆土は３層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

土坑SK64（Fig.26）

調査区の南東側Ｄ－６－ａ・ｃ区に位置し、標高27.50ｍの平坦部に立地する。本址の南側1/2以上が調査区域外に存在するため、遺構の全容は不明だが、平面形は東西に長い楕円形を呈すると推定される。なお、竪穴住居跡SI07を切って検出された。開口部長径は212㎝を計り、短径は不明。長軸方向はＮ－60°－Ｗを示す。坑底長径は262㎝を計る。坑底短径は不明。底面中央の深さは125㎝を計測する。開口部より坑底部が20～30㎝ほど大きく広がる。壁は内側へ大きく膨らみながら急傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。覆土は４層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

土坑SK65（Fig.26）

調査区の南東側Ｄ－５－ｃ、Ｄ－６－ａ区に位置し、標高26.90ｍの平坦部に立地する。溝状遺構SD02に切られ、竪穴住居跡SI07を切っている。平面形は南北に長い楕円形を呈する。長径は158㎝、短径は136㎝を計る。長軸方向はＮ－20°－Ｗを示す。坑底長径は136㎝、坑底短径は110㎝、底面中央の深さは26㎝を計測する。壁は緩やかに立ち上がり、底面は起伏がある。覆土は６層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

土坑SK66（Fig.27）

調査区の南東側Ｄ－５－ｃ区に位置し、標高27.00ｍの平坦部に立地する。溝状遺構SD02に切られている。平面形は東西に長い楕円形を呈する。長径は230㎝、短径は200㎝を計る。長軸方向はＮ－43°－Ｗを示す。坑底長径は225㎝、坑底短径は180㎝、底面中央の深さは56㎝を計測する。壁はやや内傾しつつ、急傾に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。坑底施設としては、楕円形サイド・ピットを１基有する。ピットの大きさは82×52㎝、深さ23㎝を計る。覆土は４層に分けられ、人為的な埋め戻し土と考えられる。

土坑SK67（Fig.27）

調査区の南東側Ｄ－５－ｄ区に位置し、標高27.00ｍの平坦部に立地する。本址の東側1/3が調査区域外に存在するため、遺構の全容は不明だが、平面形は南北にやや長い略円形を呈すると推定される。長径・短径は不明だが、180㎝ほどの大きさと考えられる。長軸方向も推定でＮ－20°－Ｗを示すと思われる。坑底長径・坑底短径も不明。底面中央の深さは50㎝を計る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

坑底部の南側の一部が、開口部より外側へ10㎝ほど広がっている。坑底施設としては、楕円形サイド・ピット２基を有する。P1のサイド・ピットは、北西側に配し、大きさは38×20㎝、深さ５㎝を計り、ピットの上場が土坑の開口部より内側へ10㎝ほど広がり、ピットの底部も土坑開口部より南西方向へ25㎝ほど奥に入っている。P2のサイド・ピットは南西側にあって、規模は70×58㎝、深さは29㎝を計測し、ピットの上場が土坑開口部より15㎝広がり、底部は開口部より８㎝ほど奥へ入っている。覆土は３層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

土坑SK69（Fig.27）

調査区の南側Ｃ－４－ｃ・ｄ、Ｃ－５－ａ・ｂ区に位置し、標高27.20ｍの平坦部に立地する。溝状遺構SD02、土坑SK70に切られているため、遺構の全容は不明だが、平面形は南北に長い楕円形を呈すると推定される。なお、竪穴住居跡SI05を切っている。長径は243㎝、短径は推定で206㎝を計る。長軸方向はＮ－24°－Ｗを示す。坑底長径は210㎝、坑底短径は184㎝、底面中央の深さは58㎝を計測する。壁は急傾に立ち上がり、底面はやや起伏がある。坑底施設としては、楕円形サイド・ピットが１基有する。ピットの大きさは65×52㎝、深さ28㎝を計り、ピットの坑底部の南側が、土坑の開口部より２～15㎝ほど広がっている。覆土は４層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

土坑SK70（Fig.27）

調査区南側Ｃ－４－ｃ・ｄ、Ｃ－５－ａ・ｂ区に位置し、標高26.80～27.10ｍの平坦部に立地する。土坑SK98に切られ、土坑SK69、Pit03を切っている。平面形は南北に長い楕円形を呈する。長径は255㎝、短径は245㎝を計る。長軸方向はＮ－58°－Ｗを示す。坑底長径は225㎝、坑底短径は185㎝、底面中央の深さは37㎝を計測する。壁は急傾に立ち上がり、底面はやや起伏がある。坑底施設としては、円形センター・ピットを１基、楕円形サイド・ピットが２基有する。センター・ピットは坑底中央部よりやや北側に位置し、大きさは47×42㎝、深さ46㎝を計る。サイド・ピットは北西側及び北東側に位置する。北西側のサイド・ピットは、規模が47×42㎝、深さ57㎝を計り、ピットの西側底部が上場より６㎝へ広がる。覆土は３層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

土坑SK98（Fig.27）

調査区の中央部南側Ｃ－４－ｄ区に位置し、標高26.60ｍの平坦部に立地する。土坑SK70・Pit03を切っている。平面形は東西に長い楕円形を呈する。長径102㎝、短径82㎝を計る。長軸方向はＮ－50°－Ｗを示す。坑底長径は80㎝、坑底短径は48㎝、底面中央の深さは22㎝を計測する。壁は急傾に立ち上がり、底面はやや起伏がある。

Pit03（Fig.27）

調査区中央部南側Ｃ－４－ｄ区に位置し、標高26.80ｍの平坦部に立地する。土坑SK70・98に切られているため、遺構の全容は不明だが、平面形は東西にやや長い略円形を呈すると推定される。長径・短径は正確には不明だが、規模は長径で70㎝ほどを計ると考えられる。長軸方向も推定でＮ－51°－Ｗを示す。坑底長径は42㎝、坑底短径は不明、底面中央の深さは42㎝を計測する。壁は急傾に立ち上がり、底面は

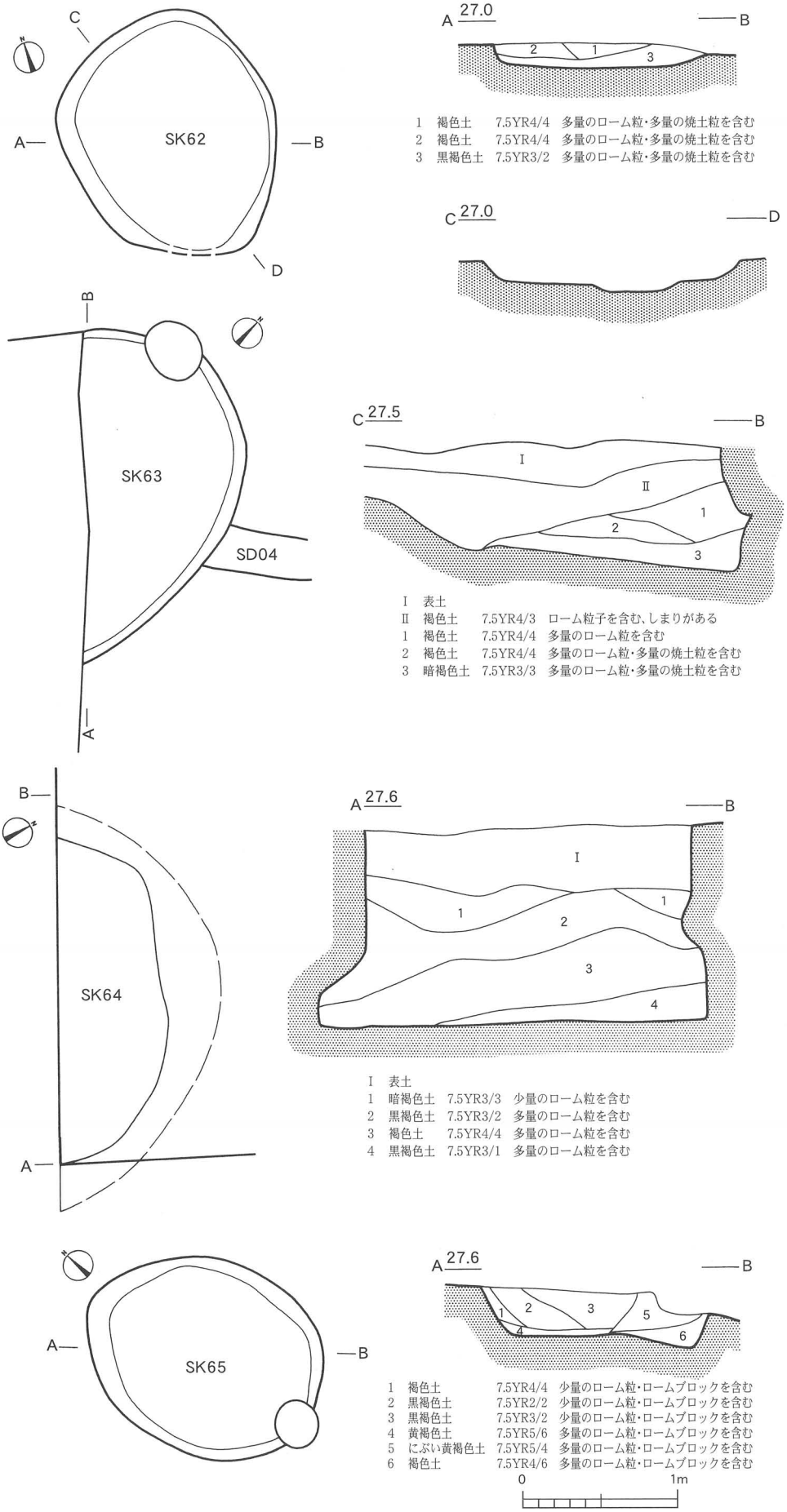


Fig.26 土坑 SK62・SK63・SK64・K65

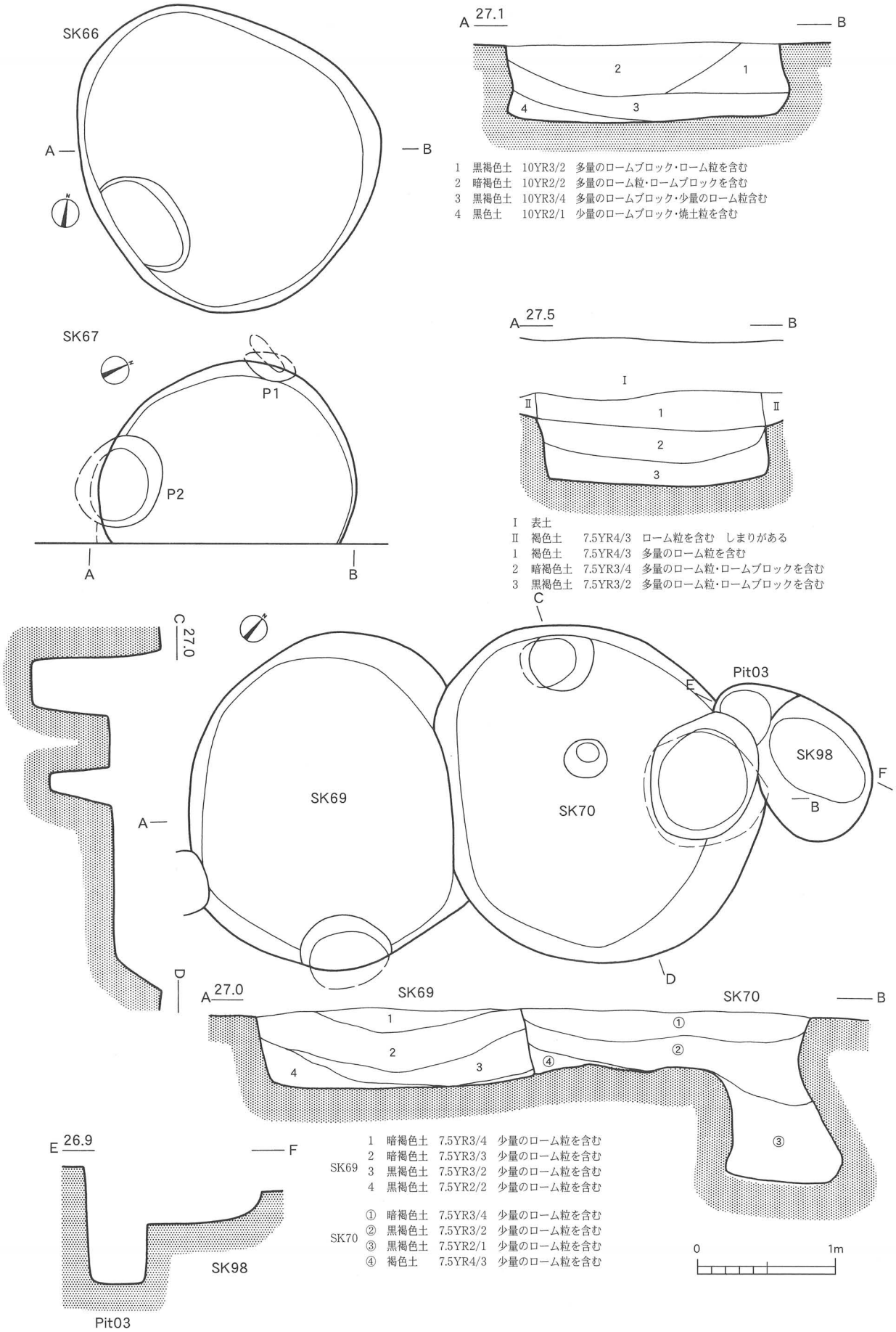


Fig.27 土坑 SK66・SK67・SK69・SK70・SK98・Pit3

ほぼ平坦である。

土坑SK71（Fig.28）

調査区の南側C－4－b・d区に位置し、標高26.80ｍの平坦部に立地する。平面形は東西に長い楕円形を呈する。長径は147㎝、短径は110㎝を計る。長軸方向はN－54°－Eを示す。坑底長径は125㎝、坑底短径は88㎝、底面中央の深さは63㎝を計測する。壁は急傾に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

土坑SK72（Fig.28）

調査区の中央部南東側C－4－d、D－4－c、C－5－b、D－5－a区に位置し、標高26.70ｍの平坦部に立地する。土坑SK73・74に切られているうえに、北東側の底面の一部が現代の撹乱によって壊されているため、遺構の全容は不明だが、平面形は東西に長い楕円形を呈すると推定される。長径は不明、短径は208㎝を計る。長軸方向はN－64°－Wを示す。坑底長径は不明、坑底短径は138㎝、底面中央の深さは26㎝を計測する。壁は急傾に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。坑底施設としては、楕円形サイド・ピットを1基有する。ピットは大きさが96×74㎝、深さ75㎝を計り、ピットの坑底部は上場より2～30㎝奥へ広がっている。

土坑SK73（Fig.28）

調査区の中央部南東側C－4－d、D－4－c区に位置し、標高26.70～26.80ｍの平坦部に立地する。土坑SK72を切り、土坑SK74に切られているうえに、北東側の一部を現代の撹乱によって壊されているため、遺構の全容は不明だが、平面形は東西に長い楕円形を呈すると推定される。長径は不明、短径は190㎝を計る。長軸方向はN－57°－Wを示すと考えられる。坑底長径は不明、坑底短径は174㎝、底面中央の深さは23㎝を計測する。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。坑底施設としては、略円形サイド・ピットを1基有する。ピットは大きさが40×32㎝、深さ48㎝を計る。

土坑SK74（Fig.28）

調査区の中央部南東側D－4－c、D－5－a区に位置し、標高26.70～26.80ｍの平坦部に立地する。竪穴住居跡SI08、土坑SK72・73を切っている。平面形は東西に長い楕円形を呈する。長径は243㎝、短径は210㎝を計る。長軸方向はN－57°－Wを示す。坑底長径は238㎝、坑底短径は204㎝、底面中央の深さは84㎝を計測する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。坑底施設としては、略円形サイド・ピットは2基有し、略円形センター・ピットを1基伴う。南西側サイド・ピットは大きさが、38×36㎝、深さ22㎝を計る。南東側のサイド・ピットは規模66×60㎝、深さ70㎝を計測し、ピットの北東部底部は上場より2～8㎝広がっている。センター・ピットは、坑底中央部よりやや南西側に位置し、大きさは26×24㎝、深さ65㎝を計る。

土坑SK75（Fig.29）

調査区の南東側D－5－a・b区に位置し、標高26.70～26.90ｍの平坦部に立地する。竪穴住居跡SI08を切っている。平面形は南北に長いやや楕円形を呈する。長径は119㎝、短径は96㎝を計る。長軸方

向はN－52°－Eを示す。坑底長径は89㎝、坑底短径は68㎝、底面中央の深さは30㎝を計測する。壁は急傾に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。覆土は2層に分けられ、人為的な埋め戻し土と考えられる。

土坑SK76（Fig.29）

調査区の南東側D－5－b区に位置し、標高26.90ｍの平坦部に立地する。平面形は南北に長い略円形を呈する。開口部長径は158㎝、開口部短径は154㎝を計る。長軸方向はN－14°－Wを示す。坑底長径は180㎝、坑底短径は176㎝、底面中央の深さは52㎝を計測する。開口部より坑底部が7～15㎝ほど大きく広がる。壁は膨らみながら急傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。坑底施設としては、略円形サイド・ピットが1基有する。ピットの大きさは39×28㎝、深さ37㎝を計る。覆土は4層に分けられ、人為的な埋め戻し土と推定される。

土坑SK77（Fig.29）

調査区の南東側E－4－c区に位置し、標高26.70～26.80ｍの平坦部に立地する。本址の東側1/5が調査区域外に存在するため、遺構の全容は不明だが、平面形は南北に長い楕円形を呈すると推定される。長径は236㎝を計り、短径は不明。長軸方向はN－28°－Wを示す。坑底長径は214㎝、坑底短径は不明、底面中央の深さは50㎝を計測する。壁は急傾に立ち上がり、底面は凹レンズ状を呈する。坑底施設としては、2基の略円形サイド・ピットを有し、1基の円形センター・ピットを伴う。北東側に配するサイド・ピット(P1)は大きさが64×60㎝、深さ43㎝を計り、南西側のサイド・ピット(P2)は規模が19×15㎝、深さ14㎝を計測する。センター・ピット(P3)は坑底部中央よりやや南西側に配し、大きさは21×20㎝、深さ23㎝を計る。

土坑SK78（Fig.29）

調査区の南東側D－6－a区に位置し、標高26.70～26.80ｍの平坦部に立地する。竪穴住居跡SI07、土坑SK79を切り、Pit01に切られている。平面形は南北に長い楕円形を呈する。長径は210㎝、短径は190㎝を計る。長軸方向はN－41°－Eを示す。坑底長径は206㎝、坑底短径は190㎝、底面中央の深さは70㎝を計測する。底面はやや起伏があり、北東側の底面の一部が上場開口部より2～25㎝広がっている。壁は北東部が膨らみながら急傾して立ち上がる以外は、ほぼ垂直に立ち上がっている。坑底施設としては、7基のピット（P1～P7）を有する。P1は北東側に配し、50×40㎝、深さ32㎝を計り、土坑開口部より内側にあるサイド・ピットと考えられる。P2は楕円形を呈し、径42×32㎝、深さ12㎝のピット。P3は大きさが28×18㎝、深さ22㎝の略円形センター・ピット。P4は径24×22㎝、深さ47㎝を図る略円形のセンター・ピット。P5・P6は南西側に位置する略円形のサイド・ピットで、P5は46×36㎝、深さ64㎝を計測し、P6の大きさは34×32㎝、深さ11㎝を計る。P7は北東側に配する楕円形のサイド・ピットを考えられる窪みで、大きさ100×48㎝、深さ10㎝を計測する。覆土は3層に分けられ、自然埋没土と推定される。

土坑SK79（Fig.29）

調査区南東側D－6－a区に位置し、標高26.80ｍの平坦部に立地する。土坑SK78に切られているた

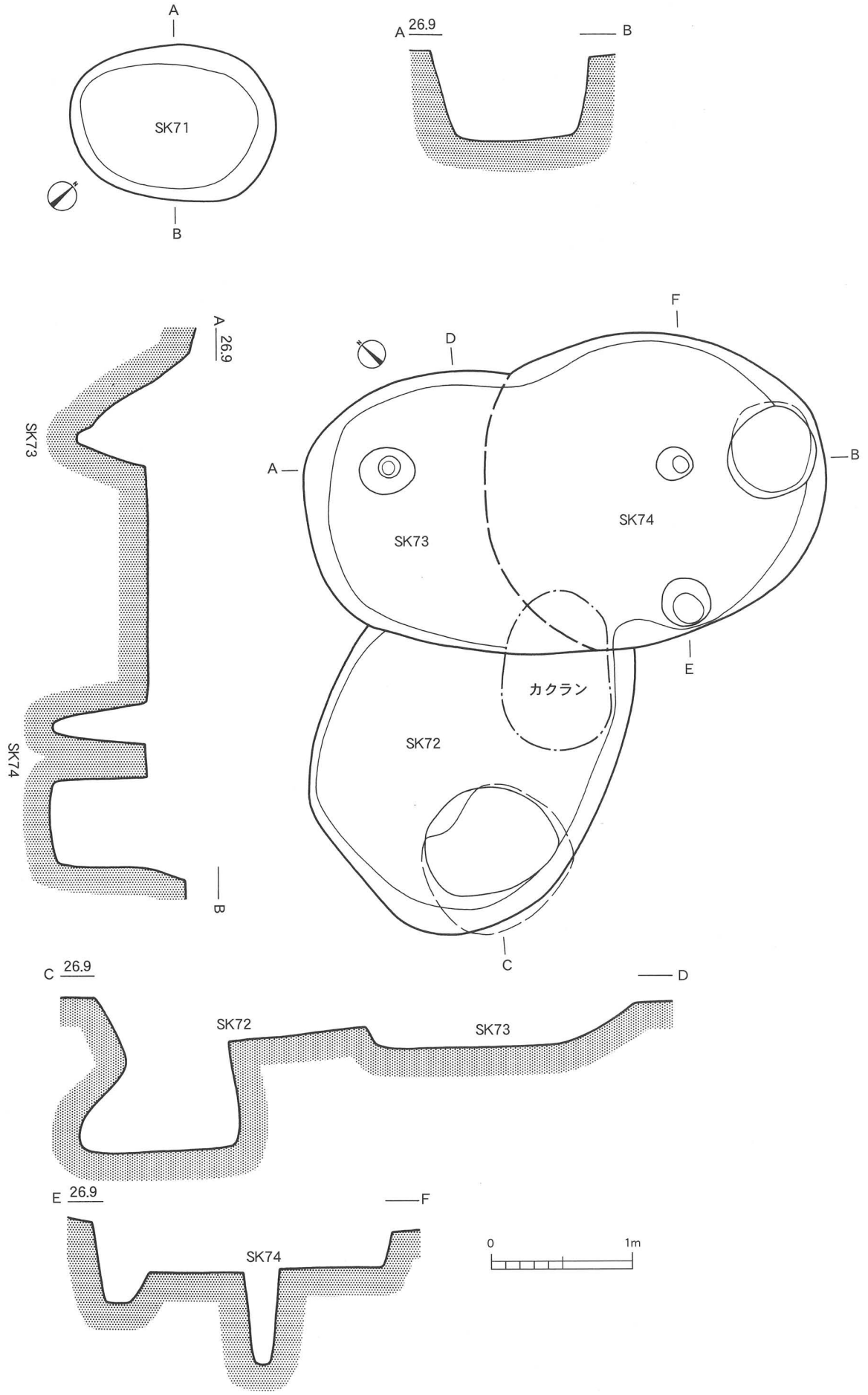


Fig.28　土坑　SK71・SK72・SK73・SK74

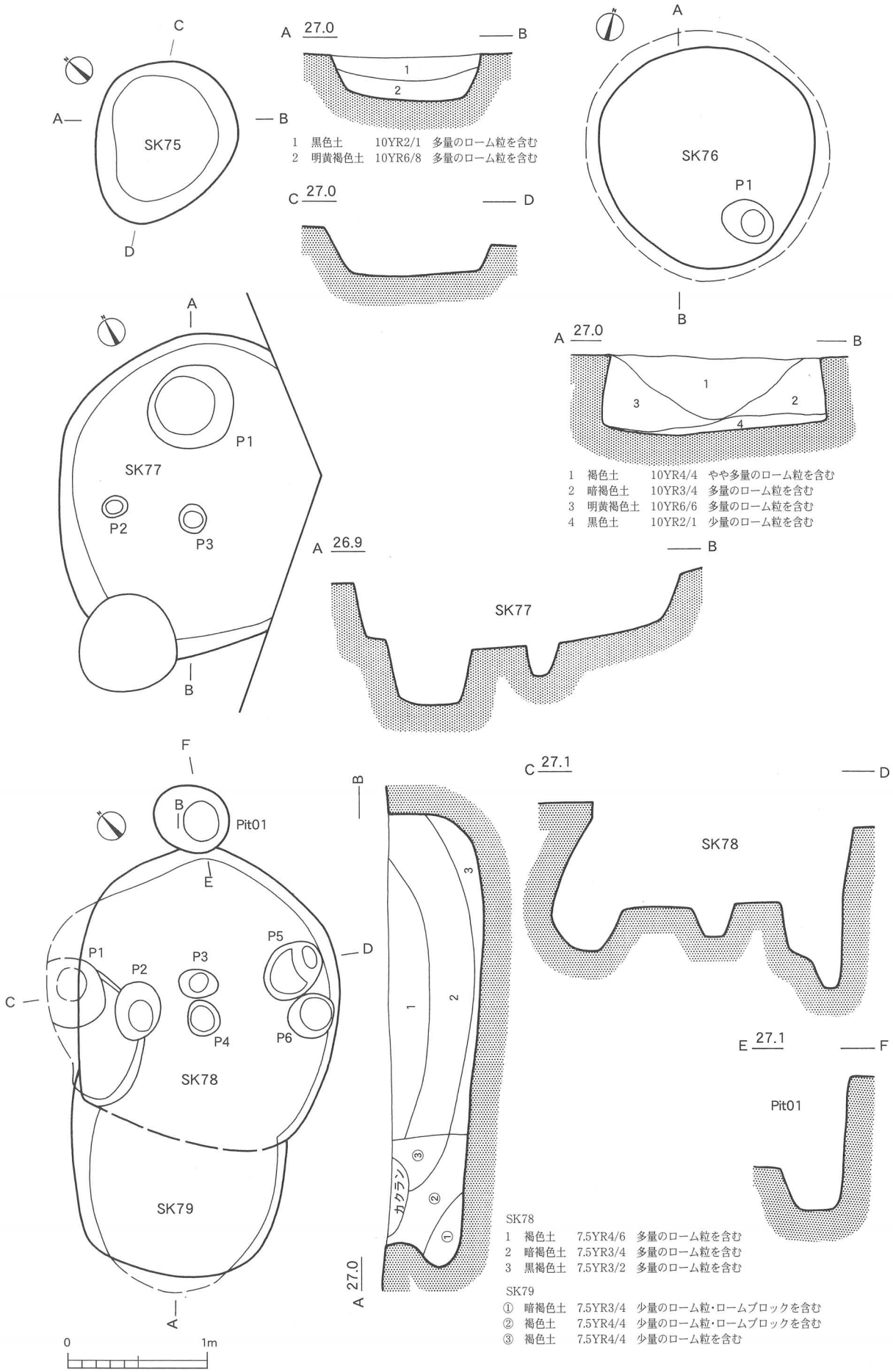


Fig.29 土坑 SK75・SK76・SK77・SK78・SK79・Pit01

め、遺構の全容は不明確だが、平面形は南北に長い楕円形を呈すると推定される。長径は不明、短径は154㎝を計る。長軸方向はN－41°－Eを示す。坑底長径は不明、坑底短径は134㎝、底面中央の深さは52㎝を計測する。壁は南西側の一部が大きく膨らみながら急傾に立ち上がっている以外はほぼ垂直に立ち上がっている。底面はほぼ平坦で、南西側の底面の一部が開口部より2～12㎝広がっている。覆土は3層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

Pit01（Fig.29）

調査区の南東側D－5－c、D－6－a区に位置し、標高26.80ｍの平坦部に立地する。土坑SK78を切っている。平面形は東西に長い略円形を呈する。長径は54㎝、短径は48㎝を計る。長軸方向はN－46°－Wを示す。坑底長径は28㎝、坑底短径は26㎝、底面中央の深さは98㎝を計測する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

土坑SK80（Fig.30）

調査区の中央部南東側C－4－b・D、C－4－a区に位置し、標高26.80ｍの平坦部に立地する。溝状遺構SD03に切られ、土坑SK82を切っている。平面形は南北に長い楕円形を呈する。長径は170㎝、短径は142㎝を計る。長軸方向はN－29°－Eを示す。坑底長径は152㎝、坑底短径は122㎝、底面中央の深さは38㎝を計測する。壁は急傾に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。坑底施設としては楕円形ピットを1基有し、大きさは40×27㎝、深さ21㎝を計る。覆土は2層に分けられ、人為的な埋め戻し土と考えられる。

土坑SK82（Fig.30）

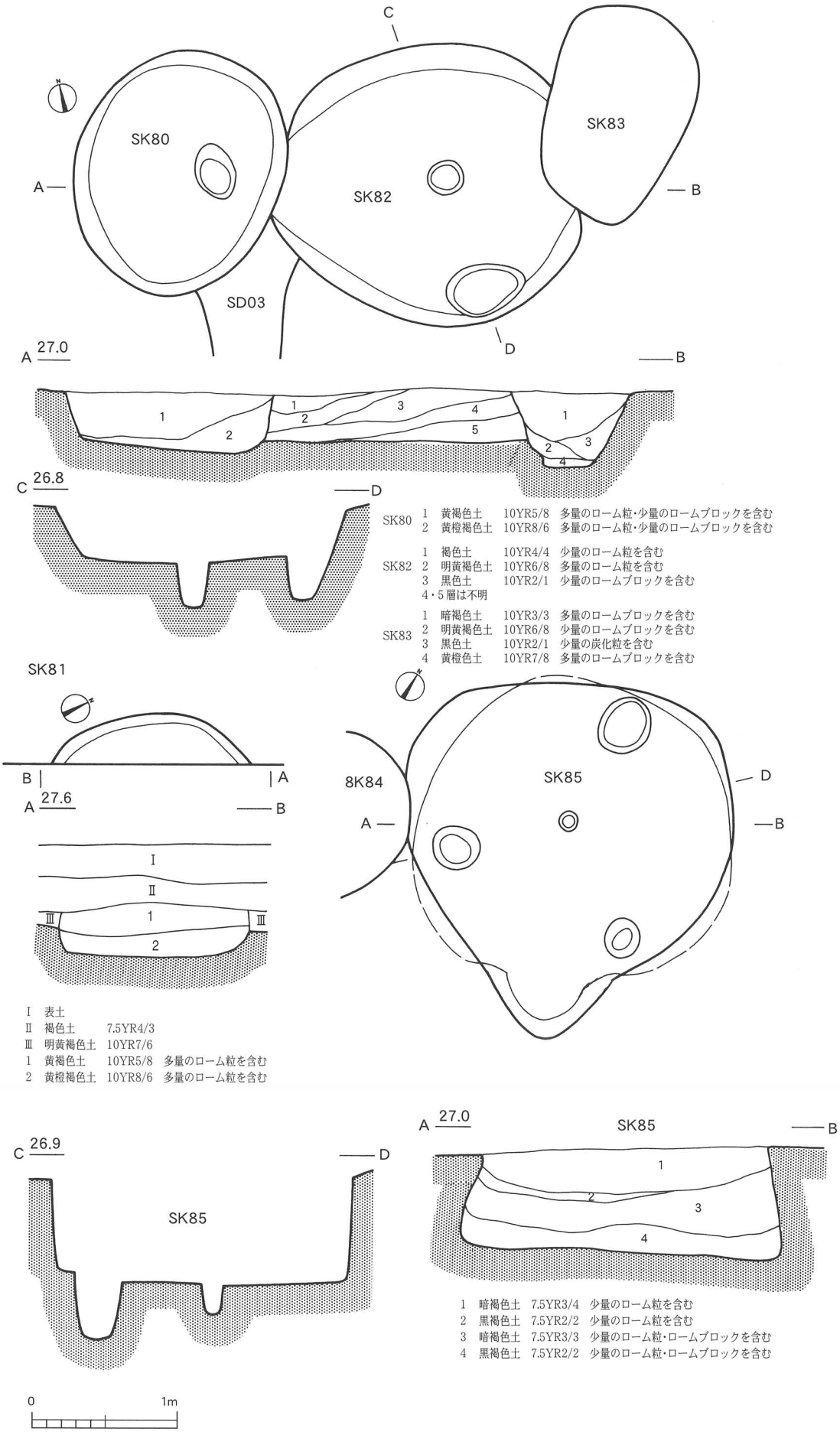
調査区の中央部南東側C－4－b、D－4－a・c区に位置し、標高26.70ｍの平坦部に立地する。溝状遺構SD03、土坑SK80・83に切られている。平面形は東西に長い楕円形を呈する。長径は216㎝、短径は190㎝を計る。長軸方向はN－68°－Wを示す。坑底長径は214㎝、坑底短径は160㎝、底面中央の深さは40㎝を計測する。壁は急傾に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。坑底施設としては、略円形センター・ピットを1基、楕円形サイド・ピット1基を有する。センター・ピットは大きさが25×23㎝、深さ33㎝を計る。サイド・ピットは坑底南側に位置し、規模は56×35㎝、深さ40㎝を計測する。覆土は5層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

土坑SK81（Fig.30）

調査区の南東側D－6－b区に位置し、標高26.80～26.90ｍの平坦部に立地する。竪穴住居跡SI07を切っている。遺構の東側の大部分が調査区域外に存在するため、本址の全容は不明だが、平面形は推定で、やや南北に長い略円形を呈していると考えられる。平面規模は長径が140㎝以上を計ると推定される。長軸方向、坑底長径、坑底短径は不明。底面の深さは38㎝を計測する。覆土は2層に分けられ、人為的な埋め戻し土と考えられる。

土坑SK85（Fig.30）

調査区の中央部南東側D－3－c、D－4－a区に位置し、標高26.70～26.80ｍの平坦部に立地する。



SK80
1 黄褐色土 10YR5/8 多量のローム粒・少量のロームブロックを含む
2 黄橙褐色土 10YR8/6 多量のローム粒・少量のロームブロックを含む

SK82
1 褐色土 10YR4/4 少量のローム粒を含む
2 明黄褐色土 10YR6/8 多量のローム粒を含む
3 黒色土 10YR2/1 少量のロームブロックを含む
4・5層は不明

SK83
1 暗褐色土 10YR3/3 多量のロームブロックを含む
2 明黄褐色土 10YR6/8 少量のロームブロックを含む
3 黒色土 10YR2/1 少量の炭化粒を含む
4 黄橙色土 10YR7/8 多量のロームブロックを含む

I 表土
II 褐色土 7.5YR4/3
III 明黄褐色土 10YR7/6
1 黄褐色土 10YR5/8 多量のローム粒を含む
2 黄橙褐色土 10YR8/6 多量のローム粒を含む

1 暗褐色土 7.5YR3/4 少量のローム粒を含む
2 黒褐色土 7.5YR2/2 少量のローム粒を含む
3 暗褐色土 7.5YR3/3 少量のローム粒・ロームブロックを含む
4 黒褐色土 7.5YR2/2 少量のローム粒・ロームブロックを含む

Fig.30 土坑 SK80. SK82. SK83. SK81. SK85

溝状遺構SD03、土坑SK84に切られている。平面形は南北に長い楕円形を呈する。長径は232㎝、短径は214㎝を計る。長軸方向はN－89°－Wを示す。坑底長径は219㎝、坑底短径は218㎝、底面中央の深さは76㎝を計測する。壁は北東側・南東側・南西側の一部が膨らみながら急傾して立ち上がっている以外はほぼ垂直に立ち上がる。底面も一部が開口部より2～12㎝奥へ広がり、やや起伏がある。坑底施設としては、1基の略円形センター・ピット、3基の略円形サイド・ピットを有する。センター・ピットは坑底中央よりやや北西側に位置し、大きさは14×13㎝、深さ21㎝を計る。北側に位置するサイド・ピットは規模40×35㎝、深さ37㎝を計測する。南東側のサイド・ピットは大きさが27×25㎝、深さ14㎝を計る。南西側サイド・ピットは規模が33×31㎝、深さ43㎝を計測する。覆土は4層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

土坑SK86（Fig.31）

調査区のほぼ中央部C－3－d、C－4－b、D－3－c区に位置し、標高26.80mの平坦部に立地する。土坑SK87を切っている。平面形は東西にやや長い略円形を呈する。長径は292㎝、短径は280㎝を計る。長軸方向はN－65°－Wを示す。坑底長径は284㎝、坑底短径は274㎝、底面中央の深さは62㎝を計測する。壁はほぼ平坦で、南側の一部が開口部より2～10㎝広がっている。壁は大部分が垂直に立ち上がっているが、南側の一部は大きく膨らみながら急傾して立ち上がっている。坑底施設としては、略円形センター・ピット1基、楕円形サイド・ピットを1基有している。センター・ピットの大きさは21×19㎝、深さ48㎝を計り、サイド・ピットは規模が54×40㎝、深さ30㎝を計測する。覆土は3層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

土坑SK87（Fig.31）

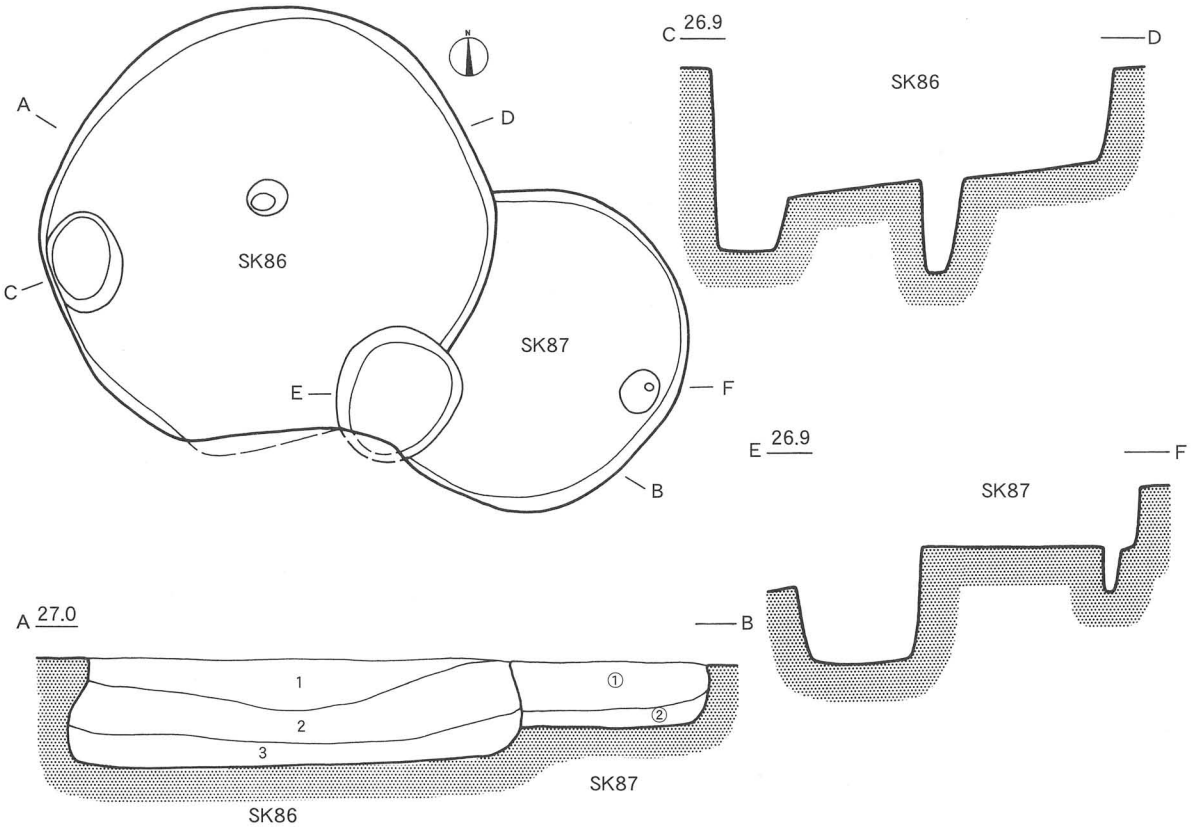
調査区のほぼ中央部C－3－d、D－3－c、C－4－b、D－4－a区に位置し、標高26.80mの平坦部に立地する。土坑SK86に切られているため、全容は不明だが、平面形は南北にやや長い略円形を呈すると推定される。長径は172㎝を計り、短径は不明。長軸方向はN－10°－Eを示す。坑底長径は158㎝を計測し、坑底短径は不明。底面中央の深さは34㎝を計る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。坑底施設としては、2基の略円形サイド・ピットを有する。南東側に位置するサイド・ピットは大きさが22×20㎝、深さ24㎝を計る。南西側のサイド・ピットは規模が70×65㎝、深さ52㎝を計測し、ピット底面が、土坑開口部より12m広がっている。覆土は2層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

土坑SK88（Fig.31）

調査区の東側D－4－b区に位置し、標高26.80mの平坦部に立地する。竪穴住居跡SI10に切られているため、遺構の全容は不明だが、平面形は南北に長い楕円形を呈していると推定される。長径は不明、短径は100㎝を計る。長軸方向はN－28°－Eを示す。坑底長径は不明、坑底短径は82㎝を計る。壁は緩やかに立ち上がり、底面はやや起伏がある。底面中央の深さは21㎝を計測する。

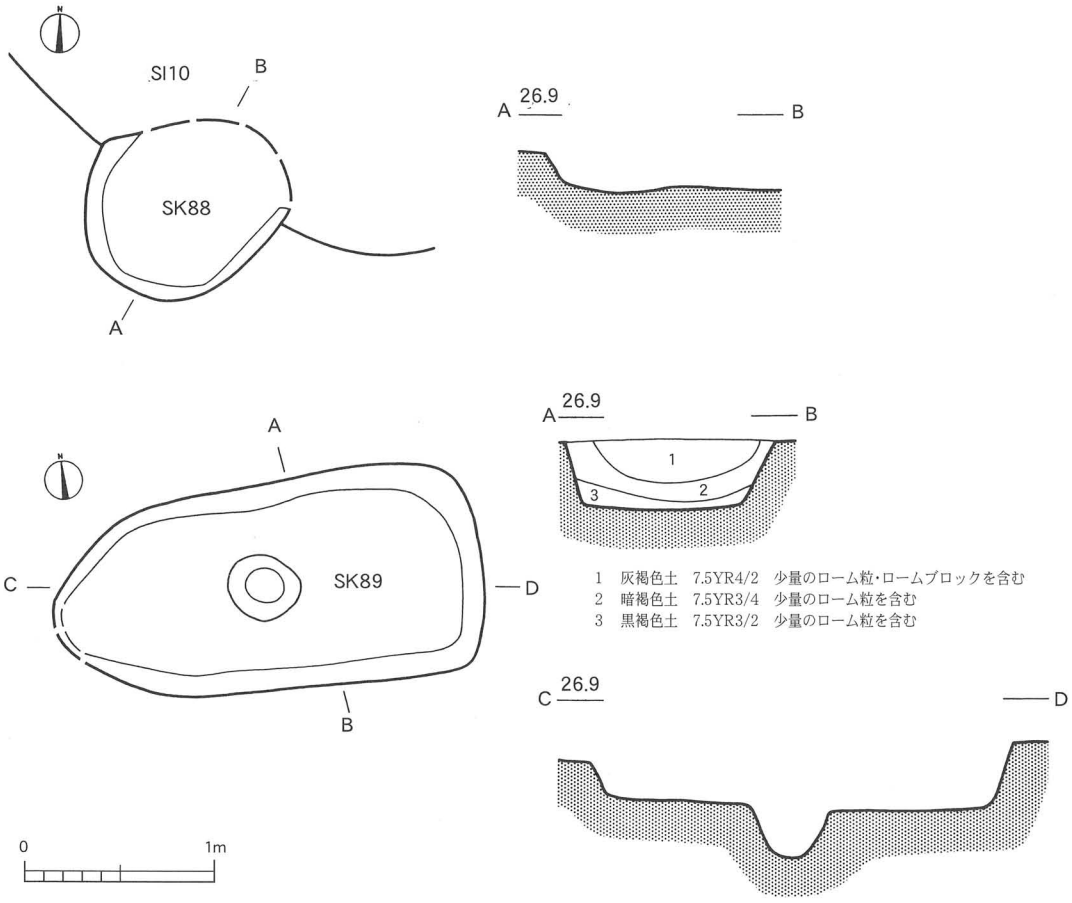
土坑SK89（Fig.31）

調査区の東側E－3－c、E－4－a区に位置し、標高26.60～26.90mの平坦部に立地する。竪穴住



SK86
1 暗褐色土 7.5YR3/4 多量のローム粒を含む
2 黒褐色土 7.5YR3/2 多量のローム粒・ロームブロックを含む
3 黒褐色土 7.5YR3/1 微量のローム粒・ロームブロックを含む

SK87
① 暗褐色土 7.5YR3/4 多量のローム粒・ロームブロックを含む
② 黒褐色土 7.5YR3/2 多量のローム粒を含む



1 灰褐色土 7.5YR4/2 少量のローム粒・ロームブロックを含む
2 暗褐色土 7.5YR3/4 少量のローム粒を含む
3 黒褐色土 7.5YR3/2 少量のローム粒を含む

Fig.31 土坑 SK86・SK87・SK88・SK89

居跡SI10を切っている。平面形は東西に長い隅丸方形を呈する。長軸は228㎝、短軸は106㎝を計る。長軸方向はN－88°－Wを示す。坑底長径は210㎝、坑底短径は84㎝、底面中央の深さは50㎝を計測する。壁は急傾に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。坑底施設としては、坑底中央に略円形のピットを1基有する。ピットの大きさは38×35㎝、深さ26㎝を計る。覆土は3層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

土坑SK94（Fig.32）

調査区の北東側E－1－d、E－2－b区に位置し、標高26.70～26.80mの平坦部に立地する。Pit02に切られている。平面形は南北にやや長い楕円形を呈する。開口部長径は193㎝、開口部短径は162㎝を計る。長軸方向はN－24°－Eを示す。坑底長径は223㎝、坑底短径は218㎝、底面中央の深さは71㎝を計測する。開口部より坑底部が2～40㎝広がる。壁は大きく膨らみながら急傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。覆土は5層に分けられ、下層の3層は人為的に埋め戻しているが、その上層の2層は自然埋没土と考えられる。

Pit02（Fig.32）

調査区の北東側E－1－d、E－2－b区に位置し、標高26.70mの平坦部に立地する。土坑SK94を切っている。平面形は南北に長い楕円形を呈する。長径は62㎝、短径は40㎝を計る。長軸方向はN－9°－Wを示す。坑底長径は16㎝、坑底短径は15㎝、底面中央の深さは124㎝を計測する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

土坑SK96（Fig.32）

調査区の東側D－3－d、E－3－c区に位置し、標高26.60mの平坦部に立地する。竪穴住居跡SI10を切っている。平面形は東西に長い楕円形を呈する。長径は91㎝、短径は77㎝を計る。長軸方向はN－59°－Eを示す。坑底長径は72㎝、坑底短径は61㎝、底面中央の深さは47㎝を計測する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

土坑SK97（Fig.32）

調査区の北東側E－2－d、E－3－b区に位置し、標高26.70mの平坦部に立地する。平面形は東西にやや長い略円形を呈する。長径は82㎝、短径は76㎝を計る。長軸方向はN－64°－Wを示す。坑底長径・短径は22㎝、底面中央の深さは134㎝を計測する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

土坑SK99（Fig.32）

調査区の北西側C－1－a区に位置し、標高26.90～27.00mの平坦部に立地する。平面形は南北にやや長い略円形を呈する。長径は59㎝、短径は50㎝を計る。長軸方向はN－5°－Eを示す。坑底長径は23㎝、坑底短径は22㎝、底面中央の深さは47㎝を計測する。壁は急傾に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

土坑SK100（Fig.32）

調査区の北西側C－1－a区に位置し、標高26.90～27.00mの平坦部に立地する。平面形は東西に長

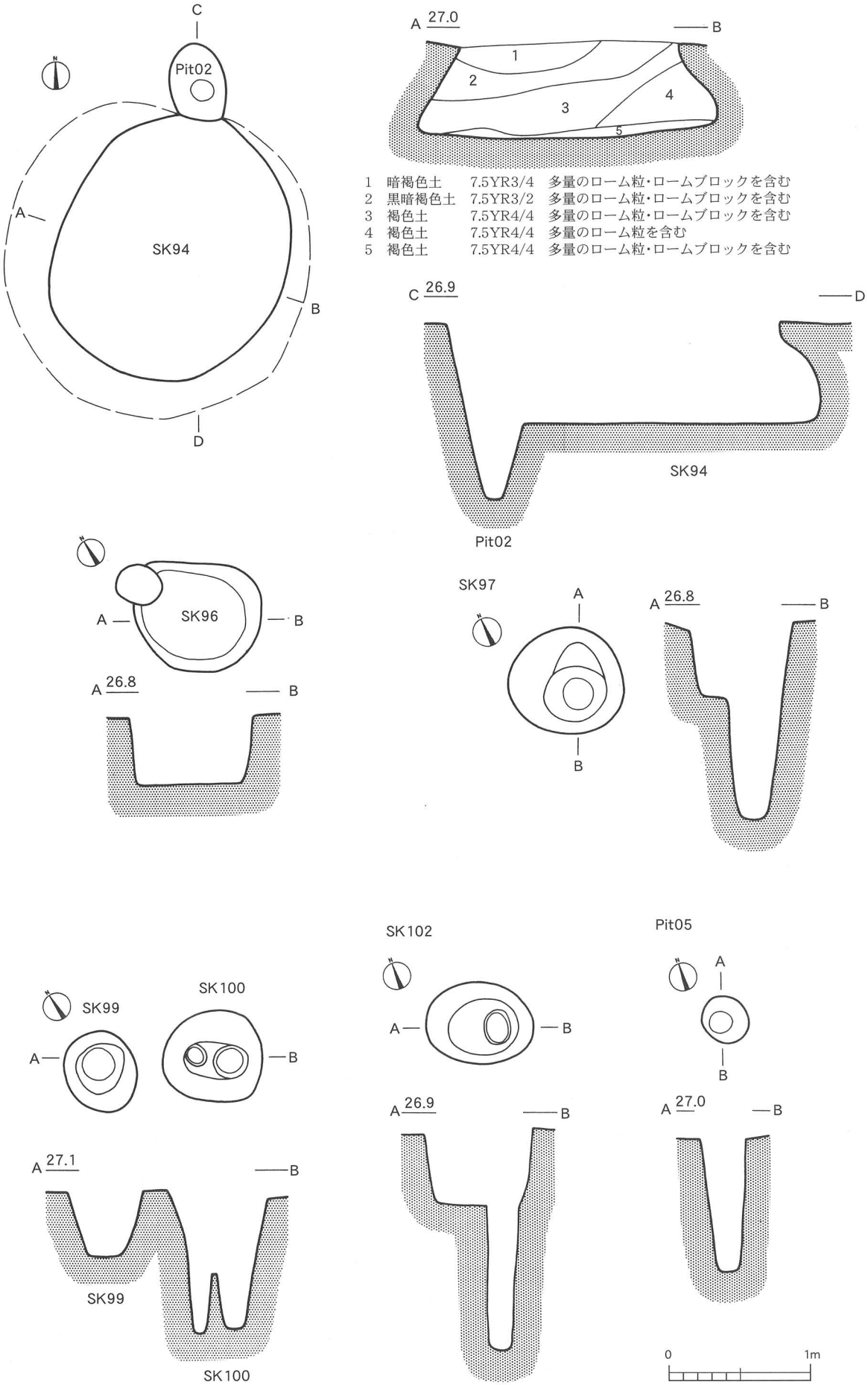


Fig.32 土坑 SK94・SK96・SK97・SK99・SK100・SK102・Pit02・Pit05

い平面形を呈する。長径は70㎝、短径は64㎝を計る。長軸方向はN－58°－Wを示す。壁は急傾に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。坑底施設としては、略円形のピット２基を有する。東側のピットの大きさは25×24㎝、深さ39㎝を計る。西側に位置するピットは規模が16×14㎝、深さ43㎝を計測する。

土坑SK102（Fig.32）

調査区の北東側Ｅ－２－ｂ区に位置し、標高26.80ｍの平坦部に立地する。平面形は東西に長い楕円形を呈する。長径は76㎝、短径は54㎝を計る。長軸方向はN－74°－Wを示す。坑底長径は50㎝、坑底短径は40㎝、底面中央の深さは47㎝を計測する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。坑底施設としては、略円形ピットを１基有する。ピットの大きさは26×22㎝、深さ105㎝を計る。

Pit05（Fig.32）

調査区の南側Ｃ－５－ｃ区に位置し、標高26.80ｍの平坦部に立地する。平面形は南北に長い略円形を呈する。長径は34㎝、短径は32㎝を計る。長軸方向はN－19°－Wを示す。坑底長径は16㎝、坑底短径は15㎝、底面中央の深さは94㎝を計測する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

陥し穴状遺構SK23（Fig.33、PL9）

調査区の中央部西側Ｂ－３－ｂ・ｄ区に位置し、標高26.80～26.90ｍの平坦部に立地する。平面形は隅丸方形状の長楕円形を呈する。長軸は270㎝、短軸は68㎝を計る。長軸方向はN－2°－Wを示す。坑底長径は282㎝、坑底短径は54㎝、底面中央の深さは92㎝を計測する。底面はほぼ平坦で、南側の坑底部の一部が開口部より２～15㎝広がっている。壁は南側の一部は大きく膨らみながら急傾して立ち上がり、その部分以外の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。坑底施設としては、円形のピットを２基有する。P1は坑底中央よりやや北側に位置し、大きさは12×12㎝、深さ８㎝を計る。P2は坑底中央よりやや南側に位置し、規模が34×32㎝、深さ19㎝を計測する。覆土は３層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

陥し穴状遺構SK29（Fig.33）

調査区の中央部北西側Ｃ－２－ａ区に位置し、標高26.90ｍの平坦部に立地する。溝状遺構SD01に切られている。平面形は南北に長い長楕円形を呈する。長軸は198㎝、短軸は90㎝を計る。長軸方向はN－30°－Ｅを示す。坑底長径は129㎝、坑底短径は22㎝、底面中央の深さは176㎝を計測する。壁は急傾に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。覆土は４層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

陥し穴状遺構SK30（Fig.34）

調査区の中央部北西側Ｃ－２－ｂ・ｄ区に位置し、標高26.80～26.90ｍの平坦部に立地する。平面形は南北に長い長楕円形を呈する。長軸は174㎝、短軸は82㎝を計る。長軸方向はN－51°－Ｅを示す。坑底長径は82㎝、坑底短径は23㎝、底面中央の深さは180㎝を計測する。壁は急傾に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。覆土は４層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

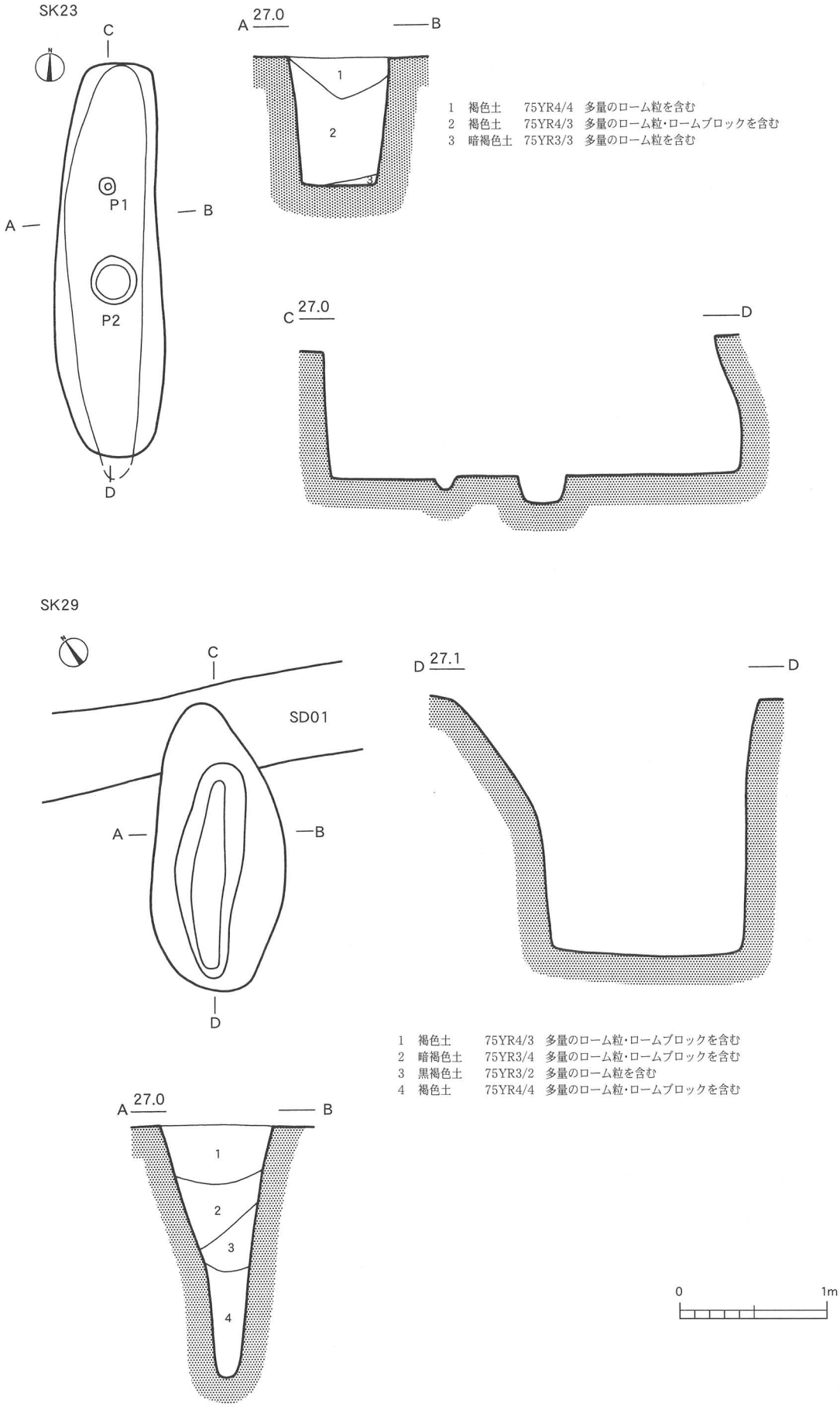
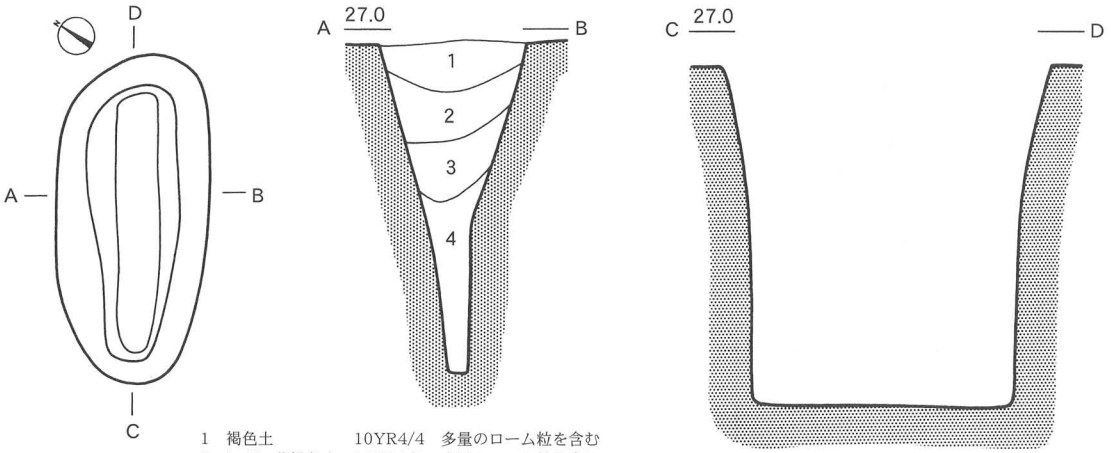
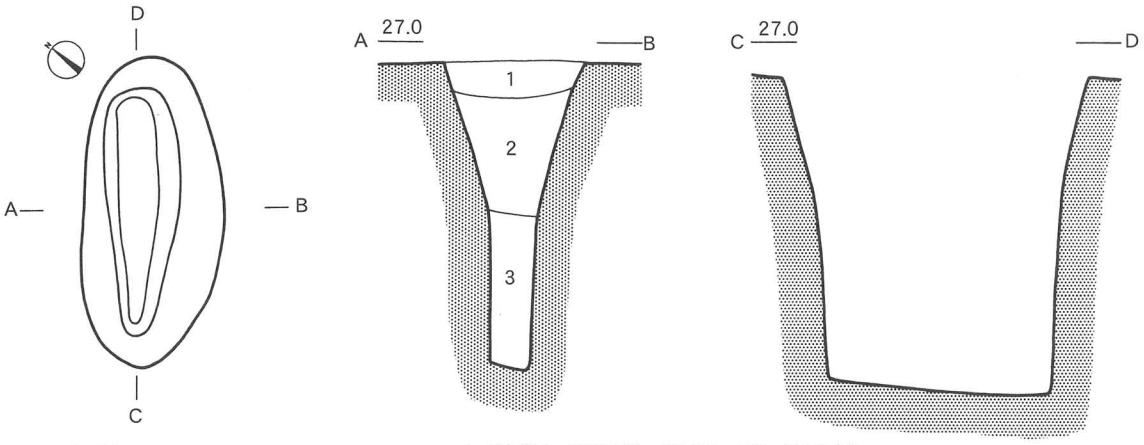


Fig.33 陥し穴状遺構 SK23・SK29



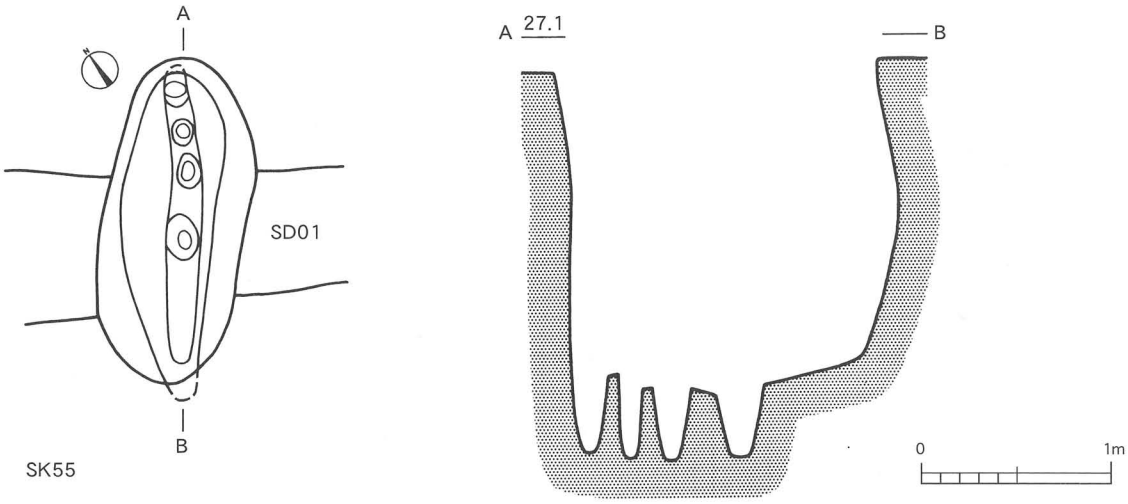
SK30

1　褐色土　10YR4/4　多量のローム粒を含む
2　にぶい黄褐色土　10YR4/3　多量のローム粒を含む
3　黒褐色土　10YR3/2　少量のローム粒を含む
4　褐色土　10YR4/6　多量のローム粒、ロームブロックを含む



SK32

1　暗褐色土　10YR3/3　多量のローム粒・炭化粒含む
2　暗褐色土　10YR3/3　多量のローム粒・ロームブロック含む
3　褐色土　10YR4/4　多量のローム粒・炭化粒含む



SK55

Fig.34　陥し穴状遺構　SK30・SK32・SK55

陥し穴状遺構SK32（Fig.34）

調査区の中央部北側Ｄ－２－ｃ、Ｄ－３－ａ区に位置し、標高26.80～26.90ｍの平坦部に立地する。平面形は南北に長い長楕円形を呈する。長軸は165㎝、短軸は75㎝を計る。長軸方向はＮ－53°－Ｅを示す。坑底長径は120㎝、坑底短径は20㎝、底面中央の深さは167㎝を計測する。壁は急傾に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。覆土は３層に分けられ、自然埋没土と考えられる。

陥し穴状遺構SK55（Fig.34）

調査区の北西側Ｂ－１－ｄ区に位置し、標高26.90～27.00ｍの平坦部に立地する。溝状遺構SD01に切られている。平面形は南北に長い長楕円形を呈する。長軸は173㎝、短軸は76㎝を計る。長軸方向はＮ－32°－Ｅを示す。坑底長径は158㎝、坑底短径は16㎝、底面中央の深さは170㎝を計測する。壁は北側及び南側の突端部の中段が開口部より５～12㎝奥へ入っている。この部分以外の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底面はやや起伏があり、坑底施設としては楕円形ピットを４基有する。北側からP1～P4とし、P1は径22×12㎝、深さ41㎝。P2は径14×12㎝、深さ38㎝。P3は径18×12㎝、深さ37㎝。P4は24×17㎝、深さ38㎝を計測する。

陥し穴状遺構SK90（Fig.35）

調査区の東側Ｅ－３－ｃ・ｄ、Ｅ－４－ａ区に位置し、標高26.60～26.70ｍの平坦部に立地する。平面形は南北方向に長い長楕円形を呈する。長軸は168㎝、短軸は133㎝を計る。長軸方向はＮ－49°－Ｗを示す。坑底長径は133㎝、坑底短径は25㎝、底面中央の深さは136㎝を計測する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はやや起伏がある。

陥し穴状遺構SK91（Fig.35）

調査区の中央部北東側Ｄ－３－ｂ・ｄ区に位置し、標高26.80～26.90ｍの平坦部に立地する。平面形は南北方向に長い長楕円形を呈する。長軸は184㎝、短軸は70㎝を計る。長軸方向はＮ－35°－Ｅを示す。坑底長径は130㎝、坑底短径は15㎝、底面中央の深さは177㎝を計測する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。坑底施設としては、４基の略円形ピットを有する。北からP1～P4とし、P1は径14×10㎝、深さ18㎝を計る。P2は径18×16㎝、深さ21㎝。P3は径20×16㎝、深さ22㎝。P4は径10×６㎝、深さ16㎝を計測し、土坑の壁より、このピットの底部は５㎝ほど奥へ広がっている。

陥し穴状遺構SK92（Fig.35、PL9）

調査区の中央部Ｄ－３－ａ・ｃ区に位置し、標高26.80～26.90ｍの平坦部に立地する。平面形は南北に長い長楕円形を呈する。長軸は268㎝、短軸は54㎝を計る。長軸方向はＮ－４°－Ｗを示す。坑底長径は240㎝、坑底短径は24㎝、底面中央の深さは77㎝を計測する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。坑底施設としては、16基の円形ピットを有する。北からP1～P16とし、P1は径５㎝、深さ８㎝を計る。P2は径４㎝、深さ６㎝。P3は径５㎝、深さ９㎝。P4は径４㎝、深さ８㎝。P5は径４㎝、深さ９㎝。P6は径５㎝、深さ６㎝。P7は径４㎝、深さ７㎝。P8は径４㎝、深さ９㎝。P9は径５㎝、深さ７㎝。P10は径５㎝、深さ６㎝。P11は径４㎝、深さ９㎝。P12は径５㎝、深さ８㎝。P13は径４㎝、深さ７㎝。P14は径４㎝、深さ７㎝。P15は径４㎝、深さ19㎝。P16は径４㎝、深さ19㎝を計測する。（大渕淳志）

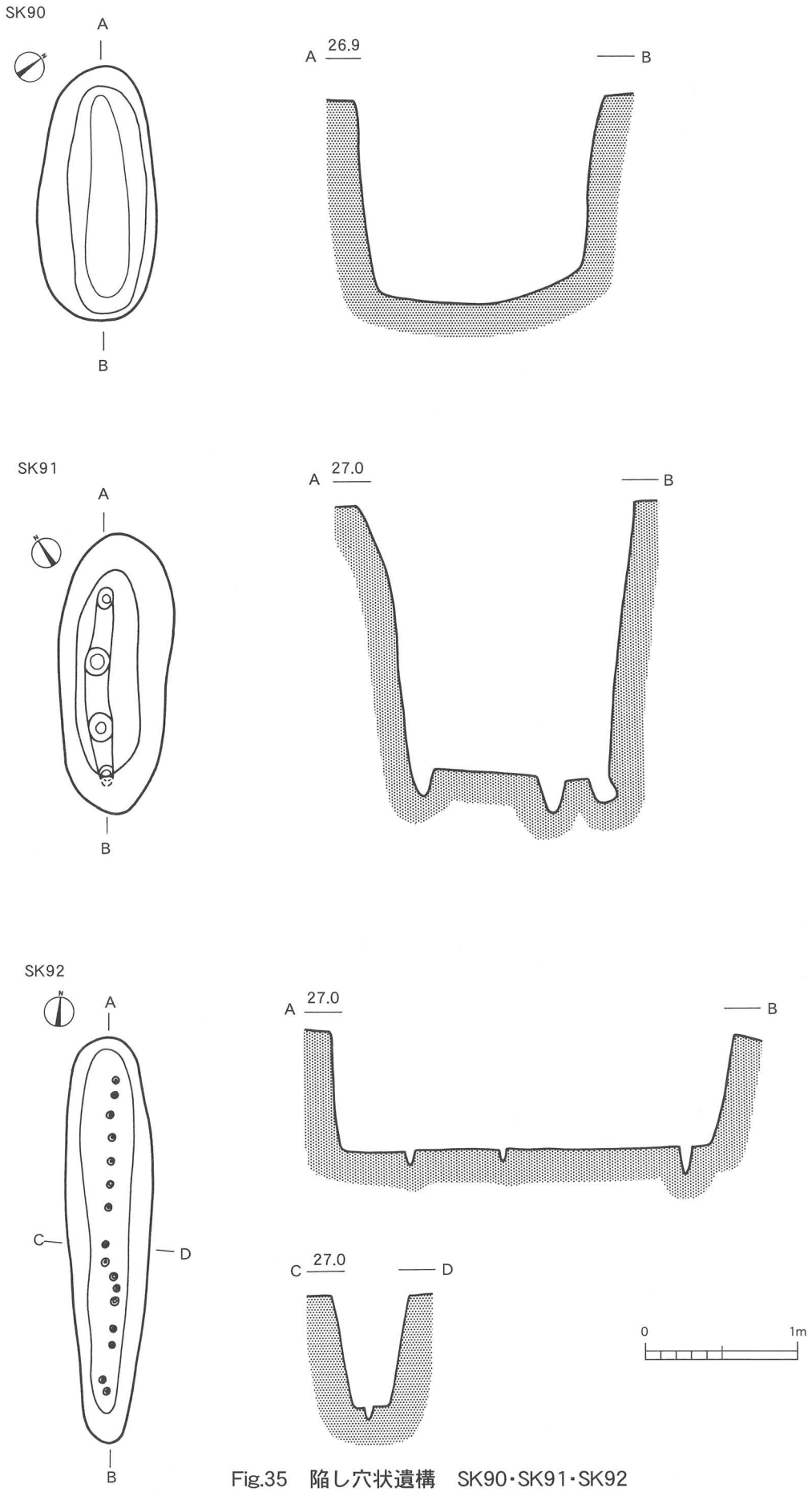


Fig.35　陥し穴状遺構　SK90・SK91・SK92

第４節　縄紋時代の遺物

本調査区内の出土遺物は、縄紋時代中期後半に属するものが主体であるが、わずかに中葉に相当するものも発見されている。また当該期の遺物には、土器、土製品、石器などがあり、土器には型式的中心となるものとして、中峠式、加曽利E1式であるが、わずかに中葉の阿玉台式、勝坂式が検出されている。

また形態的には深鉢形、浅鉢形、壷形、器台形土器がある。土製品には土器片錘と耳栓、楕円形土製品があり、石製品としては磨製石斧と磨石類がある。

因に記述にあたり住居跡出土土器からはじめ、土製品、石製品と続き、次いで土坑出土土器、土製品、石製品について漸次のべ、最後に試掘調査および表採資料で検出された遺物の記載に充てた。

１．竪穴住居跡出土の土器（Fig.36～41）

竪穴住居跡SI01出土土器（Fig.36－１～４）

Fig.36－１は深鉢の胴下半部でほぼ全周する。３本単位の懸垂紋を垂下させる。地文はRL縄紋が縦位に施されている。胎土に長石・石英粒を含み、焼成は良好。色調は褐色（7.5YR4/3）を呈する。２も深鉢の底部破片。１本単位の沈線紋を垂下させる。RL縄紋を地文とする。３・４は深鉢底部破片。加曽利E1式。

竪穴住居跡SI03出土土器（Fig.36－１～３）

Fig.36－１は深鉢の口縁部破片。隆帯による渦巻紋と楕円形区画紋が配され、区画内は縦位の沈線によって充填される。２・３は深鉢の底部破片。加曽利E1式。

竪穴住居跡SI04出土土器（Fig.36－１～４）

Fig.36－１～４は深鉢の底部破片。１は沈線紋を垂下させる。地紋はLR縄紋。

竪穴住居跡SI08出土土器（Fig.36－１・２）

Fig.36－１は埋甕炉として使用されていた深鉢の胴中位で全周する。３本単位の懸垂文とその間に２本単位の波状沈線文が垂下する。地紋はRL縄紋が縦位に施紋されている。２は深鉢の底部破片である。

竪穴住居跡SI10出土土器（Fig.37－１～４）

Fig.37－１は胴下半部を欠損する。頸部から大きく外反し、口縁部は「く」の字状に短く内彎するキャリパー形の深鉢。口縁部は小突起を有し、隆帯による楕円形区画を施し、区画内には縦位の沈線文を充填する。頸部は地紋にRL縄紋を施紋し、沈線による横位の楕円形区画文と１条の波状沈線文を垂下させる。胎土に長石粒をわずかに含み、焼成は良好。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。２は浅鉢の底部破片。底面はヘラ状工具によりナデ整形。３・４は深鉢の底部破片。

竪穴住居跡SI11出土土器（Fig.38～41）

Fig.38－１は胴部中位が膨らみ、口縁部は大きく外反しながら内彎する深鉢。口縁部は大きな波状口縁となる。口唇部は肥厚し、刻み目と沈線が付された隆帯による楕円形区画紋が配され、頸部から胴部には地紋LR縄紋が施紋され、２本単位の沈線紋と１条の波状沈線紋が垂下する。胎土に長石・石英粒を多く含み、

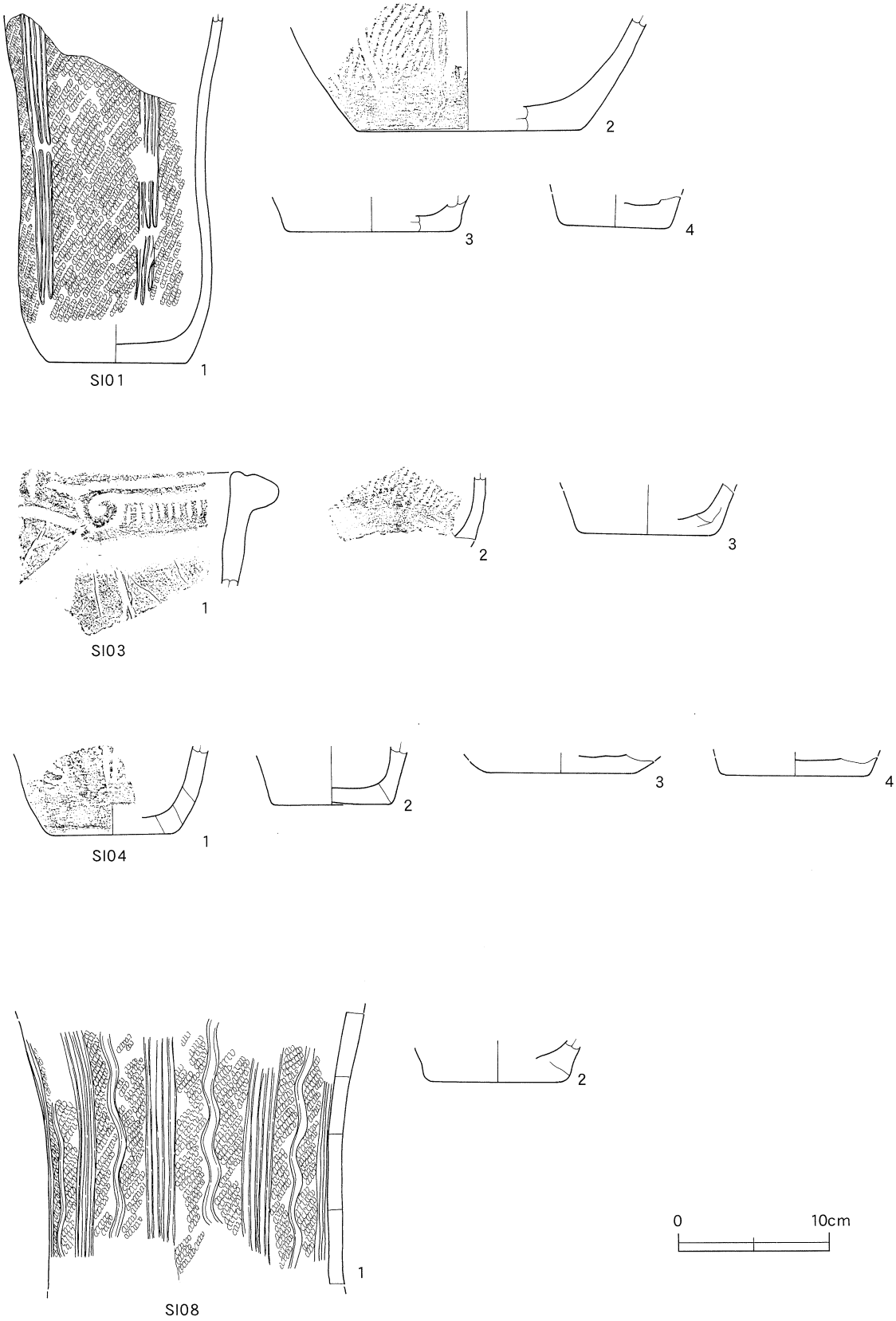


Fig.36　竪穴住居跡　SI01・03・04・08出土土器

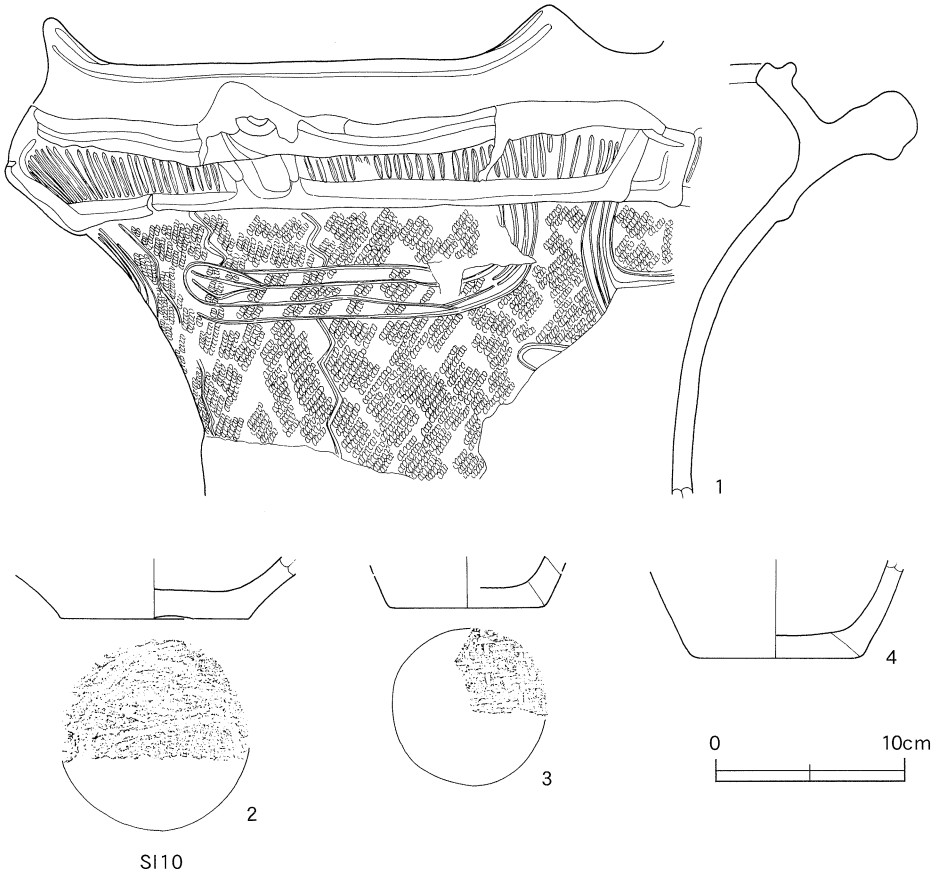


Fig.37　竪穴住居跡 SI10 出土土器

焼成は良好。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈する。2は口縁部の破片。連続爪形紋を有する隆帯楕円形区画紋内に縦位の沈線紋が充填され、連続交互刺突紋が配される。3は口縁部破片で、内彎する口縁部に口唇部は短く外反する深鉢。口縁部は無紋で、口縁部下は連続交互刺突紋が巡り区画紋となり、沈線による区画紋内には沈線が充填される。4も口縁部破片。ほぼ直線的に外方へ開き、口唇部がわずかに内彎する。口唇部は無紋とし、連続交互刺突紋の区画紋内に平行沈線による渦巻紋が配され、沈線が充填される。5は口縁部は内彎気味大きく開く深鉢で、小さい波状口縁を呈する。口縁部は2条の刻み目をもつ隆帯が巡り、頸部は無紋となる。胎土に長石・石英粒を多く含み、焼成は良好。色調は暗褐色（7.5YR3/3）を呈する。6は深鉢の胴上半部破片。やはり2条の刻み目のある隆帯の区画紋を表出し、区画内には沈線紋を配する。胴部は地紋RL縄紋が縦位に施紋される。7は口縁部付近の破片で、刻み目のある隆帯が渦巻紋を表出する。8は口縁部が内彎し、口唇部で直立する深鉢の口縁部把手部の破片。双頭状の橋状把手で、孔の周辺に沈線が巡り、さらに刻み目が施される。胎土に長石・石英粒を少量含み、焼成は良好。色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈する。9は高い橋状把手は双頭状で、孔の周辺に沈線が巡る。また口縁部には沈線による区画紋が施される。胎土に長石・石英粒を少量含み、焼成は良好。色調はにぶい黄褐色（7.5YR5/4）を呈する。10は環状把手の破片。内面より1孔が穿孔され、外面の2孔に達している。外面は刻み目のある隆帯が区画紋と渦巻き紋内に沈線紋が充填され、内面も沈線による区画紋内に沈線が充填される。胎土に長石・石英粒を多く含み、焼成は良好。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈する。11・12も把手破片。11は橋状把手の孔に沿って沈線が巡る。12は円孔の周辺に沈線を巡らす。胎土に長石・石英粒を含み、焼成は

良好。色調は暗褐色（10YR3/3）を呈する。12の胎土に長石・石英粒を少量含み、焼成は良好。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈する。13は波状を呈する口縁部破片で、口縁は内彎し、口唇部が小さく外反する。把手は橋状で、口縁部は沈線による楕円形区画紋に縦位の沈線を充填する。胎土に長石・石英粒を少量含み、焼成は良好。色調はにぶい褐色（7.5YR5/7）を呈する。14～18は把手破片である。14は半円形把手に円孔が穿孔され、孔の周辺に3条の沈線が巡る。15も同様で、山形の把手に円孔が穿孔され、孔の周囲に沈線が巡る。16は環状把手の破片。内面より1孔が穿孔され、外面の2孔に達している。円孔の周囲には沈線による略渦巻紋が施されている。胎土に長石粒を少量含み、焼成は良好。色調はにぶい黄橙色（10YR6/4）を呈する。17は偏平の楕円形把手。ほぼ中央に円孔が穿っている。胎土に長石粒を少量含み、焼成は良好。色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈する。18は山形状の把手で、やはり円孔が穿っている。Fig.39－19はキャリパー形の深鉢で口縁部は直立する。口縁部に隆帯による横位の波状紋が巡らされる。口縁部中位には2本の隆帯による渦巻紋が施紋される。地紋はLR縄紋が施されている。胎土に長石・石英粒を多く含み、焼成は良好。色調は暗褐色（7.5YR3/4）を呈する。20は口縁部付近の破片。2条隆帯による区画紋内に沈線紋が充填される。21は口縁部付近の破片。2条隆帯が巡り、沈線による渦巻紋が充填される。胎土に長石・石英粒を含み、焼成は良好。色調は褐色（7.5YR4/3）を呈する。22も口縁部破片。2条隆帯による渦巻紋に沈線紋が充填する。23は波状口縁を呈するキャリパー形の深鉢。口唇部は沈線を伴う隆帯が巡り、口縁部は2条の隆帯によるクランク紋が施され、沈線が充填する。24は波状口縁の深鉢。隆帯による区画紋内にLR縄紋横位回転を施紋する。25はキャリパー形の深鉢。口縁部破片で、隆帯による渦巻紋を施こし、頸部に2本の隆帯が巡っている。26は口縁部がほぼ直立するキャリパー形の深鉢、口唇部は太凹帯が巡り、口縁部は2条隆帯によるクランク紋が施され、地紋にRL縄紋が施紋される。27は口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。口唇部は2条隆帯により断面M字状沈線が巡り、口縁部は2条隆帯によるクランク紋が配される。地紋はLR縄紋の横位施紋である。28は口縁部付近の破片。太隆帯による区画内に地紋LR縄紋が施紋される。29は口縁部が大きく外反する深鉢。口縁部下半部の破片で、口縁部は無紋。頸部に隆帯による橋状把手が付される。胎土に長石・石英粒を少量含み、焼成は良好。色調は黒褐色（7.5YR3/2）を呈する。30はわずかに内彎しながら直立する波状口縁部破片。口唇部に隆帯による太凹帯が巡り区画され、口縁部はLR縄紋が施紋される。31は口縁部が内彎する深鉢。口唇部にそって結節沈線による波状紋が横走する。32は口縁部はわずかに内彎し、口唇部が内削する深鉢。口縁部上端は沈線によって区画され無紋帯が巡り、口縁部は縦位の沈線が施紋されている。33は橋状把手で、孔周辺に沈線が巡る。胎土に長石・石英粒を含み、焼成は良好。色調はにぶい黄褐色（10YR6/4）を呈する。34は円形の把手破片。内彎気味に立ち上がる。胎土に長石・石英粒を多く含み、焼成は良好。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈する。35は口縁部上端が「く」の字状に外反し、口縁部は内彎する。口唇部は太凹帯が巡り、口縁部上端は無紋帯、口縁部は縦位の沈線が施紋されている。36は小形の深鉢。口唇部は小さく外反し、口縁部は内彎する。口縁部上端は交互刺突紋が巡り、口縁部はRL縄紋が施紋される。37は口縁部は外反し、胴部が張る深鉢。口縁部は無紋とし、胴部は地紋LR縄紋に沈線紋が施紋される。38は口縁部が内彎する深鉢。口縁部上端に交互刺突紋が巡り、地紋にLR縄紋横位に施紋される。39は口縁部は内彎し、口唇部が短く直立する。口唇部直下に沈線が巡り、単節RLにより横位および縦位に施紋し、羽状効果をあげている。40は胴部破片。隆帯上に円形刺突紋が施紋されている。Fig.40－41はキャリパー形の深鉢。口唇部直下に横沈線が巡り、口縁部は沈線による渦巻紋が施紋される。42は深鉢の底部付近の破片。2単

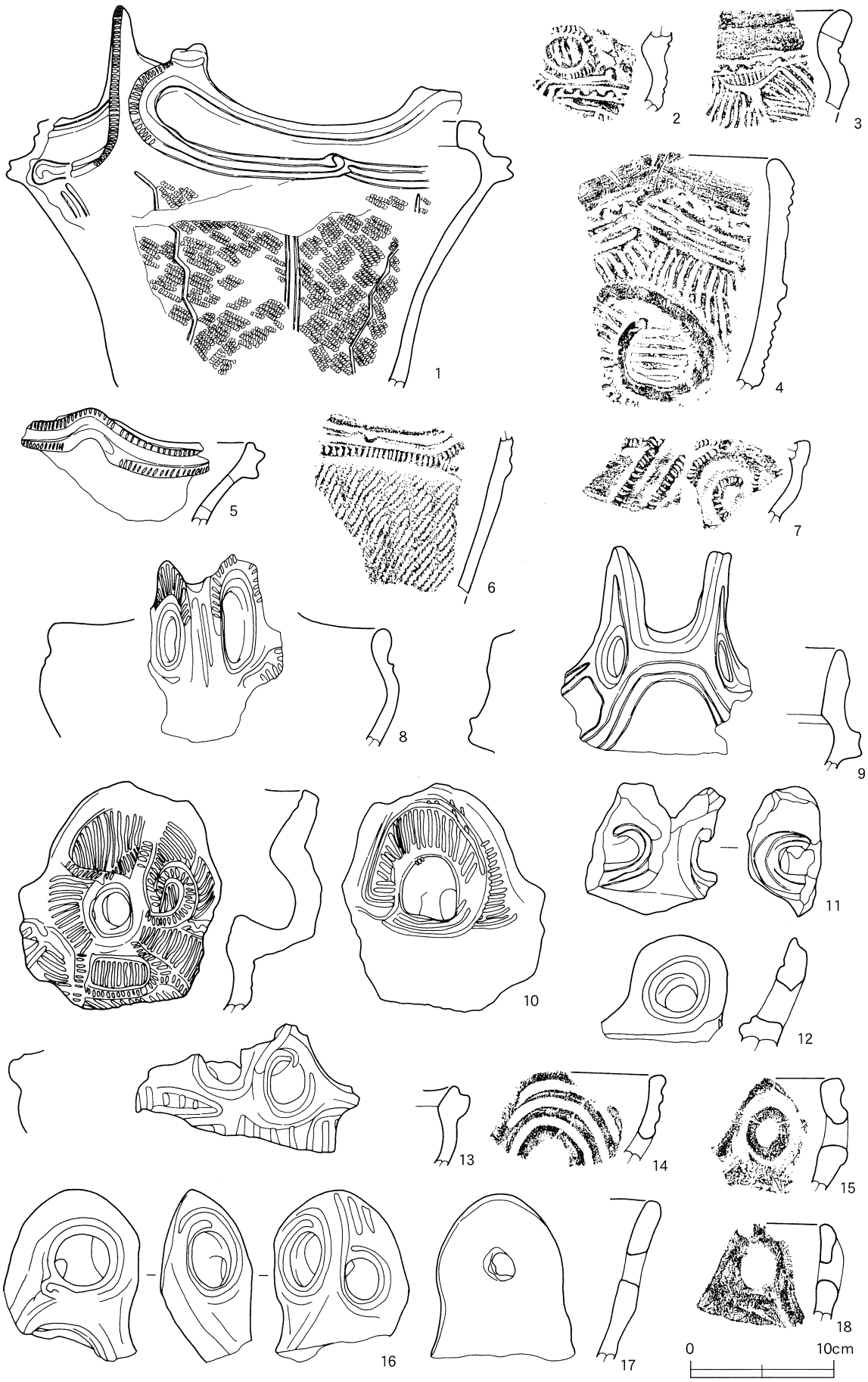


Fig.38　竪穴住居跡 SI11 出土土器（1）

位の懸垂紋とその間に緩い波状の沈線が垂下する。地紋にRL縄紋縦位施紋する。43は胴部破片。地紋にRL縦位施紋し、波状沈線を垂下する。44は体部は直線的に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する深鉢。口唇部直下からRL縄紋を施紋する。45は頸部から胴下半部の破片。2単位の懸垂紋とその間に波状沈線を垂下させる。地紋はRL縄紋縦位に施紋されている。胎土に長石・石英粒を小量含み、焼成は良好。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈する。46は胴部下位より直線状に開く深鉢。口縁部内面に稜をもち、肥厚する。推定口径20.2㎝を測る。口唇部直下より単節RL縄紋縦位施紋されている。胎土に長石・石英粒を含み、焼成は良好。色調は褐色（7.5YR4/3）を呈する。47は体部が直線的に外方へ開き、口縁部で短く強く外反する。推定口径16.7㎝を測る。口縁部はやや肥厚し無紋帯が巡り、体部は単節RL縄紋が施紋されている。胎土に長石粒を少量含み、焼成は良好。色調は褐色（7.5YR4/3）を呈する。48は口縁部がラッパ状に大きく開き、口唇部は外削状を呈する。口唇部直下より単節RL縄紋の縦位施紋されている。49は口縁部が内彎する深鉢。口唇部直下より単節RL縄紋が施紋されている。50は体部破片である。頸部下半から底部付近までで、ほぼ直線的に外方へ開く体部をもつ。単節RL縄紋を施紋する。胎土に長石粒を少量含み、焼成は良好。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈する。51も同様、頸部下半から底部付近の破片。単節RL縄紋を縦位施紋する。胎土に長石粒をやや多く含み、焼成は良好。色調はにぶい黄褐色（10YR5/4）を呈する。52は胴部破片で「く」の字状に屈曲する。単節RL縄紋を縦位施紋する。53も胴部中位の大形破片。単節RL縄紋を縦位施紋する。胎土に長石・石英粒を含み、焼成は良好。色調は明褐色（7.5YR5/6）を呈する。54は深鉢の胴部下半部。下位がやや湾曲し、平底である。単節RL縄紋を縦位施紋する。また内面は比較的粗い縦方向のヘラナデ整形が施されている。胎土に長石・石英粒を少量含み、焼成は良好。色調は明褐色（7.5YR5/6）を呈する。55も同様深鉢の胴部下半部。下位がやや湾曲し、平底である。単節RL縄紋を縦位施紋する。胎土に長石粒を少量含み、焼成は良好。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈する。56は胴部中位の破片。単節RL縄紋を縦位施紋する。57は深鉢の胴部破片。6～7本単位の櫛描波状紋が垂下する。58は口縁部は大きく外反し、内面に稜をもち、肥厚する。口唇部は浅い凹帯が巡り、外面は横位のヘラナデ成形痕が残されている。59は口縁部が緩く外反する深鉢。外面に成形痕が残されている。Fig.41－60～72は深鉢の底部破片である。60～67は体部に縄紋施紋がみられる。また60・61・69～71には底面に網代痕を有するもので、60・62・69・70の編み方は経緯2本越1本潜り。71は経1本越え1本潜りであろうと考えられる。73～80は浅鉢類である。73は口縁部が大きく外反する浅鉢で、口唇部が外側を向く。内面口縁部に稜をもつ。無紋化し、内外面とも丁寧なナデにより平滑されている。74も口縁部が大きく開くが、口縁部は肥厚し、内彎気味となる。内面に稜をもつ。また口唇部に太沈線が巡り、内外面とも丁寧なナデ成形が施されている。75・77・78は口縁部が短く「く」の字状に内彎する。口唇部は内削状を呈する。76は口唇部が肥厚し、口唇部が外側を向く。79・80は底部破片である。79は底面がナデ整形され、網代痕は不明瞭であるが、わずかに残置されており、編み方は経緯2本越1本潜りと推定される。80は底部周囲が肥厚する。

2．竪穴住居跡出土の土製品（Fig.42－1～19）

竪穴住居跡から出土した土製品は土器片錘18点と耳栓1点がある。

a　土器片錘（Fig.42－1～18）

検出された土器片錘18点すべて土器破片を再利用して作出したものである。SI11出土が最も多いが、と

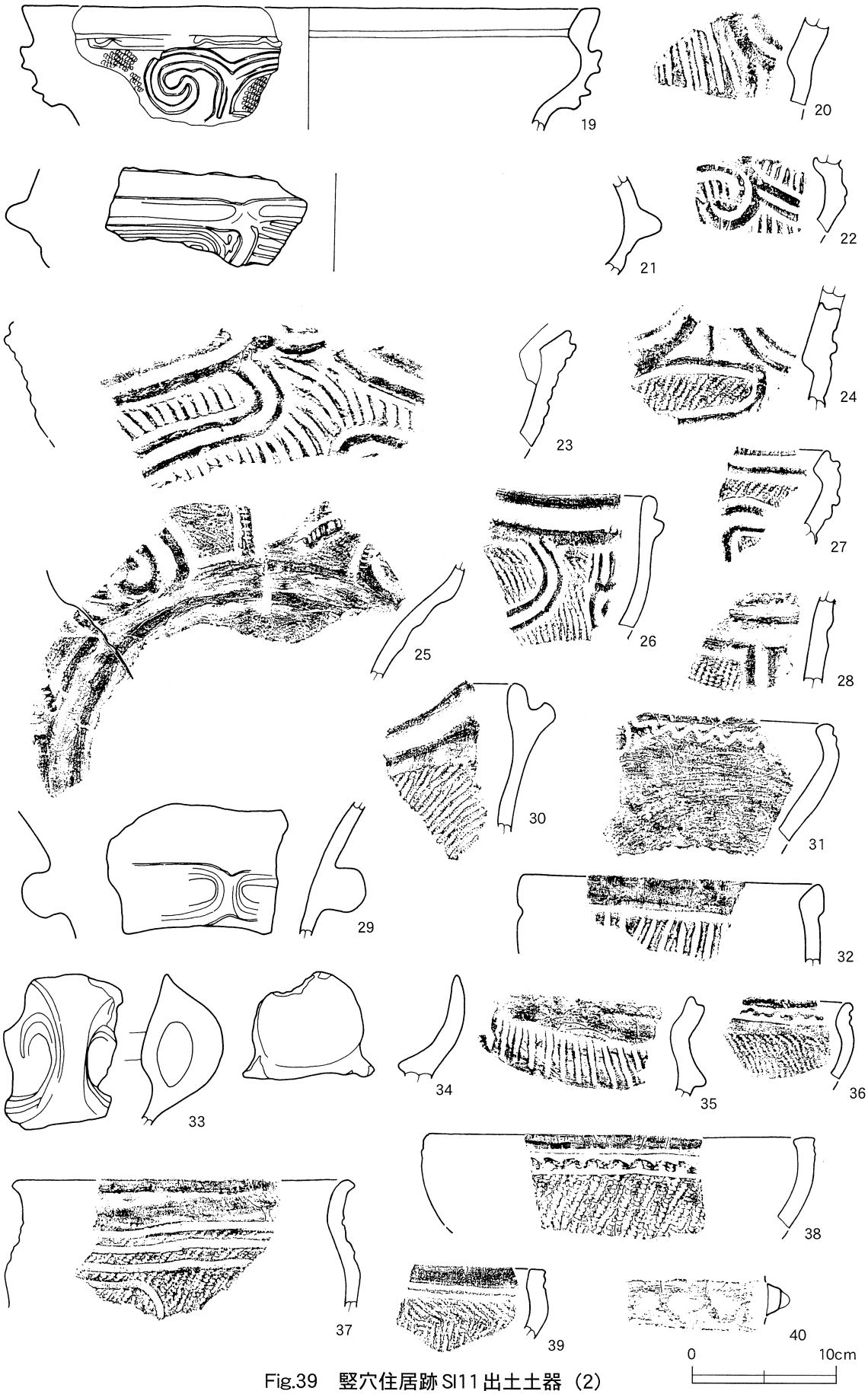


Fig.39　竪穴住居跡 SI11 出土土器（2）

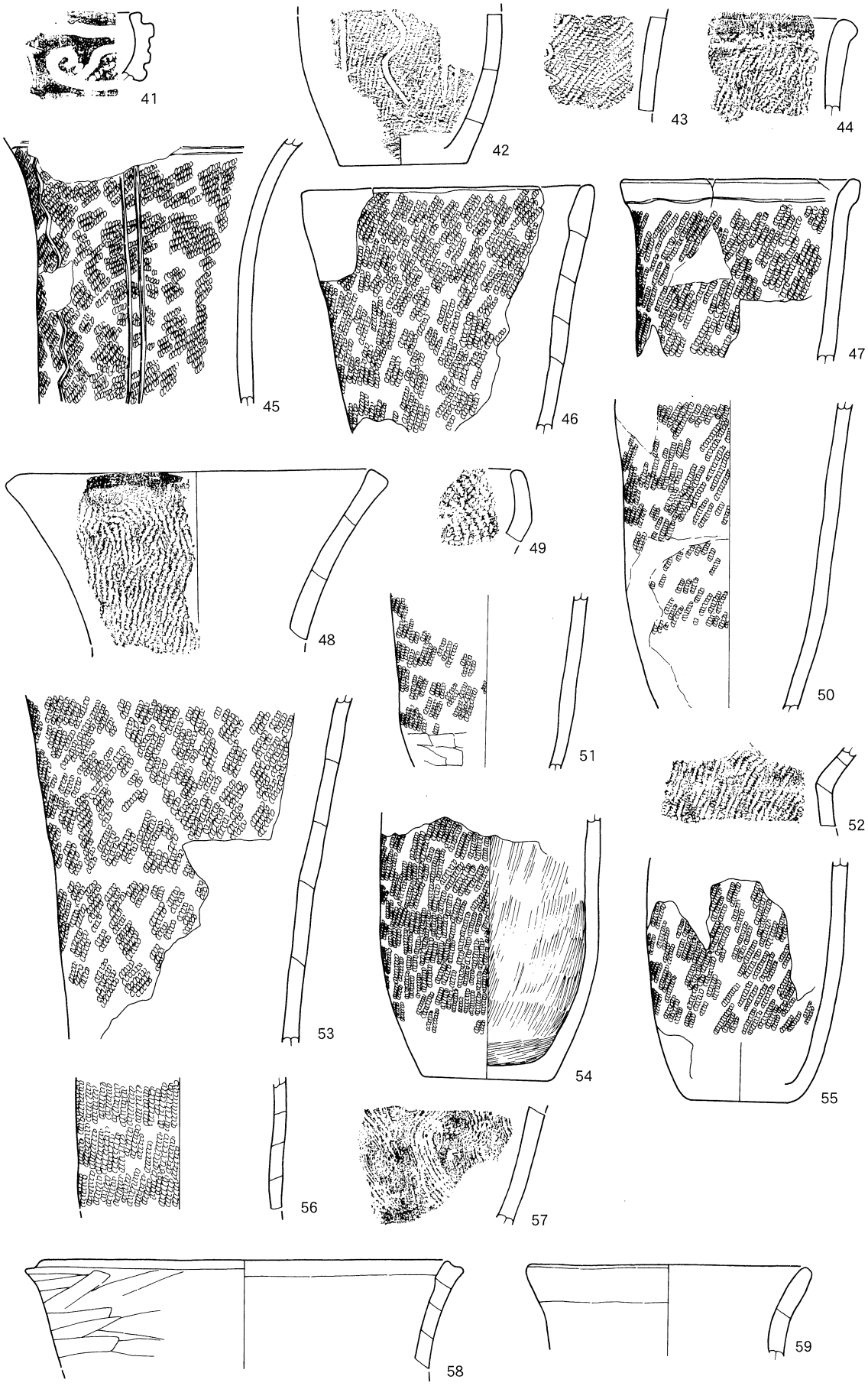


Fig.40　竪穴住居跡 SI11 出土土器（3）

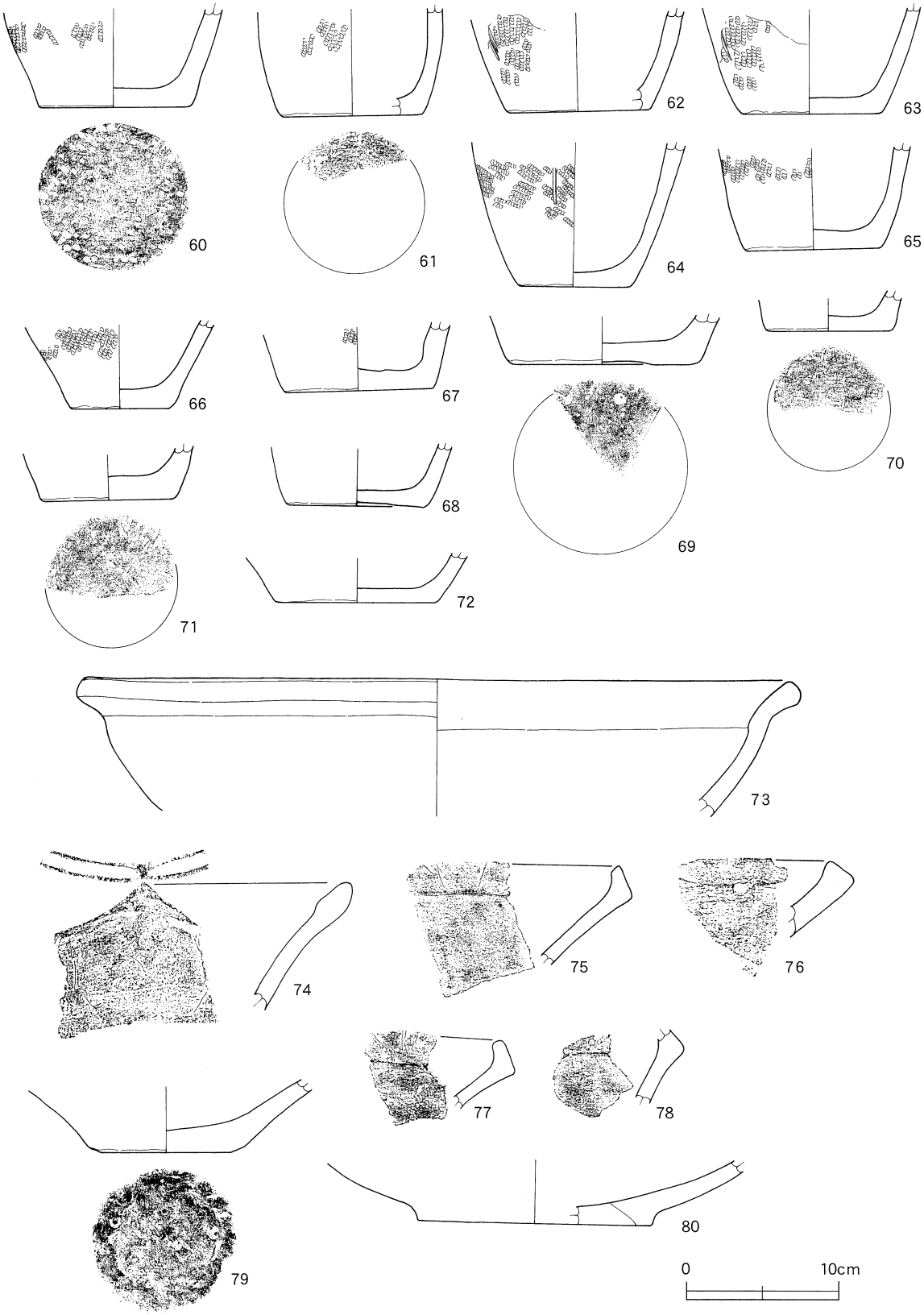


Fig.41　竪穴住居跡 SI11 出土土器（4）

くに出土状況において大きな特徴を見いだせない。使用された土器の時期はすへて加曽利Ｅ式である。

なお、ここでいう土器片錘とはいうまでもなく土器の破片を板状に打ち欠いて端部のほぼ中央部にＶ字状の溝を切り込み、糸掛け部を作出したもので、錘りとして成形し焼成したものはない。多くの形態は４～５㎝前後の土器片を素材として、土器片の周縁を打ち欠いて調整する打割整形を基本に周縁をさらに研磨調整を行うものもみられる。打割の形状は一辺が長い長方形もしくは楕円形が主体を占めている。また糸掛け溝のＶ字状切り込み位置は長軸の両端中央が大半である。

b　耳栓（Fig.42－19）

竪穴住居跡SI11覆土より出土。完形品である。形状は両端で膨らみを有する典型的な滑車型を呈する土製耳栓で、中央に径0.81㎝の通し孔が穿ってある。外形の大きさは長さ2.05㎝、上端部径2.29㎝、下端部径2.55㎝、中央部径1.90㎝、重さ10gを測る。胎土に長石・石英・雲母片を含み、焼成は良好で、色調は橙色（7.5YR6/8）を呈する。

３．竪穴住居跡出土の石製品（Fig.42－20～25）

竪穴住居跡から出土した石製品には磨石類５点と磨製石斧１点がある。

竪穴住居跡SI－01出土石器（Fig.42－20～22）

20～22は磨石類として分類されるもので、摩耗痕のみ観察されるものではなく、凹み痕および敲打痕が確認されるものを一括した。20は円礫に円孔の凹み痕を伴う凹石である。長さ16.5㎝、幅8.0㎝、厚さ4.0㎝、重さ338gを測る。21は概ね長方形を呈する凹石である。凹み痕は表裏両面と左右側縁および端頂部の５カ所有している。また現存する５面には摩耗痕も観察できる。長さ7.5㎝、幅8.6㎝、厚さ5.8㎝、重さ470gを測る。22は自然円礫の側縁部に摩耗痕が観察される磨石である。

竪穴住居跡SI－05出土石器（Fig.42－23）

23は平面形態が楕円形を呈する磨石である。断面形状は略長方形で、側縁全周に摩耗痕が認められ、表面中央付近に比較的広く敲打痕がみられる。

竪穴住居跡SI－08出土石器（Fig.42－24）

24は自然円礫の側縁部に摩耗痕が観察される磨石である。

竪穴住居跡SI－11出土石器（Fig.42－25）

25は磨製石斧である。左右の側面の面取りは明瞭ではなく、側縁と刃部の稜線も不明瞭である。刃部は比較的丁寧に研磨され、横断面形も略楕円形を呈する。長さ11.6㎝、幅4.0㎝、厚さ1.7㎝、重さ134gを測る。

（小川和博）

挿図番号	出土地点	形　状	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	加工状態	切り込み状況
Fig.42-1	SI01	不整長方形	5.48	3.77	1.11	31.5	打割	長軸1対
Fig.42-2	SI01	不整方形	3.65	3.55	1.00	13.5	打割	長軸1対
Fig.42-3	SI01	不整長方形	2.35	2.29	1.01	6.8	打割	長軸1対
Fig.42-4	SI02	不整長方形	4.30	3.50	0.65	23.4	打割	長軸1対
Fig.42-5	SI02	方形	4.05	3.90	0.80	25.3	打割	長軸1対
Fig.42-6	SI03	楕円形	4.25	3.94	1.02	24.8	打割	長軸1対
Fig.42-7	SI04	楕円形	4.25	3.02	1.05	19.8	打割	長軸1対
Fig.42-8	SI10	楕円形	3.79	2.97	1.14	18.6	打割	長軸1対
Fig.42-9	SI10	長方形	3.40	2.19	1.15	10.2	打割	長軸1対
Fig.42-10	SI11	楕円形	3.97	2.69	1.10	14.8	打割	長軸1対
Fig.42-11	SI11	楕円形	3.28	2.40	1.28	11.5	打割	長軸1対
Fig.42-12	SI11	楕円形	2.55	2.20	1.85	6.8	打割	長軸1対
Fig.42-13	SI11	楕円形	2.60	2.90	1.15	8.7	打割	長軸1対
Fig.42-14	SI11	長方形	2.65	(2.55)	1.81	6.1	打割	長軸1対
Fig.42-15	SI11	円形	2.30	2.10	1.15	5.6	打割・研磨	長軸1対
Fig.42-16	SI11	長方形	(3.38)	3.14	1.85	10.1	打割	長軸1対
Fig.42-17	SI11	長方形	(1.94)	3.28	1.14	6.5	打割	長軸1対
Fig.42-18	SI11	楕円形	(2.41)	2.52	1.05	7.4	打割	長軸1対

Tab.1 竪穴住居跡出土土器片錘一覧表

4．土坑出土の土器

土坑SK01出土土器（Fig.43－1～8）

Fig.43－1は推定口径14.6㎝の筒形深鉢。口縁部は内彎したのちに端部は外反する。口縁部上部は無紋帯となり、下位に交互刺突紋が巡り区画され、刻み目のもつ隆帯による渦巻紋と楕円形区画紋が配され、区画内に沈線紋と有節沈線が充填される。体部には単節RL縄紋縦位施紋され、内面には輪積み痕が残置される。胎土に長石・石英粒を多く含有し、焼成はほぼ良好である。色調は褐色(7.5YR4/4)を呈する。2は口縁部の上部と下部を欠損するキャリパー形の深鉢。刻み目のある楕円形隆帯を配し、区画内には楕円形沈線を伴う。頸部には単節RL縄紋が施紋されている。胎土に長石・石英粒を多く含み、焼成は良好。色調は黒褐色(7.5YR3/1)を呈する。3は口縁部破片。口縁部は内彎し、端部で短く外反するキャリパー形の深鉢。口縁部上部は無紋帯で、括れ部に交互刺突紋が巡り、楕円形の刻み目のある隆帯が配され、区画内に平行して沈線紋と縄紋が施紋される。縄紋は単節RL横位施紋。胎土に長石・石英・雲母を少量含み、焼成は良好。色調は褐色(7.5YR4/3)を呈する。4は口縁部が内彎する深鉢。推定口径24.0㎝を測る。口縁部上部は交互刺突紋が巡り、結節沈線紋と沈線紋が区画紋となり、区画内に沈線を充填する。胎土に長石・石英・雲母粒をわずかに含み、焼成は良好。色調は外面が黒褐色(10YR3/1)、内面がにぶい黄橙色(10YR6/3)

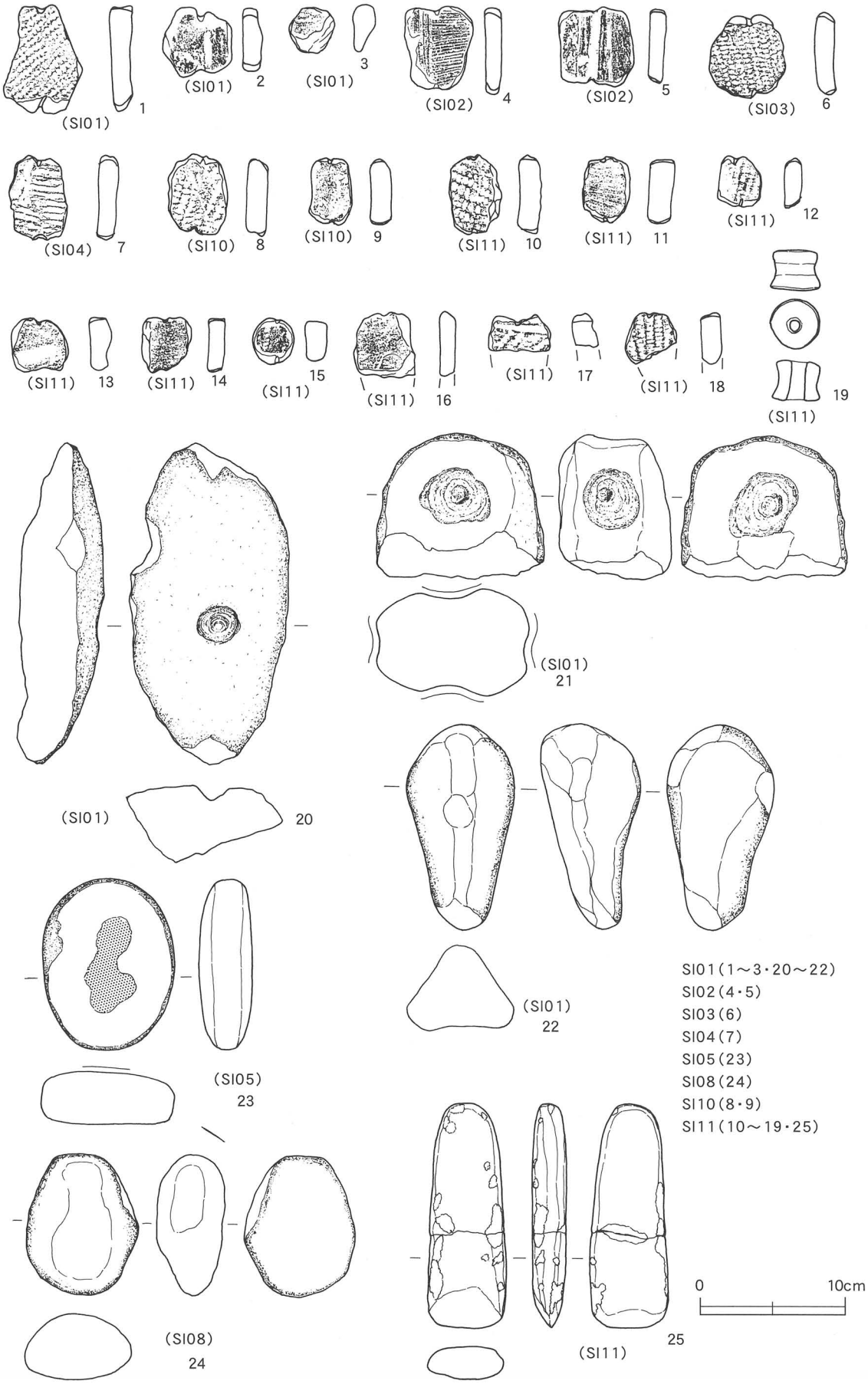


Fig.42　竪穴住居跡出土土製品・石製品

を呈する。5は橋状把手をもつキャリパー形の深鉢で、推定口径は17.0㎝を測る。橋状把手の円孔周辺に沈線が巡り、頸部には沈線区画紋と地紋にRL縄紋を施紋する。胎土に長石・石英粒を微量に含み、焼成は良好。色調は外面が黒褐色(7.5YR2/2)、内面がにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。6は口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。推定口径27.2㎝を測る。口唇部に沈線が巡り、隆帯による楕円形区画紋が配され、区画内にはわずかに斜行する縦位の沈線が充填する。頸部は無紋である。胎土に長石・石英粒を含み、焼成はやや悪い。色調は外面が黒褐色(7.5YR3/1)、内面がにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。7も口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。推定口径22.0㎝を測る。口唇部には沈線が巡り、貼付隆帯による渦巻紋と楕円形区画紋が配される。胎土にわずかな長石と多くの雲母を含む。焼成は良好で、色調は黒褐色(7.5YR2/2)を呈する。8は深鉢の胴部破片。刻み目のもつ隆帯によりV字状区画紋が施され、区画内に横位の沈線が充填される。胎土に長石・石英・雲母を含む。焼成は良好である。

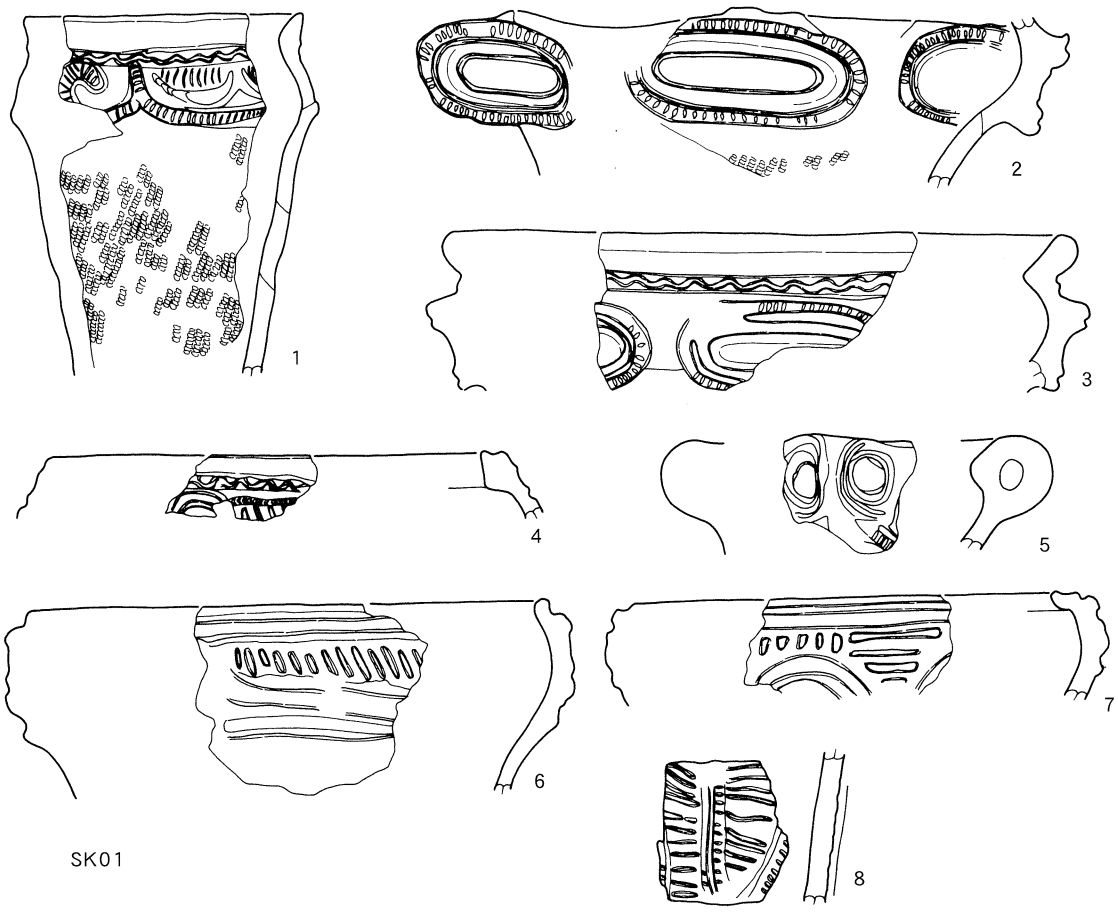
土坑SK02出土土器（Fig.43－1～4、Fig.44－5～17）

Fig.43－1は口縁部は「く」の字状に大きく内彎したのち端部は外反する浅鉢。括れ部に交互刺突紋が巡り、肩部に刻み目のもつ隆帯区画内に縦位の短沈線を充填する。胎土に少量の長石粒を含み、焼成は良好。色調は褐色(7.5YR4/3)を呈する。2・3は同一個体である。大きな波状口縁をもつ深鉢。口縁部は内彎し、橋状把手を有する。波状頂部に刻み目の隆帯が沿い、口縁部上端部に2重の交互刺突紋が巡り、2条隆帯の半円形区画紋が配され、区画内に縦位の沈線が充填する。胎土に石英・長石粒を少量含み、焼成は良好。色調は暗褐色(7.5YR3/3)を呈する。4は口縁部破片で、推定口径32.8㎝を測る。口縁部は内彎し、口唇部が外反気味に立ち上がる。口縁部上部は無紋帯で、交互刺突紋によって区画され、口縁部は隆帯と刻み目のある隆帯による渦巻紋で、沈線が充填する。胎土に長石・石英粒を多く含み、焼成は良好。色調は褐色(7.5YR4/3)を呈する。5は口縁部は内彎し、口唇部が外反するキャリパー形の深鉢。推定口径19.3㎝を測る。区画紋として口縁部上下部に刻み目のもつ隆帯区画を配し、区画内に三重の連続爪形紋が充填する。頸部は単節RL縄紋が施紋されている。胎土に長石・石英粒を含み、焼成は良好。色調は褐色(7.5YR4/3)を呈する。Fig.44－6・9・10は同一個体である。6でみるように橋状把手が付いた深鉢で、口縁部は内彎し、口唇部が直立するキャリパー形土器である。推定口径19.5㎝を測る。橋状把手を中心に沈線を伴う2条隆帯による枠状区画紋内に縦位の沈線が充填する。また橋状把手の円孔周辺には沈線を施す。頸部は単節RL縄紋が施紋される。7は口縁部破片の把手部分であるが、上下端部が欠損している。口縁部は内彎し、上部で外反気味に直立する。隆帯による枠状区画内は沈線によって充填している。胎土に長石・石英粒を含み、焼成は良好で、色調は明褐色(7.5YR5/6)を呈する。8は山形把手が付された波状口縁を呈する深鉢。把手には円孔が穿ってあり、孔の周辺には沈線が巡る。口縁部は沈線による枠状区画紋内に沈線が充填する。胎土には長石粒を多く、石英粒が少量含まれている。焼成は良好で、色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈している。11は深鉢の頸部付近の破片。隆帯による区画紋が巡る。12は口縁部と胴部下半部が欠損している。胴部はやや張り、頸部は外方に開く。頸部に隆帯による区画紋が巡り、胴部は1条の隆帯による懸垂紋が垂下する。地紋は単節RL縄紋の縦位施紋。頸部下部に炭化物が付着する。胎土は長石・石英粒を含み、焼成は良好。色調は黒褐色(7.5YR3/2)を呈する。13は体部がほぼ直線的に外方に開き、口唇部で小さく外反する深鉢。推定口径15.2㎝を測る。口唇部下部から単節RL縄紋を縦位施紋する。また器外面には炭化物の付着が認められる。胎土に長石・石英粒を含み、焼成は良好。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈

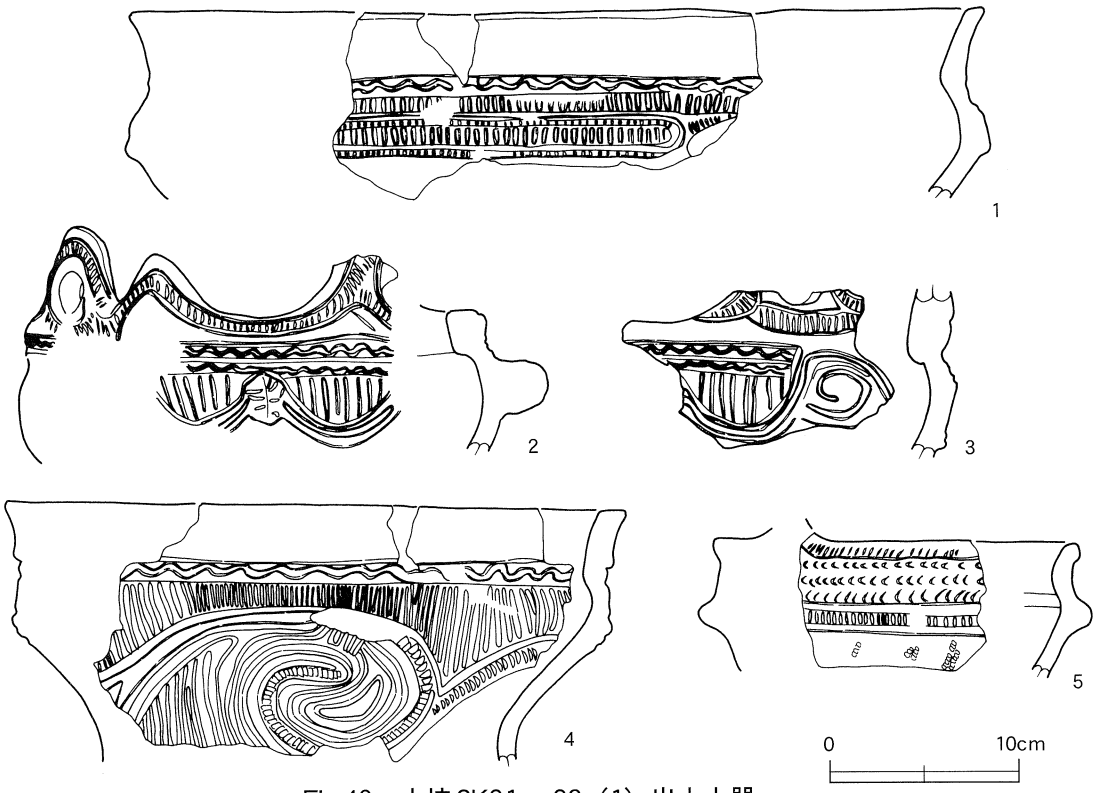
する。14も同様。体部直線的に外方へ開き、口唇部がわずかに外反する。推定口径15.4㎝を測る。口唇部下部から単節RL縄紋を縦位施紋する。胎土に長石・石英粒を含み、焼成は良好。色調は暗褐色(7.5YR3/3)を呈する。15は体部がほぼ直線的に外方に開き、口唇部が肥厚する深鉢。推定口径19.4㎝を測る。口唇部直下から櫛歯状工具による縦位の条線を施紋する。胎土に長石粒を少量含み、焼成は良好。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。16は深鉢の底部破片。底径8.8㎝を測る。底部付近まで単節RL縄紋が縦位施紋されている。胎土に長石・石英粒を少量含み、焼成は良好。色調は褐色(7.5YR4/3)を呈する。17は体部が大きく外方へ開く深鉢。隆帯による区画紋をもつ。

土坑SK03出土土器 (Fig.44－1～3、Fig.45－4～26)

Fig.44－1は体部がほぼ直線的に外方へ開き、口唇部が逆三角形状に肥厚する。口縁部は無紋とし、刻み目のもつ隆帯によって上下区画された内面にやはり刻み目のある隆帯による渦巻紋が配され、三叉紋が施される。胎土に微細な長石粒を少量含み、焼成は良好。色調はにぶい黄橙色(10YR6/4)を呈する。勝坂3式である。2は4山の波状口縁を呈する深鉢。口縁部は緩く内彎気味に外方へ開く。波状の口唇部に沿って隆帯が巡り、波頂部から波状の隆帯が垂下する。この口縁上部は指頭圧痕によるナデ整形で無紋とする。また隆帯懸垂紋は口縁部の区画紋と連携する。口縁部は上下隆帯により区画され、区画内に逆半円の枠状紋が配される。頸部には2条の隆帯によって区画され、やはり隆帯による曲線モチーフが描出される。地紋に単節LR縄紋が施紋される。胎土に微細な長石粒を少量含み、焼成は良好。色調は褐色(7.5YR4/3)を呈する。3は口縁部破片で、口縁部は内彎し、口唇部が短く外反するキャリパー形の深鉢。推定口径40.9㎝を測る。口縁部は無紋であるが、橋状把手を有し、把手周辺には沈線が巡り、隆帯による区画が施されている。胎土に長石粒を多く、石英粒を少量含む。焼成は良好で、色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。Fig.45－4は体部がほぼ直線的に外方へ開き、口唇部が折り返す波状口縁を呈する深鉢。口唇部に刻み目をもつ低隆帯によって区画され、沈線による渦巻紋と区切紋を施す。胎土に長石・石英粒をわずかに含み。焼成は良好。色調は黒褐色(7.5YR3/4)。5・6は同一個体。口縁部は内彎し、口唇部が外反気味に短く立ち上がる。口縁部上端部は無紋で、2条隆帯によるクランク紋を施し、地紋にRL縄紋横位施紋する。胎土に長石・石英粒を多く含み、焼成は良好。色調は赤褐色(5YR4/6)を呈する。7は円筒形の深鉢で、体部が緩やかに外方へ開く。口縁部下に1条の沈線が巡り、胴部はRL縄紋が施される。胎土に長石・石英粒を含み、焼成は良好で、色調は黒褐色(7.5YR3/2)を呈する。8は筒形深鉢の口縁部破片。推定口径26.8㎝を測る。口縁部が直線的に外方へ開き、口縁部下に沈線が巡る。胴部に単節LR縄紋が縦位に施紋される。胎土に長石・石英粒を含み、焼成は良好。色調は褐色(7.5YR4/3)を呈する。9も筒形深鉢。推定口径22.4㎝を測る。口縁部は直線的に外方へ開く。内面に稜をもつ。内外面とも横位の細かなナデ整形。胎土に微細な長石粒を含み、焼成は良好。色調はにぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する。10は波状口縁をもつ深鉢。波状頂部の破片で、隆帯による渦巻紋を配し、隆帯による枠状区画を施す。11は頸部付近の破片。区画紋である隆帯に連続爪形紋を施す。12～21は胴部破片。12・14は胴部破片で、2条隆帯による枠状区画紋をもつ。13も口縁部付近の破片。波状口縁を呈するものと考えられる。隆帯による波状紋を垂下させ、半円形区画紋を配し、区画内に縄紋を充填する。15も胴部破片。隆帯による枠状区画紋を表出する。16は2条の波状沈線が垂下する。17は縄紋地紋地に胴部区画横帯に3本沈線を施す。縄紋は単節RL縦位施紋である。18は胴部上半部の破片。頸部は2条低隆帯による横区画、胴部は縄紋地紋地に2条沈線による枠状区画を施す。19は2条

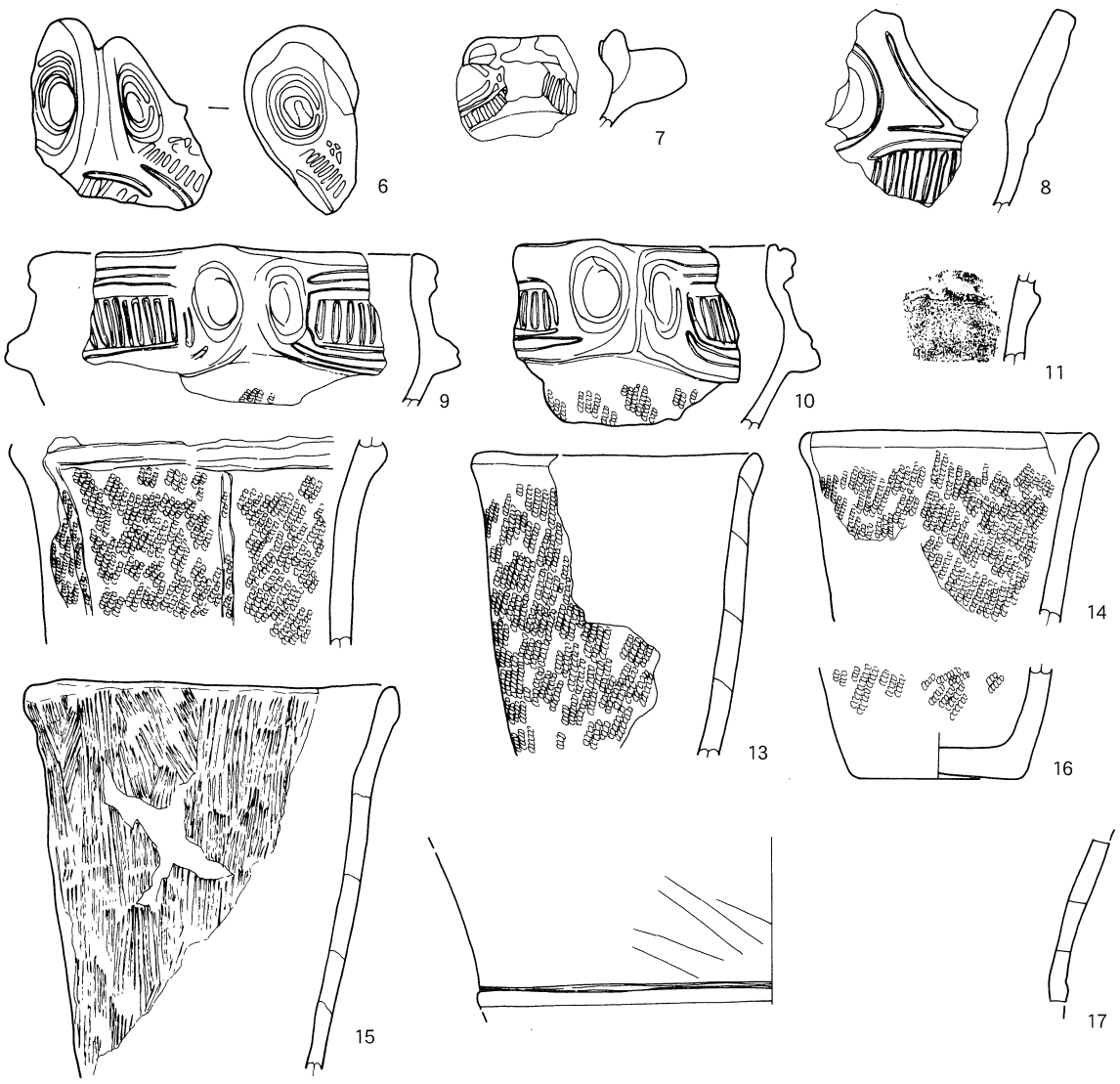


SK01

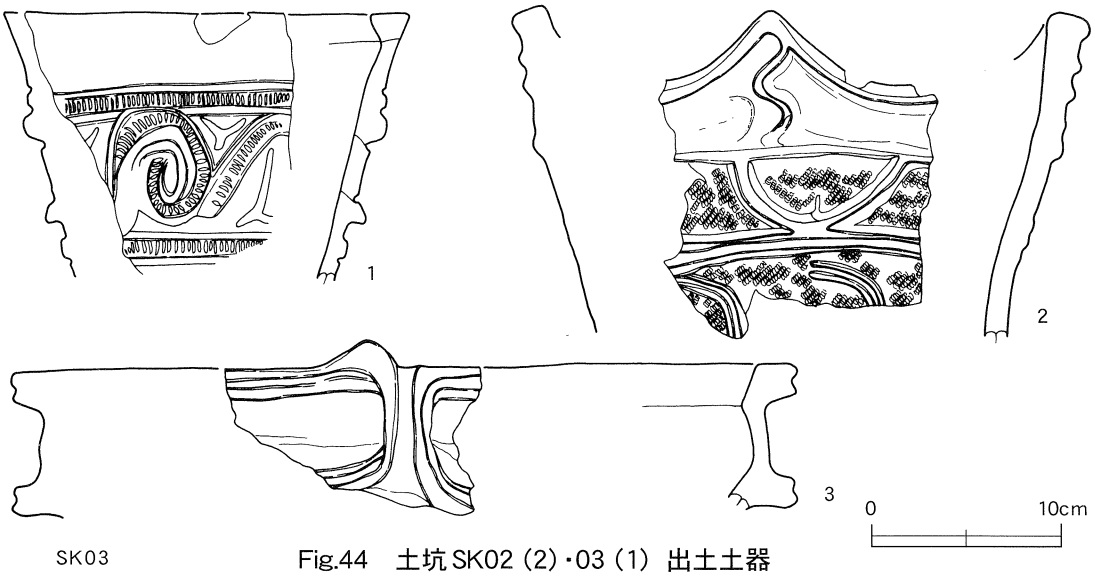


SK02

Fig.43　土坑SK01・02（1）出土土器



SK02 (2)



SK03

Fig.44　土坑 SK02 (2)・03 (1) 出土土器

隆帯による枠状区画内に縄紋を施紋する。20は2単位の沈線による懸垂紋を垂下させ、その間に1条の波状沈線を入れる。21は縄紋地紋に2単位の沈線を施す。22は底部付近の破片。単節RL縄紋の縦位施紋を地紋に2本単位の沈線を懸垂紋に、波状沈線を垂下させる。23も底部破片で、単節RL縄紋を施紋する。24・25も深鉢の底部破片。26は推定口径29.6㎝を測る浅鉢。口唇部に太凹帯が巡り、やや肥厚する。器面内外面ともヘラナデが顕著である。胎土に長石をわずかに含み、焼成は良好。色調は明褐色(7.5YR5/6)を呈する。

土坑SK04出土土器 (Fig.45－1～8)

Fig.45－1は体部が筒形を呈し、口縁部が外反する深鉢で、推定口径20.4㎝を測る。口唇部は肥厚する。地紋に単節RL縄紋が施紋され、口唇部は横位に、体部は縦位に施される。胎土に長石・石英粒をわずかに含み、焼成は良好。色調は褐色(7.5YR4/3)を呈する。2は口縁部破片。体部はほぼ直線的に開き、口唇部がわずかに外反する深鉢。口唇部直下から縄紋RLが施紋されている。3～5は胴部破片。縄紋地紋に3は3本単位の沈線を垂下させ、その間に波状沈線を垂下させる。4・5も3本単位の懸垂紋を垂下させる。6～8は底部破片である。6・7は縄紋RLを縦位施紋している。

土坑SK05出土土器 (Fig.46－1～27)

Fig.46－1は胴下半部を欠損する波状口縁をもつ深鉢で、口縁部が大きく外反する。口唇部に刻み目をもつ隆帯が巡り、波頂部には大きな環状把手が付く。把手には円孔の周辺に沈線が巡る。頸部は無紋で、胴部に単節RL縄紋が縦位施紋される。胎土に長石・石英粒を含み、焼成は良好で、色調は黒褐色(7.5YR3/2)を呈する。2は口縁部が内彎し、口唇部がわずかに外反するキャリパー形の深鉢。口径27.7㎝を測る。口唇部には小さな突起が付き、太凹帯が巡り、突起部で小さな渦巻状となる。口縁部は2条隆帯による横S字状紋が配され、単節RL縄紋が施紋されている。頸部は隆帯により区画され、胴部は2単位の沈線が懸垂する。胎土に長石・石英粒を含み、焼成は良好で、色調は褐色(7.5YR4/6)を呈する。3は口縁部が内彎気味に大きく開き、口唇部は内側に折返され肥厚する深鉢。口径25.7㎝を測る。口唇部を頂点とする幅の狭い逆U状沈線紋が垂下し、地紋に単節RL縄紋が縦位施紋されている。胎土に微細な長石粒をわずかに含み、焼成は良好で、色調は黒褐色(7.5YR2/2)を呈する。4は波状口縁をもつ深鉢、口唇部が肥厚する。隆帯による枠状区画紋内に沈線が充填する。5は口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。口唇部に太凹帯が巡り、口縁部は2条隆帯による横S字状紋が配される。6も口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。口唇部に太凹帯が巡り、口縁部は隆帯による渦巻紋が配される。7は波状口縁をもつ深鉢。口縁部は直線的に開く。口唇部は太凹帯が巡り、口縁部は隆帯による枠状区画が施されている。8はわずかに内彎するキャリパー形の深鉢。口唇部に太凹帯が巡り、口縁部は隆帯による渦巻紋が配される。9・10は深鉢の胴部破片。2条隆帯による区画紋が施されている。11・16は波状口縁の深鉢。隆帯による渦巻区画紋内に縦位の沈線が充填する。12は口縁部がわずかに内彎しながら直立する深鉢。口唇部には太凹帯が巡り、胴部には単節LR縄紋が縦位施紋されている。19は胴部破片。頸部に隆帯による横区画され、胴部には3本単位の沈線が懸垂する。14は内彎する胴部破片。単節LR縄紋を地紋に沈線によるモチーフが表出される。15は口縁部がわずかに外反する深鉢。口縁部に沈線による区画紋と区切紋が配される。17は口縁部がほぼ直立する深鉢。口唇部下から単節RL縄紋が施紋されている。18は口縁部が直立する筒形の深鉢。19は単節LR縄紋施紋の胴部破片。

ほぼ筒形を呈する深鉢。20～27は深鉢の底部破片。

土坑SK07出土土器（Fig.47－1～3）

Fig.47－1は口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。口唇部は太凹帯が巡り、口縁部は隆帯による枠状区画で、渦巻紋が伴う。枠状内は単節RL縄紋が横位施紋されている。2は胴部が直立し、口縁部が大きく外反する深鉢。推定口径21.4㎝を測る。懸垂紋として、沈線による波状紋と直線紋が垂下する。地紋に単節LR縄紋が縦位施紋されている。3は深鉢の胴下半部の破片。櫛歯状工具による縦位の条線が施されている。胎土に長石粒をわずかに含み、焼成は良好で、色調は褐色(7.5YR4/3)を呈する。

土坑SK08出土土器（Fig.47－1）

Fig.47－1は口縁部が外反する深鉢となろう。口縁部は無紋で、括れ部に交互刺突紋が巡る。

土坑SK09出土土器（Fig.47－1～20）

Fig.47－1～3は大形把手の破片。1は先端が尖状を呈する把手で、大きな円孔が穿ってある。円孔の周辺には沈線が巡り、口唇部には刻み目のもつ隆帯が2条施されている。2は橋状把手。円孔の周辺に沈線が巡る。口縁部には沈線区画内に単節LR縄紋が充填する。3も橋状把手。円孔の周辺に沈線が巡り、口縁部は2条隆帯によるクランク紋が施され、沈線が充填する。4はおそらく4単位の波状口縁を呈する深鉢で、口縁部は直立する。口唇部に太凹帯が巡り、下部に刻み目のもつ隆帯が平行して巡る。口縁部には地紋LR縄紋に、2単位の波状沈線と直線沈線が懸垂する。5は口唇部が大きく外側に向く深鉢。口唇部は刻み目のもつ隆帯によって下端が区画され、沈線による楕円形区画と区切紋を配する。6は口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。口唇部に太凹帯が巡り、口縁部は2条隆帯によるクランク紋が配され、単節RL縄紋が充填する。7も口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。隆帯による枠状区画と渦巻紋が表出される。8もキャリパー形の深鉢。9は口縁部が内彎し、口唇部が短く外反する。2条隆帯による渦巻紋に沈線紋が充填する。10は波状を呈する深鉢。沈線による渦巻紋が施されている。11は口縁部付近の破片。太隆帯による枠状区画内に縦位の細い沈線紋が充填する。12・13は口縁部が内彎し、口唇部がわずかに外反するキャリパー形の深鉢。口唇部に沿って太凹帯が巡り、隆帯による枠状区画紋が伴う。14は口縁部上端が外反する深鉢。括れ部に交互刺突紋が巡る。15・16は波状を呈する深鉢。口唇部に沿って太凹帯が巡る。17も口縁部が外反する深鉢。18は口縁部付近の破片。隆帯による円形紋下に2条沈線が放射状に施紋される。19・20は深鉢の底部破片。

土坑SK10出土土器（Fig.48－1～29）

Fig.48－1は口縁部は内彎し、胴部は筒形となるキャリパー形の深鉢。口唇部に突起部をもち、太凹帯が巡り、突起部に渦巻紋が施される。口縁部は2条隆帯による渦巻紋と枠状区画され、胴部には単節RL縄紋を地紋に、沈線による3本単位の懸垂紋の間に波状沈線が垂下する。胎土に長石粒をわずかに含み、焼成は良好。色調は褐色(7.5YR4/3)を呈する。2～4・7～9・11・12も口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。隆帯による渦巻紋と枠状区画紋が施されている。5は胴部はやや内彎し、口縁部が外反する深鉢。2条隆帯による区画紋に円形刺突紋が付く。6・13は波状口縁を呈する深鉢。13のように波頂部に太沈線によ

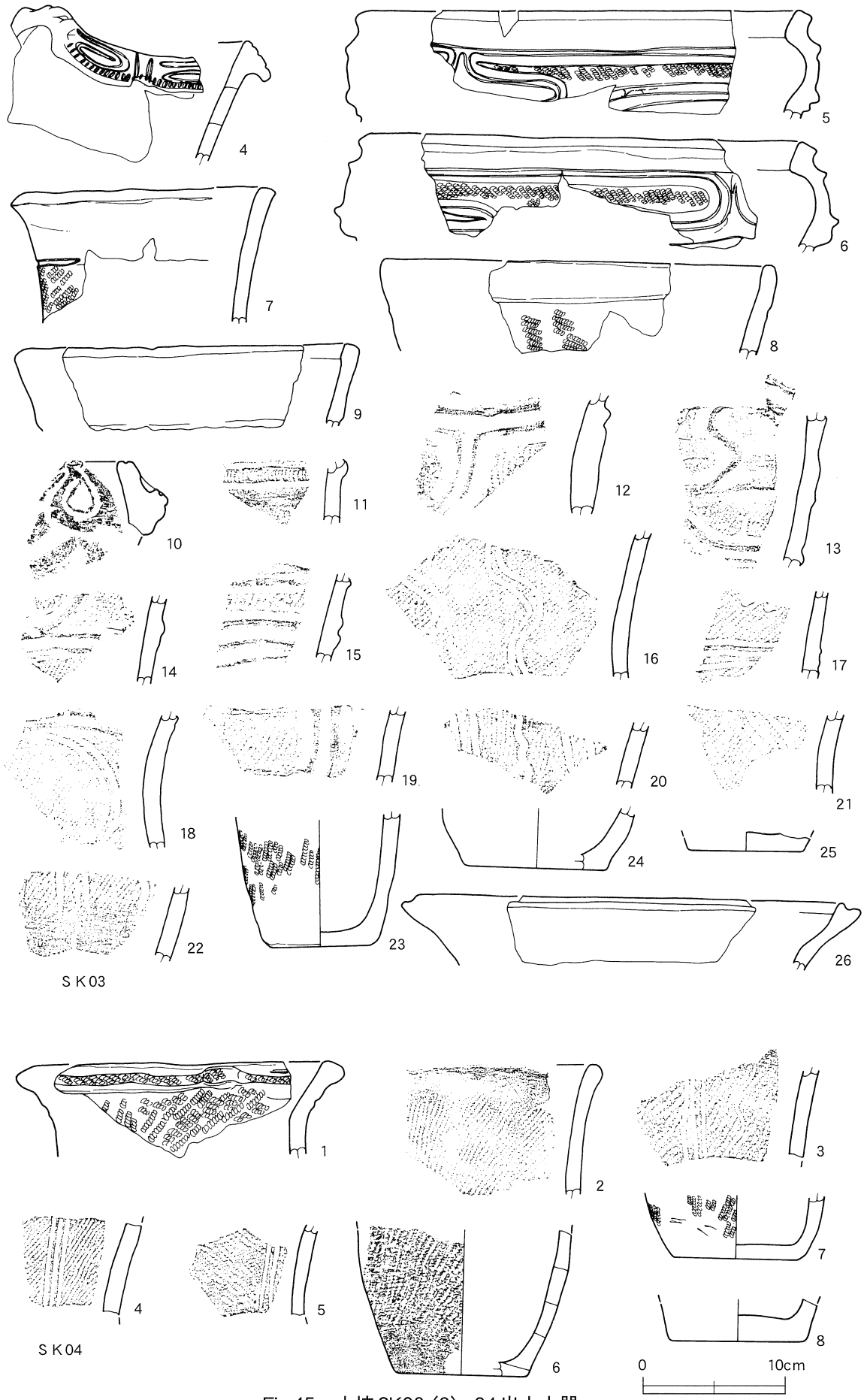


Fig.45　土坑SK03（2）・04出土土器

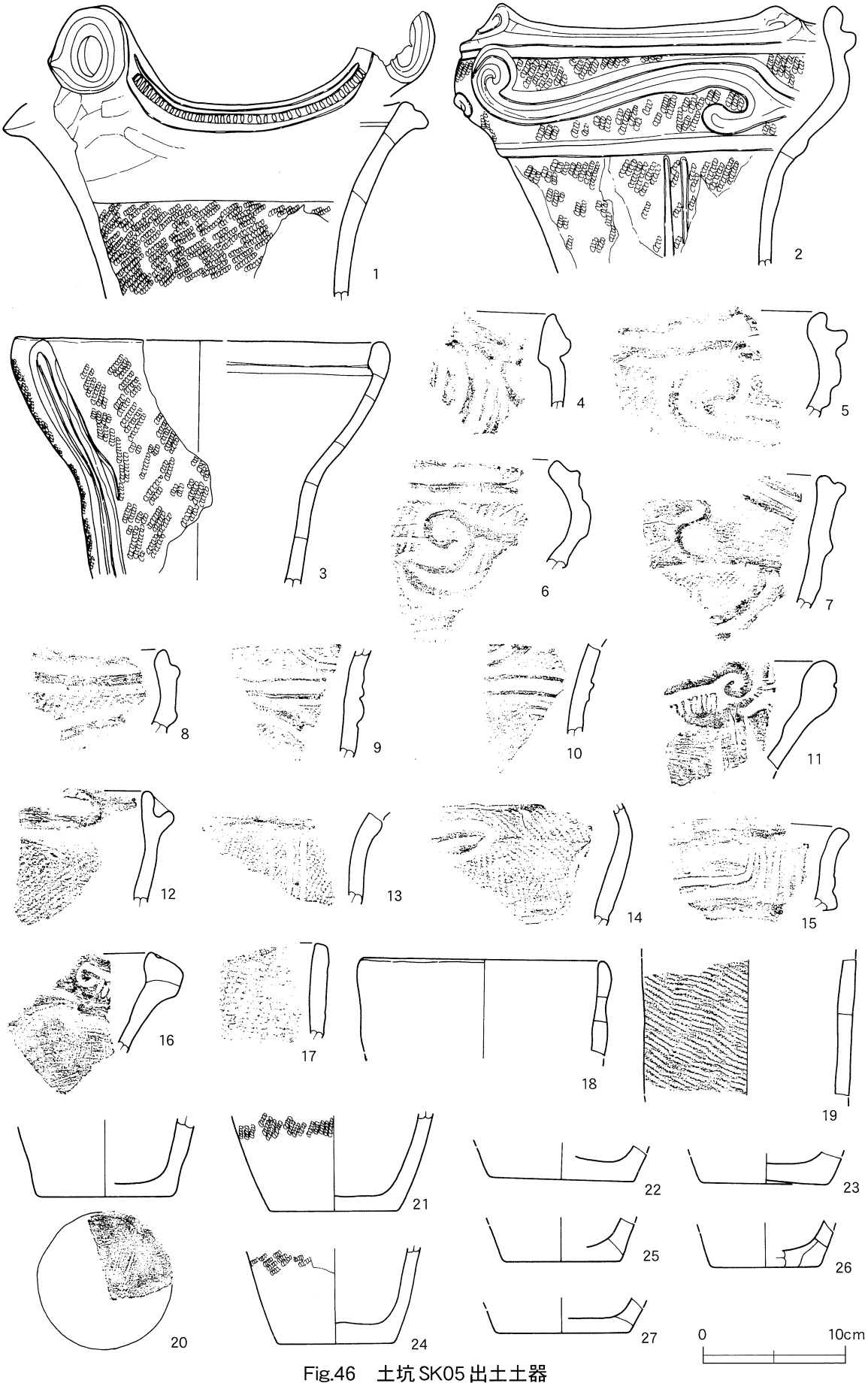


Fig.46　土坑 SK05 出土土器

る渦巻紋が施される。10は口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢で、隆帯枠状区画内に横位の波状隆帯が施されている。14～16・18は口縁部下位の胴部破片。隆帯による区画が施されている。17は口縁部がわずかに外反する筒形の深鉢。地紋に単節RL縄紋縦位施紋されている。19～21は胴部破片で、地紋に単節RL縄紋に沈線を懸垂する。22～24は浅鉢である。22は口唇部に太沈線を巡らせ、内面に稜をもつ。23は口唇部が外側に広がり、沈線による渦巻紋が施紋される。24は口唇部内側に沈線よる渦巻紋と枠状区画紋が配される。25～29は深鉢の底部破片。25は櫛歯状工具による縦位の条線が施されている。胎土に長石をわずかに含み、焼成は良好。色調はにぶい黄褐色(10YR5/6)を呈する。

土坑SK11出土土器 (Fig.49－1～11)

Fig.49－1は胴部が張り、口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢で、山形の把手が付く波状口縁を呈する。推定口径30.0㎝を測る。口縁部は刻み目のもつ隆帯が枠状区画紋と渦巻紋を表出し、区画内に縄紋LRを充填する。胴部は2単位の沈線を懸垂し、その間に波状沈線を垂下させる。地紋に口縁部と同じ原体で、縦位に施紋している。胎土に長石粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい橙色(2.5YR5/4)を呈する。2の胴部は筒形で、口縁部は内彎するキャリパー形の深鉢。口径21.5㎝を測る。口唇部は肥厚し、太凹帯が巡り、口縁部は2条隆帯による上下端部が区画され、区画内にやはり2条隆帯によるクランク紋が配され、沈線が充填する。胴部は単節RL縄紋縦位施紋を地紋に、1条の波状沈線を垂下させる。胎土に長石・石英粒をわずかに、雲母片を多く含む。焼成は良好。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。3は胴部が直線的に移行し、口縁部は内彎気味に開く深鉢。口径20.7㎝、器高25.7㎝を測る。口唇部下位は無紋帯とし、口縁部下の頸部に5個の突起部が付く。地紋は単節RL縄紋縦位施紋。胎土に長石・石英粒を含む。焼成は良好で、色調はにぶい褐色(7.5YR7/5)を呈する。4は胴部中位から底部の破片。2条単位の直線沈線を垂下させ、その下位にやはり2条単位の沈線による横位の波状紋を施す。地紋にRL縄紋を縦位に施紋する。胎土に長石・石英粒をわずかに含む。焼成は良好で、色調はにぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する。5は口縁部が外反する深鉢、括れ部に交互刺突紋を巡らし区画する。口縁部は縄紋施紋。6は口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。口唇部に太凹帯が巡り、隆帯による枠状区画される。7は波状口縁をもつ深鉢。沈線による枠状区画内に沈線が充填する。8は口唇部が肥厚し、沈線が巡る。9は交互刺突紋が施されている。10は口唇部が無紋で、体部に地紋LR縄紋が施されている。11は胴部上位から底部の破片。胴部は直線的で筒形を呈する。地紋は単節LR縄紋の縦位施紋で、胎土に長石・石英粒を多量に含む。焼成は良好で、橙色(7.5YR6/6)を呈する。

土坑SK12出土土器 (Fig.50－1～15)

Fig.50－1・2は同一個体。胴部は筒形で、口縁部は大きく外反する深鉢。頸部付近で隆帯による区画が施され、地紋に単節LR縄紋を縦位施紋している。胎土に長石・石英粒を多量に含み、焼成は良好で、色調は褐色(7.5YR4/3)を呈する。3は口縁部は内彎し、口唇部が内傾しながら立ち上がる深鉢。口唇部下位の無紋帯下と口縁部下に交互刺突紋を巡らし区画紋とし、区画内に円形紋と沈線を充填させる。4は突起部をもつ口縁部付近の破片。隆帯による区画紋をもつ。5は口縁部が内彎し、口唇部が短く外反する。沈線によって枠状区画され、区画内に縦位の沈線を充填する。6は口縁部がわずかに内彎し、口唇部が肥厚する深鉢。7・8は深鉢の胴部破片。縄紋施紋された隆帯により区画される。9・10は筒形の深鉢で、太沈線に

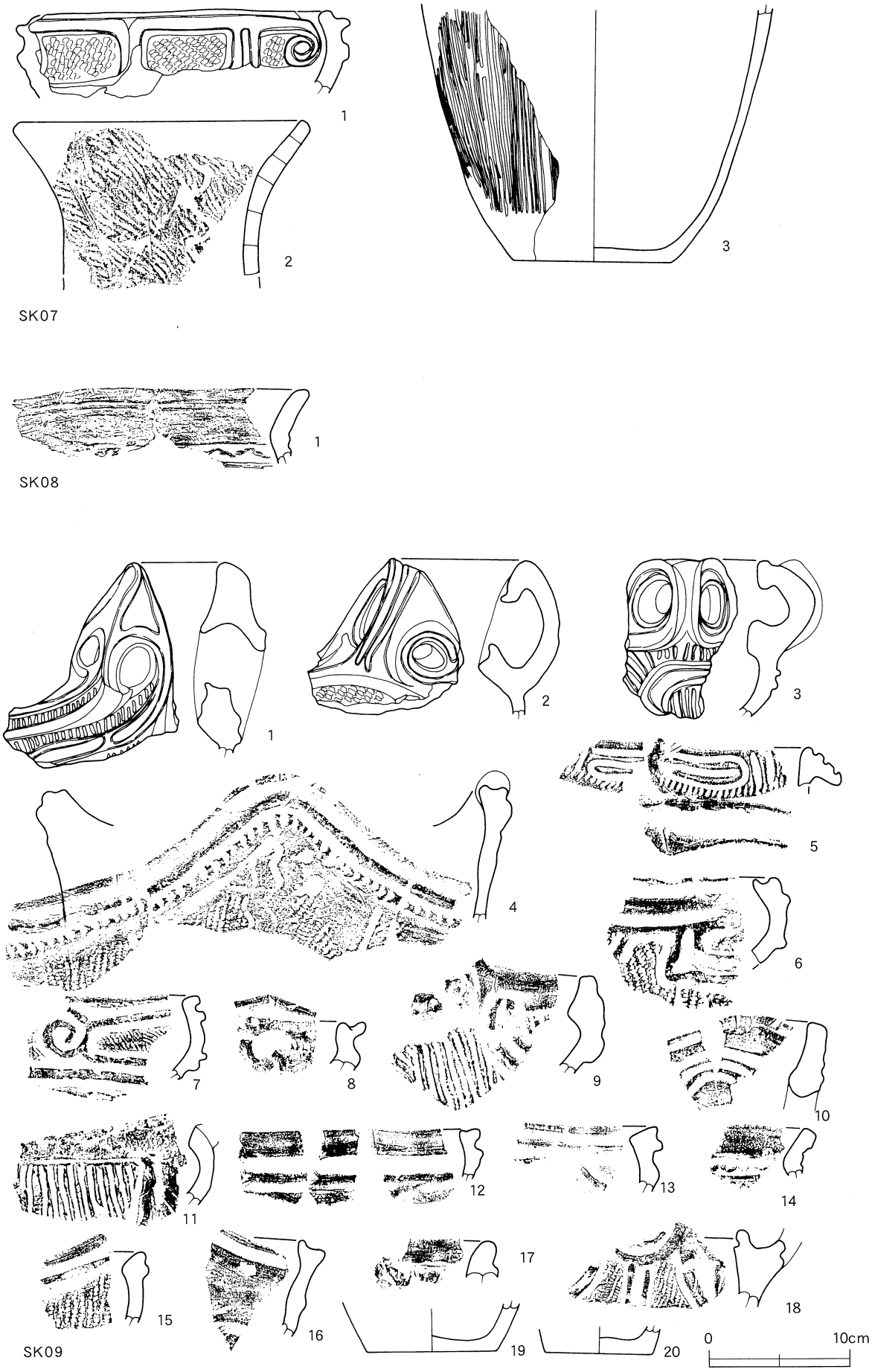


Fig.47　土坑SK07・08・09出土土器

よって区画され、口縁部は無紋。胴部は単節RL縄紋が施紋される。11は頸部に隆帯による区画が施される。12・13は縄紋施紋の胴部破片。14・15は深鉢の底部破片。

土坑SK13出土土器 (Fig.51－1～26)

Fig.51－1は口縁部は内彎して、口唇部で短く立ち上がる深鉢。口唇部には縄紋施紋の隆帯が施され、口縁部は隆帯により楕円形区画紋が施され、地紋に単節LR縄紋を縦位施紋している。胎土に長石・石英粒をわずかに含み、焼成は良好で、色調は黒褐色(10YR3/2)を呈する。2は波状口縁をもつ深鉢。口縁部は内彎し、口唇部が外反する深鉢。波状部は無紋で、2条隆帯による区画紋とクランク紋を配する。胴部は2条単位の沈線を懸垂させ、その間に波状沈線を垂下させる。胎土に長石・石英粒を多く含み、焼成は良好で、色調は褐色(7.5YR4/3)を呈する。3は胴上部から底部にかけての破片。筒形の深鉢で、隆帯による区画紋内に沈線による渦巻紋、半円紋を描出する。胎土に長石・石英粒を多く含み、焼成は良好。色調は暗赤褐色(5YR3/4)を呈する。なお、15・16の胴部破片も同様である。4は口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。口縁部は隆帯によるクランク区画紋と渦巻紋を配する。頸部は縄紋施紋で、下位に沈線により区画される。地紋は単節RL縄紋。胎土に長石を微量に含み、焼成は良好。色調は明赤褐色(5YR5/8)を呈する。5～7も口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。5は2条隆帯によるクランク紋を配する。8～10は口縁部上部が外反する浅鉢もしくは深鉢。口縁部上部に無紋帯に交互刺突紋が区画され、8は推定口径45.2㎝を測る浅鉢であろう。刻み目のもつ隆帯が巡る。11は胴部破片。沈線による渦巻紋が表出される。12は口縁部がわずかに内彎する深鉢。波状口縁で、波頂部に隆帯による渦巻紋を配し、ここから2条の隆帯を垂下させる。13は波状口縁のキャリパー形の深鉢。波頂部に隆帯による渦巻紋を施す。14は突起部をもつ口縁部付近の破片。波頂部に沈線を充填する。隆帯による区画紋をもつ。17は直立する口縁部をもつ深鉢。沈線による横位の波状紋を施紋する。18は口唇部が平縁で、縄紋地紋に横位の短沈線を施す。19は3本単位の沈線による渦巻紋および枠状区画紋をもつ。20は胴下部が張る筒形の深鉢。無紋で、縦位の粗いヘラ削りとナデが顕著である。胎土に長石・石英粒を多く含み、焼成はやや悪く、色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。21は深鉢の胴部破片。3本単位の沈線を懸垂させ、その間に1条の波状沈線を垂下させる。22は深鉢の胴部破片。単節RL縦位の施紋。23～26は深鉢の底部破片。23は沈線による懸垂紋が施されている。

土坑SK14出土土器 (Fig.52－1･2)

Fig.52－1は胴部破片。沈線紋が垂下する。2は単節RL縄紋を縦位施紋されている。

土坑SK16出土土器 (Fig.52-1～19)

1・2・5は口縁部が緩く内彎するキャリパー形の深鉢の口縁部破片。1の口縁部文様帯は縄文地紋に背割り隆帯によるクランク紋が配される。また口縁部区画紋も降帯で施されている。2は隆帯による渦巻紋と沈線が沿う隆帯による区画紋内に縦位の沈線紋が充填する。5は渦巻紋が小突起となり、波状口縁を呈する。口縁部は隆帯による区画紋が施されている。3・4・7・8は口縁部の小破片で隆帯区画紋を有する。いずれも口縁部は直行する。6は口唇部が肥圧する深鉢で、口縁部が内彎する。口唇部に沈線による三叉状紋が描出され、口縁部にも沈線による渦巻紋が施紋される。9～17は深鉢の胴部破片。11は頸部から胴部下半にかけての大型の深鉢。体部は大きく開き、頸部付近から内彎する。口縁部下端は沈線が沿う隆

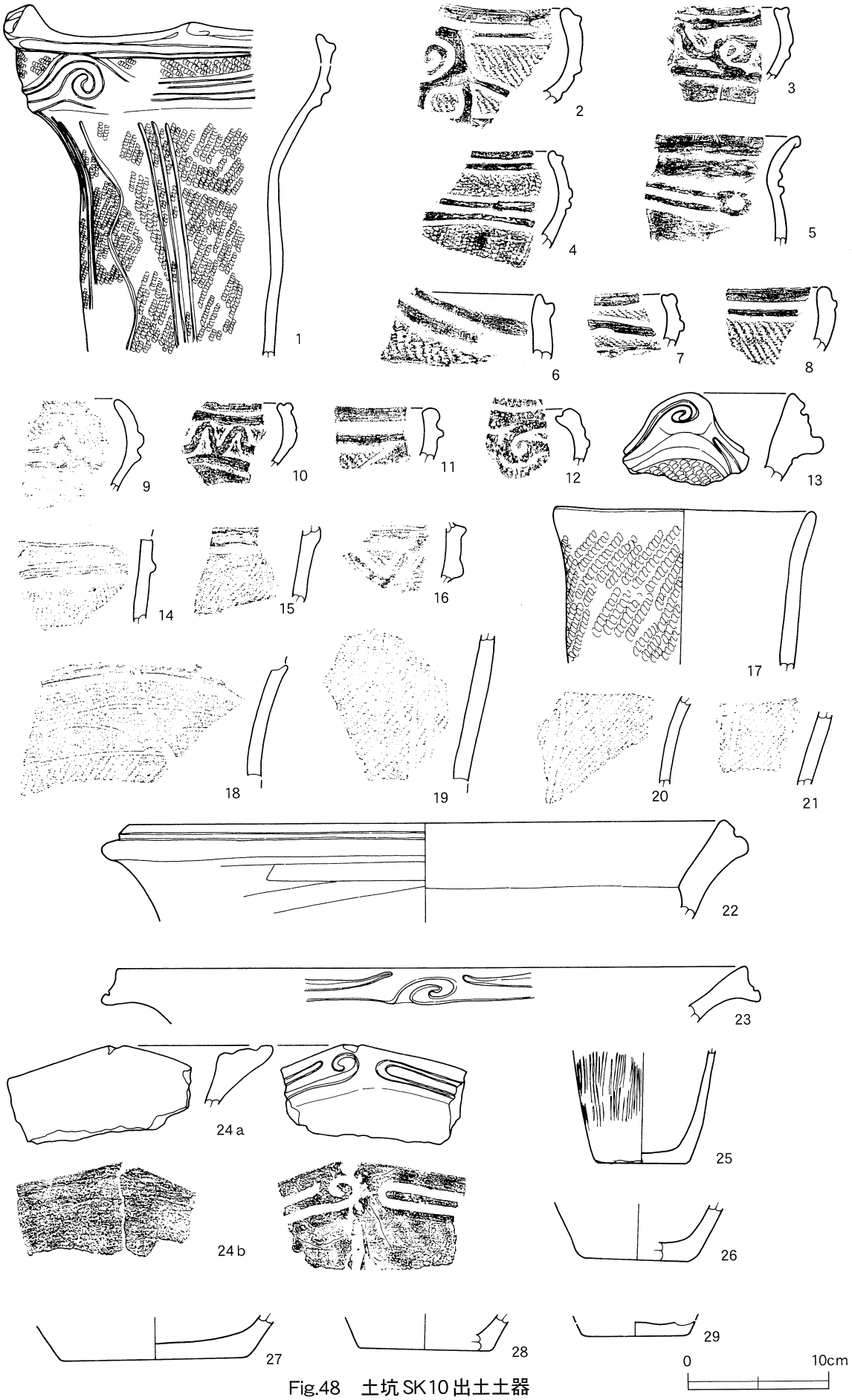


Fig.48　土坑SK10出土土器

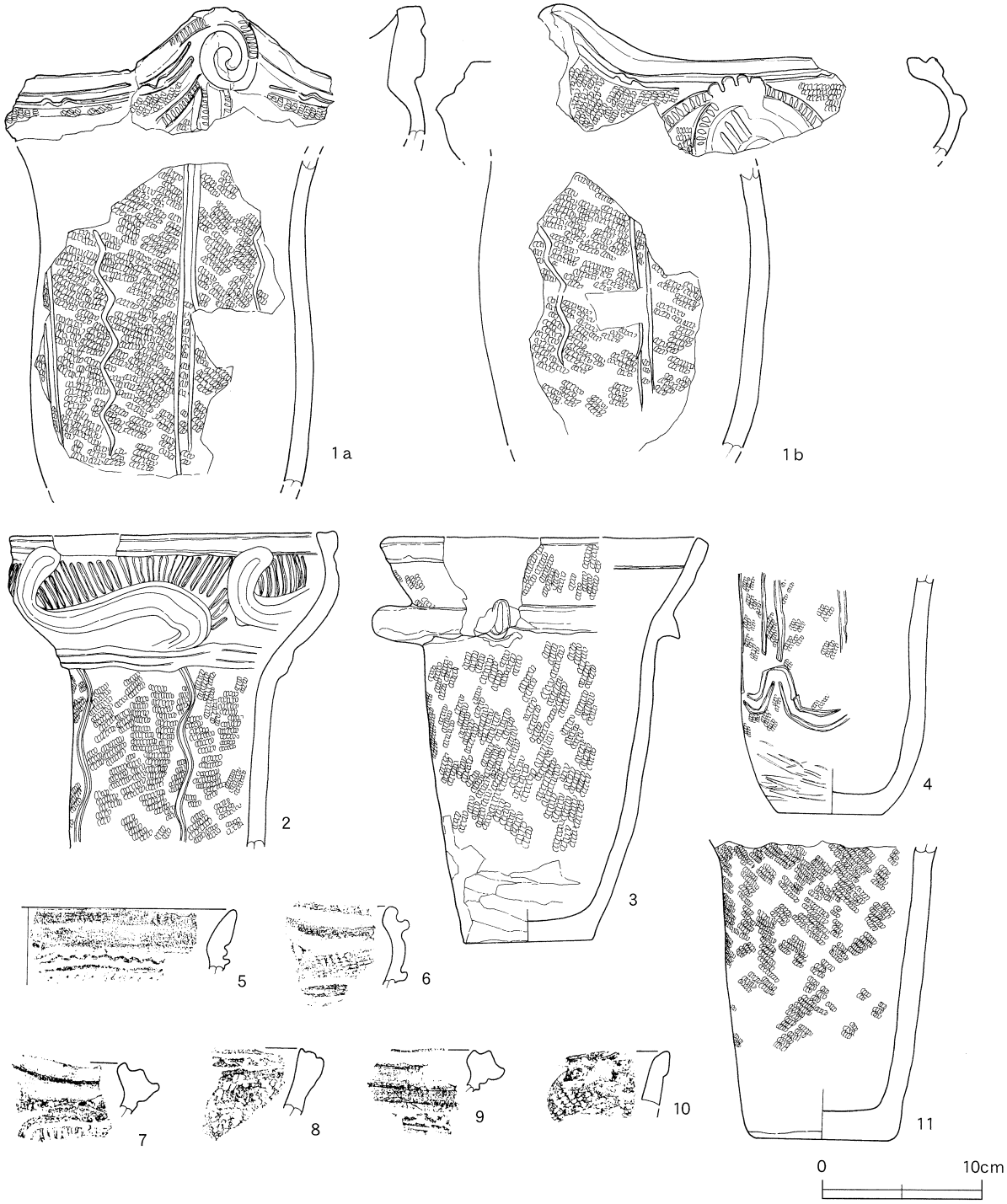


Fig.49　土坑SK11出土土器

帯による区画紋。頸部は無紋帯となり、３本の沈線を区画紋として巡らす。この区画紋から縄文地紋に３本単位の懸垂紋とその間に緩い波状の沈線が１条垂下する。９は口縁部下端の破片。沈線が沿う隆帯区画紋。10・12・14は深鉢の頸部破片。いずれも背割り隆帯による区画紋である。13・15～16・19は縄文地紋による沈線による懸垂紋が垂下する。13・15は先の11と同様、３本単位の懸垂紋とその間に緩い波状の沈線が１条垂下する。16も同じであろう。３本単位の懸垂紋が垂下する。17は波状沈線が２本垂下する。19は胴下半部の破片で底部まである。縄文地紋に３本単位の懸垂紋とその間に緩い波状の沈線が２条垂下する。18は深鉢の底部破片である。

土坑SK17出土土器（Fig.53－１～19）

Fig.53－１～３・５は口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。１は隆帯による半円形区画と渦巻き紋を配する。２も同様で隆帯による区画内に渦巻紋が施される。区画内は縄紋が充填される。３は口縁部下部から胴部上半部の破片で、胴部は直線的で筒形を呈する。口縁部は沈線による枠状区画と渦巻紋が組み合わせされ、頸部は無紋帯。胴部は３条の沈線によって区画され、やはり３単位の沈線が懸垂する。地紋にLR縄紋が施紋される。４は口縁部が直立する深鉢。口唇部下に刻み目のもつ隆帯が施される。６は円形の把手で、円孔の周辺に沈線によるモチーフが描出される。７・８はキャリパー形の深鉢で、口縁部付近の破片。９・10は深鉢の胴部破片。沈線による懸垂紋が施されている。11・12は縄紋施紋の胴部破片。13は口縁部が直線的に開く無紋の深鉢。14・15は浅鉢の口縁部破片。14は口縁部は浅く内彎する。15は口縁部が短く外反する。16～18は底部破片。19は器台形土器で、裏面に隆起線による紋様を描いている。

土坑SK18出土土器（Fig.53－１～17）

Fig.53－１～４・６・７は口縁部が緩く内彎するキャリパー形の深鉢。１～４は口縁部破片。沈線を伴う隆帯による枠状区画が施されている。６・７は胴部破片。やはり沈線が伴う隆帯によって区画される。５は口縁部が外反し、括れ部は交互刺突紋によって区画される。８は口唇部に太凹帯が巡り、口縁部が無紋となる。９は深鉢の頸部付近の破片。沈線による区画紋が施されている。10～12は縄紋施紋の胴部破片。15～17は口縁部が無紋の深鉢。13・14は口唇部が平縁で、口唇部が内彎する。15は口縁部が大きく外反する。16・17は深鉢の底部破片。

土坑SK19出土土器（Fig.54－１～17）

Fig.54－１・２は口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。口唇部に沿って沈線の伴う隆帯が巡る。３は口縁部が直立する深鉢。口縁部は沈線による枠状区画紋と区切紋が施されている。４は胴部が張る頸部付近の破片。括れ部に波状の沈線が巡り、胴部は単節LR縄紋を施紋する。５も頸部付近の破片。頸部との区画に隆帯が巡る。６は口唇部が大きく外反し、胴部は筒形を呈する深鉢。口唇部直下から単節RL縄紋を施紋する。７～12は胴部破片。７・８は縄紋地紋に沈線による懸垂紋が垂下する。13は底部付近の破片。単節RL縄紋を地紋に２単位の沈線を垂下する。14～17は口縁部が大きく開く浅鉢。14・17の口唇部は肥厚し、内側に突出する。また15は逆に口唇部は外側に突出する。

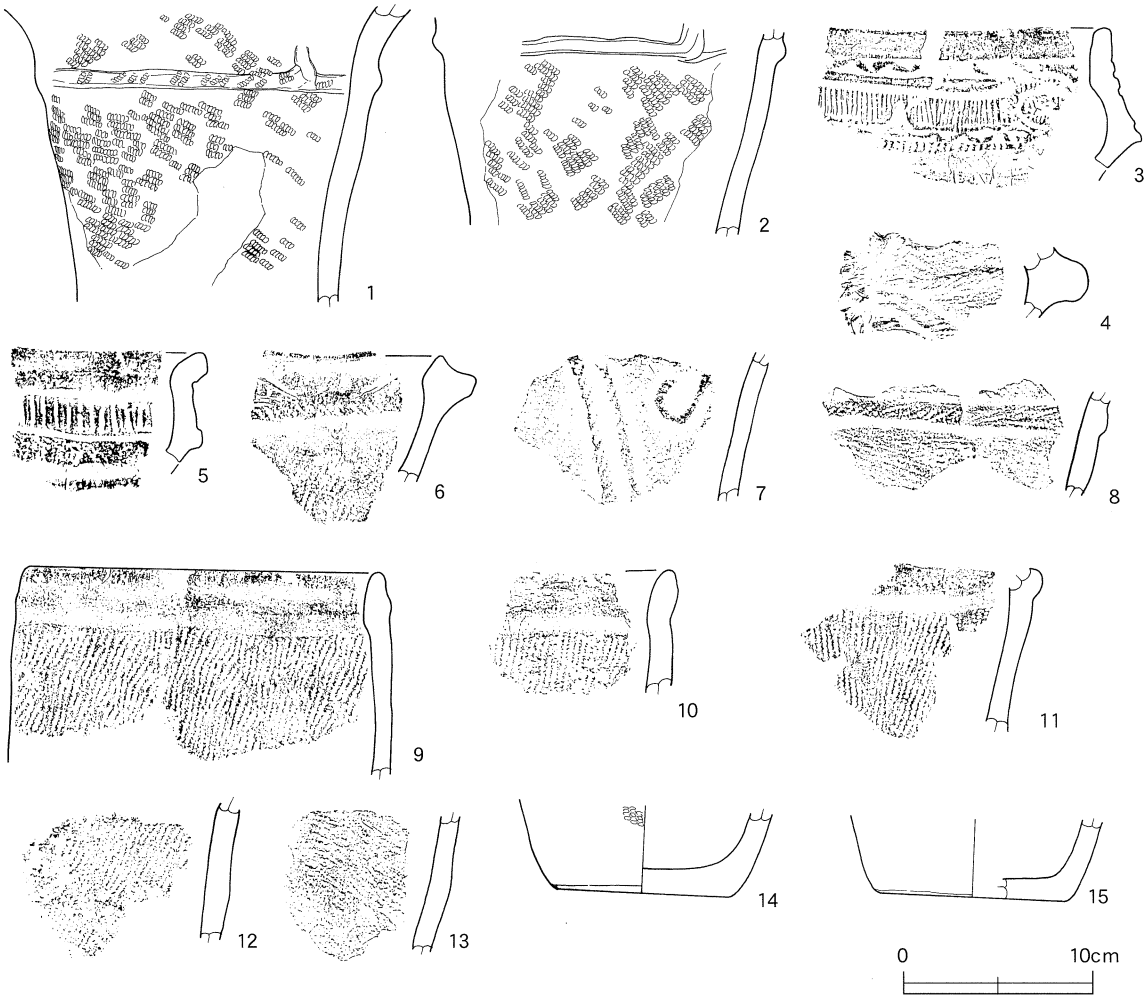


Fig.50　土坑SK12出土土器

土坑SK24出土土器（Fig.54－1・2）

Fig.54－1・2とも深鉢の胴部破片。1は縄紋地紋に沈線による懸垂紋が垂下する。2は単節RL縄紋縦位に施紋されている。

土坑SK25出土土器（Fig.54－1～4）

Fig.54－1・2とも深鉢の口縁部付近の破片。1は隆帯による枠状区画紋内に沈線を充填する。2は沈線が区画紋となる。3は胴部破片。4は底部付近の破片。

土坑SK26出土土器（Fig.54－1～6）

Fig.54－1は深鉢の口縁部破片。口縁部は直線的に立ち上がり、口唇部に太凹帯が巡る。2～6は胴部破片。2は横位の沈線が施紋される。3・4は縄紋施紋。5は縦位の櫛歯状工具による条線が施されている。6は無紋。

土坑SK28出土土器（Fig.54－1～10）

Fig.54－1は口縁部破片。ほぼ直立して立ち上がり、口唇部でわずかに外反する。沈線による区画紋が

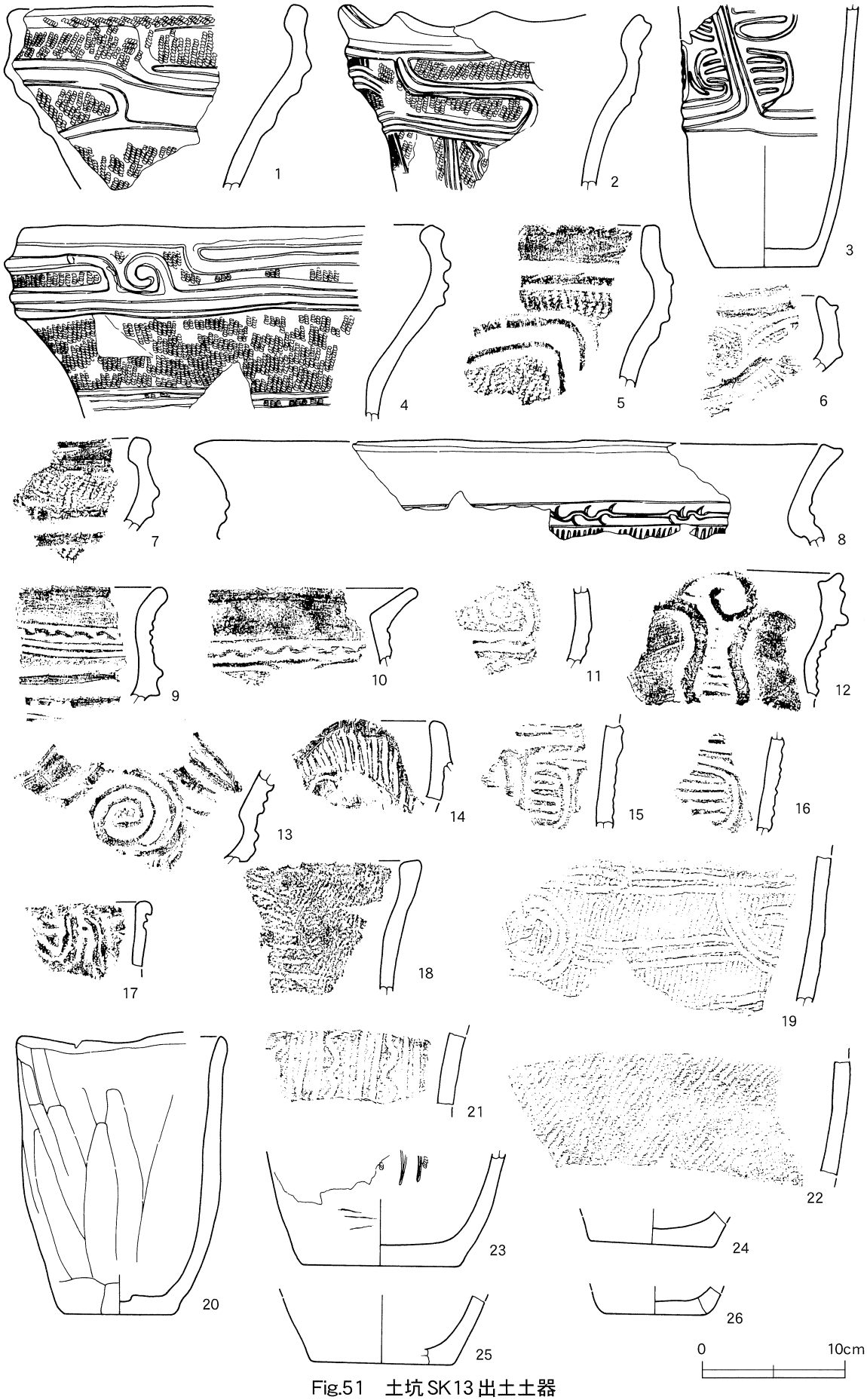


Fig.51　土坑SK13出土土器

表出される。2・3は縄紋施紋の深鉢。2は口縁部がわずかに内彎する。口唇部下から単節LR縄紋が施紋される。3はほぼ直線的に口縁部が外傾する。単節LR縄紋が施紋されている。4は口縁部下端の破片。沈線の伴う隆帯によって区画され、胴部は縄紋施紋。5～9は胴部破片。5・6は縄紋地紋に直線沈線が懸垂する。7～9は縄紋施紋。10は口縁部がわずかに内彎する深鉢。口縁部は無紋である。

土坑SK29出土土器 (Fig.55－1～3)

Fig.55－1は口縁部付近の破片。沈線による枠状区画紋と渦巻紋が施されている。2は深鉢の胴部破片。縄紋地紋に沈線が垂下する。3は頸部付近の破片。無紋である。

土坑SK30出土土器 (Fig.55－1～3)

Fig.55－1は口縁部付近の破片。隆帯による枠状区画内に沈線が充填する。2・3は縄紋施紋の胴部破片である。

土坑SK32出土土器 (Fig.55－1～3)

Fig.55－1は口縁部破片。口縁部は内彎するキャリパー形の深鉢。隆帯による枠状区画紋と渦巻紋が施紋され、区画内には縄紋が施紋されている。2は胴部が筒形を呈し、口縁部先端がわずかに外反する深鉢。括れ部に浅い凹帯が巡り区画され。以下縄紋施紋される。3は縄紋施紋の胴部破片。

土坑SK35出土土器 (Fig.55－1・2)

Fig.55－1は深鉢の頸部破片。沈線の伴う隆帯によって区画され、胴部は縄紋施紋。2は口縁部破片。口縁部は内彎する。口唇部直下から縄紋施紋される。

土坑SK37出土土器 (Fig.55－1～28)

Fig.55－1～3は口唇部が肥厚し、口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。1は口唇部に山形の小突起を有する。口縁部上端は無紋とし、隆帯によって区画される。区画内は2条隆帯による渦巻紋であろうか。地紋に単節LR縄紋が横位に施紋されている。2は大きな波状口縁をもつ。2条隆帯により渦巻紋が施紋されている。地紋はRL縄紋が横位に施紋されている。3は隆帯による区画紋。4は口縁部が内彎する深鉢。口唇部直下に円形刺突紋が巡り、口縁部は集合沈線様による渦巻紋とそれらを囲む沈線が充填する。5は沈線によるモチーフが表出される。6は波状口縁の把手。沈線が口唇部に沿って施紋される。7は波状口縁をもつ深鉢。口唇部は幅狭い無紋帯を有し、口縁部は単節RL縄紋が施紋される。8は平縁で口縁部がほぼ直線的に立ち上がる。口唇部下から縄紋RLが施紋されている。9は頸部付近の破片。隆帯により区画され、胴部は縄紋施紋される。10は口縁部と胴下半部を欠損する深鉢。胴部は緩く外方へ開く。地紋に単節LR縄紋を施紋し、2条の垂線沈線間に波状沈線を垂下させ3本を1単位とする懸垂紋を施す。胎土に微細な長石粒を少量含み、焼成は良好。色調は赤褐色(5YR3/2)を呈する。11は頸部付近の破片。2条隆帯による区画紋で、区画内は沈線が充填する。12・13は縄紋地紋に沈線を懸垂する。14～16は縄紋地紋に横位の沈線区画を設ける。17～19・21・22は縄紋施紋の胴部破片。いずれも深鉢である。20は深鉢の底部破片。10と同様、2条の垂線沈線間に波状沈線を垂下させ3本を1単位とする懸垂紋を施す。胎土に微細な長石・石

Fig.52　土坑SK14・16出土土器

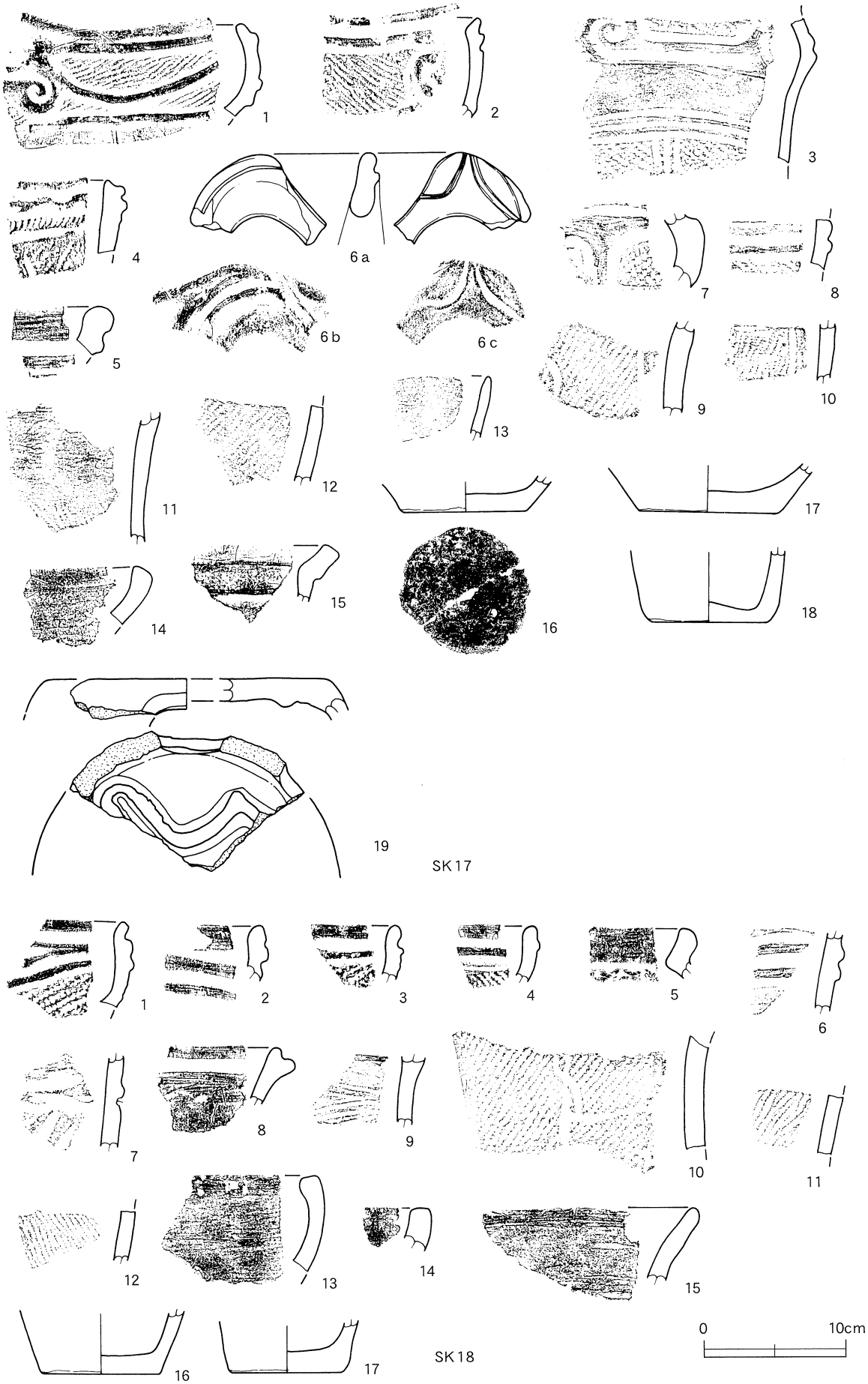


Fig.53　土坑SK17・18出土土器

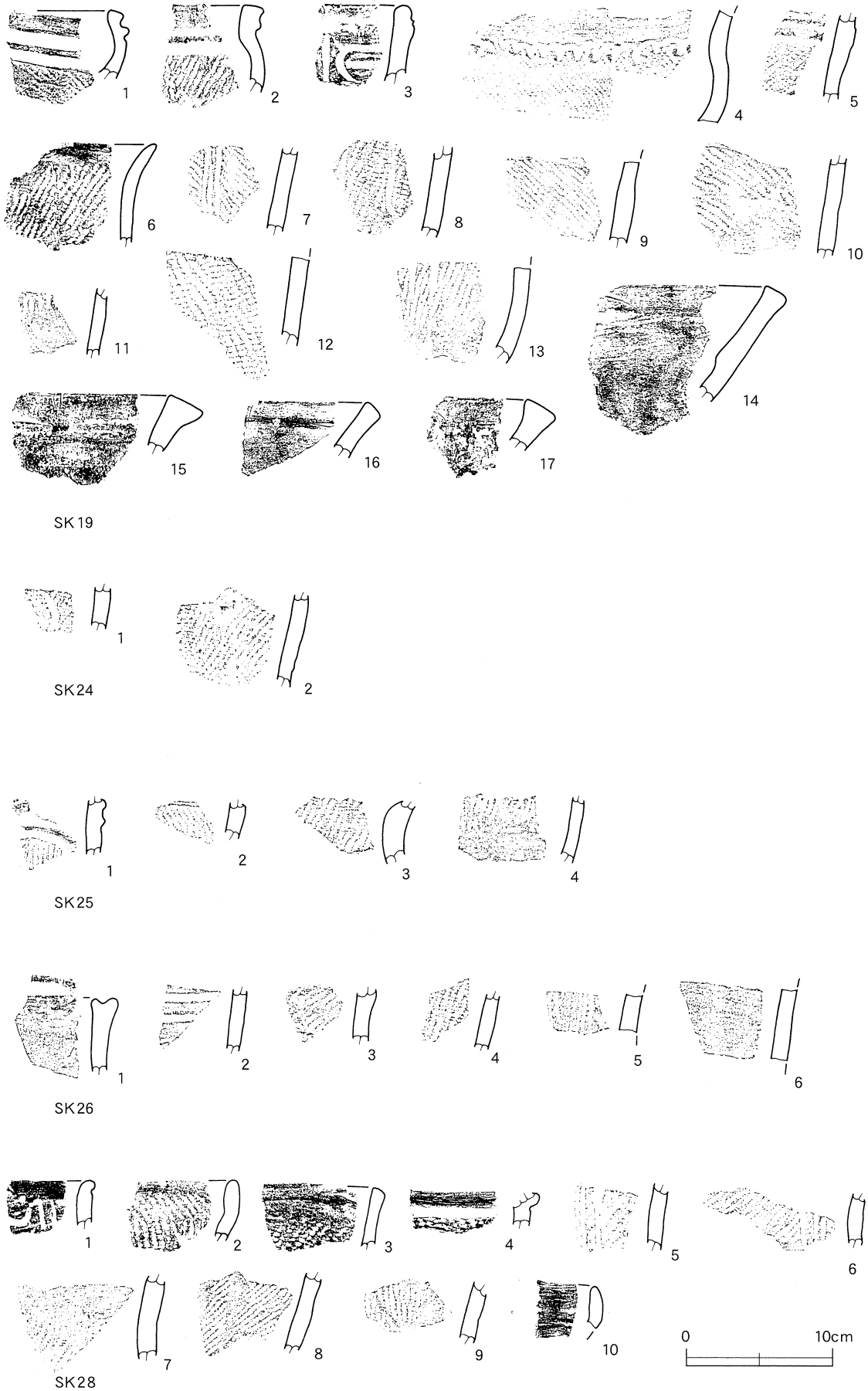


Fig.54　土坑SK19・24・25・26・28出土土器

英粒を少量含み、焼成は良好。色調は明褐色(7.5YR5/6)を呈する。23は口縁部が直線的に外方へ開き、口唇部が小さく内彎する。無紋の深鉢である。24は深鉢の底部破片。底面に木葉痕が残置している。また底部内面に炭化物の付着が認められる。胎土に微細な長石粒を含み、焼成は良好。色調は明褐色(7.5YR5/8)を呈する。25は櫛描波状紋が垂下する胴部破片。26・27は浅鉢の口縁部破片で、26は口唇部が肥厚する。28は底部破片。

土坑SK38出土土器 (Fig.56－1～4)

Fig.56－1は口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。隆帯による区画紋が施され、区画内は地紋LRが施紋されている。2は口唇部が肥厚する深鉢。刻み目のもつ隆帯が施される。3は口縁部が緩く外反する深鉢。口縁部を無紋とし、以下単節RL縄紋を施す。4は口縁部がわずかに外反する。

土坑SK39出土土器 (Fig.56－1～7)

Fig.56－1は口縁部わずかに内彎し、頸部の括れ部が狭くなるキャリパー形の深鉢。口唇部は肥厚し、沈線による太凹帯が巡り、口縁部は隆帯による枠状区画紋に渦巻紋が付す。頸部は無紋帯で、胴部は3本単位の横沈線によって区画され、やはり3本単位の垂線が懸垂する。2は深鉢の口縁部破片。口唇部はやや肥厚する。口縁部は沈線が伴う隆帯による区画紋。3も同様、口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。2条隆帯による枠状区画紋が施されている。区画内に縄紋施紋される。6は頸部付近の深鉢破片。隆帯によって口縁部と頸部が区画され、口縁部には単節RLが横位施紋されている。4・5・7は浅鉢の口縁部破片。4・5は無紋。7は内面に沈線によるモチーフが描出される。

土坑SK47出土土器 (Fig.56－1～3)

Fig.56－1は口縁部わずかに内彎するキャリパー形の深鉢。沈線の伴う隆帯が区画紋となる。2は口唇部が肥厚する。口唇部下は単節RL縄紋が施紋されている。3は口縁部が直行する深鉢。

土坑SK48出土土器 (Fig.56－1～6)

Fig.56－1は口縁部が外方へ開くキャリパー形の深鉢。口唇部に沿って隆帯が区画紋となる。枠状区画紋であろう。2・3は口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。隆帯による区画紋が施されている。4は口唇部が肥厚する。口唇部下は単節RL縄紋が施紋されている。5は口縁部が直行する深鉢。6は口縁部がわずかに内彎する深鉢。

土坑SK49出土土器 (Fig.56－1～9)

Fig.56－1は口縁部が内彎し、口唇部が短く外反するキャリパー形の深鉢。口唇部下に2条隆帯が巡り区画紋となり、区画内は隆帯による渦巻紋が表出され、沈線が充填する。2は口縁部は直行し、口唇部がわずかに外反する深鉢。口唇部下は沈線の伴う隆帯が巡る。口縁部は単節RL縄紋が施紋されている。3は口縁部上端が外反する深鉢。口唇部下は無紋で、口縁部は沈線による枠状区画内に縦位の沈線が施される。9は口縁部がわずかに内彎する深鉢。口唇部下から縄紋RLが施紋されている。5・6は口縁部が無紋の深鉢。5は口唇部下に浅い太凹帯が巡る。6は口唇部が外側に折り返される。7は深鉢の底部破片。底面に木葉痕

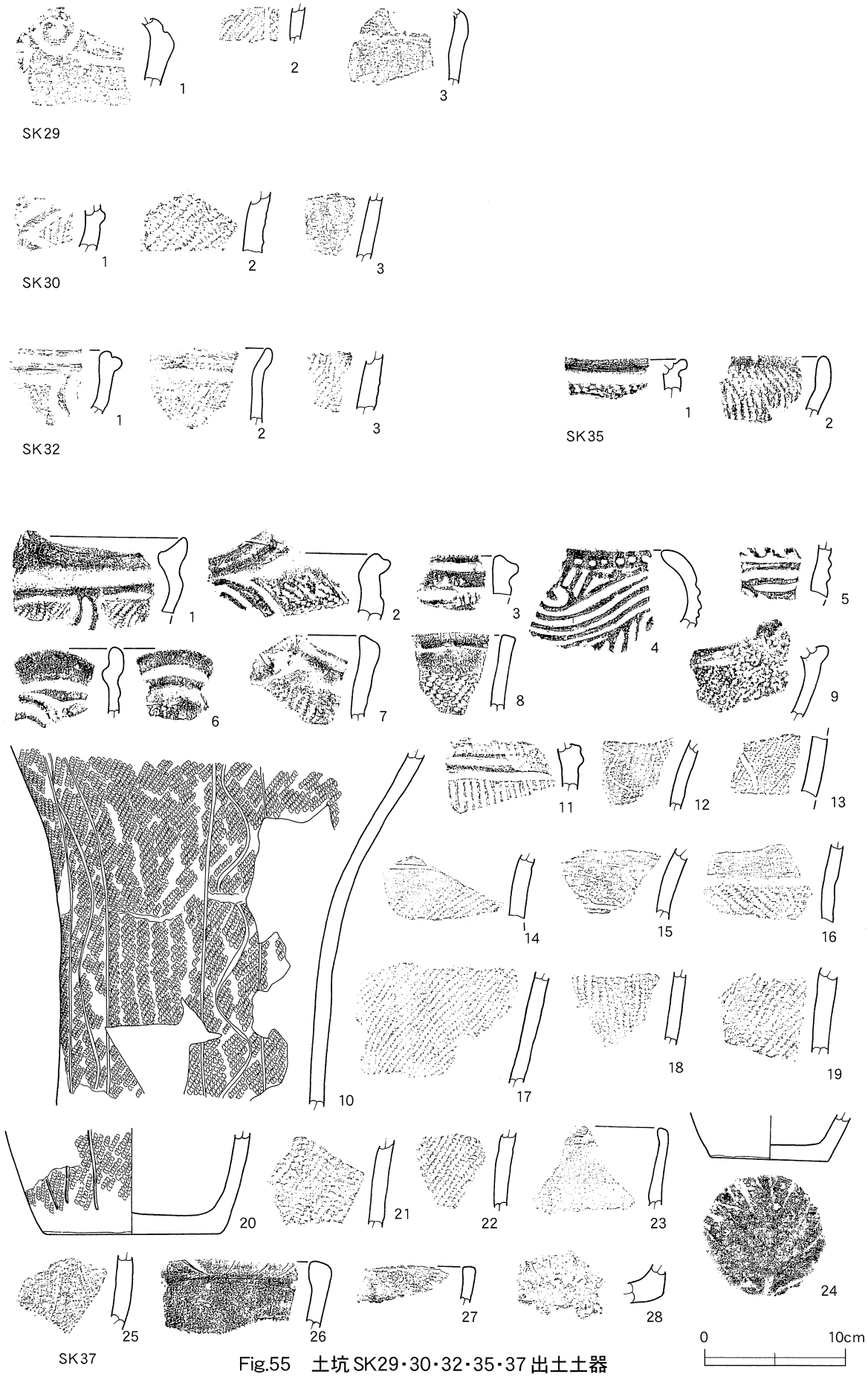


Fig.55　土坑 SK29・30・32・35・37 出土土器

が残置している。胎土に長石粒を多く、石英粒を少量含む。焼成は良好で、色調は明赤褐色(2.5YR5/6)を呈する。8・9は浅鉢の破片。8は頸部付近で括れ部にあたる破片。9は口縁部の破片で、口唇部は肥厚し、太凹帯が巡る。また内面に稜を有する。

土坑SK50出土土器 (Fig.57－1～16)

Fig.57－1は口縁部は内彎し、上端部で「く」の字状に外反する深鉢。括れ部に交互刺突紋が区画され、沈線による枠状区画紋が配され、その間に横位の短沈線が充填する。2は突起部で、口唇部に沿って隆帯が巡る。3も突起部に相当する。縄紋施紋された隆帯が渦巻き状に施されている。4は橋状把手の破片。隆帯による枠状区画内に縦位の沈線が充填する。5は口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。隆帯区画紋内に短沈線が充填する。6は口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。2条隆帯による区画紋が施されている。7も同様。口唇部に太凹帯が巡り、隆帯区画内に沈線が充填する。8は口唇部が外削状を呈する深鉢。沈線を伴う隆帯によって区画される。9は口縁部が直線的に立ち上がり、口唇部がわずかに肥厚する。口縁部は単節RL縦位施紋である。10は口縁部が直行する深鉢。口唇部下から縄紋施紋される。11は口唇部が肥厚し、沈線によって区画され、口縁部はLR縄紋が施されている。12は深鉢の底部破片。底部付近まで単節RL縄紋が施紋され、底面には網代痕が認められ、2本越え1本潜りと考えられる。胎土に微細な長石粒が多く含み、焼成は良好。色調は褐色(7.5YR4/3)を呈する。13は口唇部がわずかに外反し、口唇部下から縄紋施紋される。14・15は口縁部が無紋となる深鉢で、交互刺突紋が区画紋となる。16は深鉢の底部破片。単節RLが施紋されている。胎土に長石粒を少量含み、焼成は良好。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。

土坑SK52出土土器 (Fig.57－1～4)

Fig.57－1は波状口縁を呈する深鉢。口縁部は内彎する。波頂部に隆帯による渦巻紋を配し、口唇部に沿って太凹帯が巡る。2は口縁部が大きく外反する浅鉢。口唇部は肥厚する。3は深鉢の底部破片。単節RL縄紋が縦位に施紋されている。胎土に長石・石英粒を多く含み、焼成は良好。色調は褐色(7.5YR5/5)を呈する。4も深鉢の底部破片。単節RL縄紋が縦位に施紋されている。胎土に長石粒を多く含み、焼成は良好。色調は明褐色(7.5YR5/6)を呈する。

土坑SK53出土土器 (Fig.57－1)

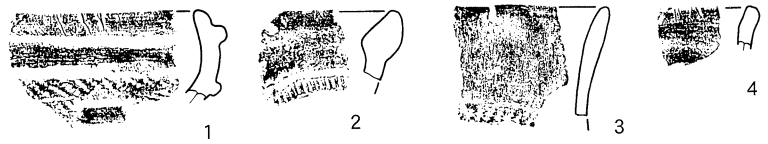
Fig.57－1は深鉢の底部破片。底部付近は横位のヘラナデが顕著に施されている。胎土に長石粒を少量含み、焼成は良好。色調は褐色(7.5YR4/4)を呈する。

土坑SK55出土土器 (Fig.57－1)

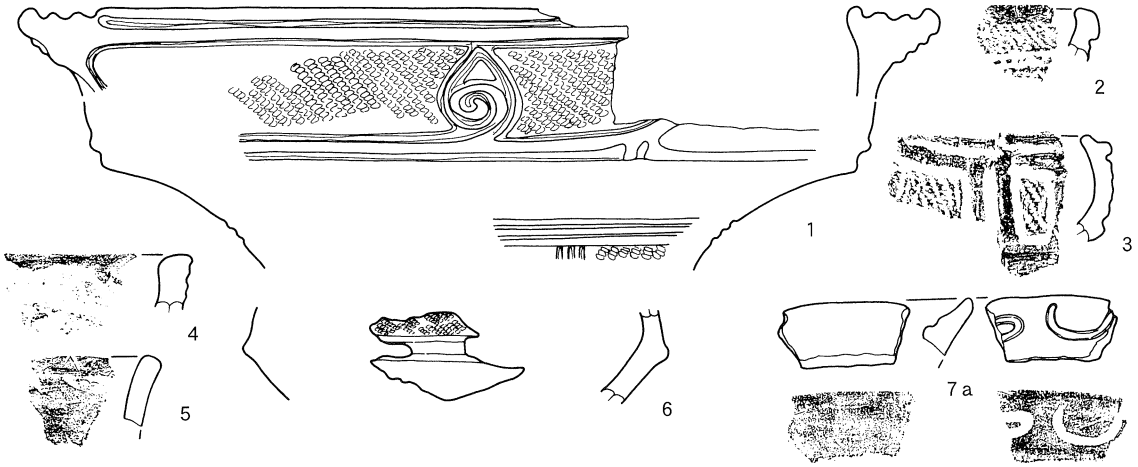
Fig.57－1は口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。口唇部に沿って隆帯が巡り区画紋となり、区画内には単節RL縄紋が横位施紋されている。

土坑SK56出土土器 (Fig.57－1～13)

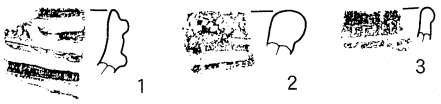
Fig.57－1は胴部がわずかに張り、口縁部が小さく外反する深鉢。口唇部は外削状を呈し、2本の沈線が巡る。口唇部下から2条の波状沈線に挟まれた垂線の3本単位の懸垂紋と2本単位の垂線の懸垂紋が垂下



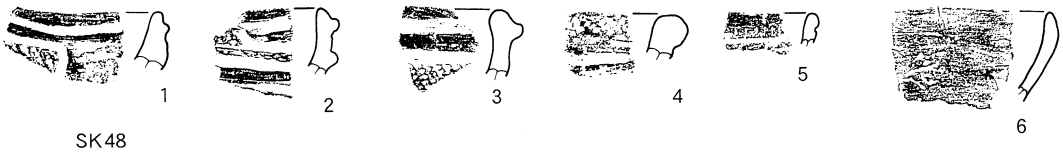
SK38



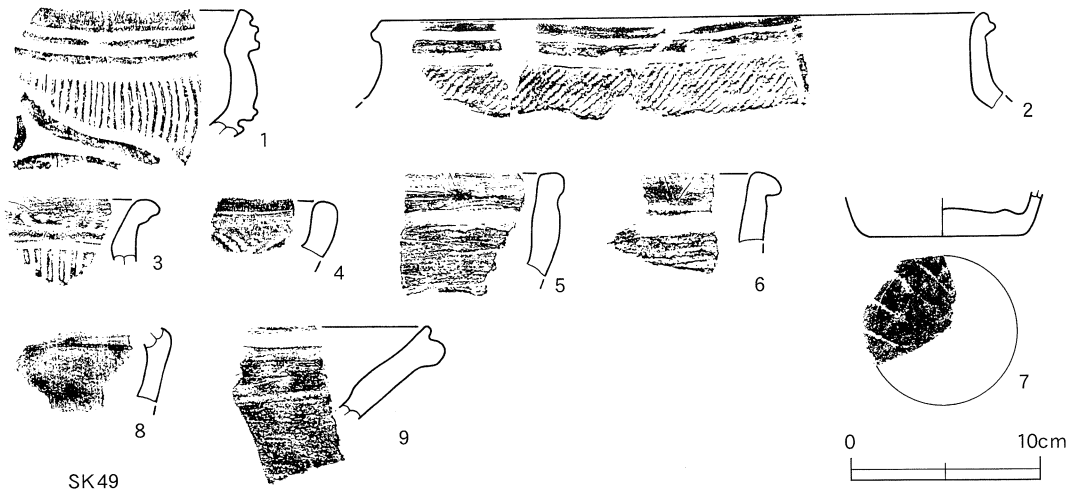
SK39



SK47



SK48



SK49

Fig.56　土坑SK38・39・47・48・49出土土器

する。地紋は単節LR縄紋の縦位施紋である。胎土に長石粒を少量含み、焼成は良好。色調は黄褐色(10YR5/6)を呈する。2は大形の双頭状の橋状把手で、円孔の周辺に沈線による円形紋と短沈線紋を施す。3は双頭状の突起を有する深鉢。口唇部は太凹帯が施され、口縁部には沈線区画内に短沈線が充填する。4は波状口縁を呈する深鉢。口唇部は肥厚し、交互刺突紋が巡る。5も口唇部が肥厚する深鉢。口唇部に交互刺突紋が施され、区画紋とする。6は口縁部が内彎する深鉢。地紋に単節RL縦位施紋に横沈線紋が施されている。7は口縁部が内彎する深鉢。沈線によって区画される。8は口縁部が直行する深鉢。9は頸部付近の破片。口縁部との境に隆帯が区画され、胴部は単節RL縄紋が縦位施紋されている。10は波状口縁を呈する深鉢。口唇部が肥厚する。口唇部から沈線紋が垂下する。11は口縁部大きく外反する浅鉢の破片。12・13は深鉢の底部破片で同一個体と考えられる。胎土に長石粒を多く含み、焼成は良好。色調は褐色(7.5YR4/4)を呈する。

土坑SK57出土土器 (Fig.58－1)

Fig.58－1は深鉢の胴部破片。単節RL縄紋を地紋に沈線による波状紋と垂線紋を懸垂させる。

土坑SK58出土土器 (Fig.58－1～14)

Fig.58－1は胴部は筒形で、口縁部が外反する深鉢。口唇部は肥厚し、太凹帯が巡る。口唇部下から単節LR縄紋が縦位施紋される。2は口縁部が大きく外反する深鉢。口唇部内側に折り返しがみられる。口唇部下から単節RL縄紋が縦位施紋される。3は胴部破片。胴部は張り、沈線によって頸部と区画される。4～7は胴部破片で、単節RL縄紋を地紋に沈線紋を垂下させる。8は横位の沈線区画が施されている。9～12は縄紋施紋の胴部破片。13は口唇部が肥厚する無紋の深鉢。14は深鉢の底部破片。

土坑SK59出土土器 (Fig.58－1)

Fig.58－1は深鉢口縁部下部の破片。沈線により三叉紋が施されている。勝坂式土器である。

土坑SK60出土土器 (Fig.58－1・2)

Fig.58－1・2ともに深鉢の胴部破片。縄紋が施紋されている。

土坑SK61出土土器 (Fig.58－1～5)

Fig.58－1は波状口縁を呈する突起部の破片。口唇部に太凹帯が巡り、短隆帯が直交して貼り付けられている。2は口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。沈線を伴う隆帯による区画紋。3～5は胴部破片。3は単節RL縄紋を地紋に垂線と波状沈線が懸垂する。4は単節RL縄紋の縦位施紋されている。5は沈線によって区画されている。

土坑SK63出土土器 (Fig.58－1～3)

Fig.58－1・2は櫛歯状工具による条線が施された深鉢で、1は口縁部が直線的に外方へ開く深鉢。2は胴部破片。3は単節RL縄紋を地紋に3本単位の垂線が懸垂する。

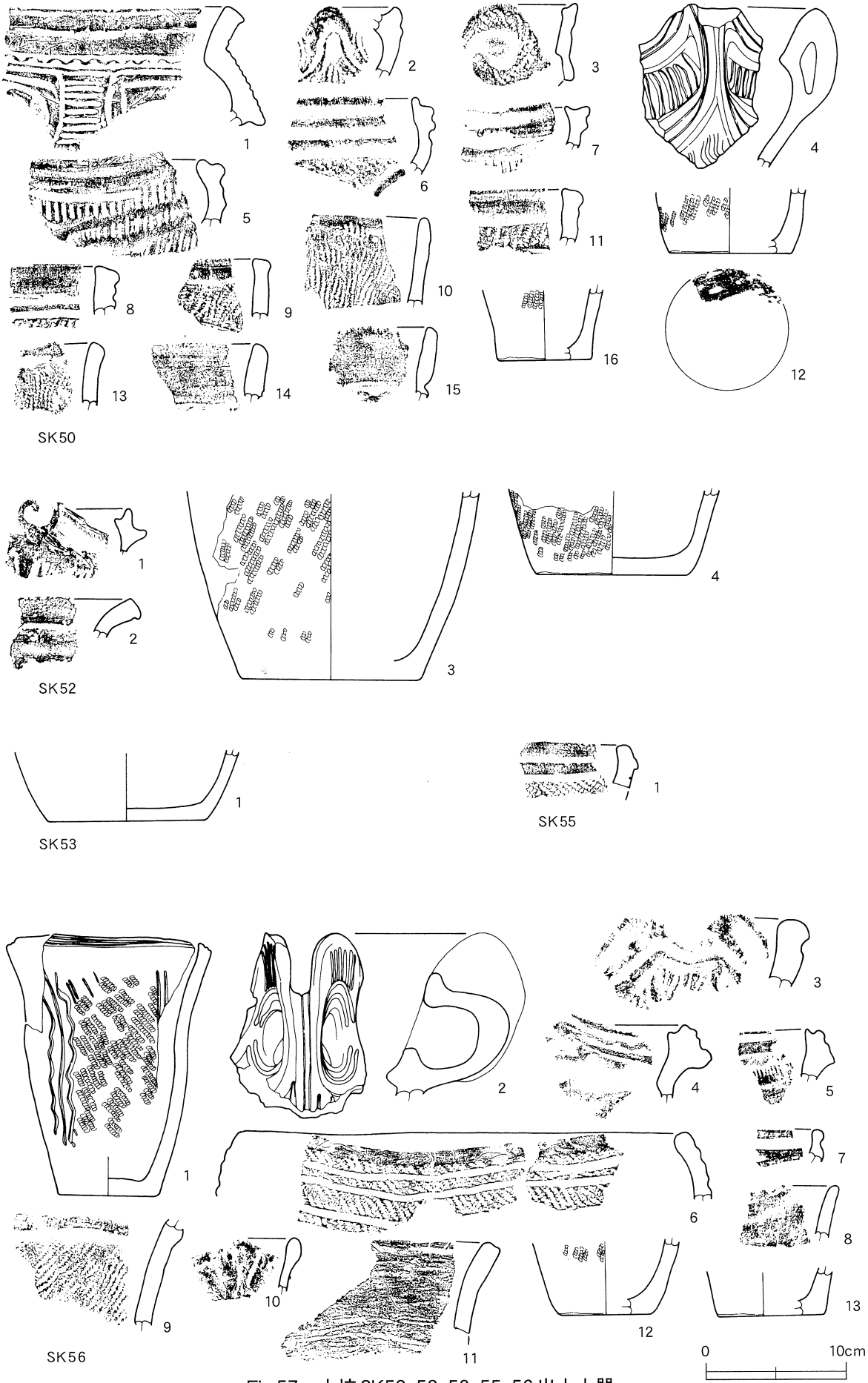


Fig.57　土坑SK50・52・53・55・56出土土器

土坑SK64出土土器（Fig.59－1～26）

Fig.59－1は口縁部が内彎し、さらに口唇部が内傾するキャリパー形の深鉢。口唇部は太凹帯が巡り、口縁部は交互刺突紋が区画紋となり、隆帯による渦巻紋が配される。2・3は同一個体、で口縁部が内彎し、口唇部が短く外反する。7は口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。口唇部下を無紋とし、口縁部は沈線区画で、縦位の沈線を充填する。4は橋状把手破片。大形のキャリパー形の深鉢。円孔の周辺に沈線が巡る。5は口縁部がわずかに内彎するキャリパー形の深鉢。貼付隆帯による区画紋に縄紋LRが施紋されている。6も内彎する口縁部破片。沈線を挟む2条隆帯による渦巻紋に沈線が充填する。8は口縁部が内彎する深鉢。隆帯区画内に細沈線が充填する。9は山形把手の破片。円孔が穿ってある。10～12は縄紋地紋に隆帯による区画紋が施されている。13は胴部中位から底部にかけての破片。3単位の垂線に波状沈線が懸垂する。地紋に単節RL縦位施紋されている。14・15・17・19は同様に地紋に単節RL縄紋縦位施紋に沈線が垂下する。16は地紋に単節RL縄紋を縦位に施紋する。18は地紋に単節RL縄紋を縦位に施紋し、横位の微隆起帯を巡らす。20は口縁部が内傾する壷形を呈する。口縁部下に微隆帯による区画紋が施されている。21は口縁部が大きく内彎する深鉢。口唇部が外側に突出し、2条の沈線が巡る。22は口縁部が直行し、口唇部に太凹帯が巡る。23は口縁部が外反する。23も口縁部が外反し、口唇部に浅い太凹帯が巡る。25・26は深鉢の底部破片。

土坑SK65出土土器（Fig.59－1～5）

Fig.59－1は口縁部が内彎する深鉢。口唇部下は無紋で、沈線による区画紋が施紋されている。2は頸部付近の破片。頸部に沈線による区画紋が施されている。3～5は縄紋施紋の深鉢胴部破片。

土坑SK66出土土器（Fig.60－1～15）

Fig.60－1は波状口縁を呈するキャリパー形の深鉢。口縁部は内彎し、口唇部で短く外反する。沈線を挟む2条隆帯による区画紋に縄紋LRが施紋されている。2は口縁部が内彎する深鉢。口唇部は肥厚する。口唇部は沈線により渦巻紋と太凹帯が巡る。3は口唇部がわずかに外反し、口縁部が内彎する深鉢。口唇部下に交互刺突紋によって区画される。4は頸部付近の破片。2条隆帯による区画が施されている。5～7は縄紋地紋に沈線による区画紋および懸垂紋が施紋されている。8は横位の沈線が巡る。10は単節RL縄紋が縦位施紋されている胴部中位の破片。9・11・12はいずれも単節RL縄紋が施紋されている深鉢の底部付近の破片。13・14は深鉢の底部破片。15は浅鉢の底部破片。大きく外方へ開く。

土坑SK67出土土器（Fig.60－1～10）

Fig.60－1～4はキャリパー形の深鉢。1は口縁部が内彎し、口唇部に太凹帯がめぐる。口縁部は隆帯によって区画され、沈線の渦巻紋が施紋されている。地紋は単節LR縄紋を横位に施されている。2は口唇部がわずかに外反する。口縁部は結節沈線による区画紋が施されている。3は口縁部が直行する。隆帯による区画紋が施紋されている。4は2条隆帯による区画紋と渦巻紋が施されている。5は口唇部が内削状を呈する深鉢。口唇部下から櫛歯状工具による条線を垂下させる。6～10は縄紋施紋の深鉢胴部破片。

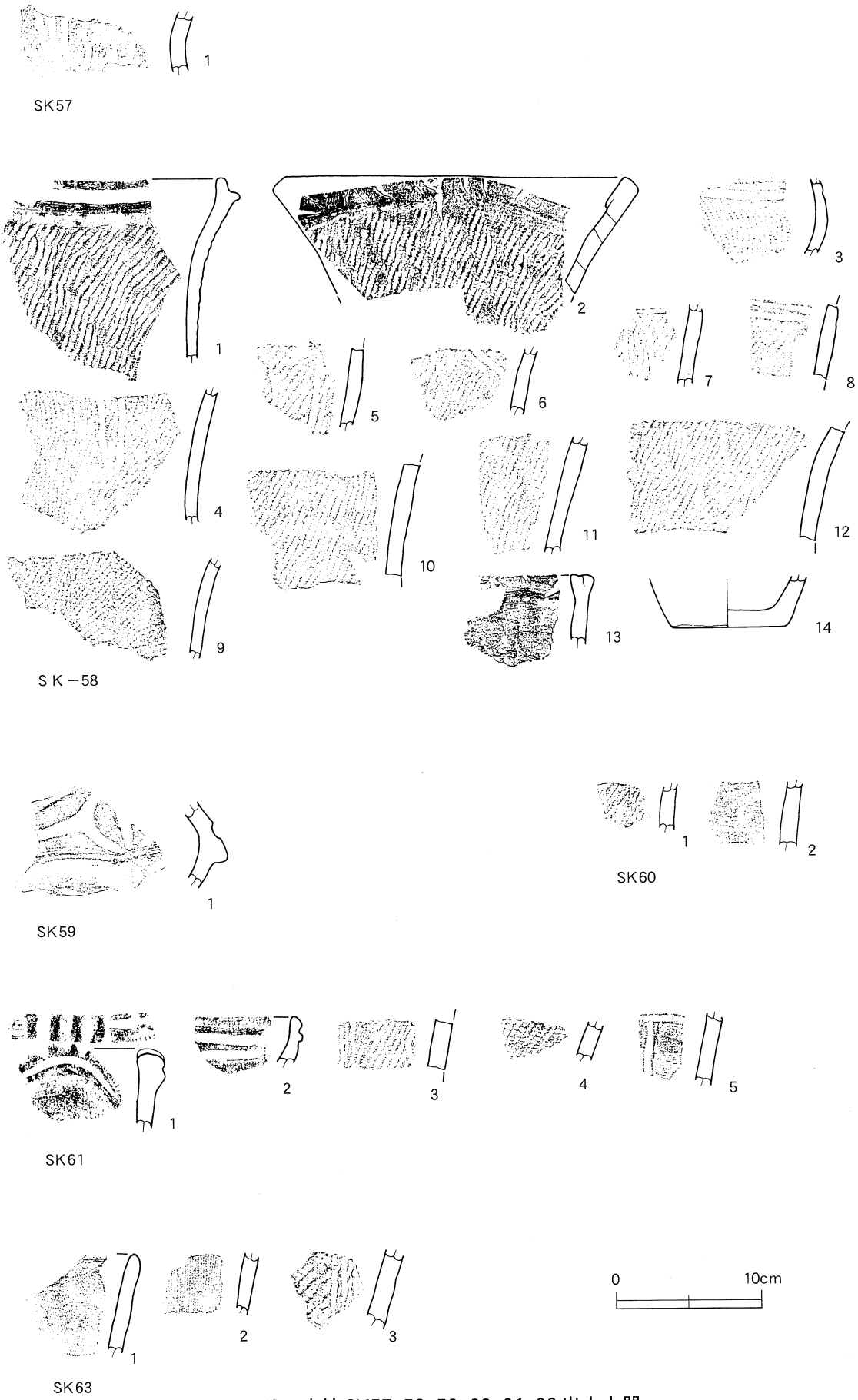


Fig.58　土坑SK57・58・59・60・61・63出土土器

土坑SK68出土土器 (Fig.60－1・2)

Fig.60－1は深鉢の胴部破片。単節RL縄紋を縦位施紋している。2は深鉢底部破片。

土坑SK70出土土器 (Fig.61～63－1～92)

Fig.61－1は口縁部が内彎し、4単位の大形把手を有する波状口縁となる。把手はラッパ状で円孔が穿ってある。円孔の周辺は沈線が巡り、口唇部にも隆帯が巡る。2は阿玉台式土器。口縁部は内彎し、口唇部がわずかに肥厚する。3は山形把手を有する波状口縁の深鉢。口縁部は内彎し、把手は外反する。また把手には円孔が穿ってあり、周辺に沈線が巡る。口縁部は刻み目のもつ隆帯が逆半円形の区画紋をもち、区画内に縦位の沈線が充填する。4～6は口縁部が外反し、無紋となり、交互刺突紋によって区画され、4は粗い凹帯を施す隆帯をもつ。5は沈線による区画紋をもつ。7・8は波状口縁をもつ深鉢。7は口縁部に沈線区画をもち、区画内は沈線を充填する。8は口縁に縄紋を施紋する。9～27、Fig.62－28～35は口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。9は口径19.7㎝を測る。口縁部は隆帯と沈線による渦巻紋、楕円形区画が表出され、胴部は3本単位の沈線による区画紋が施されている。胴部には地紋としてLR縄紋で、口縁部は横位に、胴部は縦位に施紋されている。胎土に長石・石英・雲母粒を含み、焼成は良好で、色調は橙色(7.5YR7/7)を呈する。11～18、20～27は口縁部に隆帯による渦巻紋、楕円形区画紋が配され、頸部は無紋帯で，胴部は地紋に縄紋施紋されている。19は小さな波状口縁で、隆帯により楕円形区画紋が配する。28・29は沈線による渦巻紋と楕円形区画紋が配される。区画内には縦位の沈線が充填する。30は波状口縁を有する口唇部が肥厚する深鉢。口唇部に沿って沈線が伴う2条隆帯が巡る。31も波状口縁で、口唇部は肥厚する。波頂部は沈線による渦巻紋を描出し、口唇部に沿って、沈線による区画紋を施す。32・36は口縁部付近の破片。口唇部に沿って沈線が巡る。33・34は波状口縁の波頂部破片。沈線による渦巻紋が施紋される。35は口縁部破片。沈線による渦巻紋と楕円形区画紋を有する。37は口縁部が大きく外反する深鉢。口縁部の境に沈線を伴う隆帯が区画される。38は口縁部が直行する深鉢。口唇部下から縄紋施紋される。39～42・44・46・47は頸部付近の破片。39は交互刺突紋を区画紋とし、胴部はRL縄紋縦位施紋する。40～42・44は沈線を伴う隆帯により区画される。43は胴中位から底部が残存する。胴部は筒形で、ほぼ直行する。地紋単節LR縄紋に沈線による渦巻懸垂紋と垂線懸垂紋を垂下させる。45・48～61は縄紋地紋に沈線による懸垂紋を垂下させる。49は蛇行沈線紋を懸垂し、45・48・50～60は垂線を懸垂紋とする。61～67およびFig.63－68～72は縄紋施紋の胴部破片。73～77は深鉢の底部破片。78・79は櫛歯状工具による条線を垂下させる。80～85は無紋の深鉢。80は口縁部は内彎し、口唇部に隆帯が巡る。81・82は口縁部が外反する。83・84は口縁部が内彎する。85は口唇部は肥厚し、口唇部に沈線が巡る。86～92は浅鉢である。86は口縁部が外反し、胴部が張るもので、口唇部が肥厚する。胎土に長石粒を含み、焼成は良好で、にぶい黄褐色(10YR5/4)を呈する。87は口縁部が内彎し、口唇部がさらに内傾する。口縁部は肥厚し、隆帯が伴う。89は推定口径42.0㎝を測る。口縁部は外反し、胴部は内彎気味に張る。内外面とも横位のヘラナデ成形で、外面は幅4mm前後の工具を使用している。胎土に長石粒をわずかに含み、焼成は良好で、色調はにぶい黄褐色(10YR6/3)を呈する。90は波状口縁を呈し、口唇部は外側に大きく突出し、口縁部は外反する。胴部は内彎気味に立ち上がる。口唇部に沈線による区画紋が施紋されている。胎土に長石粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。91・92は底部破片。91は体部が大きく開く。胎土に長石・石英粒を多く含む。焼成は良好で、色調はにぶい黄褐色(10YR5/4)

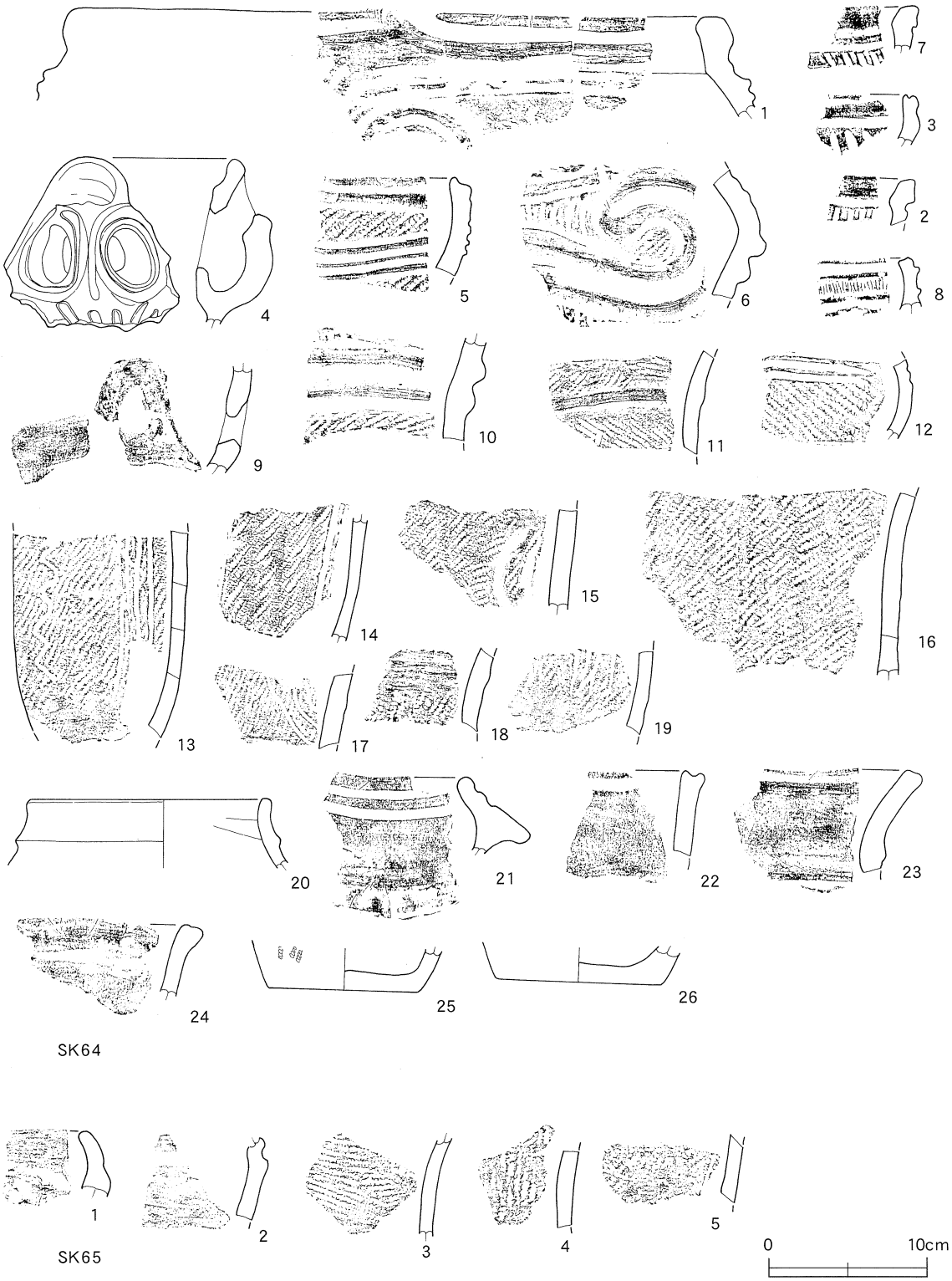


Fig.59　土坑SK64・65出土土器

を呈する。92は体部の立ち上がりは高く、外面は横位のヘラナデが顕著である。胎土に長石・石英粒をわずかに含み、焼成は良好で、色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。93は口縁部上部を欠損する手捏土器である。径は6.5㎝、現存器高2.5㎝を測る。胎土に長石粒をわずかに含む。焼成は良好で、色調はにぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する。内面には赤色顔料の付着が見られる。

土坑SK72出土土器 (Fig.64－1～5)

Fig.64－1は口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。口唇部下は無紋で、沈線の伴う隆帯が区画紋となり、地紋に単節LR縄紋横位施紋している。2は口縁部は直行し、口唇部が肥厚する深鉢。口縁部は縦位の沈線を充填する。3も口唇部がわずかに肥厚する深鉢で、口唇部下から縄紋施紋される。4・5は浅鉢の底部破片。

土坑SK73出土土器 (Fig.64－1～12)

Fig.64－1～5は口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。沈線の伴う隆帯による枠状区画紋で、縄紋施紋を充填する。6は口唇部が肥厚し、口縁部は直行する。7は小さく外反する深鉢。9は口縁部が直行する深鉢でわずかに外反する。10は手捏土器である。推定口径7.8㎝、器高1.5㎝、底径7.0㎝を測る。平底で、体部がわずかに外傾する。胎土に長石粒をやや多く含み、焼成は良好で、色調は明赤褐色(5YR5/6)を呈する。11は体部は直線状に大きく開き、口縁部は肥厚し、内面に稜を有する浅鉢。内外面ともヘラナデ成形は丁寧である。12も浅鉢の口縁部破片。口唇部内面に沈線による区画紋をもつ。内外面ともヘラナデ成形は緻密である。

土坑SK74出土土器 (Fig.64－1～14)

Fig.64－1～8は口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。沈線の伴う隆帯による枠状区画紋で、1は隆帯による渦巻紋が施紋され、7・8は沈線の伴う隆帯によって渦巻紋が描出される。また区画内は縄紋施紋を充填する。9は口唇部がわずかに肥厚し、口縁部が直行する深鉢。口唇部下より縄紋施紋される。10・13は無紋で、口縁部はほぼ直行する。11・12・14は深鉢の底部破片。11は縄紋施紋に3条単位の垂線が懸垂する。12は単節RL縄紋が縦位施紋され、底面がやや上げ底状をなす。胎土に長石粒をわずかに含み、焼成は良好。色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。

土坑SK75出土土器 (Fig.65－1～3)

Fig.65－1は深鉢の口縁部の破片。沈線の伴う隆帯によって区画され、区画内は縄紋施紋。2は深鉢の胴部破片。横位の3本単位の沈線が巡る。3は深鉢の底部破片。底面には網代痕が残置している。

土坑SK76出土土器 (Fig.65－1～6)

Fig.65－1は橋状把手部分の破片。波頂部には沈線による渦巻紋が、円孔の周辺には沈線が巡る。2は深鉢の胴部破片。連続爪形紋が施された隆帯が渦巻状を呈している。3は口唇部が肥厚し、口縁部が外反する深鉢。口唇部下より単節LR縄紋が縦位施紋されている。4・5は深鉢の胴部破片。縄紋地紋に沈線が垂下する。6は縄紋施紋の深鉢。

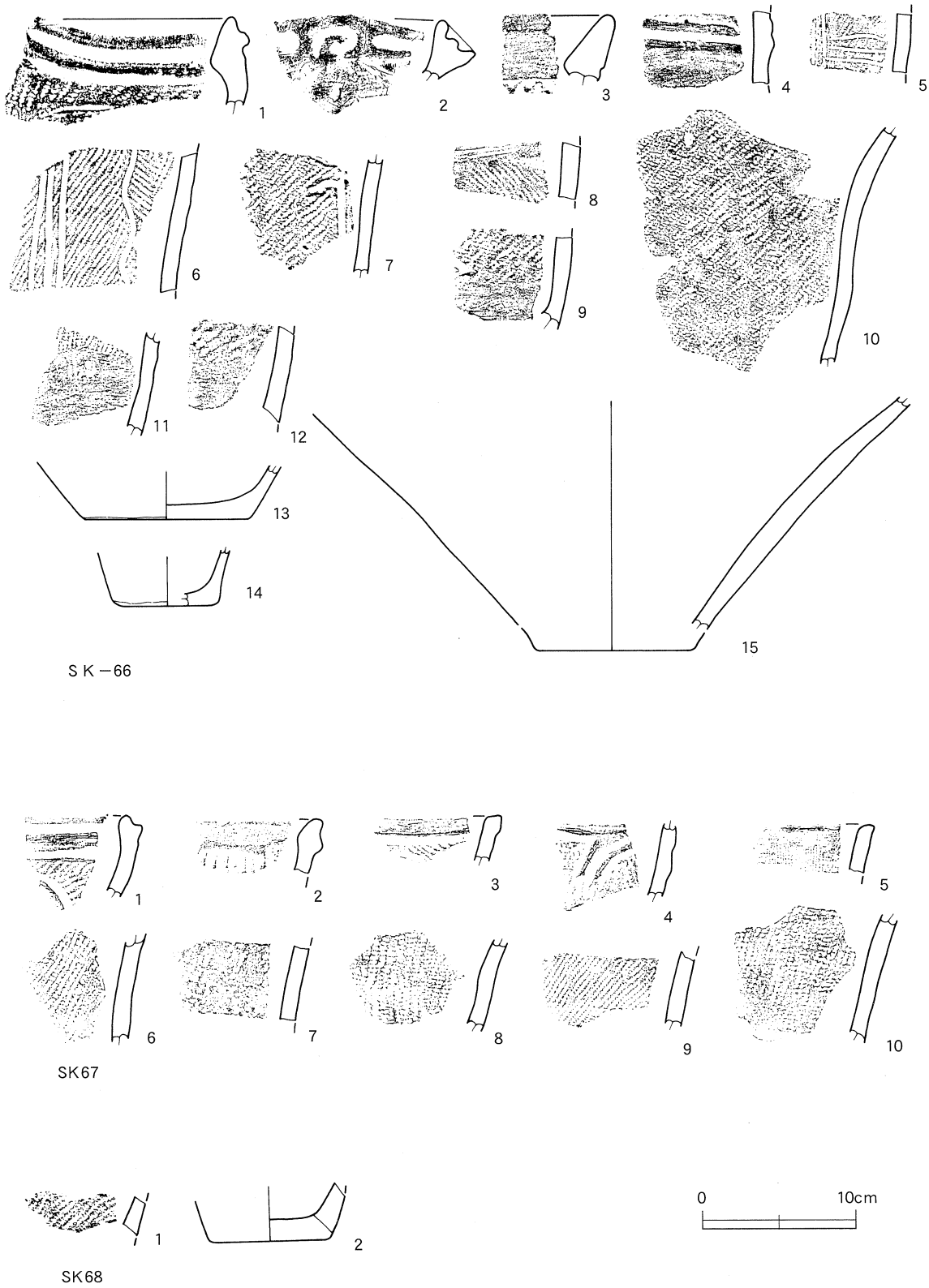


Fig.60　土坑SK66・67・68出土土器

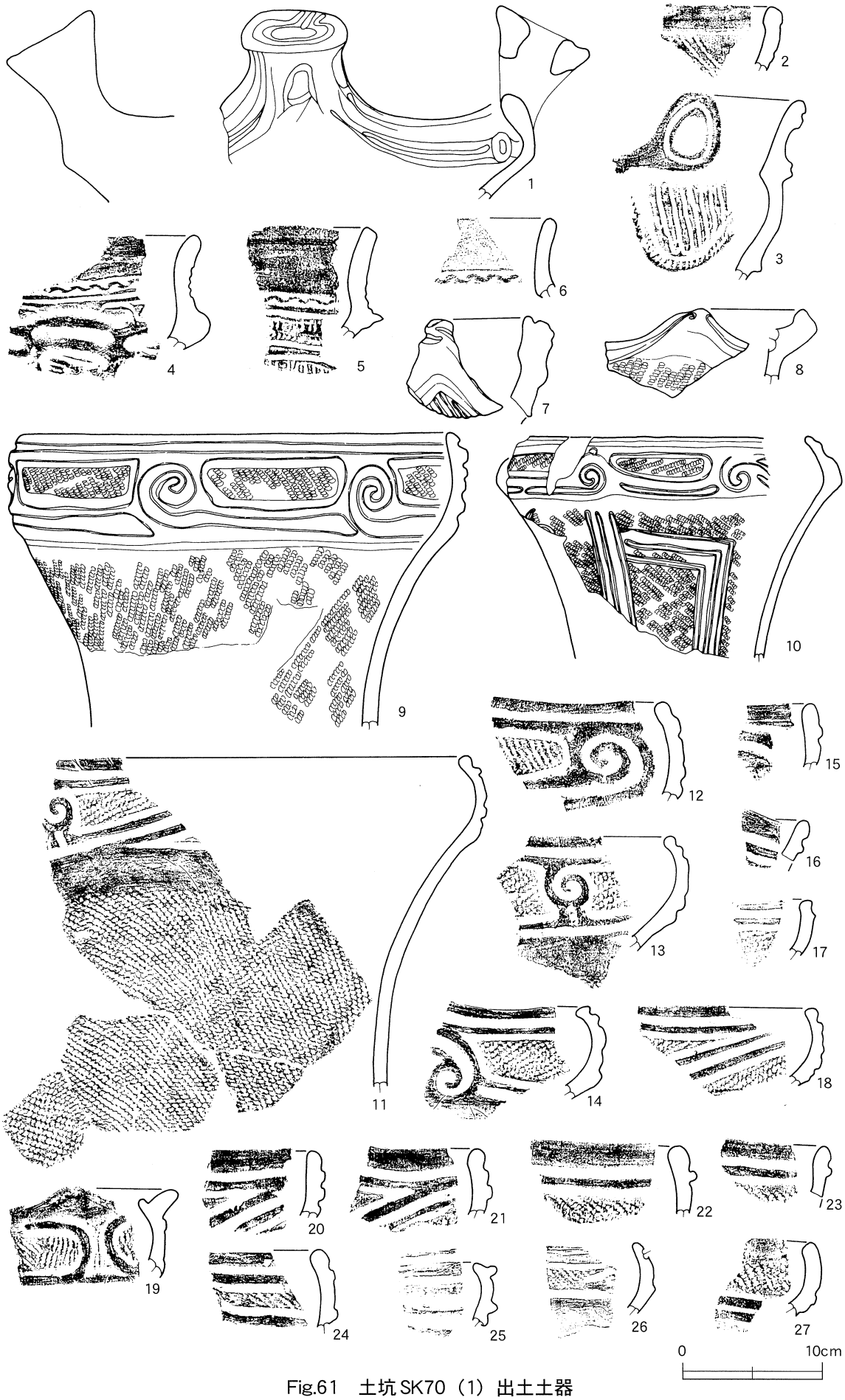


Fig.61　土坑SK70（1）出土土器

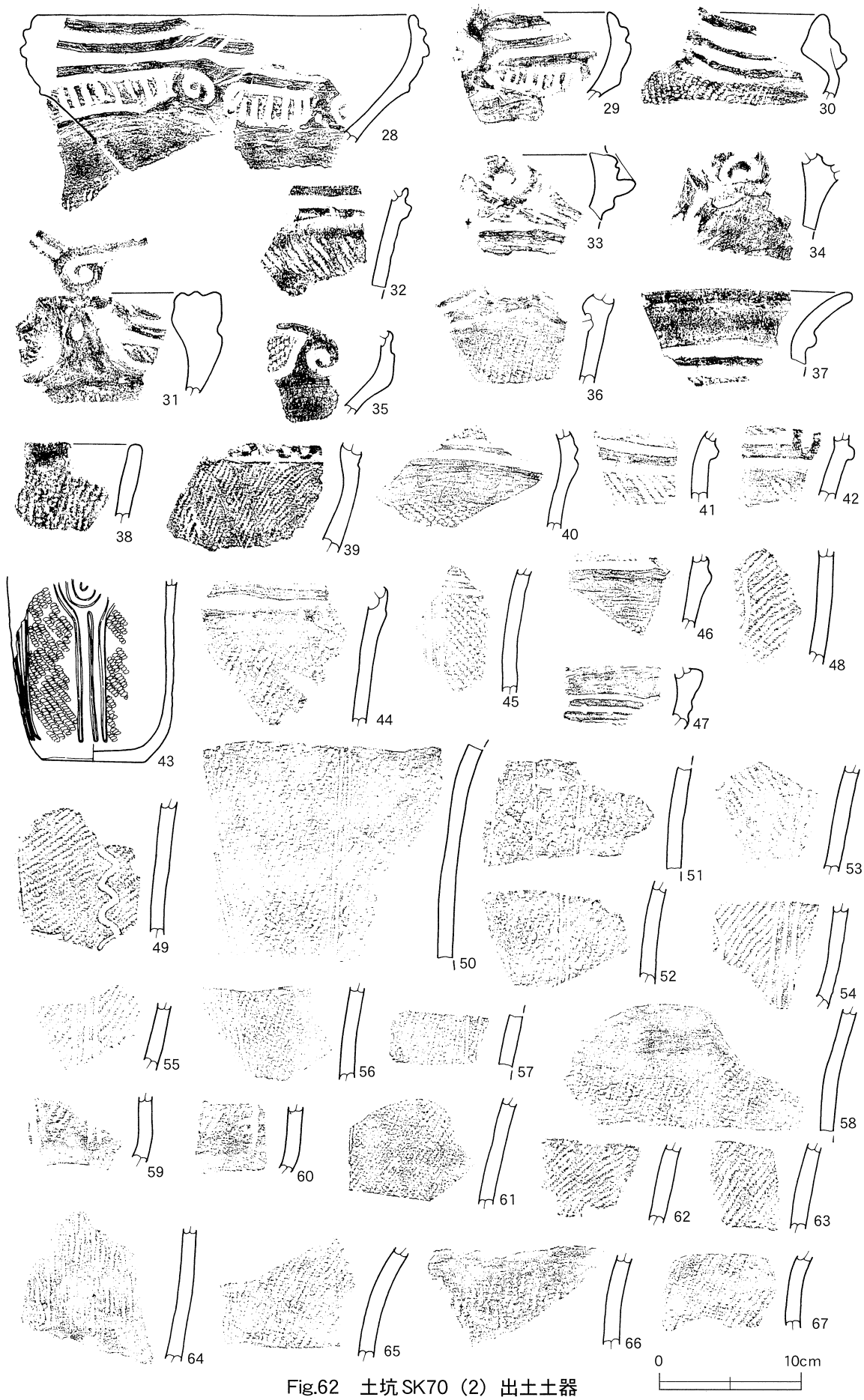


Fig.62　土坑SK70（2）出土土器

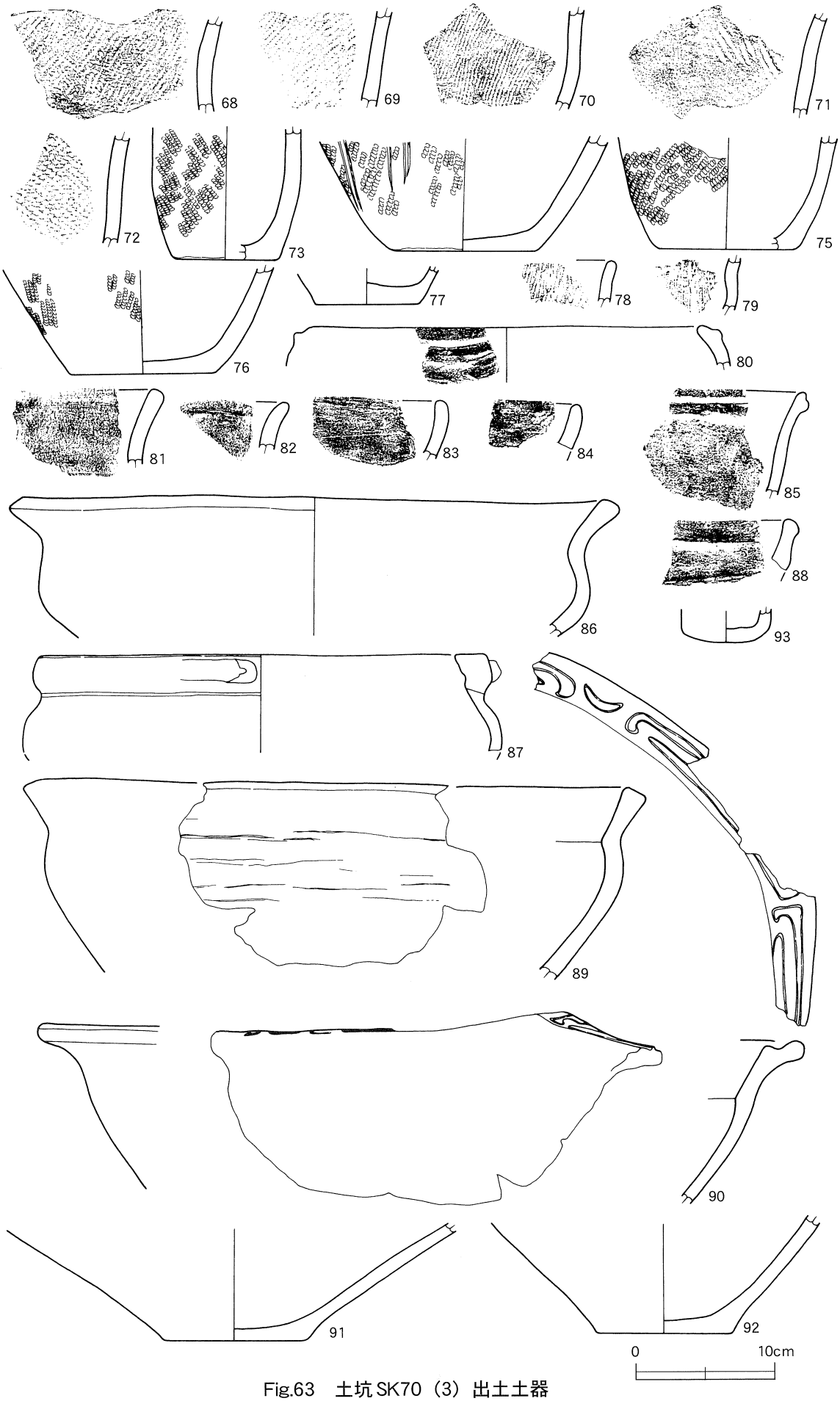


Fig.63　土坑SK70（3）出土土器

土坑SK77出土土器（Fig.65－1～10）

Fig.65－1は阿玉台式。内彎する口縁部に、口唇部はわずかに外反する深鉢。口縁部に有節沈線による枠状区画紋が表出される。2・3は口縁部が内彎する深鉢。沈線を伴う隆帯により渦巻紋が描出される。4は口縁部が外方へ開く深鉢。沈線を伴う隆帯による区画紋内に縦位の沈線が充填する。5は口縁部わずかに外反する深鉢。口唇部下から縄紋施紋される。6は胴部破片。縄紋施紋に沈線による区画紋が施されている。7～10は縄紋施紋の深鉢の胴部破片。

土坑SK78出土土器（Fig.65－1～22）

Fig.65－1は口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。沈線の伴う隆帯による枠状区画紋が表出され、区画内に単節RL縄紋が施紋される。2・3は波状口縁の深鉢。口唇部が肥厚する。口唇部に沈線による渦巻紋が施紋される。口縁部には沈線が充填される。4は橋状把手が伴うキャリパー形の深鉢。口縁部は内彎し、口唇部がわずかに外反する。口縁部には横位の隆帯による波状紋が施紋され、区画内に沈線が充填する。5は口縁部付近の破片。沈線による区画紋が施紋されている。6は口縁部が内彎する深鉢。口唇部に沈線が巡り、縄紋施紋される。7は口縁部が直行して立ち上がり、隆帯によって区画される。口縁部は単節LR縄紋を横位に施紋される。8は口縁部がわずかに内彎する。口縁部に横位の沈線紋が施されている。9は口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。沈線区画によって縄紋が充填する。10は口唇部に太凹帯が巡る深鉢。11は深鉢の胴部破片。2条隆帯による曲線区画紋が配される。12は口唇部は外側に突出し、沈線による楕円形区画紋が施紋される。13は口縁部付近の破片。沈線による渦巻紋が表出される。14は深鉢の胴部破片。隆帯によって区画される。15は縄紋地紋に沈線が懸垂する。16・17は深鉢胴部破片。縄紋施紋。18・19は深鉢の無紋土器。20～22は浅鉢。ふわは口縁部が大きく外反する。21は体部が開き、口縁部は大きく外反する。口唇部は肥厚し、太凹帯が巡る。22は口縁部が内彎する。

土坑SK79出土土器（Fig.66－1～10）

Fig.66－1は波状口縁を呈する深鉢。体部は緩く張りながら頸部括れ、口縁部は外反する。口唇部に太凹帯が巡り、口縁部を無紋とし、交互刺突紋を区画紋に胴部は単節RL縄紋を地紋に蛇行沈線を懸垂する。胎土に長石・石英粒をわずかに含み、焼成は良好。色調は褐色(7.5YR4/3)を呈する。2は口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。沈線を挟む2条隆帯による区画内に変形クランク紋を施し、さらに波状沈線を横走させる。3・4は縄紋地紋に沈線による懸垂が施されている。5～8は縄紋施紋の深鉢胴部破片。9は深鉢の胴部下半部。単節RL縄紋の縦位施紋を地紋に蛇行沈線を垂下させる。胎土に長石粒をわずかに含み、焼成は良好。色調はにぶい褐色(10YR5/4)を呈する。10も深鉢の胴中位から底部。単節RL縄紋を施す。胎土に長石粒をわずかに含み、焼成は良好。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。

土坑SK80出土土器（Fig.66－1～6）

Fig.66－1は口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。口縁部は沈線を挟む2条隆帯による楕円形区画紋とこれらの隆帯と連結した鉤状紋をもつ。頸部は無紋帯をなし、胴部は2条の直沈線と波状沈線によって区画紋とする。胴部は単節RL縄紋の縦位施紋。胎土に長石・石英粒を含み、焼成は良好。色調はにぶい赤褐色(5YR4/4)を呈する。2は口縁部が内彎し、口唇部が外反するキャリパー形の深鉢。口縁部は隆帯による

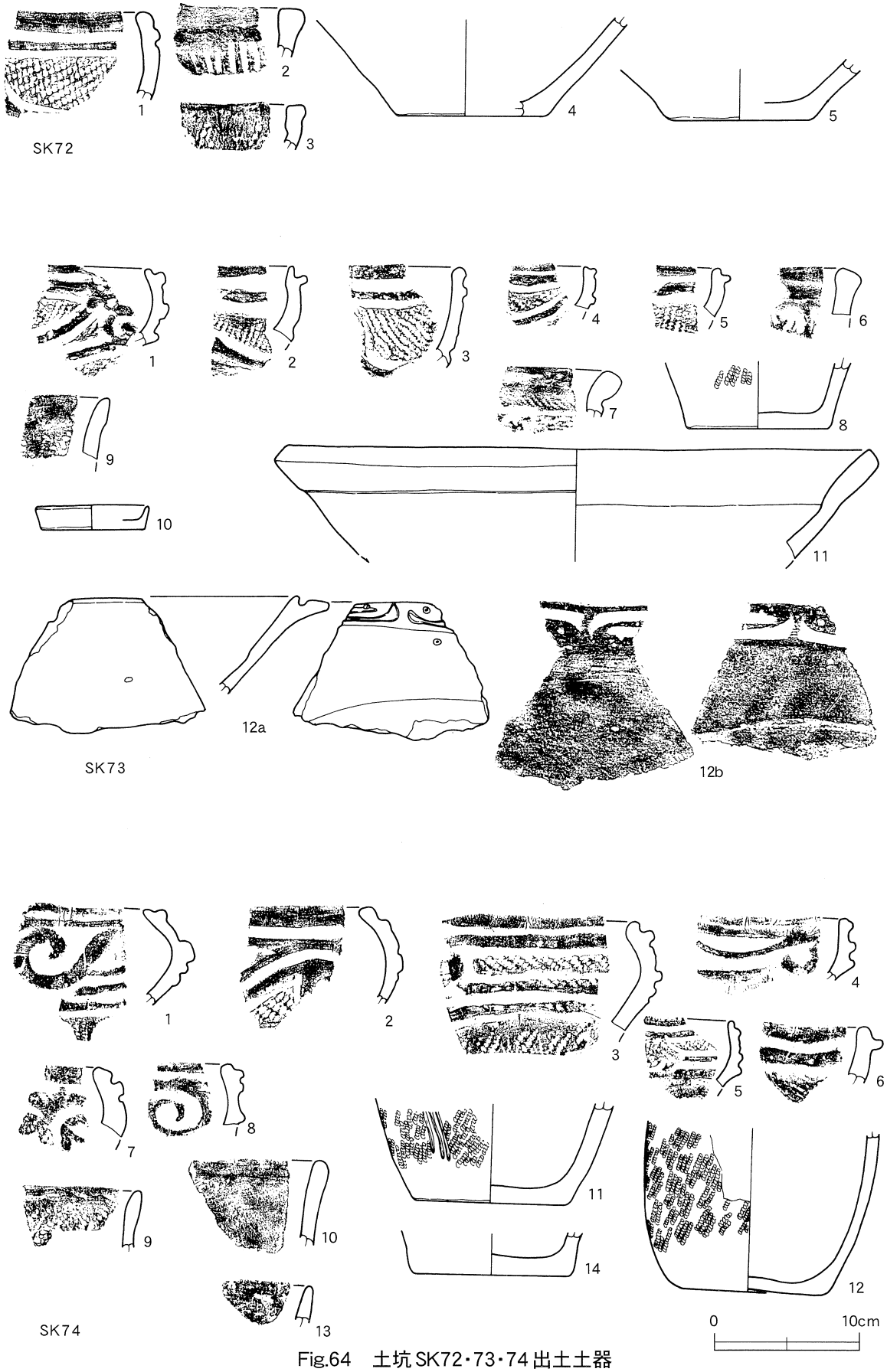


Fig.64　土坑SK72・73・74出土土器

渦巻紋を施す。3は口縁部が直行する深鉢。口縁部の区画に微隆帯が巡る。4は単節RL縄紋に2条単位の垂線が懸垂する。5・6は縄紋施紋の深鉢で胴部破片である。

土坑SK82出土土器 (Fig.66－1～4)

Fig.66－1・2は口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。沈線を挟む2条隆帯による区画紋が施されている。3は頸部付近の深鉢。縄紋地紋に区画紋の隆帯が施されている。4も深鉢の胴部破片。単節RLの縦位施紋を地紋に2条単位の垂線が懸垂する。

土坑SK83出土土器 (Fig.66－1～3)

Fig.66－1は深鉢の胴部破片。沈線を挟む2条隆帯が懸垂する。2は横位の2条隆帯を区画紋に地紋は櫛歯状工具による縦位の条線が施されている。3は縄紋施紋の胴部破片。

土坑SK84出土土器 (Fig.66－1・2)

Fig.66－1・2は深鉢の胴部破片。縄紋地紋に横位の沈線区画される。

土坑SK85出土土器 (Fig.67・68－1～57)

Fig.67－1は口径33.2㎝、現器高25.8㎝を測る。胴部がわずかに張り口縁部は内彎し、口唇部でわずかに立ち上がるキャリパー形の深鉢。口縁部は沈線を挟む縄紋施紋の隆帯が渦巻状に連結し、頸部の隆帯区画紋内には縦位の沈線を充填する。胴部は単節RL縄紋の縦位施紋。胎土に長石・石英・雲母粒をわずかに含み、焼成は良好。色調は暗褐色(7.5YR3/3)を呈する。2・5も口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。突起を有する。口唇部に太凹帯と波頂部に渦巻紋を連携させ、口縁部は隆帯区画内に横位の波状隆帯が巡る。胴部は縄紋施紋。胎土に長石・石英粒を含み、焼成は良好。色調は褐色(7.5YR4/3)を呈する。3も口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。沈線を挟む2条隆帯によるクランク状渦巻紋を配する。地紋に単節RL縄紋を施紋する。4は口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。山形突起をもつ波状口縁で、2条隆帯による区画内に変形クランク紋を配し、縦位の沈線を充填する。6は口唇部が内削状を呈し、口縁部が内彎する。交互刺突紋が区画紋として巡る。7は口唇部が短く外反する。隆帯による区画紋をもつ。8～10は口唇部が肥厚し、連続爪形紋をもつ隆帯が区画紋をなす。11は口唇部が肥厚し、内削状を呈する。口縁部は内彎する深鉢。平行する沈線が区画紋をなす。12は口縁部内彎する深鉢。口唇部に沿って沈線が巡る。13・14は波状口縁を呈する深鉢。13は口縁部が内彎し、口唇部に太凹帯が巡り、波頂部に渦巻紋を施す。口縁部は沈線による区画紋を配する。14は口唇部に沈線が巡る。15は頸部付近の破片。隆帯による区画紋をもつ。16は小突起を有する深鉢。突起に円孔が穿ってある。口縁部は隆帯による区画紋を配する。17は口唇部が肥厚する。口唇部に沈線による渦巻紋を施紋する。18も口唇部が肥厚し、交互刺突紋が巡る。19～21は隆帯を施紋する深鉢の胴部破片。22～24は縄紋地紋に沈線が懸垂する。25は把手破片。刻み目のもつ隆帯が渦巻き状に施されている。26は縄紋施紋の底部付近の破片。27は頸部は括れ、口縁部は直行して立ち上がる深鉢。器面全面縄紋施紋。Fig.68－28～39は深鉢胴部破片。39は底部付近の破片。40は口唇部は肥厚し、口縁部が内傾する。41・47・48は口縁部が緩く外反する深鉢。42～45は口唇部が肥厚する深鉢。41・42は口唇部に太凹帯が巡る。46は口唇部が短く内彎する。49～51は浅鉢の口縁部破片。

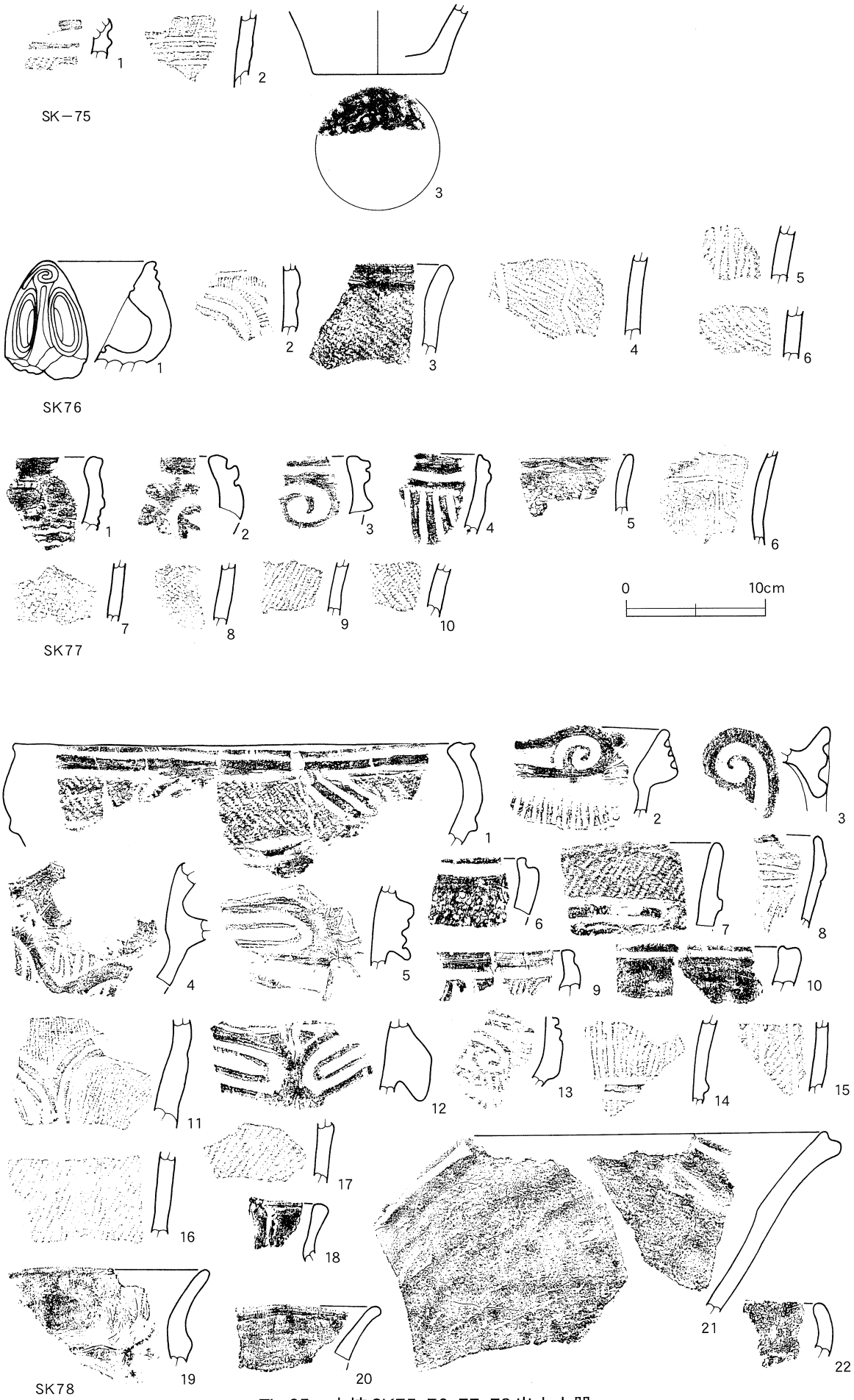


Fig.65　土坑SK75・76・77・78出土土器

49は波状口縁で、口唇部が肥厚する。50も波状口縁で、口唇部に沈線が巡る。51は口唇部内面に沈線による渦巻紋を巡らす。52～57は深鉢底部破片。55は底面に網代痕が残置している。

土坑SK86出土土器（Fig.69～71－1～83）

Fig.69－1は口唇部が内彎し、口縁部は直行する。口唇部に刻み目のもつ隆帯が巡り、ここから2条隆帯が垂下する。2は口縁部が内彎する深鉢。刻み目をもつ隆帯が区画紋をなす。3は深鉢胴部破片。連続爪形紋をもつ隆帯が区画紋をなす。4は小突起をもつ波状口縁をなすキャリパー形の深鉢。胴部は筒形を呈し、口縁部は内彎する。口縁部は隆帯により区画され、区画内は隆帯による渦巻紋とクランク紋を配する。胴部は3条単位の垂線を懸垂させ、蛇行沈線を垂下させる。地紋は単節RL縄紋を縦位施紋する。胎土に長石粒を多く含み、焼成は良好。色調はにぶい黄褐色(10YR4/3)を呈する。5は胴部は筒形をなし、口縁部は内彎し、口唇部は短く立ち上がる。口縁部は隆帯による区画内に2条隆帯を垂下させ区切れ紋とし、さらに変形クランク紋を配する。胴部も2条隆帯を懸垂する。地紋はRL縄紋を施紋する。胎土に長石・石英粒をわずかに含み、焼成は良好。色調は褐色(7.5YR4/3)を呈する。6も口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。沈線を挟む2条隆帯による変形クランク紋が配される。胎土に長石粒を含み、焼成は良好。色調は褐色(7.5YR4/3)を呈する。7・25は胴部が筒形を呈し、隆帯による区画内に隆帯による波状紋を巡らす。地紋はRL縄紋を施紋する。8～10は波状口縁をなす深鉢。8は橋状把手に円孔が穿ってある。円孔の周辺には沈線が巡る。口縁部は隆帯区画内に縦位の沈線が充填する。胴部は波頂部から2条沈線を垂下させる。9は波頂部に沈線による渦巻紋をもつ。10も口唇部に沈線による渦巻紋を巡る。頸部は無紋で胴部は縄紋施紋。11は円形突起で円孔の周辺に沈線を巡る。12は口縁部が内彎し、太凹帯が巡る。13～23は口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。13～18は沈線を挟む隆帯による枠状区画紋と渦巻紋が連携する。区画内は縄紋施紋。19～22は区画内に沈線が充填する。24・26～28は口唇部が肥厚する深鉢。24・27・28は口唇部に沈線が巡る。29は口唇部が肥厚する深鉢。口唇部は単節LR縄紋を施紋する。30・33は口唇部が立ち上がり、無紋帯をもつ。31は隆帯が巡る。32は口唇部下に太凹帯を巡らす。Fig.70－34～36は胴部が筒形で、口縁部はわずかに外反する。口縁部は無紋帯で、胴部は単節RL縄紋の縦位施紋。34は胎土に長石・石英粒を含み、焼成は良好。色調は褐色(7.5YR4/3)を呈する。37は胴部中位の破片。地紋に単節RL縄紋を縦位施紋し、2条単位の垂線を懸垂した間に、1条の蛇行沈線を垂下させ、さらに短状のS字状沈線を加える。胎土に長石・石英粒を含み、焼成は良好。色調は褐色(7.5YR4/3)を呈する。38も胴部中位の破片。地紋に単節RL縄紋を縦位施紋し、2条単位の垂線を懸垂する。胎土に長石・石英粒を含み、焼成は良好。色調はにぶい黄褐色(10YR5/4)を呈する。39・40は深鉢の胴部破片。地紋に単節RL縄紋を縦位施紋し、2条単位の沈線による渦巻紋、曲線紋を施紋する。41～47も深鉢の胴部破片。縄紋地紋に横位の隆帯の区画紋。41～43・45は沈線を挟む2条隆帯。48～57は縄紋地紋に沈線による懸垂紋が施されている。48は2条単位の横位の沈線区画紋に2条単位の垂線紋を垂下させる。49は曲線紋。50は蛇行沈線を垂下させる。51～57は2条単位の垂線を懸垂させる。58～61・63～68は深鉢で、縄紋施紋の胴部破片。62は縄紋地紋に横位の波状沈線を施紋する。69～74は深鉢の底部付近の破片。69は筒形の体部が直線的に立ち上がる胴部をもち、単節RL縄紋を縦位施紋する。胎土に長石・石英粒を含み、焼成は良好。色調は褐色(7.5YR4/3)を呈する。70も単節RL縄紋を縦位施紋する。胎土に長石・石英粒を含み、焼成は良好。色調は褐色(7.5YR4/3)を呈する。74は底面に木葉痕を残置する。胎土に長石粒をわずかに含み、焼成は良好。

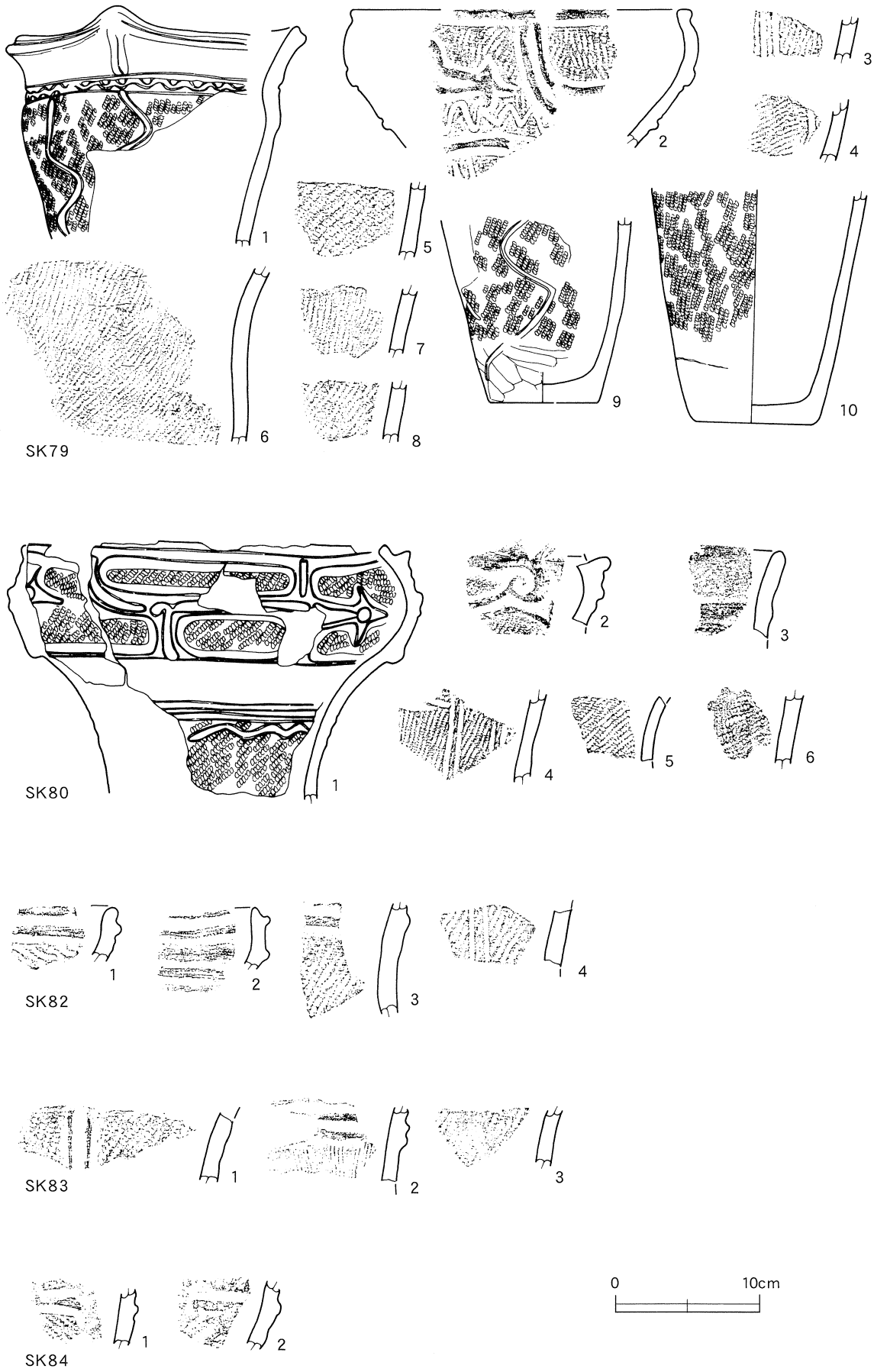


Fig.66　土坑SK79・80・82・83・84出土土器

色調は褐色(7.5YR4/3)を呈する。75・76は櫛歯状工具による条線が施紋された胴部破片。75は横位に、76は縦位の波状に施紋している。Fig.71－77～79・81は口縁部が無紋帯の深鉢。77は口縁部がわずかに外反する。78は口縁部が直行して立ち上がり、79は口縁部がわずかに内彎する。81は口唇部に沈線が巡る。80・82・83は浅鉢の口縁部破片。82は口縁部は内彎し、口唇部が肥厚しながらわずかに直行する。

土坑SK87出土土器 (Fig.71－1～5)

Fig.71－1は口縁部が内彎する深鉢。口唇部下に沈線が巡り区画紋とし、縦位の沈線が充填する。2～5は単節RL縄紋の縦位施紋を地紋に3条単位の垂線を垂下させる。

土坑SK88出土土器 (Fig.71－1・2)

Fig.71－1は口縁部が直行する深鉢。地紋に単節RL縄紋を施紋する。2は深鉢の胴部破片。

土坑SK89出土土器 (Fig.71－1～3)

Fig.71－1・2は沈線を挟む2条隆帯を区画紋とする深鉢の口縁部破片。3は無紋で浅鉢の破片。

土坑SK90出土土器 (Fig.71－1・2)

Fig.71－1は深鉢の頸部破片。隆帯による区画紋が施されている。2は単節RL縄紋の縦位施紋の深鉢胴部破片。

土坑SK91出土土器 (Fig.71－1～3)

Fig.71－1・2は深鉢の胴部破片。沈線を挟む2条隆帯の区画紋が施されている。地紋はRL縄紋。3は縄紋地紋に波状沈線を横走させる。

土坑SK94出土土器 (Fig.71－1～16)

Fig.71－1～3は阿玉台式。1は口縁部破片。口縁部はわずかに内彎し、口唇部で短く外反する。口唇部下に結節沈線紋を巡らす。2は口縁部がわずかに内彎し、口唇部は肥厚し、わずかに外反する。3は円形の把手で、把手部の周辺は縄紋施紋の隆帯が巡り、区画内は撚糸紋が充填される。4は波状口縁をもつ深鉢で、口縁部は外反し、さらに波頂部は直行して立ち上がる。波頂部は円形把手に沈線による区画紋。口縁部は縦位の短沈線が充填する。5は胴部中位から底部にかけての深鉢。胴部は筒形を呈し、単節RL縄紋を縦位施紋する。胎土に長石・石英粒をわずかに含み、焼成は良好。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。6・10は波状口縁を呈する深鉢。口縁部は内傾し、口唇部は大きく外反する。口唇部に沿って縄紋施紋の隆帯が巡り区画紋とし、区画内には交互刺突紋に縦位の沈線が充填する。7は口縁部が外傾する深鉢。口唇部に沿って縄紋施紋の隆帯が区画される。8・9は口唇部が肥厚し、小さく外反する。胴部は縄紋施紋。11・13・15は縄紋施紋の深鉢胴部破片。12は口唇部と口縁部下に刻み目を巡らす深鉢。14は深鉢の胴部破片で、隆帯が区画紋となる。16は連続爪形紋が施紋されている。

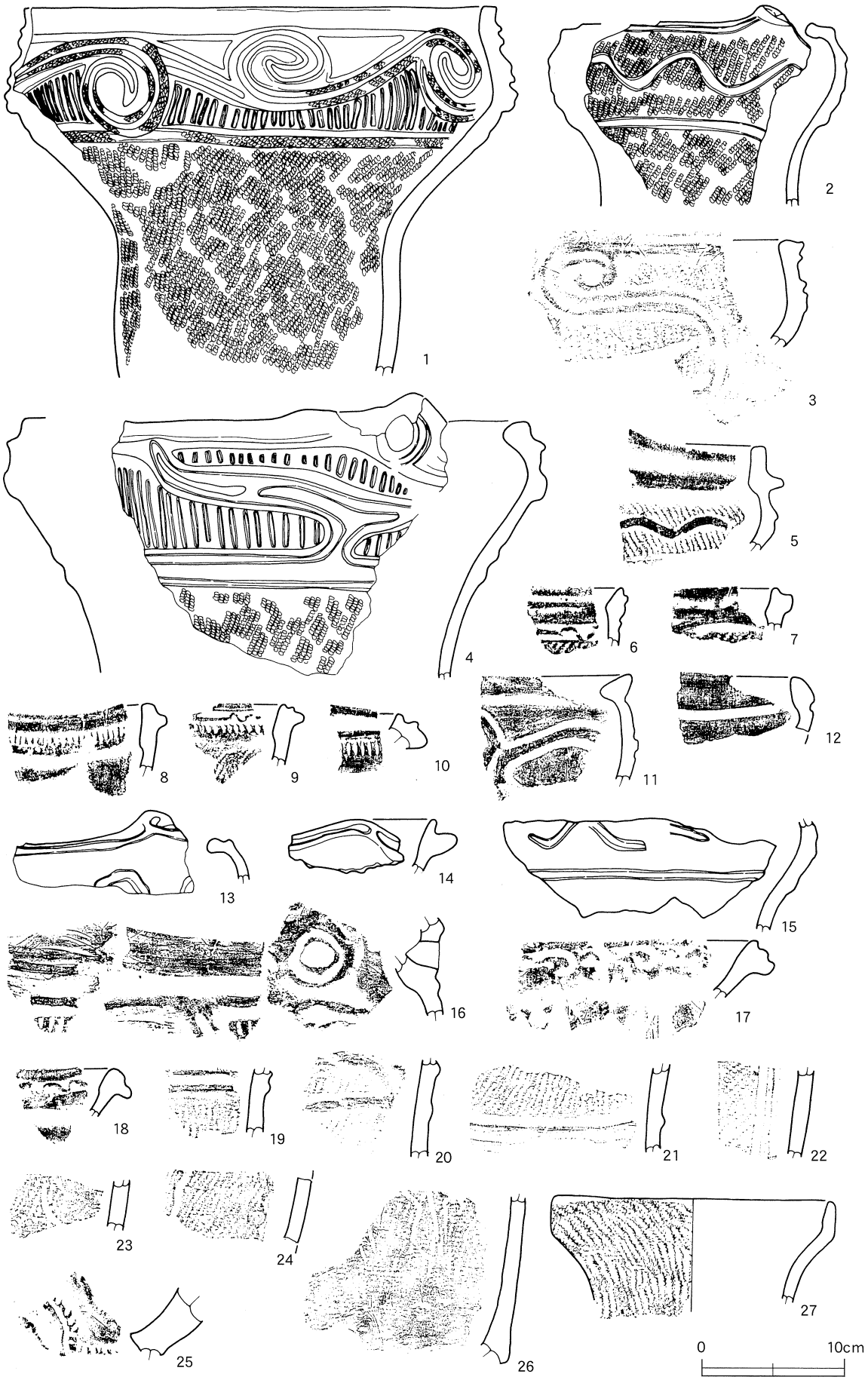


Fig.67　土坑SK85（1）出土土器

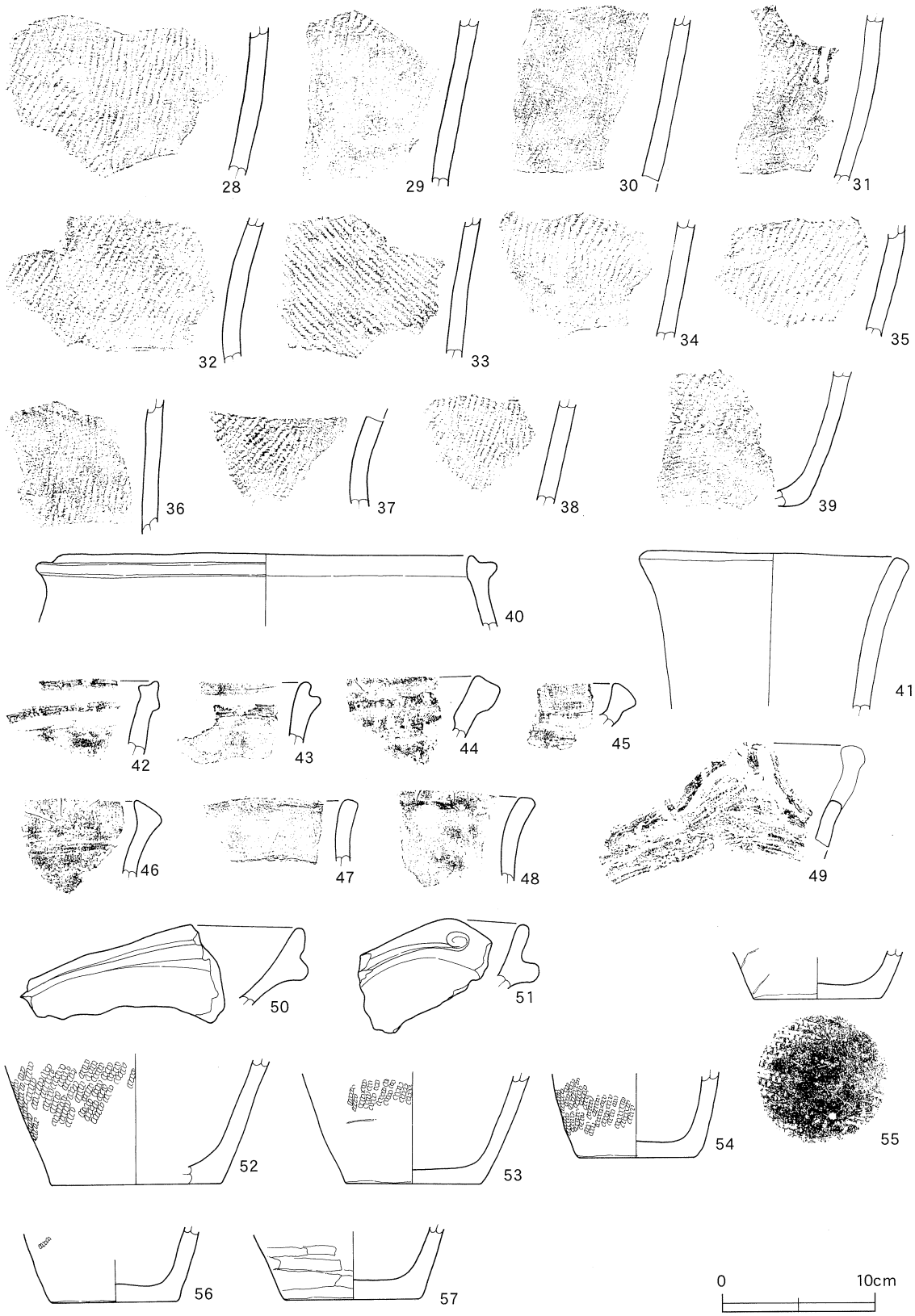


Fig.68　土坑SK85（2）出土土器

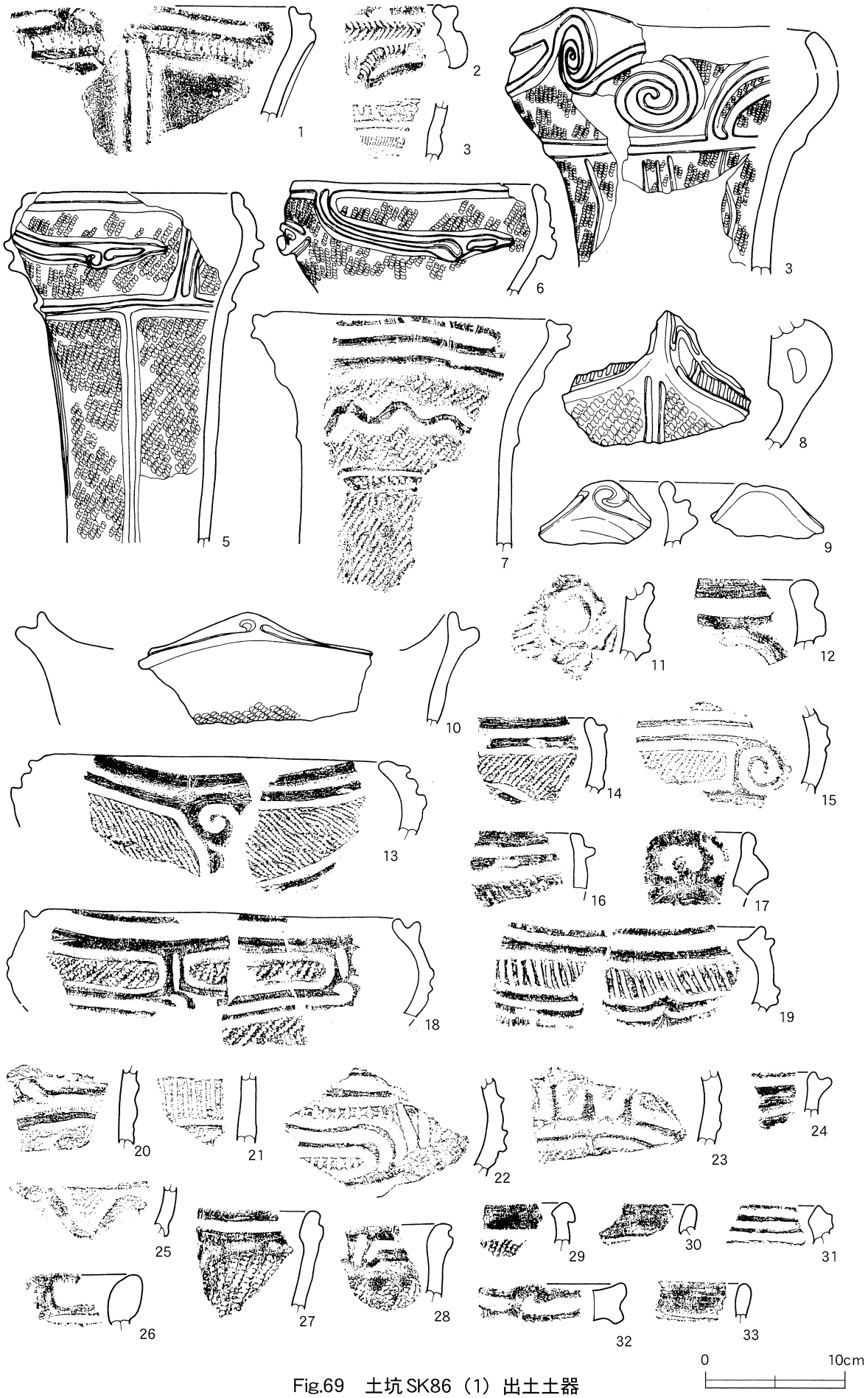


Fig.69　土坑SK86（1）出土土器

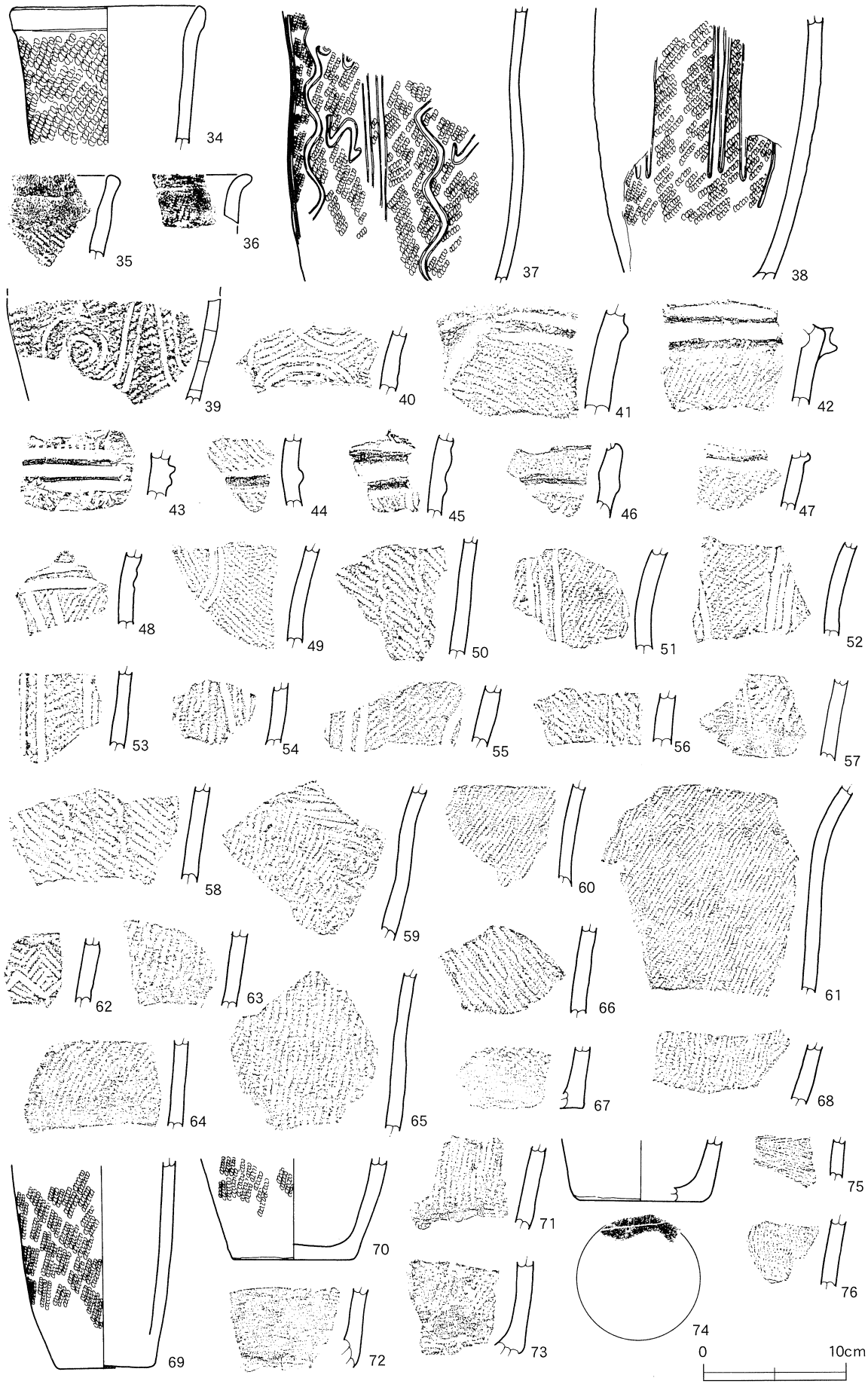


Fig70　土坑SK86（2）出土土器

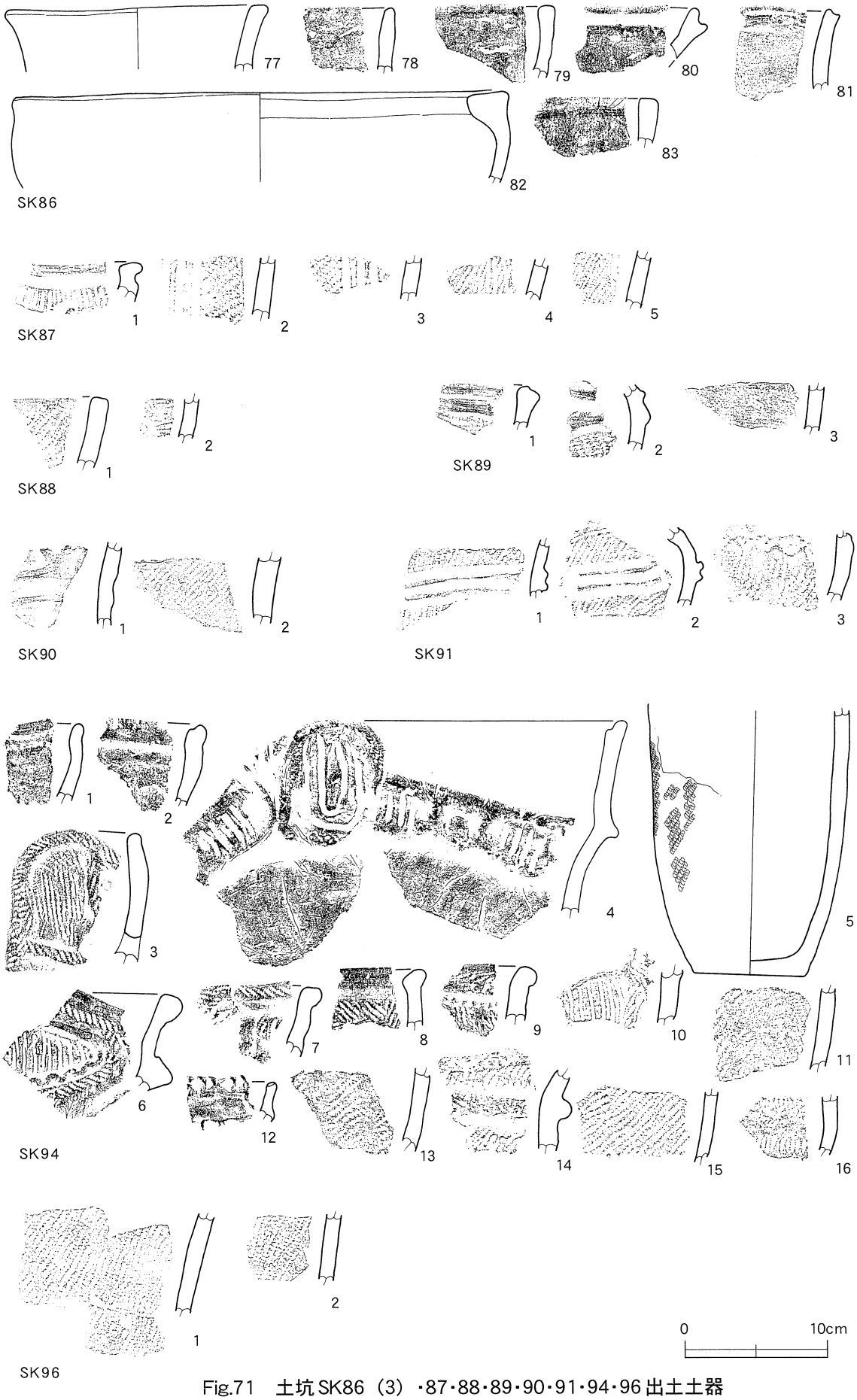


Fig.71　土坑SK86（3）・87・88・89・90・91・94・96出土土器

土坑SK96出土土器(Fig.71－1・2)

Fig.71－1・2は深鉢の胴部破片。単節RL縄紋を縦位に施紋している。

(小川和博)

5．土坑出土の土製品 (Fig.72－1～51)

各土坑から出土した土製品は土器片錘50点と土錘1点である。

a　土器片錘 (Fig.72－1～50)

土坑内から検出された土器片錘は50点を数え、先に竪穴住居跡に記載したとおり、いずれも土器破片を再利用して作出したものである。出土点数からみるとSK70からの出土が最も多く、20点ある。とくに出土状況は大きな差を見いだせないでいるが、1土坑から20点まとめて出土した意義は大きい。なお使用された土器の時期はすべて加曽利E式である。

なお、ここでいう土器片錘とはいうまでもなく土器の破片を板状に打ち欠いて端部のほぼ中央部にV字状の溝を切り込み、糸掛け部を作出したもので、錘りとして成形し焼成したものはない。多くの形態は4～5cm前後の土器片を素材として、土器片の周縁を打ち欠いて調整する打割整形を基本に周縁をさらに研磨調整を行うものもみられる。打割の形状は一辺が長い長方形もしくは楕円形が主体を占めている。また糸掛け溝のV字状切り込み位置は長軸の両端中央が大半である。

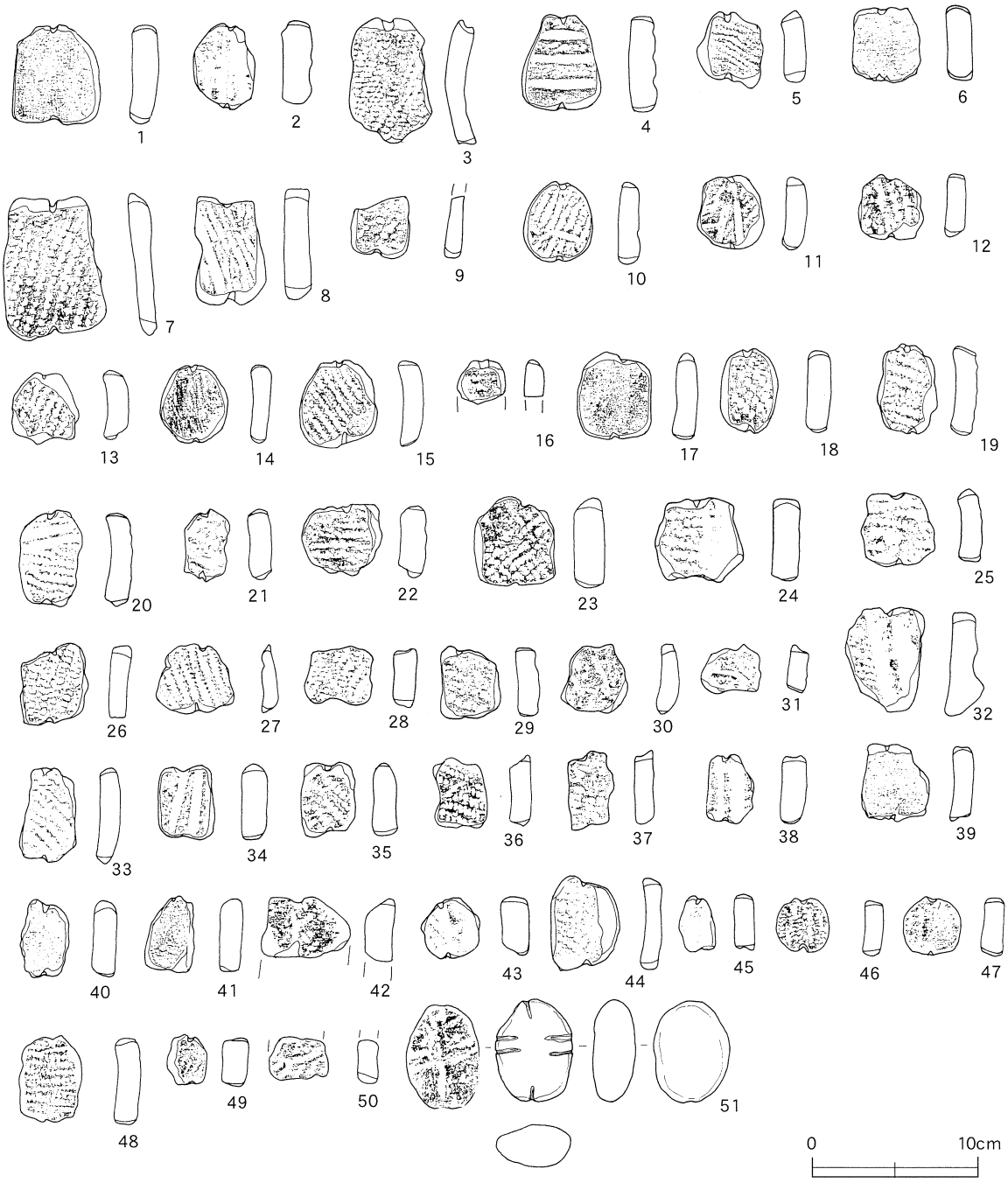
挿図番号	出土地点	形　状	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	加工状態	切り込み状況
Fig.72-1	SK03	長方形	4.40	4.00	1.31	22.5	打割	長軸1対
Fig.72-2	SK05	楕円形	3.85	2.07	1.36	14.5	打割	長軸1対
Fig.72-3	SK10	長方形	5.49	3.20	0.81	34.8	打割	長軸1対
Fig.72-4	SK10	不整長方形	4.15	2.37	1.17	14.4	打割	長軸1対
Fig.72-5	SK10	長方形	3.08	2.91	0.97	15.3	打割	長軸1対
Fig.72-6	SK10	長方形	3.35	3.05	1.15	21.8	打割	長軸1対
Fig.72-7	SK16	長方形	6.35	3.95	0.76	33.8	打割	長軸1対
Fig.72-8	SK16	長方形	4.93	2.90	1.15	34.6	打割	長軸1対
Fig.72-9	SK16	長方形	2.56	2.79	0.63	10.2	打割	長軸1対
Fig.72-10	SK26	楕円形	3.52	2.52	0.87	16.8	打割	長軸1対
Fig.72-11	SK37	楕円形	3.12	2.60	0.92	14.5	打割	長軸1対
Fig.72-12	SK47	楕円形	2.86	2.77	0.87	21.8	打割	長軸1対
Fig.72-13	SK49	楕円形	3.09	2.90	1.07	21.7	打割	長軸1対
Fig.72-14	SK49	楕円形	3.47	3.10	0.80	20.1	打割	長軸1対
Fig.72-15	SK52	楕円形	3.82	2.90	0.96	18.6	打割	長軸1対
Fig.72-16	SK52	楕円形	2.08	2.14	0.85	10.1	打割	長軸1対
Fig.72-17	SK58	長方形	3.87	3.38	1.14	19.5	打割	長軸1対
Fig.72-18	SK64	楕円形	3.71	2.52	1.05	15.4	打割	長軸1対
Fig.72-19	SK64	楕円形	4.10	2.79	1.05	18.2	打割	長軸1対
Fig.72-20	SK64	楕円形	4.18	2.87	1.01	14.8	打割	長軸1対
Fig.72-21	SK64	楕円形	3.16	1.88	1.00	11.5	打割	長軸1対

Fig.72-22	SK67	長方形	3.25	3.70	1.15	20.8	打割	短軸1対
Fig.72-23	SK70	長方形	(2.80)	4.00	1.35	11.7	打割	長軸1対
Fig.72-24	SK70	長方形	3.35	3.40	1.01	19.1	打割	長軸1対
Fig.72-25	SK70	長方形	3.25	3.35	1.02	18.6	打割	長軸1対
Fig.72-26	SK70	長方形	3.35	3.10	0.83	17.1	打割	長軸1対
Fig.72-27	SK70	長方形	3.02	3.48	0.79	16.5	打割	短軸1対
Fig.72-28	SK70	長方形	2.71	3.12	1.05	11.4	打割	長軸1対
Fig.72-29	SK70	長方形	3.30	2.70	1.05	12.2	打割	長軸1対
Fig.72-30	SK70	楕円形	3.64	4.05	1.18	18.8	打割	長軸1対
Fig.72-31	SK70	楕円形	2.38	2.59	0.85	10.5	打割	長軸1対
Fig.72-32	SK70	楕円形	4.80	3.51	1.42	21.8	打割	長軸1対
Fig.72-33	SK70	長方形	4.25	2.90	1.15	18.7	打割	長軸1対
Fig.72-34	SK70	長方形	3.45	2.60	1.21	11.1	打割	長軸1対
Fig.72-35	SK70	長方形	3.30	2.50	1.15	10.6	打割	長軸1対
Fig.72-36	SK70	長方形	3.14	2.25	1.05	11.1	打割	長軸1対
Fig.72-37	SK70	長方形	3.64	2.18	0.84	15.5	打割	長軸1対
Fig.72-38	SK70	長方形	3.07	2.15	1.06	10.4	打割	長軸1対
Fig.72-39	SK70	長方形	3.43	3.05	0.93	15.2	打割	長軸1対
Fig.72-40	SK70	楕円形	3.43	2.23	1.16	12.8	打割	長軸1対
Fig.72-41	SK70	楕円形	3.48	2.15	0.98	11.5	打割	長軸1対
Fig.72-42	SK70	楕円形	2.85)	4.00	1.35	8.8	打割	長軸1対
Fig.72-43	SK78	円形	2.54	2.77	1.28	8.7	打割	長軸1対
Fig.72-44	SK85	長方形	4.12	2.02	0.90	16.1	打割	長軸1対
Fig.72-45	SK85	長方形	2.38	1.58	0.94	5.6	打割	長軸1対
Fig.72-46	SK85	円形	2.48	2.44	0.85	8.1	打割	長軸1対
Fig.72-47	SK85	円形	2.74	2.68	1.04	6.5	打割	長軸1対
Fig.72-48	SK86	楕円形	3.91	2.82	1.15	11.4	打割	長軸1対
Fig.72-49	SK86	楕円形	2.30	1.79	1.25	9.2	打割	長軸1対
Fig.72-50	SK86	長方形	1.90	2.89	0.95	7.2	打割	長軸1対

Tab.2 土坑出土土器片錘一覧表

b　**土錘**（Fig.72－51）

土坑SK66覆土より出土。完形品である。形状は楕円形を呈し、表面に両頂部中央に1条の沈線と両縁に2条単位の沈線を施す。外形の大きさは長さ4.7cm、幅3.4cm、厚さ1.8cmを測る。胎土に長石・石英粒を含み、焼成は良好で、色調は橙色（7.5YR6/8）を呈する。



SK03 (1)
SK05 (2)
SK10 (3～6)
SK16 (7～9)
SK26 (10)
SK37 (11)
SK47 (12)
SK49 (13～14)
SK52 (15～16)
SK58 (17)
SK64 (18～21)
SK67 (22)
SK70 (23～42)
SK78 (43)
SK85 (44～47)
SK86 (48～50)
SK66 (51)

Fig.72　土坑出土土製品

6．土坑出土の石製品（Fig.73－1～11）

土坑から出土した石製品には磨石類と磨製石斧がある。

土坑SK01出土石器（Fig.73－1）

1は磨石。平面形は楕円形で、表裏両側面に連続的に摩滅している。長さ8.4cm、幅5.6cm、厚さ4.8cm、重さ280gを測る。

土坑SK02出土石器（Fig.73－2）

2は偏平礫を使用した磨石である。表裏面とも磨面が認められる。長さ10.6cm、幅5.8cm、厚さ4.2cm、重さ346gを測る。

土坑SK16出土石器（Fig.73－3）

3は側面を明瞭な面取りを行わず、刃部の表裏境界がそのまま続く磨製石斧である。長さ9.5cm、幅3.06cm、厚さ1.8cm、重さ79gを測る。

土坑SK52出土石器（Fig.73－4～6）

4は刃部の形状が撥形を呈する磨製石斧である。左右の面取りは不明瞭であるが、側縁の区画を施している。頂部はそのまま稜線に続き、刃部は裾広がりで、曲線を描く。長さ13.1cm、幅5.6cm、厚さ2.1cm、重さ182gを測る。5は蛤刃状に整形された刃部を呈する磨製石斧である。側縁の区画は不明瞭で、頂部は一部欠損部分はあるが、そのまま稜線に続く。長さ12.5cm、幅4.6cm、厚さ2.3cm、重さ168gを測る。6は磨石で、平面形状は楕円形で、断面形状も楕円形を呈する。表裏面および側面にも磨痕が認められる。長さ12.1cm、幅5.1cm、厚さ3.4cm、重さ298gを測る。

土坑SK56出土石器（Fig.73－7）

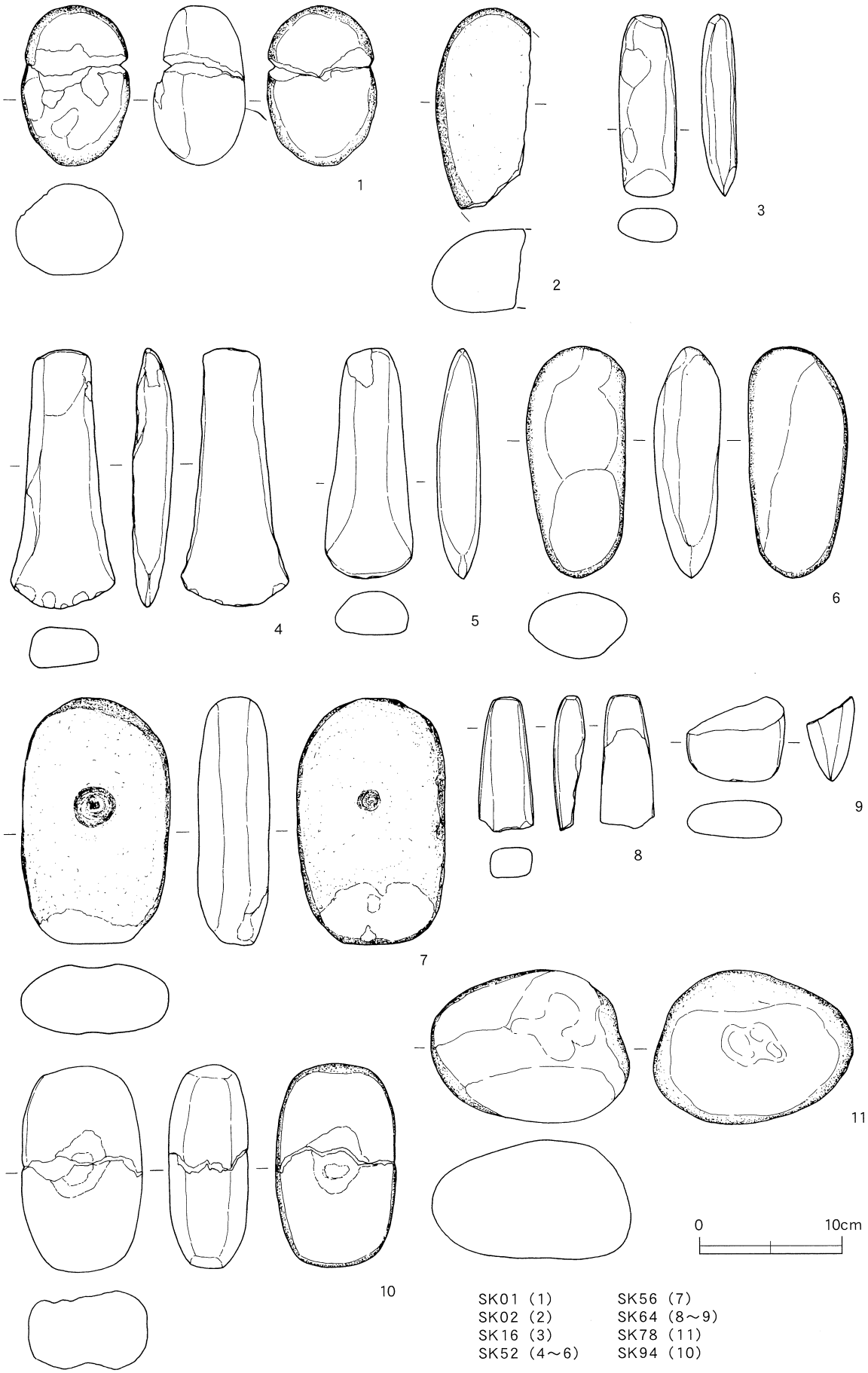
7は隅丸長方形を呈した磨石である。表裏全面、および側面に磨面が明瞭に認められ、表裏両面のほぼ中央にすり鉢状をなす小円孔が穿ってある。長さ13.0cm、幅7.8cm、厚さ3.7cm、重さ640gを測る。

土坑SK64出土石器（Fig.73－8・9）

8は刃部を欠損するものの、左右の側面を明瞭に面取りして表裏面との間に稜線を形成して区画する。定角型の小形磨製石斧である。長さ7.0cm、幅2.8cm、厚さ1.5cm、重さ45gを測る。9も刃部のみ残存するものの定角型の磨製石斧。左右の側縁は明瞭な面取りが行われ、刃部の表裏面の稜線がそのまま続く。現存長さ3.4cm、幅5.1cm、厚さ2.1cm、重さ58gを測る。

土坑SK78出土石器（Fig.73－11）

11はほぼ楕円形をなす自然礫を素材とした磨石類で、石器側縁にわずかであるが、使用痕が観察できる。長さ10.28cm、幅8.1cm、厚さ6.2cm、重さ695gを測る。



SK01 (1)
SK02 (2)
SK16 (3)
SK52 (4～6)
SK56 (7)
SK64 (8～9)
SK78 (11)
SK94 (10)

Fig.73　土坑出土石製品

土坑SK94出土石器 (Fig.73－10)

10は隅丸長方形を呈した磨石である。表裏全面、および側面に磨面が明瞭に認められ、表裏両面のほぼ中央にすり鉢状をなす小円孔が穿ってある。長さ10.7cm、幅6.3cm、厚さ4.2cm、重さ435gを測る。

7．遺構外出土遺物 (Fig.74～76)

今回の調査で縄紋土器をはじめとする縄紋時代の遺物が遺構外からも多量に出土した。また試掘調査の際、のちの本調査で明確な遺構出土と判断できない遺物についても遺構外遺物として処理した。また遺物量が多いため比較的遺存度のよい土器とそのほか土製品と石製品のすべてを図示した。

a.土器 (Fig.74･75－1～69)

Fig.74－1は口縁部が内彎し、橋状把手を有するキャリパー形の深鉢口縁部破片。円孔が穿ってある橋状把手の周辺には沈線が巡り、この把手を中心に沈線を伴う2条隆帯による渦巻楕円形区画をもち、区画内に縦位の沈線を充填する。頸部区画には沈線が巡る。2も橋状把手を伴う深鉢。口縁部は内彎し、口唇部でわずかに外反する。橋状把手は隆帯に刻み目を有し、円孔の周辺には沈線が巡る。口縁部は横位の短沈線と縦位の沈線が施紋されている。3・4は口縁部が内彎し、口唇部が短く外反する深鉢。3は交互刺突紋による区画紋。4は隆帯による区画紋に沈線が充填する。5～8は波状口縁を呈する深鉢。いずれも波頂部に沈線による渦巻紋が施されている。9・13は口縁部は枠状区画紋に、渦巻紋を付された突起をもつ。10～12は隆帯区画内に沈線が充填される。14～30は口縁部が内彎するキャリパー形の深鉢。沈線を挟む2条隆帯もしくは単隆帯による枠状区画紋と渦巻紋が接続する。31は口縁部が直行する深鉢。口縁部上部は無紋帯で、隆帯によって区画され、2単位の垂線が垂下する。32は口縁部が内彎し、口唇部か大きく外反する深鉢。りゅうたいによる区画紋が施されている。11は口縁部は内彎し、口唇部は平坦で、肥厚する。口唇部直下は沈線で区画される。34・35は沈線を挟む2条隆帯による区画紋。36～43は縄紋施紋の深鉢。36・40・42は口唇部で小さく外反する。44は胴部下半部で、単節RL縄紋を施紋している。45も胴下半部の深鉢。単節RL縄紋の縦位施紋である。46～60は深鉢の底部破片。46は垂線が懸垂されている。51～57は底面に網代痕が残置されている。61・62は無紋土器である。61は四山の波状口縁を呈する深鉢。口唇部が外反し、肥厚する。62は口縁部が内彎する。63～68は浅鉢である。63は胴部が大きく張り、口縁部は外反する。口唇部は肥厚し、外削状を呈する。64は内面で口縁部と胴部の境に稜をもつ。65は口唇部が内傾する。66・67は口唇部に沈線もしくは太凹帯による渦巻紋が施されている。68は口唇部は肥厚し、内面に口縁部との境に稜をもつ。69は器台の破片である。体部は内彎気味に延び、体部中央に円孔が穿ってある。

b.土製品 (Fig.76－1～26)

すべて土器片錘である。既記したとおり、形状等についてはほぼ同じ形態をもつ。

Fig.74　遺構外出土遺物（1）

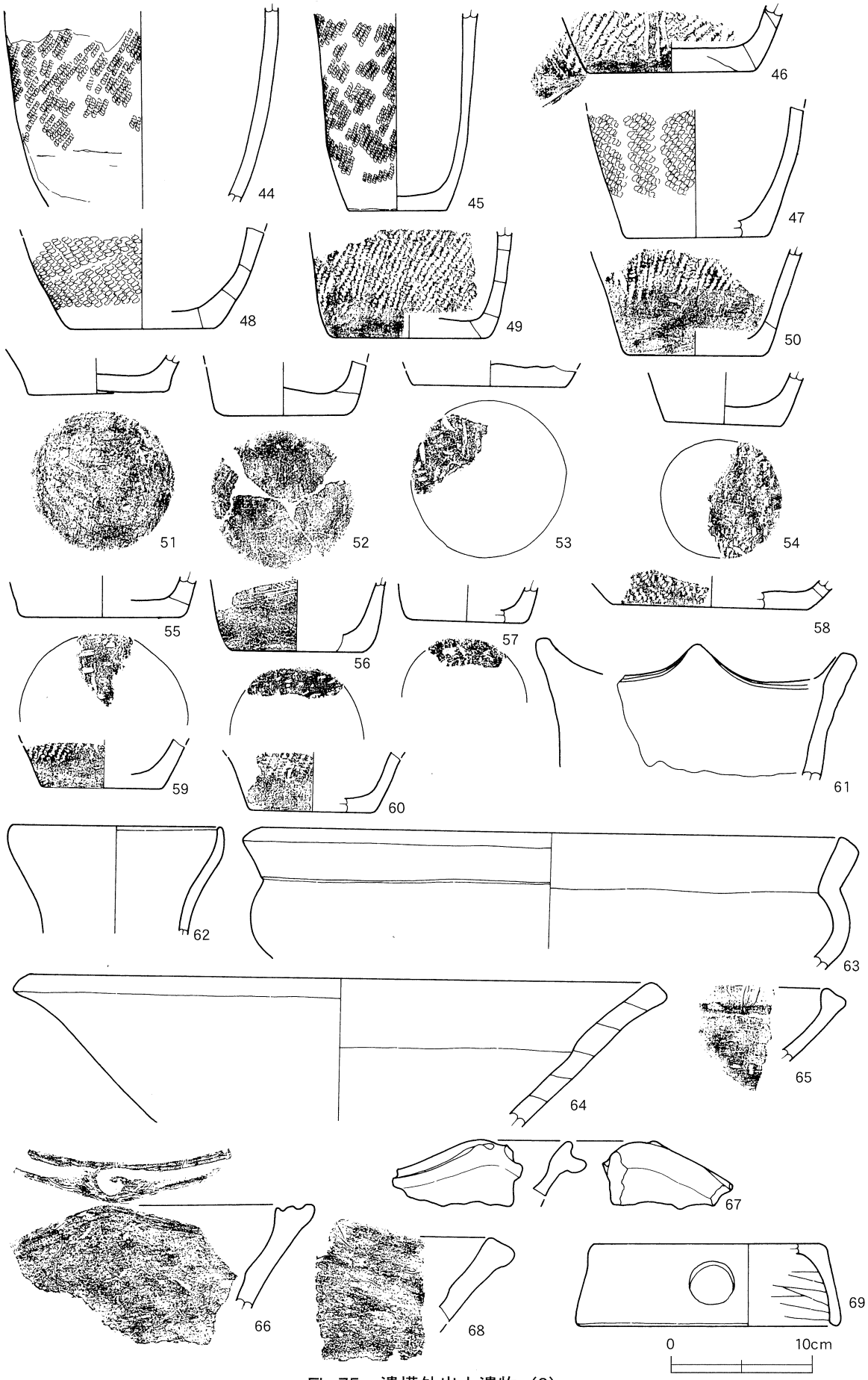


Fig.75　遺構外出土遺物（2）

挿図番号	出土地点	形　状	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	加工状態	切り込み状況
Fig.76-1	試掘	楕円形	6.00	4.30	1.51	40.5	打割	長軸1対
Fig.76-2	表採	楕円形	3.95	2.97	1.06	16.5	打割	長軸1対
Fig.76-3	表採	方形	3.39	3.20	1.01	18.8	打割	長軸1対
Fig.76-4	表採	長方形	3.25	2.67	1.27	14.4	打割	長軸1対
Fig.76-5	表採	長方形	3.08	2.91	1.17	18.3	打割	長軸1対
Fig.76-6	表採	長方形	2.35	1.75	0.85	10.8	打割	長軸1対
Fig.76-7	表採	長方形	3.75	1.65	1.16	12.8	打割	長軸1対
Fig.76-8	表採	楕円形	7.63	7.20	1.25	84.6	打割	長軸1対
Fig.76-9	表採	楕円形	6.76	6.69	0.83	74.2	打割	長軸1対
Fig.76-10	試掘5T	楕円形	5.42	5.32	1.17	38.8	打割	長軸1対
Fig.76-11	表採	楕円形	4.52	4.30	1.22	21.5	打割	長軸1対
Fig.76-12	表採	長方形	4.86	3.37	1.17	27.8	打割	長軸1対
Fig.72-13	表採	長方形	3.99	3.40	1.07	19.7	打割	長軸1対
Fig.76-14	表採	楕円形	3.54	2.80	1.10	20.1	打割	長軸1対
Fig.76-15	表採	楕円形	3.82	2.80	0.96	15.6	打割	長軸1対
Fig.76-16	表採	楕円形	3.28	2.94	1.15	19.1	打割	長軸1対
Fig.76-17	表採	楕円形	2.93	2.86	1.04	19.5	打割	長軸1対
Fig.76-18	表採	楕円形	2.11	2.32	0.95	12.4	打割	長軸1対
Fig.76-19	表採	楕円形	2.10	2.49	0.95	13.2	打割	長軸1対
Fig.76-20	表採	楕円形	3.98	3.57	1.21	23.8	打割	長軸1対
Fig.76-21	表採	長方形	3.76	3.08	0.90	18.5	打割	長軸1対
Fig.76-22	表採	長方形	4.35	2.60	1.15	20.8	打割	短軸1対
Fig.76-23	表採	長方形	3.40	2.40	0.95	11.7	打割	長軸1対
Fig.76-24	表採	楕円形	3.65	3.30	1.01	19.1	打割	長軸1対
Fig.76-25	試掘	円形	3.25	3.15	0.92	18.6	打割	長軸1対
Fig.76-26	表採	楕円形	(2.15)	2.72	0.83	11.1	打割	長軸1対

Tab.3 遺構外出土土器片錘一覧表

8．遺構外出土の石製品 (Fig.76－27～29)

遺構外から出土した石製品には磨製石斧と磨石類がある。

Fig.76－27は偏平な自然円礫に刃部のみ丁寧な研磨を施し、側縁部や刃部以外の表裏面は自然面のままである。大きさは長さ9.8cm、刃部の幅5.17cm、厚さ1.25cm、重量94gを測る。試掘によって確認された。28は円礫の表面ほぼ中央に楕円形の敲打痕と側縁部による摩耗痕が観察できる。長さ10.5cm、幅8.1cm、厚さ6.22cm、重量695gを測る。29は磨石で、円礫の周縁に摩耗痕が顕著である。横断面は長方形を呈している。大きさは長さ4.6cm、幅6.4cm、厚さ4.5cm、重量178gを測る。

(小川和博)

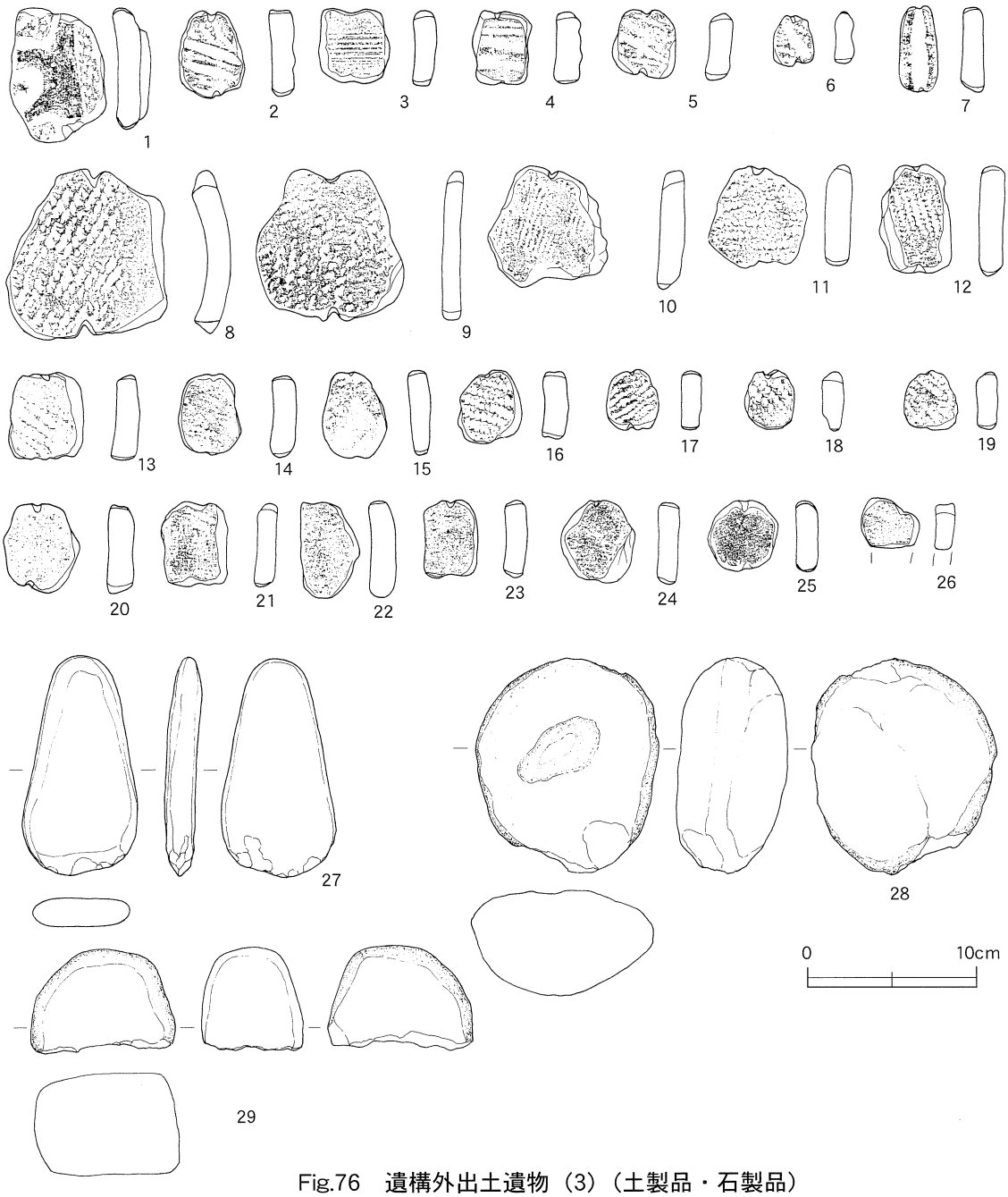


Fig.76　遺構外出土遺物（3）（土製品・石製品）

第Ⅳ章　調査のまとめ

本遺跡を含めた周辺地域には、今回確認された縄紋時代中期後半の集落跡がさらに大きな広がりを示していることは周知の事実である。既に報告されている六十原Ａ遺跡では縄紋中期に比定される竪穴住居跡８軒、土坑109基が調査され、東方約100mに位置する今回の調査区域内でもいわゆる有段式竪穴遺構を含めて竪穴住居跡11軒、土坑88基が確認された。これらは概ね地形（台地）の状況からみて推定南北100m×東西200mの範囲に環状もしくは楕円形を呈する馬蹄形状に住居跡と土坑群が分布する100軒規模の大きな集落跡であるとみられる。時期は阿玉台Ⅳ・中峠式段階から加曽利E1式新段階に限られ、また対する六十原Ａ遺跡では阿玉台Ⅲ式段階から始まり、加曽利E1式の中期段階まで知られいる。本来同一遺跡にもかかわらず各地点において出土土器の若干の段階差がみられるものの、その前後の時期はなく比較的短期間の存続期間に限定された集落跡である。

まずここでは竪穴住居跡が10軒と有段式竪穴遺構が１軒検出された。竪穴住居跡ではSI01に代表されるように楕円形プランに主柱穴は５本で、柱穴５角形タイプの住居である。炉址は５角形柱の頂点を通る中軸線の奥部に位置する。同様にSI02・03・04・05と主柱穴が５本でありながら柱穴の位置が変則的であるSI06・08・09・10と全体を掌握できた住居跡はいずれもSI01と同一形相を呈する。縄紋中期の住居跡は一般に円形を基本にその平面形は多くのバリエーションが認められているものの、ここ霞ケ浦周辺に

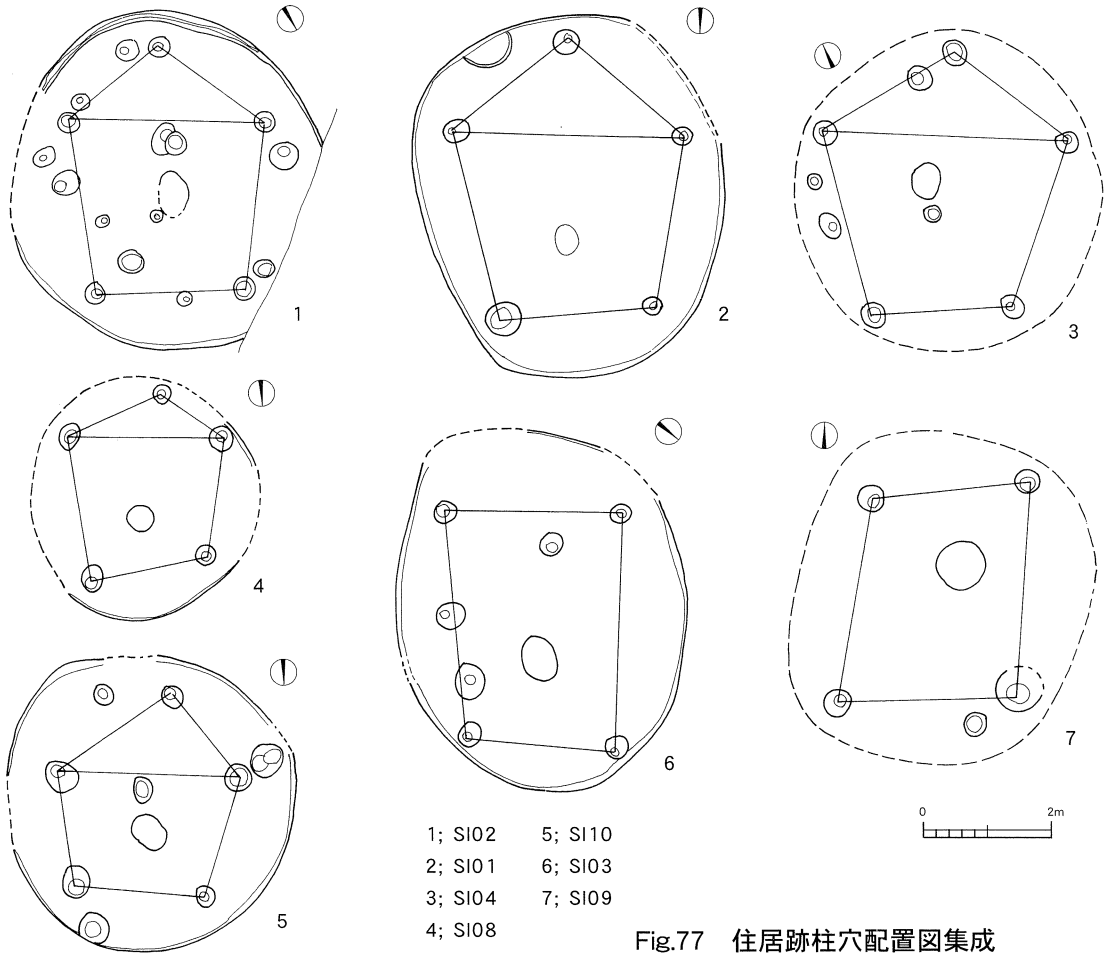


Fig.77　住居跡柱穴配置図集成

おける住居構造は阿玉台Ⅲ式期以前に比較して阿玉台Ⅳ・中峠式期段階から加曽利E3式段階まで柱穴・炉の位置等が明確に定型化する。

なお、これら竪穴住居跡と同時に確認されたなかにいわゆる「有段式竪穴遺構」1棟がある。この遺構はいうまでもなく「床面が二段に掘り窪められた」もので特徴ある遺構である。霞ケ浦周辺を含めた古鬼怒湾および東京湾の千葉県側を中心にすでに40を越える遺跡で確認されている。とくに阿玉台終末期から加曽利E1式期の比較的規模の大きな集落跡では1棟から数棟にかけて確実に検出される遺構である。したがって、この二段床面という特殊性ゆえに当遺構に関する多くの報告、論考をみることができる。(今橋1985、中野1985・1987、鈴木1985、縄紋時代研究班1995・1996、谷口1996等)

今回検出された有段式竪穴遺構の形状は、上部床面の外縁形態が楕円形で、下部床面の内郭形態は長方形、さらに内郭四隅に柱穴をもち、南壁に梯子穴を有するもので、茨城県教育財団・縄紋時代研究班による「平面形態は楕円形を基調とし、4ヵ所あるいは6ヵ所の主柱穴を持つもの」「F類」に分類されている(縄紋時代研究班1996)。また谷口陽子は、平面形態が「有段の掘り込みをもつもの(C型)」で、主柱配置が「規則的に4・6本の主柱穴を配するもの(3類)」、炉が「遺構内に炉の施設を持たないもの(a種)」で「C－3－a」類に分類されている(谷口1996)。しかし、両分類では構築基礎となる柱穴の配置および本数が「4本」も「6本」も同等として処理・分類されている。これは建物の規模や屋根の形状等の上屋構造を考えた場合、4本と6本では大きな違いが想定され、本来明確に区分されるべきものと考える。逆に出入口部柱を含めた5本もしくは7本柱構築はあっても、主柱穴はあくまでも4本もしくは6本に限定されいることに注目したい。

ここで筆者は、かつて近接する阿見町竹来(たかく)遺跡において、加曽利E1古期段階の当該遺構のもつ「属性」とくに柱穴配置における柱穴間距離および上部床面の外縁と下部床面の内郭規模について計測分析したことがある(小川1999)。各集落に少なからず存在する当遺構の形態をみると、そのもつ基本的な属性はあまりにも共時態性が強いからであった。しかし形態的に相似(形態比率の一致(馬橋1998))はするものの、細かな属性要素(例えば壁溝、間仕切、梯子穴等の出入口構造、支柱穴等)や規模(大きさ、形状、柱穴間距離等)になるとそこにはバラツキがみられる。これは各集落内における構築者の設計の個人差であって、同一集団(もしくは専業集団)がすべての集落における設計・構築を指揮、指導もしくは請け負っていないことが読み取れる。竪穴住居を含めた土坑等において、多少の誤差はあってもその規模は一定の許容範囲内にすべてが収まるように構築されていることはよく知られている。ここに伝統技術だけではない縄紋スケールに基づく専用の「設計図」の存在することの疑う余地はない。それぞれ各集落間にみられる同一形相の有段式竪穴遺構における最低限の規範(共通性)として二段床面で、上部床面は狭くし、ここには主柱穴を設けず、下部床面に構築された主柱穴は4本もしくは6本、炉を構築しない等の構築規制は一致していることから、少なくとも炉をもつ生活拠点の竪穴住居のように各集落内で保有されている経験的で伝統技術を併せ持つだけではなく、この有段式建物に関しては広い縄紋ネットワークの中で、規範された専用の設計図に基づき、情報として得ただけではなく、それを経験的に習得し共有した各集団の構築者たちが各集落内に持ち込んで工夫し、自らの構築技術をもって建築していることことを意味している。一方こうした構築時期はそこから出土する遺物とくに土器型式によって判断されるものの、出土遺物の少なさからその機能活用期間はもちろん廃絶・埋没時期すら正確に把握することが困難な遺構が多い。例え遺物の出土があっても、時間幅が広すぎて(事実縄紋時代研究班の集成した桜村下広岡遺跡では「阿玉台末～

加曽利ＥⅡ」という漠然とした時間幅の提示例もある。）的確な時期的位置付けを不可能にしている。こうした意味では遺構の共通性（形態比率の一致）は重要である。少なくとも徹底した遺構のもっている属性を引き出すことが肝要であろう。馬橋利行がかつて仮定した柱穴の配置等の規格性の一致する住居は、「より時間の近い関係をもち、これが土器細分型式レベルよりも時間的に近い関係を抽出できる（馬橋1998）。」という提示は有効であろう。

そして最後に柱穴配置や柱穴間距離はまず屋根の高さや上屋構造を規定し、柱材の大きさまでも予測させていることは事実であるが、かつて竹来遺跡で試みた数値レベルの比較検討は、少なくとも規模において規格性を見いだせず、そのバラツキだけが目立つこととなった。逆にこの不一致こそが大きな意味があるのであろう。有段式竪穴の構築に体験的あるいは経験的に習得した構築者は、習得した設計図とおり構築するものの、今日みて多少の誤差はあっても、その設計図の情報としての“見かけ”は正確であったに違いない。規模や細部の形状が異なっても、有段式竪穴遺構のもつ『形態比率の一致＝形相』のみによって十分縄紋社会のなか共有され通用していた意味を今後の課題として追及していかねばならないであろう。

（小川和博）

参考文献

今橋浩一　1985「阿玉台文化の一側面－二段床構造住居址の検討」『古代探叢Ⅱ』早稲田大学出版会

小川和博　1999「竹来遺跡－茨城県稲敷郡阿見町所在の埋蔵文化財第二次調査」阿見町竹来遺跡第二次発掘調査会・阿見町教育委員会

鈴木美治　1985「阿玉台期における竪穴住居跡の形態についての一考察」『年報』3　茨城県教育財団

縄紋時代研究班　1995「茨城県における縄紋時代中期前半の住居跡の形態について」『研究ノート4』茨城県教育財団

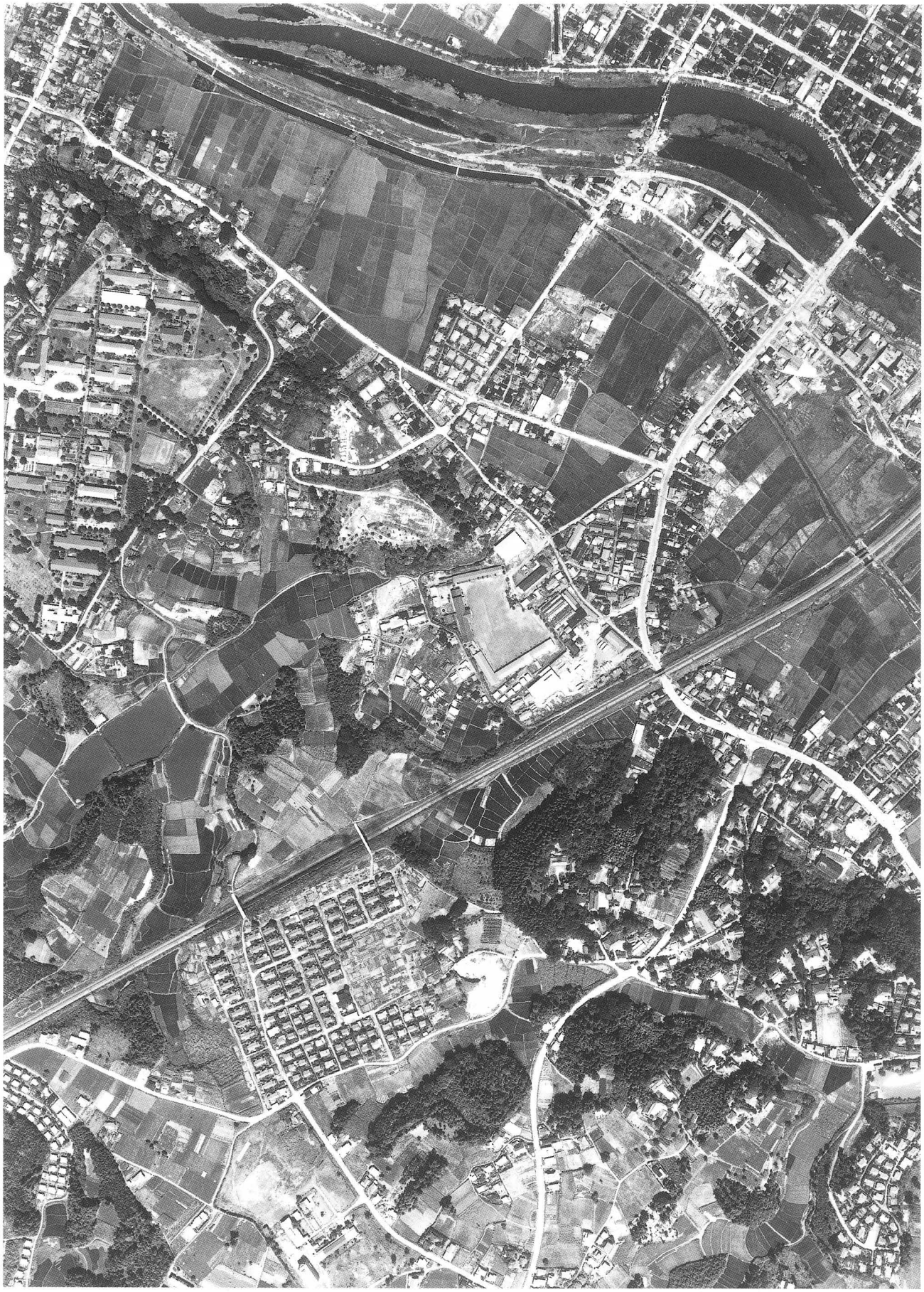
縄紋時代研究班　1996「関東における縄紋時代中期の「有段式竪穴遺構」について」『研究ノート5』茨城県教育財団

中野修秀　1985「有段式竪穴遺構に関する覚書－関東地方縄紋中期における異系統の竪穴住居跡－」『日本考古学研究所集報Ⅶ』日本考古学研究所

中野修秀　1987「有段式竪穴遺構再考－新資料の検討とコメントを中心として」『日本考古学研究所集報Ⅷ』日本考古学研究所

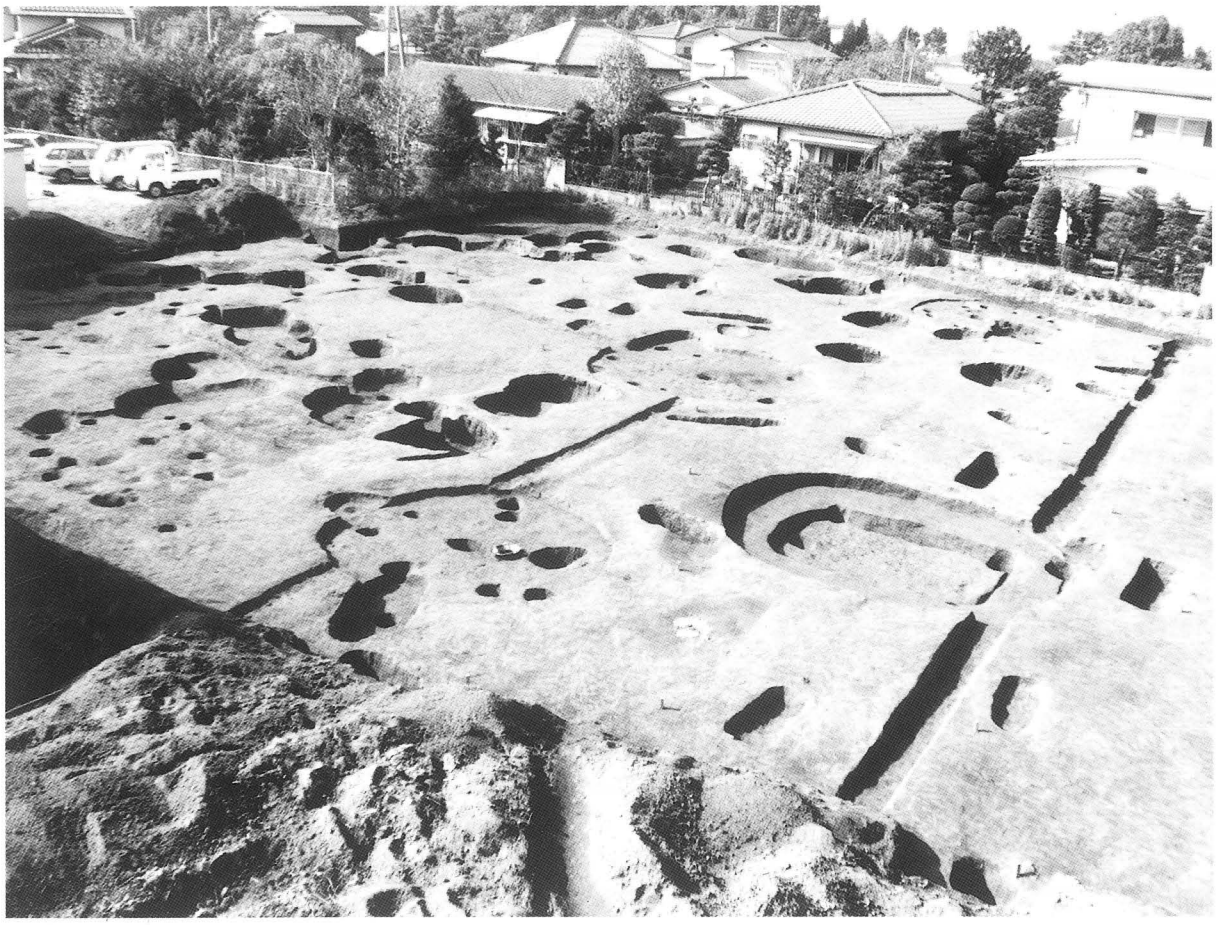
西野元・谷口陽子他1996「笠間市西田遺跡の研究－縄紋時代における石鏃の制作と流通に関する研究』筑波大学歴史・人類学系

馬橋利行　1998「縄紋時代中期前半の住居柱穴配置類型と規格性の抽出による集落分析法の一試案」『シンポジウム縄紋集落研究の新地平２－発表要旨』縄紋集落研究グループ

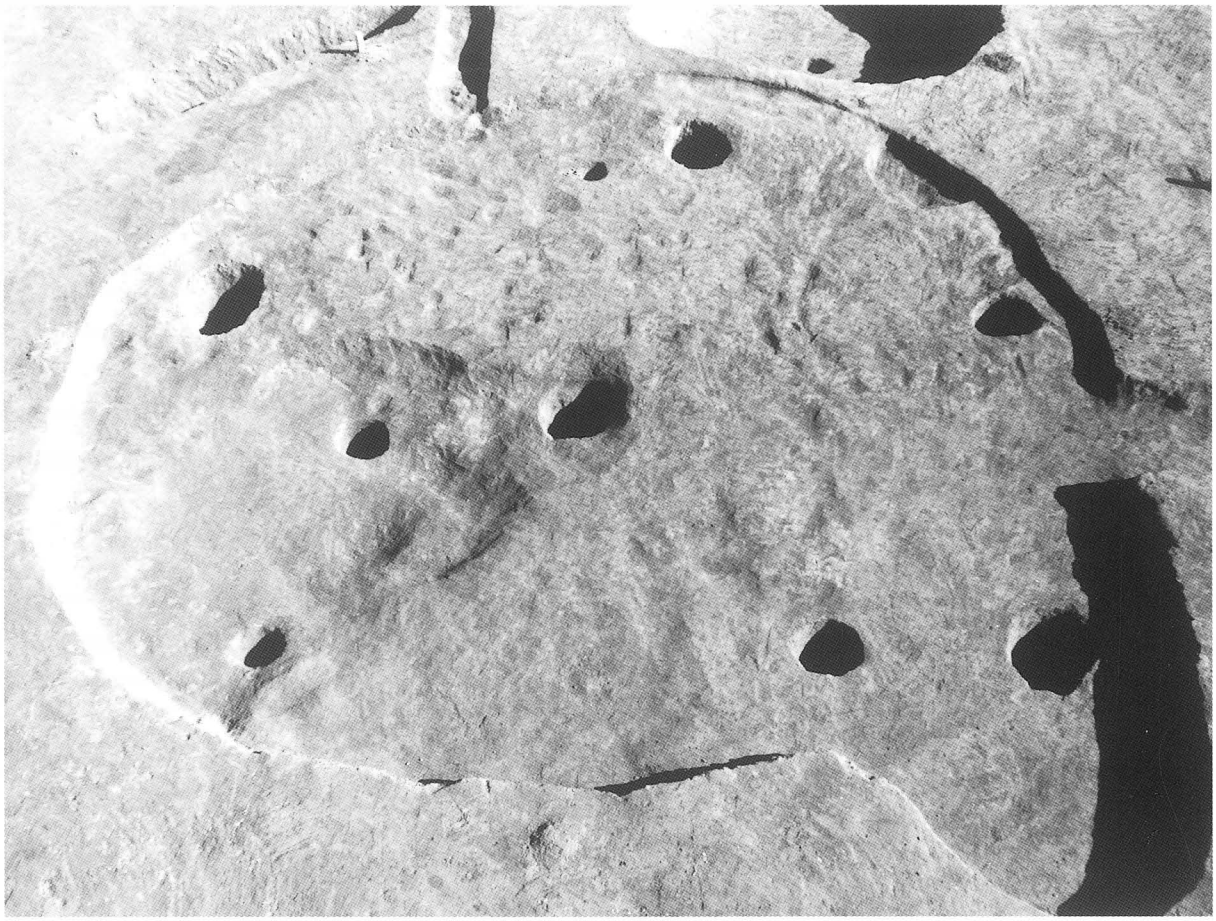


↑ 遺跡周辺航空写真（アメリカ合衆国極東空軍撮影）（国土地理院発行）

遺跡遠景
（東より）

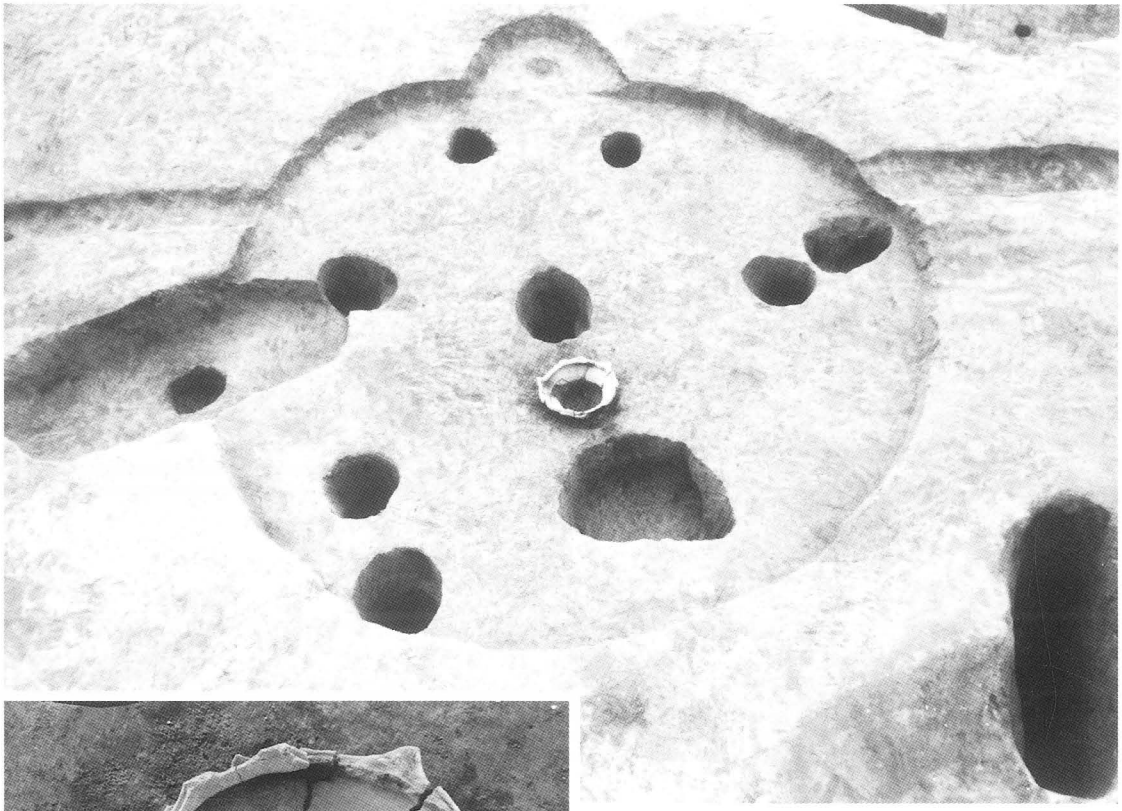


遺跡全景
（北東より）

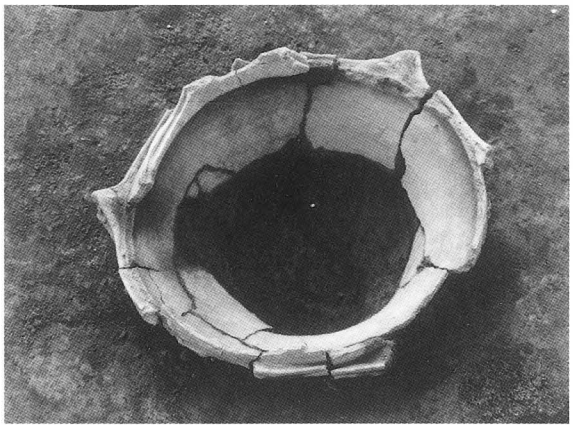


竪穴住居跡 SI01

竪穴住居跡 SI02
土坑 SK26.27.35.36

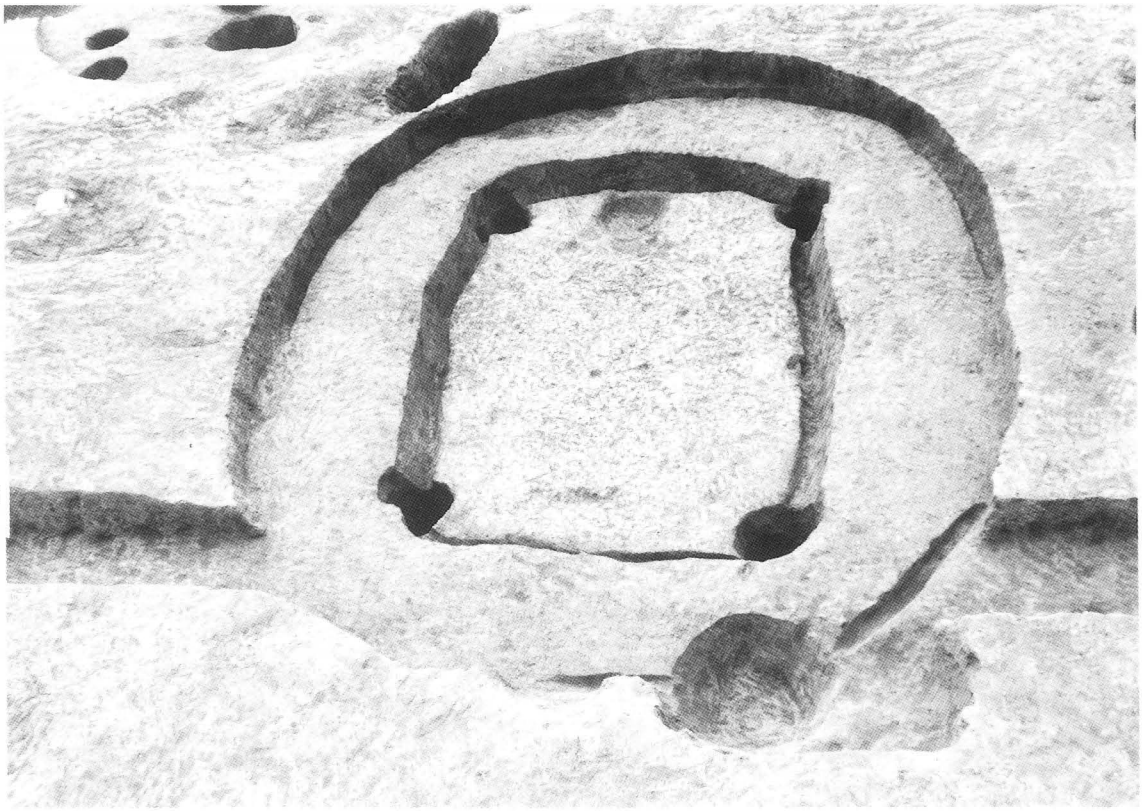


竪穴住居跡 SI10
土坑 SK88・89・96

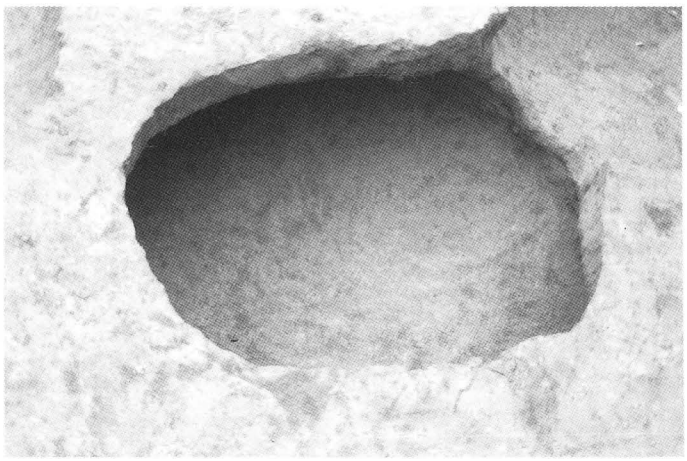


竪穴住居跡 SI10
遺物出土状況

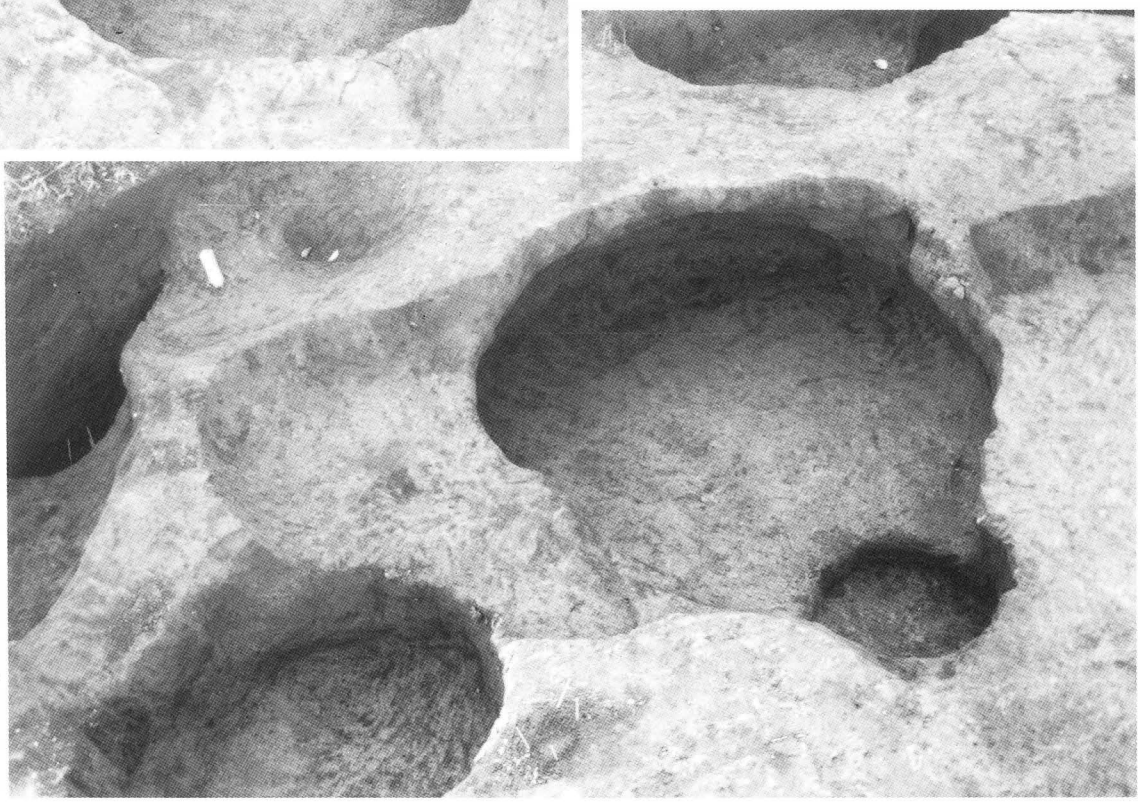
竪穴住居跡 SI07
土坑 SK64・65・78
SK79・81



竪穴住居跡 SI11



土坑 SK02



土坑 SK04 ～ 07

土坑 SK04・09・38
SK41・44

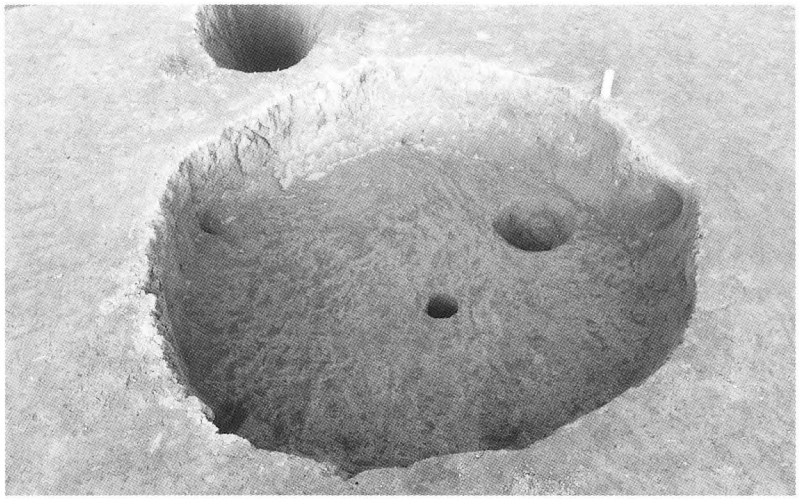
土坑 SK07・34・48・57

土坑 SK09・10
SK41・44

土坑 SK09・10

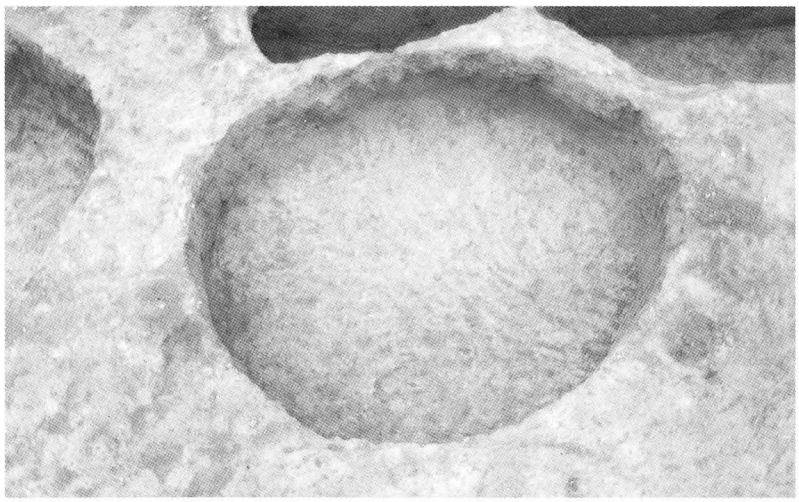
PL8

土坑 SK25

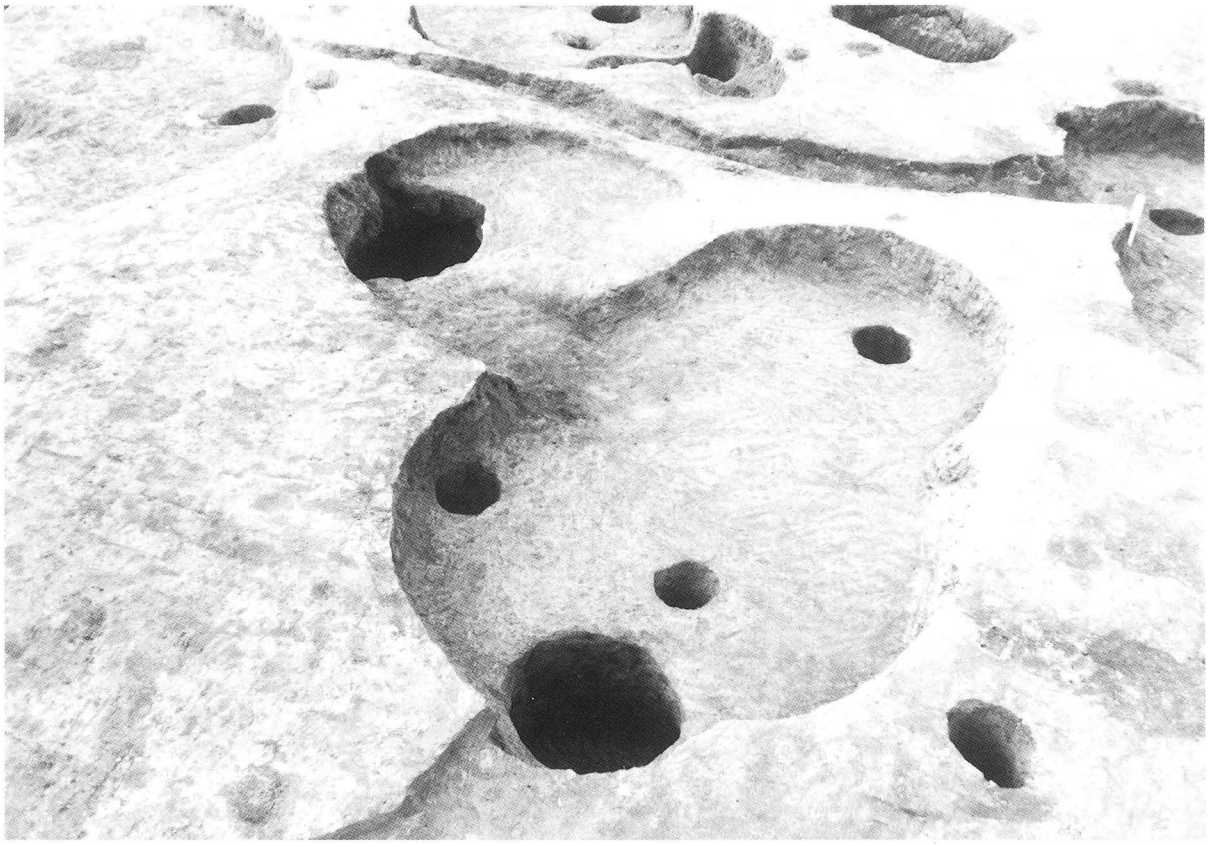


土坑 SK28

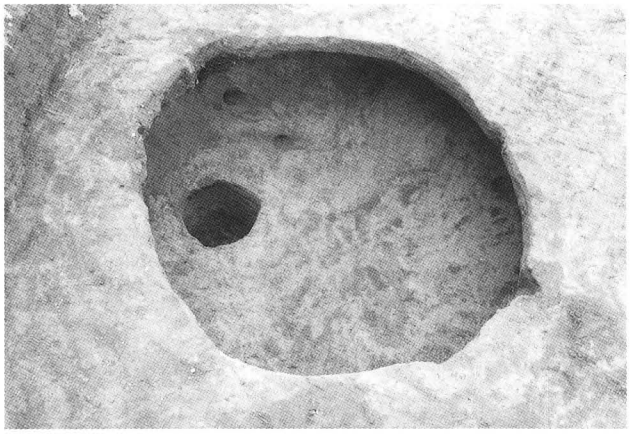
土坑 SK60



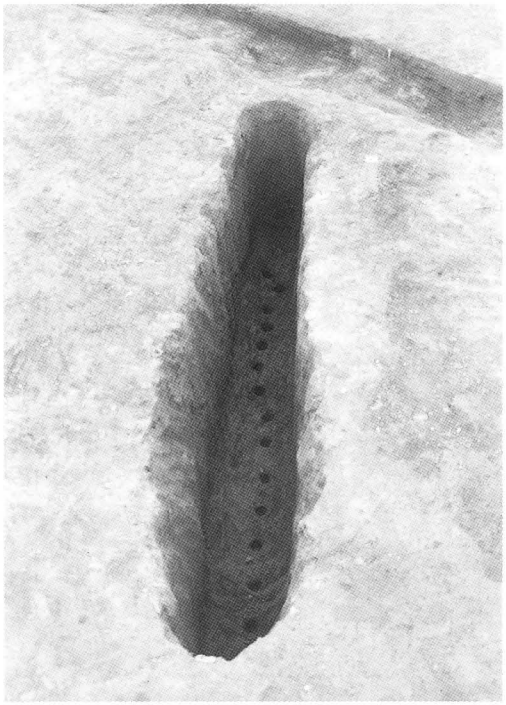
土坑 SK61



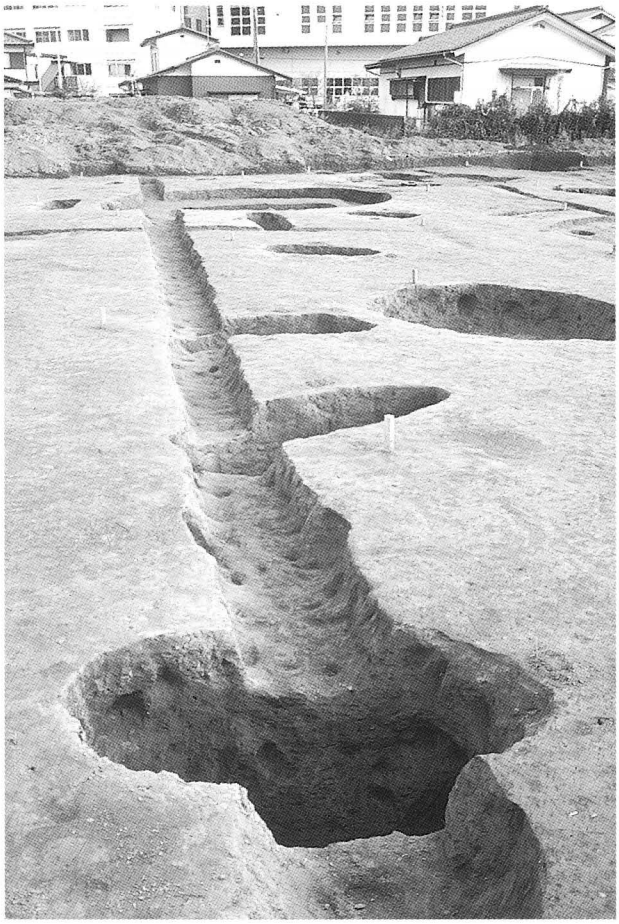
土坑 SK72 ～ 74



土坑 SK76

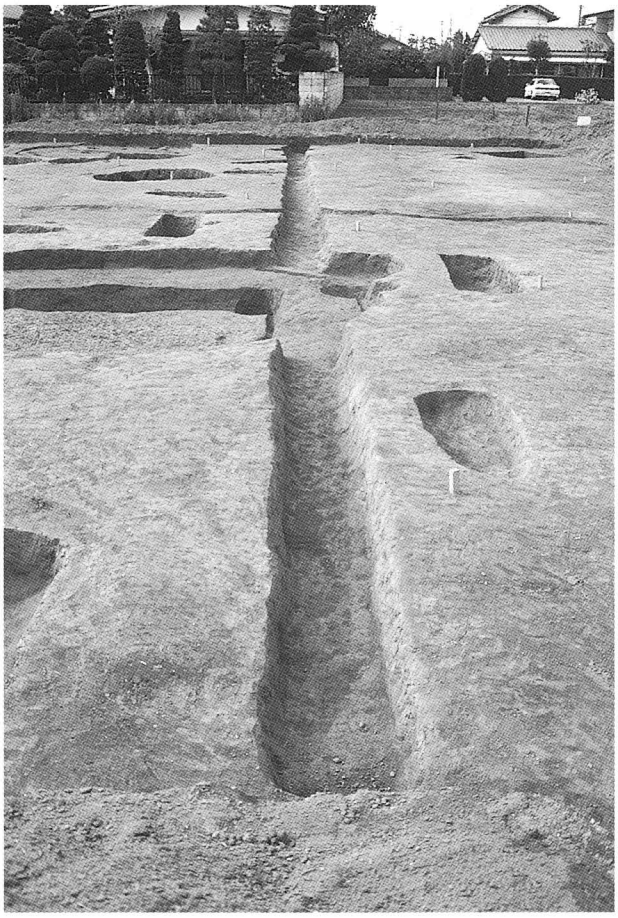


陥し穴状遺構 SK23（左）
陥し穴状遺構 SK92（右）

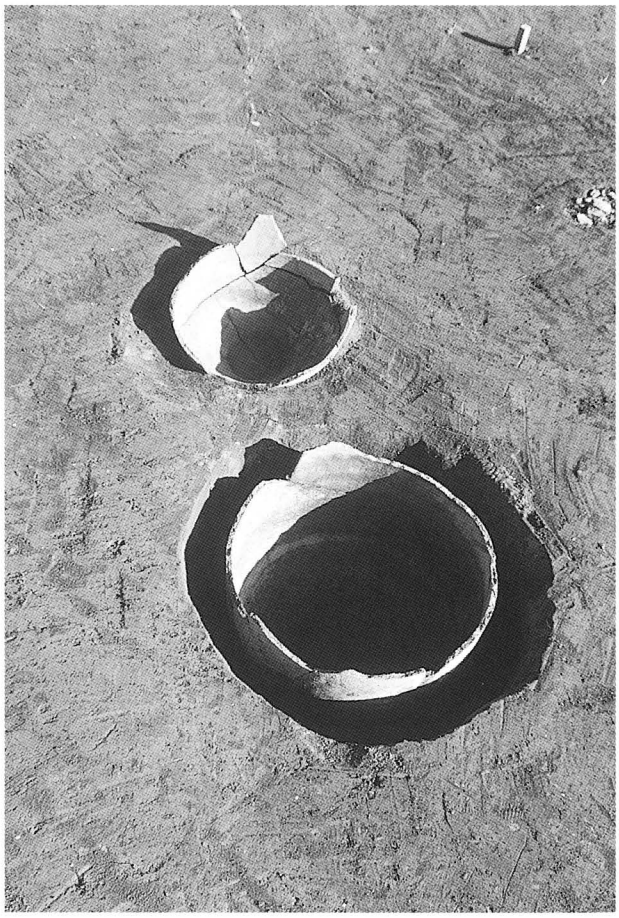


陥し穴状遺構列（北西から）

陥し穴状遺構列（南東から）



溝状遺構 SD-1



便所甕 SX01・SX02

竪穴住居跡 SI10-1

土坑 SK05-2

土坑 SK10-1

土坑 SK11-2

土坑 SK11-3

土坑 SK11-11

竪穴住居跡・土坑出土遺物

土坑 SK13-20

土坑 SK86-4

土坑 SK74-12

土坑 SK70-86

土坑 SK70-92

土坑 SK70-93

土坑出土遺物

土坑 SK-17-19（上面）

土坑 SK-17-19（下面）

竪穴住居跡 SI11-16（表）

竪穴住居跡 SI11-16（裏）

竪穴住居跡 SI11-10（表）

竪穴住居跡 SI11-10（裏）

竪穴住居跡・土坑出土遺物

網代痕（竪穴住居跡 SI11-60）

木葉痕（土坑 SK37-24）

ヘラ削り痕（土坑 SK17-17）

ナデ痕（土坑 SK74-12）

現地説明会

報告書抄録

ふりがな	ろくじゅうはらいせき
書名	六十原遺跡
副書名	宅地造成工事事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	小川和博　大渕淳志　関口　満
編集機関	土浦市遺跡調査会
所在地	〒300-0812　茨城県土浦市下高津2－6－36　土浦市教育委員会内
発行年月日	西暦2003年11月20日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ろくじゅうはら 六十原遺跡	つちうらし 土浦市 さくらがおかまち 桜ヶ丘町 2268-2	0823	149	36° 3′ 48″	140° 11′ 53″	1993.10.12 ～ 1993.11.22	1,300m²	宅地造成工事に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
六十原遺跡	集落跡	縄紋時代 近現代	竪穴住居跡　11基 土坑(縄紋時代) 88基 陥し穴状遺構　8基 ピット状遺構　4基 土坑(近現代) 14基 溝状遺構　4条 便所甕　2基	縄文土器・土器片 錘・石器	縄紋時代中期の加曽利EI式を中心とした、群在する土坑群を伴う集落跡。

六十原遺跡

宅地造成工事事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 ２００３(平成15)年11月20日発行
編　集 土浦市遺跡調査会
発　行 土浦市教育委員会
〒300-0812 土浦市下高津２丁目７-36
問合先 上高津貝塚ふるさと歴史の広場
〒300-0811 土浦市上高津1843
TEL 029-826-7111
印　刷 菊池印刷株式会社
〒300-0811 土浦市上高津911-1
TEL 029-821-2525